

貞操問答

菊池寛

青空文庫

金を売る

一

七月、もうすっかり夏であるべきはずなのに、この三日ばかり、日の目も見せず、時々降る雨に、肌寒いような涼しさである。

今も、小雨が降っている。だが空はうす白く、間もなく雨も降り止みそうな光が、ただよっている。

新子は、ぼんやり二階の居間から、外を眺めている。

路次の水たまり、黒い小猫がぴよんぴよんと水溜みずたまりをさけて、隣の生垣の下をくぐった。茶色の雨マントを着た魚屋が、自転車に乗って来て、共同水道のわきで、雨にぬれな

がら、切身を作り始めた。

豆腐屋のラツパ、まだ午ひるまえ前なのである。

「あーあ！」新子は、かるい欠伸あくびをした。

とたんに、階段の下から、甘えかかった、

（新子姉さまア！）という声が、弾み上り、ドタドタとかけ上って来る足音がして、勢いよく襖ふすまが開いた。

あまり成育しない前に、熟うれてしまった果物のような、小柄な、身体全体が、ピチピチした——深々とした眼、小さい鼻、小さい唇の、生々とした新子の妹、美和子である。

「何よう！」新子は、無愛想に、広い聡明な額のうすい細い眉をひそめて、そちらを振りむいた。下顎骨が形よく精巧に発達していて、唇が大きかった。のどかそうな、それでいてひどく謎めいている大きな目が、無愛想な言葉を、やわらげるように、ニヤニヤ妹へ笑いかけていた。

「ストツキングが、みんなどれも満足なのがなくなっちゃったのよ。」

「日曜くらい、お家にいらつしやいよ。それに、もうご飯よ。雨は降っているし……」

「だってえ、家にいたら、呼吸いきがつまりそうなんですもの。渡辺さんそこへ行くって約束

してあるんですもの。一時の約束よ、もう支度しなければ、遅くなるわ。」

「じゃ着物になさいよ。」

「意地わるっ！　こんなに、ちゃんと着てしまっているのに——」クリーム色のピケで、型ばかりはひどくハイカラだが、お手製らしいワンピースを、大^{おおぎよう}仰に手を展^{ひら}いて見せた。その胸に、大きな乳^{ちちびよう} 鋏のように正確な半球が二つ、見事に盛り上っていた。

「少しくらいの穴、かがつてはいらつしやいよ。」

「かがれるだけは、かがつてよ。もう、その余地がないのよ。ほら！」美和子は、姉の膝にストッキングを落した。脚の型のまま、だぶだぶにふくらんでいる膝のあたりに、虫の喰ったくらいの丸い穴があいている。

「これくらい、大丈夫よ。マニキュアのエナメルを塗っておくと、毛が抜けないから。洋服でかくれちゃうわ。」

「うん、そうする。でも、帰りに新しいのを買って来なくっちゃ、お金頂戴！」

「この間上げた五円、どうなったの？」

「少し残っているけれど、ストッキングを買えば、バスにも乗れないわ。」

「チエツ！」笑いをふくんだ舌打ちをして、ねめすえて、五十銭銀貨を二つ出してやると、

美和子は現金によるこんで、階下へ降りて行った。

台所へ降りて、昼の支度をと思っている、

「新子ちゃん！」と、すぐ隣の部屋で、姉が彼女を呼んだ。

二

(新子ちゃん！　ちよつと来てよ。話があるの)隣室からの姉の声がつついた。

「お姉さまも、ご用？」ちよつと、皮肉に笑いながら立ち上った。スラリとした長身、ふくよかな感じはなかったが、清純な仇あだつぼさが——そんな言葉が許されないとしたら——特別な風情が、新子のからだには、流れていた。

ふすま襖一重の姉圭子の部屋は、およそ異人種でもが住んでいるほど、区切られて特異であった。

床の間一杯に、おびただしい和書洋書が積み重ねられ、明り取りの円窓の近くに、相当古いがドツシリとした机が置かれ、その前の皮ばりの椅子に、圭子は腰かけていた。

壁には、外国の名優の写真らしいのが、銘々白かまちい框の縁に入れて三つかかっていた。

小さい水彩画と、ピカソの絵葉書、その脇には圭子自身の製作らしい麻布あきぬのに葡萄ぶどうの房のアプリケが、うすよごれた壁をすつかりかくしていた。

「話って？」新子は、姉の机の脇に立った。

「佐山さんが、貴女あなたが私達姉きょうだい妹いの中では、一番曲くせもの者ものだっていつていたわよ。」と、圭子が、微笑しながらいった。

「それは、どういう意味？」

「貴女には、聖母のような清らかさと、娼婦のようなエロがあるんだって！ 恋愛でもしたら、男殺しという役だって！」

「へえ。そんなこといった？ だって、佐山さん、一度しか私と会いもしないくせに、分るもんですか。」

圭子は、姉妹の中で一番美しいかもしれないなかった。とにかく、完璧な美人タイプに列し得られる。白粉おしろい気がなく、癖のない潤沢な黒髪を、無造作に束ねているので、たいへん清楚せいそな感じがした。

「話って、それぎり？」新子は、もう一度訊きいた。

姉は、ちよつと首を振って、

「ううん、これよ。」と、丸善のビルを新子に渡した。

洋書が五冊、新子は内訳は見なかったが、合計は二十三円五十銭だった。

「お母さまにいうと、また長講一席よ。貴女から、話してほしいの。」

新子は、しばらくの間だまってしまった。

姉妹の父は、長い間、台湾のさる製糖会社の技師をして、相当な高給を食^はんでいた。退職したときにも、数万円の手当を貰った。しかし、生活ぶりが、華手^はだったので、一昨年^{のういっけ}脳溢血で死んだときは、金はいくらも残っていなかった。そして華手な生活ぶりと、金の事を気にしないルーズな性格とだけが遺族の上に遺されていた。今年の初め、あわてて家賃の安い現在の家に引越して来たのであるが、働く者のない家庭は窮乏の淵へ一歩一歩ズリ落ちて行く外はなかった。

その上、姉妹の母が、生活に対しては、ひどく没常識であった。

三

父が死んだ後も、母は漫然として、何の新しい収入の当^{あて}もないのに、家賃の高い^{こうじま}麴

町の家に暮っていた。姉の圭子は相不変女子大に通い、新子は津田英学塾に通っていた。

今年の初め、母が少し愚痴っぽくなったので、新子がおかしく思つて、母に迫つて家の経済状態を掘り葉掘り問い質してみると、父が勤めていた会社の株が五十ばかりのほかには、銀行預金が二千元とわずかしが残つていなかった。父の死後、そんなわずかな預金の中から、月々三百円に近い生活費を出していた母の出鱈目に驚いたが、今更どうすることも出来ず新子にあわてて、自分で学校を廃めてしまい、母を勧めて、家賃の安いここ、四谷谷町の家へ越して来たのであるが、しかしそれは半年で駄目になる生命を、やつと一年に延ばしたというだけのこと、前途に横たわる生活の不安は、どう払いのけることも出来なかった。

しかし、それは新子だけの気持で、姉の圭子も妹の美和子も、家の生活の実際を知りもしなければ知ろうともせず、太平無事の日々を過していた。殊に、圭子は文学好きで、去年あたりから新劇研究会のメンバーになると、家の暮し向きなどはおかまいなしで、いつも損をする公演の手伝いなどに、うき身をやつしているのだった。

だから、新子が今年の初めから母を助けて家計を切り盛りし、月々幾何幾何と、定めて

おいても圭子も美和子も、ムダな浪費をする習慣がなかなか止まず、本好きの姉は、この頃為替相場の関係でめつきり高くなつた洋書を、買ったたりするのである。

「二十三元五十銭、こまるわね。お母さまが、この頃愚痴つぽくなつたのも、無理はないのよ。お姉さま、家に今お金いくらあると思つていらつしやるの？」新子は、ビルを手にしながら、金銭というものの脅威が、しみじみ身に迫るのを覚えながらいった。

「おやおや、貴女まで愚痴つぽくなつたのね。だつて、これ二月分よ、私もつと買いたい本があるのを辛抱しているんですもの。その代り、私着物なんか一枚だつて買わないじやないの？」もう、姉は少し中腹ちゆうつぽららしかつた。

初めての愛児として、両親の全盛時代に、甘やかされて育つた姉は、生活ということに對しては、全然考えようとしないうらしく、てんで話にならなかつた。

こんな機会に、もつと真面目に、根本的に姉に話してみようかと新子が考え出したとき、階下から母親が高い声で、

「新子さん。ちよつと階下へ来て下さいな。」と叫んだ。

「はい。」と、新子は返事をした。

一家中、何かにつけて、新子だつた。いかなる場合でも、一番深く考えている者が苦勞

するように、母も姉も妹も、みんな新子に背負いかかっているのだった。

四

新子は、姉に自分達の生活について、何かいつてやりたい気持ちを抑えて、階下へ降りてみると、上で気がつかない内にその玄関へ、父の存ぞんしょう生中から、出入りしている重松という日本橋の時計屋が来ていた。四、五年前までは、よく恰好な出物でものがあるといつて、売り付けに来たのであるが、去年あたりからは、母が生活費のたしに、時々売り払う品物を買いに来るようになっていた。

茶道具のわきに、新子の見馴れない金きんの大きい指輪が、二つ置いてあった。

母は子供のように秘密主義で、子供にまでかくして、色んなものを持っていたのだが、この指輪も、母がとつて置き秘蔵品だったのかと思うと、新子は悲しかった。だが、母はニコニコしながら、

「重松さんにね、こんな指輪、どうせ安いんだらうと思つて見せたら、金は今とても、値がいいんですつてね。ねえ、新子売つてもいいだらうね。あなたに相談しようと思つて、

呼んだのよ、どう？」母は、二、三年来の金の値上りにさえ、今更おどろいているらしかった。

「そうね。そりや売つてもいいけれど、重松さん、今一匁もんめいくらで買つて行くの。」

「十円五十銭です。」頭をテカテカになでつけた重松は、どっかにずるそうなどころのあ
る四十近い小男だった。

「もつと、するのじやないの。」

「十一円五十銭まで行きましたが、このところ一円ばかり下っていますので……」

「この指輪、何匁あるの。」新子は、一つずつ持ち上げてみながら訊いた。

「大きい方が、五匁二分。小さい方が、四匁四分、両方で九匁六分でございます。」

「重松さんのはかり、インチキじやないの。」と、新子がからかうと、

「どう致しまして、それにお母さまが、ちゃんと古い書付を持っていらっしやいます。ご
まかしがきかないんですよ。」

「へえ。どんな書付？」

「これよ。」母は、うれしそうに、膝の上に置いてあつた渋色になった、みの紙の書付を
ひらひら出して見せた。

一、金二十三円九十二銭也

平打純金指輪。五匁二分（一匁四円六十銭也）

一、金二十円二十四銭也

平打純金指輪。四匁四分（一匁同上）

細工料一円二十銭

明治四十年九月吉日

と書いてあつた。

考えると、これは両親のエンゲージ・リングなのである。

「売っちゃうの。」新子は、何か悲しいような、あさましいような気がして、しずかに母の顔を見返した。

五

この四、五年来、金輸出禁止とか解禁とか、再禁止とか、あんなに騒ぎがあつて、金の値上りについての新聞記事だつていく度も出ているのに、それをちつとも知らない母は、重松のいう相場に、何か大もうけでもしたように、うれしがつていた。

「ねえ。この書付だとこんなに安いのが、百何円にもなるのだねえ。やつぱり、昔のものは、物がいいんだね。」

ほかの物は、いざ知らず、金はいつにでも金であるところに値があることを知らないらしい母に、新子は、

「ええ。」と返事はしたものの、あたたかく眼めがしら頭がしらがうるんで来た。

父が死んで以来、母が経済的には不具だといふことが、露骨に分つて来ていた。百円の金は、半月くらいの中に、煙の如く意味もなく、消えるのだらうと思うと、そのために、亡父と母との大事な記念物が、易々やすやすと消えて行くことが、新子には悲しかった。

重松は、紙幣を数えて、母に渡し、小銭をも出そうとすると、母はあわてて、

「端金はしたは、いらなから。」と、あきれるばかりの氣前のよきで、ほくほく紙幣を受け取るのであつた。その端金はしたがあれば、午後取りに来るはずの電燈代が払えるのにとすると、

新子は、

(妾あたしがいるから、重松さん、置いて行きなさいよ!)と危く口に出かけたが、今でも貧乏たらしくすることのきらいな母の氣持を傷つけたくないために新子はだまっていた。

重松が帰ると、結局金を持って氣の大きくなっている母から、さつき頼まれた姉の書籍代を引き出すことに、氣をつかわねばならなかった。

「ねえ。お母さま、お姉さまの本代がいるのよ。二十五円ばかり、その中から出して下さらない?」氣のいい母は、かの女の思わく通り、割合機嫌よく、圭子の書籍代を、その内から出してくれながら、

「ほんとうに、あの子は金喰い虫だね。でも、来年学校を出たら、働いてくれるだろうね。」と、いった。

「どうですか。女子大なんか出たって、今年なんか十人に一人くらいしか、就職出来ないそうですよ。それに、お姉さまのような人働けるかしら。」

「だって、そのために学問をしているのじゃないのかい。」

「そうは行かないのよ。お母さん、この頃は男の大学を出たって十人に二、三人しか口がないんですもの。お姉さんなんか、芝居なんかを熱心に研究したって、どうにもなるもんですか。」

「じゃ、お前だんだんお金が減るばかりだし、先々どうなるのだろうね。私は、圭子が学校を出るまで、どうにかして喰べつなげばいいと思っただけだ……」

「わたし妾が、働くつもりよ。」

新子は非生活的な一家の代りに、自分が働くよりしようがないと、つとに決心していた。

六

母と卓ちやぶだい子をはさんで新子は、しみじみと云い出した。

「お母様。私、すぐ働くようになるかもしれないのよ。お母さまも知っているでしょう。前川さんで、私のお友達があるでしょう。この間、他所よそでお会いしたときに、私働きたいって、お話ししたら、ちょうどあの方のお兄さんが、家庭教師を探しているんですって、日曜だったら兄もきつと家にいるから、一度会いにいらつしやいって、おっしゃって下さったのよ。今日これから、伺つてみて、私に勤まりそうだったら、おねがいしてみるつもりよ。」

「だって、お前は美沢みさわさんと、結婚するのじゃないのかい！」と、母は気をきかして云つ

た。

「いやなお母さま。だしぬけに、そんなことを。」物に動じない新子の頬が、かすかに染まった。

「だって、美沢さんは、随分お前と親しそうじゃないか。」

「私が、今結婚してしまつたら、お母さん達どうなるの。」

「それも、そうだけれど……」

「それに、美沢さんだって、結婚できるような身分じゃないわ。それに、お友達としては、いい方だけれど……。とにかく、私午後から、前川さんのお宅へ伺つてみますから。」そう云つて、新子はお昼の支度にと、台所へ立つた。

ここへ引っこして来たとき、女中には暇を出したが、長年奉公している六十に近い婆やだけは、今更出すにも出せなかつたし、母から、つねに口やかましくいわれながらも、それを気にしないで忠実に働き、買物なども一人でやってくれるので、新子はたよりにならなかつた。

婆やに、昼のお惣菜の指図をしてから、母の居間に、さつき出かけた美和子がぬぎばなしにしていった着物を片づけていた。

「ねえ。お前が働くということ、圭子は知っているかい？」茶ちや箆だんす筒ひきだの抽出ひきだしから、手提ひきだ金庫を取り出して、さっきのお金をしまい込みながら、母が新子に云った。

「いいえ。まだ。」

「一度、相談してみたら、どう？ 圭子には、また何かいい考えがあるかもしれないもの。」

「いいですよ。」

「なぜ。圭子は、長女だもの、お前を一番に働かすなんて法はないわよ。」

「いいのよ。お母さん！ お姉さんには、またお姉さんとしての考え方があるのよ。」

「だって、そりゃ——お前の決心を聴いたら、圭子だって、何とか分りませんよ。」

「私、話がきまつてから、お姉さんに報告するわ。お姉さんはお姉さん、私は私だわ。じつとしていられない性分ですもの、つまり苦勞性なのよ。私は、おおいに働くわ。」

七

それから、三時間ばかりの後に、新子は麴町元園町の前川邸の応接間にいた。

友達の訪れを、心待ちにしていたらしい令嬢の路子は、さっぱりした趣味のよいアフタヌーンを被^きて、新子を欣^{よろこ}び迎えてくれた。

絹ぼりの壁や、カーテンの快い色彩、置き棚や卓子^{テーブル}の上に飾られた陶器や、青銅の置き物や、玻璃^{はり}製の細工物などの趣向のこった並べ方が、その豊かな暮しを現して、すべてがゆつたりと溶け合っていた。窓からは、手入のよく行き届いた庭の一部が眺められ、雨に咲いている、くちなしの強い甘い匂いが、ときどき、かすかにうつとりとするほど、部屋の中に揺れて来るのであった。

三、四年前までは、この家へ二、三度遊びに来たこともあり、こうした応接間の空気なども、特別に感じ入りもしなかつたのであるが、やや切端^{せっぽ}つまつた就職者として来ているせいもあって、新子は何か不思議な圧迫を感じるのであった。

「今年小学校五年になる兄の子が、あまり甘やかしたせい、頭はそんなにわるくないんだけれども、学校が出来ないの。」

「男のお子さん……」

「ええそう。いたずらっ子だけれども、性質は素直なの。それから、小学校三年の女の子、この方は、^{ほう}どちらでもいい。この方は、面白いかわいい子よ。二人とも、貴女がてこずる

ような子じゃないけれど、問題は姉よ。」

路子は、新子に比べると、冴^さえたところはないが、丸顔で眼も唇もほっそりしていて、豊かな黒髪を短く切つて、洗練された衣裳の好みや、金持の娘にしてはすましていない点などで、何となく人好きがした。弾力に充ちた身体は、しなやかで、いかにも快活そうだった。

「お姉さまつて？」

「つまり、子供のお母さまよ。」

「じゃ、お兄さまの奥さま！」

「ええ。」愛^{あい}嬌^{きょう}ぶかい路子の茶がかつた眼が、ちよつと皮肉な笑いをうかべた。

「それは、どういう意味で！」

「貴女、私の義姉^{あね}とお会いになつたことないかしら。」

「一度くらい、お目にかかりましたわ。」新子は、いつか劇場か何かで、路子といっしょにいるときに、ちよつと挨拶したことを思い出した。

「そうだったかしら。私、貴女なら辛抱して下さると思うけれど、……」

路子は、かわいい苦笑をつづけた後、

「兄は、とてもいい兄ですの。温良で、物分りがよくって、品行方正で……自分の肉親の兄をほめるのはおかしいけれど……」と、路子はしばらくは顧みて、他をいう形だった。

レディ第一

一

（辛抱とは、どういう意味の？……）新子は、路子と視線を合わせたまま、先を促した。

「兄は、貴女あなもご存じのとおり、長く米国におりましたから、すっかりレディ・ファストなのよ。それもすこし極端なんですの。それに、義姉あねは、私の父には主人筋に当る子爵家のお姫さまでしょう。兄も、死んだ母も、三拝九拝して、来て頂いたんでしよう。だから、家じやまるで、女王さまのような勢いよ。兄なんか、一生文句の云えない呪文じゅもんにかけられてるように、頭が上らないのよ。前に来ていた家庭教師の方は、義姉あねがあまりに、家庭教育ということに、理解がないと云って憤慨して出てしまったのよ。だから、貴女は義

姉のすることを出来るだけ気にしないことが、大切だと思うのよ。そういうことは聡明な貴女なら何でもなくやって下さると思うのよ。」

「お義姉さまは、全然お子様達の勉強に、無関心でいらっしやるの、それとも何かにつけて、干渉なさるのですの。」と、新子は訊いた。

「どちらでもないの、まるで気まぐれなの。全然無方針でいて、それで、ときどき何か云い出すらしいのよ。」

話の様子だけで察しても、頗る難物であるらしい。だが、新子はどうせ働くからは、出来るだけ、やり甲斐のある難局に身を処してみたい気持だった。

「ほら、国語の杉原先生が、新子さんのことをいつか、賞めたじゃないの。貴女なら、どんなむずかしいお姑さんだつて、勤まるだろうつて、南條さんは、お姑さんの機嫌ぐらいたるのは朝飯前だろうつて、それで私は貴女ならきつと見事つとめて下さるだろうと思つたのよ。」

「いやだわ。あれは、杉原先生が私を皮肉つたのよ。」

「皮肉の意味もあつたかしらん。でも、結局は貴女が、クラスで一番伶俐だということを認めていたのじゃない？」

「まあ、路子さんは、いろいろなことを覚えていらつしやるわねえ。」

学校時代の話が出たので、急にむかしの親しみが、よみがえって来て、新子は路子の好意をうれしく思った。

「とにかく、私出来るだけやりますから、お兄さまにお願いして頂きたいわ。」と、新子は言葉を改めて頼んだ。

「ええ、いいわ。私だって、貴女が来て下さったら、お友達ができていいのよ。出来るだけ、うまく話して来るわ。しばらく、待っていて下さらない？」と、路子は立ち上つて奥に入った。

新子は、ひとり残り残されて、路子の云う義姉あねのことを考えていた。

すると、一度しか会つたことのない前川夫人の面影が、おぼろげに頭の中に、浮び上つて来る。

きかぬ気らしい張りのある眼や、唇くちもと元や、背の高い、つんとした貴族的な態度までが、路子の言葉を裏づけているような気さえした。

そして、家庭教師などという仕事も、決して生やさしいものではないとつくづく思った。

そんなことを考えながら、新子が豊かに生い繁った庭の樹立に、眼を移してしばらくぼんやりしているときだった。

扉が、つつましく滑らかに開いて、人かげがした。新子が、ハッと視線を上げると、思いがけなくも、路子の兄の準之助氏が、独り落ちつき払った愛想のいい物腰で、部屋の中へはいって来た。

新子が、あわてて立ち上ろうとすると、

「いや、どうぞそのまま……」と、気持のいい潤いのある、男らしい中低音バリトンがそれをさえぎった。

でも、新子は立ち上って、意味もない微笑と笑顔で、初対面の挨拶をすませると、準之助氏は、椅子をちよつとずらせて、新子の真向いに腰をおろした。

上品に刈りこんだ頭、背がすらりと高く、色白く眼が柔和で、四十歳以上と聞いていたのに、三十代に見える若々しさであった。

どことなく明治文壇の鬼才川上眉山の面影あり、近くはアドルフ・マンジュウの顔を、

少し四角くしたような、瀟洒しょうしゃたる紳士であつた。

口の重い人らしく、何もいいかけないので、新子はかるく腰をうかせると、

「路子さんまで、お願いしておきました、私で勤まりますようでしたら……」と、挨拶した。

「はあ。今日は、雨が降りますのに、ご苦労でしたね。今子供達も参るでしょうが、どうもわがまま者ぞろいで、困っているのです。この二十日はつかから、夏休みになりますので、本当は九月から、お願いしてもいいのですが、貴女のご都合がおよろしければ、休命中軽井沢の方へ行きますので、あちらへ来て頂いても、よろしいのですが……」と、手をのばして、シガーボックスから、キリアジを取り、火を点じると、やがてゆるやかに紫煙を漂わせた。

新子は、いかにも物なれた優美さに、ある驚きをさえ持った。路子さんが、もつと兄さんに似ていたら、どんなに美しかっただろうと思つたくらいである。物を云う、その声の調子にさえ、ゆかしい薫りのようなものが、感ぜられた。

その上、準之助氏の話しぶりでは、もう自分を雇つてくれることは、定きままっているようなものであつた。

働くと決心した以上、軽井沢へ付いて行って、早く子供達になじんだ方がいい。九月まで待っている内に、前川家の事情が変わったりしては、いけない。殊に、奥さまは、気まぐれだというんだもの。

「はあ。どうぞ、私はどこへでもお伴いたしたいと思います。」

三

呼鈴よびりんに答えて、はいつて来た女中に、

「子供達をここへよこしてくれないか。」と、命じた。

間もなく、小さい足音が廊下に入り乱れて、扉があくと、路子に連れられて、兄妹がはいつて来た。前川氏は、ふり返つて十二になる男の子の頭に手を置くと、

「小太郎というんです。」と、やさしく名を呼び、父らしい微笑の眼で新子を見た。

短いズボンの下に、かぼそい足が、むき出しになっていた。モジモジしながら新子に頭を下げると、すぐ父の肩につかまった。

「これが祥子さちこ。」前川は、今度は右側の女の子の頭に手を置いた。

「この子は、まだ家庭で勉強させる必要はないんですが、兄がやるもんですから自分もしたがつてきかないんです。この方は、オマケですな。」

「まあ、かわいいお嬢さん！」

新子は、心からそう思った。大きな眼を早くも、クルクル廻して、人なつかしように、早くも新子にほほえみかけながら、子供らしい元気なおじぎをすると、傍^{かたわ}らの若い叔母の手にぶらさがった。

路子は、ぶら下がられて、中腰になりながら、

「さっちゃん、貴女、お使いが出来るかしら……出来ないわねえ。きつと。」

「ううん。出来る、何でも出来るわ。何……」

「ではねえ、ママのところへ行つて、およろしかつたら、応接間へいらしつてと、申し上げて来てくれない……」と、祥子にいつてから、兄に、

「ねえ。お兄さま、お義姉^{ねえ}さまにも、今ついでに会つて頂いた方がいいでしょう？」と、兄の承諾を求めた。

何事につけても、義姉に対して気をつかっているらしい容子^{ようす}が、新子の心を少し重くした。

「ああいいだろう。」前川氏はおうように肯いた。うなず

女の子はもう一度新子を見て、目をクルクルさせると、一散に部屋を出て行った。

しばらくすると、かわいい足音が廊下にきこえて、前よりもつと勢いよく、呼吸いきをはずませながら、かけ込んで来た祥子は、父と叔母と新子と三人を等分に見廻しながら、父に、

「ママは、今ご用ですって！　しばらく待っていて下さいって——」

「そう、ありがとう。」と前川氏は、子供をいたわったが、すぐ新子に、

「しばらく、どうぞ。」と、挨拶した。

子供に関する話題を中心に、三人の間にしばらく話が交わされ、二十分ばかり時間が経ったが、夫人は容易に現れては来なかった。

（何につけても、こんなに勿もつたい体たいぶるのであるか。家庭教師の候補者などには、そうやすやすとは会わないという肚はらだろうか）そんな邪推が、新子の心に、ようやく萌きざし始めた。

四

夫人の姿は、現れずして三十分近く経った。

準之助氏はたまりかねたと見え、

「今度は、お前が行つて、ママを呼んでおいで！」と、小太郎を迎いにやった。

いつかまばゆいシャンデリヤに、灯ひが入つて、雨の日の昼の光では、やや重苦しく冴えなかつた部屋が、急に花やかに照り返つた。

やつと、廊下にはほのかな衣きぬずれの音がしたかと思うと、半ば開かれた扉から、夫人が長身の姿をあらわした。

それを見ると、新子はいちはやく椅子をはなれて立ち上つた。

その新子に、夫人はほほえみもせず、頭づの高い挨拶をして、良人おとこと並んだ椅子にだまつたままで腰をおろした。

主人からは、対等に扱われていたのが、たちまちドスンとばかり、雇人志願者の位置に突き落されているのであつた。

いつか劇場で見た感じよりも、ずーっと若々しく、顔の色は浅黒く生々としているし、高貴に取りすましながらも、眼にも驚くほどの艶つやがあり、気品と明快さと堂々たる奥さまぶりで、準之助氏と並べて見劣りせず、夫人がそこに腰かけたことで、この応接間の画面の感じは、その仕上げを受けて、最高の生彩を發揮したといつてよかつた。

眼立たないが、贅^{ぜいたく}沢至極な好みの衣裳で、気持のよさそうな博多の単^{ひとえ}帯^{おび}で、胴のあたりを風情^{ふぜい}ゆたかにしめあげていた。

新子は、路子の注意を聴いているし、自分に会うために、衣物^{きもの}を着換えたのかと思うと、いよいよかたくなつて、すぐには口がきけなかつた。

「この方が、南條新子さんだ。」と、準之助氏が紹介してくれたので、

「どうぞ何分よろしく。」と、新子が再び立ち上つて挨拶すると、

「お初^{はつ}に。お名前はおききしていました。」と、さすがにかるい愛想笑いを見せた。

「どうぞ、勤めさして頂きたいと存じます。」と、新子がいうと、

「はあ。」何かふくみのあるような返事である。

「路子のお友達だし、いいだろう。」と、準之助氏がとりなしてくれと、

「ええ。それは、結構なんですの。でも、家庭教師として、家へ来て頂くとすれば、路子さんのお友達だからといって、ご遠慮ばかりしていられないところも、出来ませうから。」

新子は、急にこの美しい応接間に在つて、大きな蛾^がをでも見つけたように、襟元寒い思いがした。物を云うとき何か、一ひねりしてみないと気のすまない性格だろうか、このよな言葉は初対面の折になど、云わなくてもよい、いやがらせであると思つて、気持がわ

るくなりかけたが、ここが路子の注意だと思い、

「はあ。どうぞ、万事奥さまのお指図どおり出来るだけの努力を致したいと思ひます。」
出来るだけ素直に、出来るだけほがらかに答えた。

五

新子が出来るだけ、下手したでに出ての哀願に、夫人はニコリともせず、

「はあ。宅とも、よく相談しまして、二、三日内に、ハッキリしたお返事をいたします。」
と、どこか打ちとけない返事であった。

もう、すっかり定きまつたことと安心していた新子は、急に、夫人の手で三、四尺うしろ後へ、押しのけられたような気持であった。

新子は、急にバツがわるく路子か準之助かが、何か一言取りなすような言葉をはさんでくれることを望んだが、二人とも何ともいつてくれなかつた。

「では、何分よろしく。」

新子は、自分の身が、みじめに感ぜられ、モジモジしながら、暇いとまを乞おうとしている機

先を、夫人は見事に制して、

「まあ。およろしいじやありませんか。食事の用意を申しつけてありますから、路子さんや子供と一しよに召し上つて下さいませ。私も、ご一しよだといいですけれど、ちよつとこれから、外出致しますから、あしからず。」といいさして優美に腰を浮かせると、新子が眼のやりばにこまったほど、色つぼい眼差しで、夫君を見おろして、

「じゃ、貴君、あな私は行つて参りますから。」と、やさしく、しかし、誇りに挨拶すると、子供達の方には眼もくれず、部屋を出て行つてしまった。

子供達は、それでも急いで母の後を追つた。

(なるほど、これは相当なものだ!)と、新子は思った。もう自分を雇つてくれることが定つていながら、二、三日の内に通知するなどというのは、何事にも勿体ぶろうという夫人の趣味であろう、と新子は見とつた。

それから、新子を晩餐ばんさんに招じておいて、それを路子や良人への目つぶしにして、スラリと外出してしまうなど、心得たものであると思うと、新子は、これは、路子のいった通り、生やさしいご主人でないと思つた。

自分に会うために、着物を著換きかえたのだらうと思つたことなど、たいへんなうぬぼれだ

った。

それに第一、日曜の晩に、良人と子供とを放りばなしにして、外出する！ 普通の奥さまには、とても出来そうもない芸当を、アツサリと、威厳と自信とに充ち、優美な態度を崩さずに敢行する、それは新子にとつては、一つの驚異だった。

だが、それを見送って、のどやかに眉一つ動かさずにいる準之助氏の態度も、落ち着いたものだった。（こんなことに馴れ切っているのかしら、それとも止むを得ぬ外出先なのだろうかしら）などと、新子は去った夫人と残っているご良人りようじんとのことを等分に考えていた。そのとき、食事を知らすらしい支那風の銅鑼どらが鳴りひびいた。

「じゃ、路子、南條さんを食堂へ案内してあげなさい。」と、準之助氏が面おもてを吹いて寒か
らず楊柳の風といったような、おだやかな声でいった。

姉の愛人

一

家を一足出ると、ストッキングに開いている穴のことなどはすっかり忘れて、美和子がうきうきと、訪ねて行った先は、四谷からはさほど遠くない原宿であつた。

その昔、下町の華族女学校といわれたほど、校風も生徒も華手^はである美和子の女学校は、お友達もみな相当の、お金持の家の娘ばかりであつた。

美和子の親友相原珠子の家も、日本橋の大きな海産物問屋で、原宿の住居も新築のすばらしい邸宅である。

日本間にすれば、三、四十畳も敷けそうなサロンに、この天気の良いのにお客が十人近

く集まっていた。ほとんどクラス・メートばかりなので美和子は、はればれと、

「今日こんちア。」と、おどけて、珠子のいるソファにトンと腰をおろした。

「美坊みいぼう、おそいんだもの。心配したよ。どうしたのさア。」と珠子がいった。

「だってエ。相変らず、お姉さまのガチがうるさいもの、機を見て出て来たのさ。」

家にいる美和子とは、似て似ぬほど、ほがらかで、しかもお互に男のような、言葉づかいの乱暴さであった。

「とても、今日ラツキイなのよ。お兄さまのお友達で、新音楽協会の練習所にいる人で、とてもハンサム・ボーイを、お兄さまが呼んであるんですって……」

「へえ——」

キラキラ笑いにうるんだような美しい瞳をみはって、一わたり友達を見廻すと、美和子は、

「で、解った、道理で、ター公のお化粧が念入りだとさつきから、感心していたのさ。」

「チエツ！ 生意気いうな。こいつめ！」と、殊子に肩先をつねられそうなのを、仰ぎようさ

山さんに飛びのいて、

「めんちやい！ めんちやいつ！」と、向う側のソファに逃げた。笑いや、色や香りや、

花園のように小鳥籠かごのように、華やかで、騒々しかった。

その騒ぎの内に扉が開いて、珠子の兄が、笑いながら立った。その背後うしろにより添うて、いわゆるハンサム・ボーイ君が控えていた。みんなは、ちよつと神妙にわるびれて取りすました。

が、美和子はいきなり叫んだ。

「いやだ！ 美沢さんじゃないの。」

美沢も、美和子を見つけると、

「美和子さん、いらつしつていたんですか。僕が来たからといって、いやだはないでしょう。」と、この年頃の娘さん達は、扱ない馴なれているというように、ゆつたりした容子でま
ず美和子にはほえみかけて、他のお嬢さん達にも、ごく自然な会釈をすると、空席に腰をおろした。

「ねえ、ちよつと美沢さん。貴君あんた好ハンサム青ボーイ年年かしら？」

「これはどうも……」物に動じない快活な青年の顔にも、てれくさそうな色がひろがった。お嬢さん達は、笑いのコーラスだった。

ひとしきり楽しく笑いおわると、若い沢山の瞳が、一齐に美沢の方を向いて、パチパチとまたたいていた。

珠子の兄が、頃合を見つけて、

「南條さんとは、お知合いだったのですか。僕の妹珠子です。美沢直巳君。」と、こんな風に紹介した。

「ほほほほ、珠子さんが、新音楽協会なんて、おっしゃるから、解らなかつたのよ。ヴァイオリンの美沢先生といえばすぐ分つたのよ。それに、ハンサム・ボーイなんていうから、いよいよ解らなくしたのよ。」美和子は、なお悪ふざけを止めなかつた。

美和子のそうした態度は、美沢が一步部屋にはいると同時に、たちまちうら若い令嬢達の注視の的になつたのを見てとつて、自分がいかに美沢と親しいかを、お友達に見せびらかしたいという肚はらもあつたのだ。

美沢が、美和子の姉の新子と知り合つてから、もう二年になる。二人は、友人であるといつてもよいし、愛人同士であるといつてもよいような、即つかず離れずの間だった。

しかし、新子も恋愛だけに夢中になるのには、聡明すぎたし、美沢は美沢で、恋愛に夢中になるのには、あまりに生活の負担が重すぎた。

かれは、音楽学校を出ると、すぐ母と弟とを養わねばならなかった。だから、かれは卒業と同時に、小さい私立女学校の音楽教師になってしまった。しかし、かれの芸術的野心や情熱は、そうした生活では充たされなかった。

その上、かれは美男であったから、女学校の教師には不適任であった。

思慮もなく、ただ無分別に、うろろうと、あこがれの瞳をよせる少女達に、小突きまわされて、かれは当惑した。その上、周囲の教師達の猜疑と嫉妬との狭量な眼もいやだった。結局一年と一学期辛抱した後、このほど思い切つて、好きなヴァイオリンの試験を受けて、新音楽協会の練習所員となった。

初給は四十五円。教師のときよりも、ズーツとわるかった。新子に結婚の申込などする勇氣はいよいよなくなつた。しかし、公演もあり、放送もあり、技を磨くには絶好の職業であった。芸術家としてのかれの人生の曙光は見えた。

新子には、職業替えをしたのについて、すぐ手紙を出した。新子からの返事の中に、練習所の方が気分がよろしいとのこと、結構ですわ。でも、月給は安いんでしよう、貴

君は、自尊心がありすぎるから、蔭ながら心配していますわ。でも、生活の問題なんて、芸術家の貴君には、下らないことなんでしょう。……私は、この頃だんだん愛嬌者になって行きますわ。……

というような言葉があった。

かれは考えさせられたり、何だか腹が立ったりして、そのままになっていた。

三

新子は、彼女の愛人のことについてなど、一切妹に喋らなかつたから、美和子は、彼が先生を廃よしたのを知らなかつたのである。だから、新音楽協会の人といわれて、まごついたのである。

それに、美和子が、彼の好ハンサム青ボーイ年ブリーぶりをからかっているのも間違っていた。もつとも、美和子も冗談半分についているのであるが、彼はたしかにあるタイプのハンサム・ボーイだった。中肉中背、やや整いすぎて気むずかしそうに見える顔立ちではあつたが、眼が向き合えば、心清げに笑いかけるのが、少女達にとって一つの魅力らしかった。とに

かく、少女達の注意が彼に集まれば集まるほど、美和子は美沢をからかったり、弥次つたりした。しかし、どんなにからかわれても美沢は愛人の妹である美和子には、絶えず親しい微笑をつづけていた。

折を見て、

「新子姉さんは？」と、美和子に訊いた。

「私、お姉さんの番人じゃないことよ。」いたずらつこらしい眼をクルクルさせた。

「これは失礼！ でも、貴女あなたがお出かけになるときは、お家にいらつしやいましたか？」

「ええ。それはいたわ。」

「じゃ、今日多分お家にいらつしやるでしょうね。」

「いるかどうか、今日帰るとき私を送っていらつしやれば！ 分りますから。」

「じゃ、そういうことに致しましょうかな。」と、美沢は結局美和子に、うまく送らされる約束をしてしまった。しかし、彼も美和子を送るといふ口実で、新子を訪ねたかった。

そして、新子に自分が、職業を換えた気持をよく説明して、かの女の手紙にいささか現れている皮肉や批評を取り消してもらいたかったのである。

だが、晩餐までは、トランプや、新ルードや、カロムなどでさわぎ廻り、晩餐がすんで

からは、レコードをかけてダンスが始まったので、時間はグングン早く進んだ。

美沢が、明朝八時から練習があるので、七時前に起きなければならぬのを思い出して、急に暇いとまを告げた時は、九時を少し廻っていた。

もう、美和子を送つて、新子に会おうなどという考えは捨てていた。

だのに、美和子は美沢が、帰りかけたのを早くも見つけて、

「美沢さん。帰っちゃうの。私も、帰るから、送つて頂戴ね。」先刻の約束をちゃんと覚えていて、みんなの前で、宣言した。

美和子は、お友達にからかわれながら、美沢に寄り添つてその家を辞した。

四

お友達のひやかしや、いろいろなお別れの言葉を背中に聞き流して外へ出ると、まだぬか雨がふりしきつていて、七月とは思えないほどの、うすら寒い夜であった。

「私の傘つぼめちやうわ。貴君のに、入れてね。」美和子は、自分の小さい洋傘アンブレラをつぼめると、美沢の手にすがつて来た。

小柄で、まだ子供子供している上に、愛らしくはあるが、色っぽくはないので、そんなに近々と身を寄せられても、てれくさくないばかりか、肩に手をかけて歩いても、恥しくないほど、時々と愉快である。

「美沢さん、家へ送って下さるんでしょう？」

「そうですね。遅くなつたからな……」

新子に会えば、この上遅くなるし、それに新子の家では、姉きょうだい妹達いがいて、思つたことも話せないし……と美沢は考えた。

「ウソつき！」水だまりをよけながら、美沢の肘ひじに、すがっていた美和子の手に重みが増わつた。

「あした、八時から練習があるんですよ。明後日放送あさってだもんだから……」

「あなた先生よしたの本当？」美和子はまだ半信半疑であつたらしかった。

「本当ですとも。」

「いいわね。私、大賛成だわ。美沢さんは、天分があるんですってね。」お世辞ではあろうが、新子の手紙よりはズーツとうれしかった。

二人は、バスの停留場に出ていた。

「これから、銀座へ出て、もうお店起きてないかしら？」

「まだ大丈夫ですよ。」

「ねえ、美沢さん。一しよに銀座へ行かない？」

「何か用事があるのですか？」

「靴下を買うのよ。これ穴が開いているんですもの。お姉さま、お金ちつとしかくれないから、一円五十銭のを買うの。美和子悲しいわ。」見栄もなく、正直になげくので、美沢は何となくいじらしくなった。

「でも、僕はあした早いから……」

「いいじゃないの。私、円タクをおごるわ。」

「円タク賃ぐらい、僕が出してもいいけれども。」

「じゃ、行きましようよ。ねえねえ。」美和子は、両手で洋傘（こうもり）を持って、美沢の手を、一、二度ゆすぶった。

美沢は、とうとう通りかかった円タクを呼び止めて、銀座まで五十銭に値切った。

時間が遅いので、新子に会うのを断念した自分が、美和子につき合わされて、銀座へなごと思うとくすぐったい思いがしたが、しかし朗かきそのものである美和子と一しよに居

ることも、愉たのしいことに違いなかった。

第一、美和子は、新子のように批評的に、皮肉に人を見たり考えたりしなかった。

五

美和子が、靴下を買うのにつき合ってから、ジャーマン・ベイカリで、一しよにお茶を飲み、数寄屋橋まで歩いて、別々の電車に乗り、美沢は本郷弥生町の家に帰って来た。

ささやかな門のついでにいる暗そうな借家であった。

狭い玄関に上りかけたとき、母が出迎えて、

「お帰り、ほんの一足ちがい——新子さんが、八時半頃お見えになって今しがたまで、いらつしたのよ。」と、云った。

「へえ！」内心の驚きと口惜くやしさをこらえて、無愛想に云うと、二階の書齋へ上って行った。美和子などにつき合つたばかりにと思つと、新子にひどくすまない気がした。

二階は、八畳一間。床の間に、清すがすが々しい白百合と、根じめにりんどうの花が生けてあった。花をよく持つて来てくれる新子が、自分を待つ間の手ずさみだと思つと、銀座行き

がひどく後悔されて来て、何かしら自分と新子との愛情に凶相が萌きこしたような気がした。彼は、黙々として卓子つくえの前に坐つた。と、手元に彼の使っている白い封筒がふくらんで、きちんと、置かれていゝのに気がついた。

思いがけない嬉しさに、救われたような気がして、乱暴に封を切つた。

私とうとう働くことになりましたの。家庭教師です。今日、お目見得、多分採用される見込み、前川準之助つて実業家の家……ご存じないかしら、私のお友達のお兄さんよ。子供さん達は、みな素直な良い子らしいの。ただ前川夫人が少し難物、一ひねりも二ひねりもありそうな人物。でも、私おおいに奮闘してみるつもり。私が、働かないと、だんだん家中干ぼしになる怖れあり、貴君は家庭教師など、不賛成かもしれませんが、どうかあしからず。

二、三日の内に軽井沢へ行きます。貴君もお忙しいようだし、多分秋までお目にかかれませんか。お花を買つて来て、よかつたわ。あまり、このお部屋殺風景じゃございません？ 物干しに、朝顔の鉢でも、お置きになつたらどう？ 私のような、麗人を迎えるのに、ふさわしくないわ。レコードだけじゃ、物足りないじゃありませんか。

でも、レコード聞かせて頂いたわ。ラローのスペイン交響曲、とてもいいわ。貴君を待っている気持ちにぴったりしていたかもしれない。

お煙草、チェリイが一日に四箱ですって、お母さまに伺ったのよ。二箱になさつちやど
う？

直巳様

しん子

美沢は、美和子につき合った浮気心を、我ながらいよいよ情なく思った。

六

新子は、十一時まで美沢を待っていた。かの女は、美沢が近頃猛練習で、忙しいのを知っていたから、今宵会わなければ、軽井沢へ行くまでに、会う機会がちよつと得られないことを知っていた。

しかし、三時間近く待っていてさらにそれ以上待つのは、自分の心の底を見すかされる

ような気がしていやだった。

十二時近くまで未練がましく待つて、それでももし帰つて来なかつたりしたら、いよいよ引つ込みがつかなくなると思つたので、十一時になつたのをキツカケに、体よく美沢の母に暇乞いして、帰途についた。

新子は、美沢と交際つきあつてから一年以上になるが、その間に美沢の欠点も美点も、すつかりのみ込んでいた。美沢が芸術至上で、自分の芸の完成にどんどん邁進まいしんして行くところは好きだった。金は無くても、芸術貴族として、世俗に対し、氣むずかしそうに、眉をひそめているところなど好きであつた。しかし、それでいて彼女の現実的な考え方から、時々美沢に、「ヴァイオリニストで、ちゃんと一家を持つて行つてゐる人は、日本に何人いるのかしら。」など云つて、美沢をいやがらせていた。

実生活でも、美沢は質屋へ行つた話をしながら、時に驚くほど高価なネクタイをかけていたり、趣味のいいステッキなどを持つていた。

貧乏でも、貧乏たらしくないところなど好きであつたが、しかし結婚すべき良人おとことしての美沢を考えると、前途は遼遠としていた。

どちらかに、馬車馬のように猛進する情熱のない限り、金のないインテリ階級にとって、

結婚難は現代の宿命の一つだった。

だから、二人とも結婚について語ったり、愛について語ったことはなかった。しかし、二人の間は美しいひもに結ばれているように遠慮のない交際ぶりから、ちよつといさかいをしても、一週間も経てば、元通りになり、しばらく手紙も書かず、会いもしないでも、常にお互に快く思い起していた。

だから、会わずにこのまま、軽井沢へ行つたところで、二人の間にどう影響するということ柄ではなかったが、でも新子は何となく物足りなかつた。

電車から降りて三町ばかり、もう人通りの少くなつた路次を通つて行く、新子の心はさびしかつた。

と、ハイヒールの靴音が、大またに自分を追うて来たかと思うと寝しずまつた町並の家の安眠妨害になりはしないかと思われる大声で、

「あら、新子姉さんじゃないの。今頃、お帰り！」と、何かうれしいことがあるらしく、おのずからはずむ声高く呼びかけたのは、思いがけない妹の美和子である。

「まあ、美みちゃん、こんなに遅く！」と、新子は、つい自分の遅いのも忘れて、姉らしくとがめた。

「だってえ。相原さんのところに九時までいたんでしよう。それから、靴下を買いに銀座へ廻ったんでしよう！ 遅くなるはずよ。それよりも、お姉さん、わたしとてもいい人に逢っちゃったのよ。」と、息をはずませている。新子は、妹の逢った人など、およそ興味が無いといったように、だまって足早に歩きつづけていると、

「ねえ。お姉さん、誰だか当ててみないこと。」

「知らないわよ。」少し邪じゃけん慳につつばねると、

「ううん。お姉さまの知っている人よ。」と、思わせぶりな、口のききように、新子もやや釣り込まれて、

「だあれ。」と訊くと、

「当てなきや云わない。」と、今度は妹の方でじらしにかかるので、

「じゃ聴かない。」と、新子ははしゃいでいる妹の気持に、つき合うのが少しうるさくなっていると、

「お姉さんのとてもよく知っている人よ、私、相原さんのところで、逢うなんて、とても意外だったのよ。」と、甘えかかって来た。

(美沢かしら)と、さすがにわが愛人の名を、最初に思いうかべていると、妹は素直に、
「美沢さんに会ったのよ。」と、いった。

「そう。」と、うらさびしく答える姉の返事など、待ってはず、

「珠子さんの兄さんが、新音楽協会の人で、とてもハンサム・ボーイを連れて来るといつて騒いでいるんで、私どんな人かと思って待っていると、はいつて来たのは、美沢さんでしょう。私、とてもおかしかったわ。美沢さん、先生をよして(新協)へ入ったんですってね。」

「……………」新子は、何か悲しく、返事が出来なかった。

「お姉さん、ご存じなかったの。先生、およしになったんだって！ だから、私大賛成だと云ったわ。だって、あの方、天分がおりになるんでしょう。いつか、お姉さん、そうおつしやっていたわねえ。女学校の先生なんかしているより、よっぽど、その方がいいわねえ、そうじゃないこと。」

美沢のことを、何かわがもののように話している美和子が、まだ年端としはの行かぬ妹とはい

え、何かうとましく、新子はいよいよおしだまっていた。

赤い産婆の軒燈のついた家に添うて、わが家のある路次へ曲るとき、

「美沢さんという方、思いのほか親切な方ね。」と、美和子は、楽しげなといきのようにいった。

八

姉妹が帰ったとき、母はまだ起きていた。

圭子は、二階で勉強しているとみえて、階下へ降りて来なかった。

美和子は、すぐ二階へ上ってしまったが、新子は母と二、三十分、着物を着換えながら、前川家のことなど、少し話してから自分の部屋へ上っていった。

美和子は、新子の部屋で、一しよに寝ることになっていたので、もう床の中へはいり、うつぶせに雑誌を見ていたが、後からはいつて来た姉を上目づかいで見た眼には、まだ楽しそうな微笑があふれて、もっと、何か話したそうである。

新子は、自分が美沢の家で、待ちくらししている間、妹が美沢と楽しく遊んでいたのだと

思うと、心の平静が失われて、この上不愉快なことを聴くまいと、クルリと背を妹に向けて、床にはいった。

「ねえ。お姉さま！」美和子が、姉の背中に話しかけた。

「ほら、靴下が破けたから、買いたいって、云っていたでしょう。相原さんのお家を出てから、気がついたの。だから、私美沢さんとお別れして銀座へ行こうと云うと、あの方、ご—しよにいつてあげましようかって、……円タクを停めて下さったのよ。そして、靴下を買ってから、ジャーマン・ベイカリでお茶のご馳走になったの。あの方見かけよりは、ず—つとご親切ね。家へいらつしやる時なんか、つ—んとしていていやだったけれど、二人ぎりでお交際つきあすると、とてもいいわ。気に入っちゃった。フレドリック・マーチの小型みたいで……」

新子は、背中一杯に針をさされるような気がした。

「お姉さま、聴いていらつしやるの……」と、新子の沈黙をゆりうごかしてから、独り言のように、

「美沢さん、この頃、とても忙しいんですって——新協では、才能次第で、グングン月給が上るんですって……だから、美沢さんは夢中で勉強しているんだって、いつていたわ。」

明後日放送があるんですって、だから明日は八時までには練習所へ、顔を出さなきゃいけないんですって……練習所は、荏原えはらの方だから、早起きしなければいけないんですってね……」

美沢うわさの噂をするのなら、せめて（お姉さんによろしくとっていったわ）とか、（お姉さんに会いたいとっていったわ）とか、あつていいはずである。美沢は、そんなこと、一言も口にしなかつたのだらうか。新子は、さすがに少しジリジリして、

「美沢さん、別に私のこと何か貴女に訊かなかつた？」と、背を向けたまま訊ねた。思いがけない姉の積極的な問いに、美和子は、ドキツとした。

（私を送つてお姉さんに会いに来るはずだつたのを、私が銀座へ連れ出したの）などと答えては、たいへんだと思つたので、

「ううん。何も。」美和子の声は、低く小さく、さりげない夜風のように。それを聞いた新子は、急に淋さびしく胸がふさがつた。

一家の生活問題に及ばずながら立ち向おうと、立ち上ると、その隙間に側そばに寝ている肉親の妹が、早くもわが愛人をかき乱そうとするのか。新子は、全身をながれる悲しみを感じて、まぶた瞼の裏があたたかくぬれてきた。

新子の仕事

一

久しぶりの青空である。

午後からは、カッと暑くなりそうな、日曜日である。十六、七日の藪入りやぶいりを雨に取られたので、そのつぐないをしようとする小店員。リュクサックを肩に、一晩泊りのハイキングに出るオフィス・ガールや青年達。街も活気に充ちていたが、上野駅は一時に夏が押しかけて来たよう——嬉しげな靴の音や、はしゃいだ下駄の音、午前十時何分かの登山列車は、ほとんど空席のないほど、混雑していた。

新子は、採用が定きまって、前川家の人達よりも、一日遅れて、軽井沢へ来るよう命ぜられ

た。

「羨ましいわ。これから東京は暑くなるのに、新子姉さまだけが別天地にいられるわけね。いいわねえ。」と、美和子がいうと、圭子までが、

「私も新子ちゃんみたいにな、夏休み中だけでも、家庭教師をやればよかった。」と、新子が何か面白づくで家庭教師になって、涼しい旅行が出来、うまくやっているというような顔をしていた。

「身体を気をつけてね。奥さまや、お子様達の気に入るように……」

車の外に止まとどまっている母は、初めて家庭から離れる娘の上を、ただわけもなく不安がっていた。

「お姉さん、私一人だけは、遊びに行ってもいいでしょう。」姉の荷物を網棚に置きながら、美和子がいうと、

「ダメよ。」と、にべもない返事に、美和子はしよげた。

車の外の母が、

「軽井沢は寒いだろうから風邪を引かないように……」と、窓から首をさし入れて、念を押した。

圭子も美和子も、次々に乗つて来る人達に押し出されるように、プラットフォームに降りてしまった。

ベルが鳴った。

「さよなら。」

「気をつけてね。」

車が動く、見送人は吹き寄せられたように取り残される。はしゃいでいる美和子は、汽車と一しよに走つて、フォームのはずれまで来て手を振った。

新子は、とうとう美沢とは会わなかつた。美沢は、前夜の手紙に対し返事を速達でよこし、急に会いたいといつて来たが、それと同時に軽井沢行きが定つて今日の出発となった。会いたくもあつたが、しかし会わないで行く方が、余情が多いようにも思つた。

どうせ、簡単に結婚できないとすれば、ある間隔を保つていた方が、お互いのためにいいのではないかと思つた。

それに、美和子などが、あんな調子で甘えかかつていても、そうやすやすとは心をうごかす美沢でないことを、新子は信じたいと思つた。

だから、美沢のことは、比較的安心が出来た。心配なのは、やはり準之助夫人である。

昨日^{きのう}夫人からもらった採用通知の電話の最初の言葉なども、嫌だった。

（主人ともいろいろ相談致しましたが、こちらはどちらでもよろしいんですけれども、貴^あ女^なが非常にご希望のようですから……）という切り出しだった。何事にも高飛車に、上手^{うわて}から出ようという態度が、二、三分間の電話の中でも、新子を不快にした。

二

生活への最初の出発、昔からいう初奉公の不安、それに難物の夫人、東京を離れた刹那^{せつな}から、新子はやはりかるい物思いに沈んだ。

（あの夫人と衝突して、半月や一月でよすくらいなら、いつそ最初から行かない方が……）と、考えたりした。しかし、夫人が昨日の電話での物のいいぶりや態度でこちらを不愉快にさせながら、

（お礼は、五十円くらいは、さしあげられると思いますの）と云ったことは、彼女をよろこばした。一時は、夫人に対する不快を忘れさえした。

その上、新子は子供に好かれる性質^{たち}であつたし、彼女自身子供に愛着を感じ、子供と心

から遊べる性質たちであつた。

だから、前川家で、一夜晚餐を共にしただけで、もうすっかりお仲よしになり、帰りには彼女の肩につかまつた小さい兄妹を考えると、彼女は頼もしくも思へたし、ある楽しみをも感じた。

高崎あたりから、うすぐもりの空となり、熊の平では、かしの峰、ここの谷に、うす白い霧がまい下りて、ひんやりと浮世ばなれのした風が、窓から出した頬を吹きわたるのだつた。

(いいわ。奥さまが、我慢できなければ、他に就職の途を見つけるとして)と、唇にしみじみ山の気を吸いこむと、どうやら彼女の気持は明るくなつたような気がした。

軽井沢の駅には、小さい兄妹が、十六、七の女中につき添われて出迎えに来ていた。

青い草をもてあそんでいた小太郎が、いちはやく彼女を見つけると、草の茎で窓をポンと叩いた。

祥子さちこは、

「先生、もつと、早い汽車でいらつしやればいいのに、私とても待ちどおしかったのよ。」とおませな口を利きながら、すぐ新子の手にすがつて来た。

やや憂鬱であつた新子の車中の顔は、子供達の歓迎で、のどかなきよらかな笑いでかがやかしくなつた。

「路子叔母さまは、いらつしやらないんですの？」と、新子は、子供達に訊いた。

「路子さんは、房州よ。三谷の伯父さまのところよ。」と祥子が答えた。

（お母さまは？）と、訊きたかつたが、両親のことは、何かにつけ訊かない方がいいと思つてよした。

待つていた自動車に乗つた。

湿つた街道に、うす日がさし、まるで砂ぼこりのような霧が、サツサツと舞い上つていた。

別荘は諏訪の森の近くであつた。

表向きは、天然のひろやかな庭に二つの石柱が建つてゐるばかりのように思えるのに、小径を辿つて行くに従つて、両側の白樺並木の、しだれた若い緑の繁みごしに、ヴィラの傾斜のなだらかな屋根と、カーテンの揺れている白い框の窓が見え、繁みが切れると、玄関のポーチまで、一面の花園で、その真中を氣持のよい芝生の小径が通つてゐる。

三

ポーチの脇に、兄妹の緑と赤との愛らしい自転車置いてあった。

別荘は、しんとしていて、絶えずよい草の香りのする風が吹き、しきりなしに鳴く郭^{かつこ}公の声が遠く近くきこえるばかりであった。

運転手が、新子の荷物を運び入れてくれると、奥から三十ばかりの女中頭らしいのが出て来て、

「いらつしやいませ、どうぞ、お部屋をご案内いたします。」と、どんどん先へ立って行くこうとするので、

「あの、奥さまに、ご挨拶したいのですが……」というと、

「奥さまは、来週の水曜まで、東京にいらつしやいますので……」

「まあ……じゃ、こちらは……」と訊くと、

「旦那さまと、お子さまだけでございます。旦那さまは、ただ今ゴルフへ行っていていらつしやいます。」と云う返事だった。

廊下が、一段トンと低くなって、そのとつつきの洋室が、新子のための部屋だという。

庭に面して、二方に窓があり、淡いみどりの壁紙が貼ってあり、取りつけのベッドがあり、気持のよい部屋で、軽井沢特有の少し湿気を帯びた、すがすがしい山の風が、部屋の中を吹き払っている。

カーテンが風に、帆のようにふくらみ、たちまちガラス窓に、ぴったりと吸われる。

「もつたいないほど、よいお部屋でございますこと。」と、新子が云うと、

「洗面所トイレットやバスは、後でご案内いたします。」と、外人別荘にいたことのあるらしい女中は、英語を使った。

それまで、新子につきまといっていた子供に、

「さあ、先生は汽車でお疲れになっていますから、少しお休みになるそうですから、お坊つちゃん達は、お二人でお遊びなさいませ。」と子供にいつてから、新子に「四時にお茶でございますから、そのとき旦那さまにご挨拶なさいませ。」と、いつて、子供達を向うへ連れて行ってくれた。

新子は何から何まで、外国式なこの家の主人に気に入るように、キッチンとしたいと思つて、髪をなおし、足袋たびをはきかえ、帯のゆるみをなおしてから、荷物を一通り片づけて、さて気持を落ちつけるために、壁際にあるソファに、腰をおろした。

路子が来ていないと知ったとき、自分を夫人からかばってくれる人が居ないのを知って、悲しく思ったが、その夫人が五、六日は来ないことを知って、うれしくなった。

あの高飛車な夫人に対する気兼さえなければ、この家は相当楽しいところに違いない。準之助氏は、英国紳士のように、優雅で親切に思えたから……霧が、だんだん晴れて窓から近く、離山はなれやまが見える。こんなにも明るい静かな生活であつたら、自分も勉強が出来る。まるで、都会の厩舎きゆうしゃから高原の牧場へ放された馬のようではないかと思つてみると、お茶の迎いらしく幼い足音が、響いて来た。

四

新子は、次の朝郭公かつこうとミヒヒという山羊の声で眼がさめた。腕時計を見ると、六時少し前であつたけれど、彼女はそのまま起きて、やや肌寒いのでセルのサツパリした常着ふだんぎに着かえて庭へ出た。

庭の面おもてには輝かしい朝の陽が溢あふれているのだつたけれど、家をとりにくく緑の繁みに、まだ朝ぎり、ほのぼのと煙けむりついていた。

白樺の小径には、短い夏の夜を鳴き足りない虫の、かほそい声がきかれた。

ふと小径の曲り角で、新子は足音と影とを見て立ち止まった。

それは、準之助氏であった。

早くも今朝カミソリの刃を当てたらしいすがすがしい顎、麻の単衣ひとえに、竹のステッキを
持っていたが、新子を見ると、

「ああ、お早う。」と、呼びかけて、

「貴女は、お若いのに早起きですな。今朝だけですか、それとも習慣ですか。」

「今朝は、特別でございますけれども、家におりましたも、朝は早い方でございます。」

「そうですか。じゃ、昨夜ゆうべ、申し上げた日課を改めましょうか。子供達も、休み中なるべく早起きの習慣をつけたいと思つていますから……」準之助氏は、新子をうながすように、
小径を先に立って歩きながら、

「じゃ、朝食前に、小太郎に読み方と算術を教えて下さい。そして、十時に女の子の勉強
を見て頂いて、午後二時にまた小太郎に、ほかの学課の復習をしてやって下さい。」

「かしこまりました。」と、新子は頭を下げた。

「今日から始めて頂きましょうか。」準之助氏は、昨夜ゆうべと今朝と、新子と話をすることに、

よりふかく新子に満足してくれるらしかった。

「食事は、みんなと一しよに食堂で召し上つて下さい。それから、夜は一切貴女のご勝手にして下さい。こっちの書庫にも割合本がありますから、読みたいものがありましたらご遠慮なく。」

二人はいつか、裏庭の芝生に出ていた。大きな柏の下に、山羊が、二匹つないであった。家からは、人声が洩れ、かん高い幼い声も交った。

「お子さま達も、お眼ざめのようですね。」

「そうですね、後で、貴女の授業ぶりを拝見したいですね。」

「お恥かしいけれども、どうぞ。」

準之助氏は、新子に庭内の樹や草花の名前を教えながら庭内を一廻りした。

——七時から初めての授業。小太郎は物解りのいい子であった。そして、先生が新しくって珍しいせいにか、熱心に応^{こた}えたりきいたりして、無事に授業がすんだ。

準之助氏は、遠くはなれたソファに腰をおろしながら、始終ニコニコしながら、満足そうに新子の教えぶりを見ていた。

五

二時から、小太郎に地理や歴史などの復習をしてやると、あとはかの女の時間であった。主人や子供達と一しよに、お茶を頂くのも新子には楽しかった。

二、三日のうちに新子は、すっかりこの生活に落着いてはれやかになった。ただ、夫人が東京から来る時が近づいて来るのが、不安だった。

三日目の晩、美沢に手紙を書いた。

どうか安心して下さいませ。

こちらの生活は、とても楽しゆうございます。健康で、ご飯までがおいしく頂けます。それに、このお手紙を書いている私の部屋のよい匂い、高原の草の香りが、しみ込んでいて、どんなよい床まき香水もこの匂いには敵わないでしょう。

前川氏は、万事外国好みです。だから、私なども、一個の貴婦人^{レディ}として、とても大事にして下さいますの。

洋書も和書も、沢山ございますわ。別荘に、これだけの書庫を持っている実業家なんて、

ほかには滅多にないと思いますわ。

旦那さまと、お子さまだけをこちらへよこして、奥さまは、まだ東京にいらっしやいますの。奥さまのご交際の都合だとのことですよ。

私は、ほんとうに気が晴れやかですよ。

東京で姉や妹の生活を見て、ジリジリしているより、どんなにいいか分かりませんわ。

お子さまに、一日三時間お相手をすれば、後は私の時間ですよ。私の時間には、絶えず貴君あなたのことを思いだしております。

来てから四日目、お茶の時間に、小さい兄妹は、お昼寝をしていたため、新子と準之助氏とだけで、お茶をのんだ。お茶が済んでも、準之助氏が何だか所在なさそうなので、新子は何となく立ち去りかねていた。

「貴女は、ダイヤモンド・ゲームをおやりになりますか。」

「はあ。」

「じゃ、一つお相手しましょう。」

「どうぞー！」

準之助氏は、笑いながら、向うの玩具おもちゃ棚から、ダイヤモンド・ゲームを持って来た。

二人は、かなり身近く相對した。二人は、お互に子供らしく緊張しながら、駒をうごかしはじめた。新子は、英学塾の寄宿舎などで、お友達の誰とやっても、なかなか負けなかった。この遊び方のコツといったものを呑み込んでいた。

準之助氏は、手もなく負かされた。

二度目に駒を並べるとき、新子はいった。

「お母さまが、いらつしやらなくつても、お子さまは、たいへん、大人おとなでいらつしやいますね。」

「普段から馴れていますから、私の家では、（ママ！ パパがお帰り）なんていうことはめつたにありませんよ。大抵、（パパ！ ママがお帰り）というんですからな。」と、上品にほほえみながらいった。

主人の心

一

新子は、思いがけない言葉に、ふと相手の心の底をのぞいたような気がして、合あいづち槌づちにこまつて、だまつて相手を見ていると、準之助氏はつづけて、

「僕も、妻がいない時の方が、かえつて気楽ですよ。」と、何気なくいった。

聴いてはならない言葉である。

「まあ！ そんなことございませんでしよう。」というよりほかなかつた。

「いいや、男女が二人して作る生活に、幸福なんて滅多にないのじゃありませんか。夫婦生活も、楽しいのは最初のうちだけで、お互きに生地じを出しはじめると、月並な文句ですが、

墓場ですな。」

新子は、主人の思い切った言葉に、あわてながら、

「そんなものですかしら！」と、辛うじて答えた。

準之助氏は、いい過ぎたと思つたらしく、

「ああ、悪いことをいたしましたね。僕は……独身の貴女あなたを前にして、……しかし、夫婦生活なんて、両方であきらめるか妻か夫かの一方があきらめるか、どちらかのものですよ。

僕の家なんか、僕が早くからあきらめていますから、十五年にもなりますが、けがもなく過ぎて来ているんです。いや、これはとんでもないことを申しました。さあ、どうぞその駒をおすすめ下さい！」新子は、ひどくのどかな気持でいたのに、準之助氏のこの思いがけない話題で、すっかり気持が乱れた。

もう、子供のようにダイヤモンド・ゲームなど、やっていられる気持ではなかった。強いて駒を動かそうとしても、考えがまとまらなかつた。

折よく、目覚めた幼い兄妹が、歩調を合わせて、廊下を駈けて、この部屋へ走り込んで来てくれたので、新子はホッと救われた気持になった。

祥子は、新子の肩にすがりながら、

「南條先生、ずるいわ。パパと二人ぎりで、お茶をめし上って、なぜサチ子を呼んで下さらないの？」と、わる気はないが、詰問だった。

「あら、ご免あそばせ。でも、祥子さんは、ほんとうに、よくお休みになっていたんですよ。お起しするのがわるいくらい。」

「そうお。ダイヤモンド・ゲーム、サチ子としましょう。」と、祥子がいうと、

「祥子がすんだら、僕とだよ。ねえ、先生！」と、小太郎は自分の順番を確保した。

子供達と、ゲームを争いながらも、新子は準之助氏の言葉が、気になって仕方がなかった。

そして、ふと準之助氏の方を見たとき、相手の眼が、あまりにも自分の方を、親しげに見つめているので、更に心の平静を乱された。

二

晴れた日と澄んだ夜と、高原の夏は、人の身体から、汚ないものを吸い取ってしまうような気がした。

翌日は、二時の復習が了ると、子供達は父と散歩かたがたアメリカン・ベイカリへ行く嬉しさで、無遠慮になつていた。

「先生のお洒落しやれ！ パパは、もうお支度が出来ているのに……」小太郎は、新子の部屋の扉を開けて、足踏みをしながら叫んだ。

新子が、パラソルの中に、祥子を入れて玄関を出た時には、小太郎とその父は、白樺の繁みで手を振つていた。

ニュウグランド・ホテルの前を通つて、陽の眩まはしい草原の道を真直ぐに進みながら、小さい兄妹はえんじ色にうれた野苺のいちごを見つけて、わざと草深い中を歩きながら両手にあまるほど苺を摘んだ。

「こんなの、甘いよ。」と妹に云いながら、小太郎が、大きな紅玉を、唇に持つて行きそうにすると、

「およし。チブスになるぞ！」と、父は急に乱暴に、厳しい調子で叱つた。小太郎は、いさぎよく赤い粒を、地面にバラバラと落して、父のステッキを持つている手の甲に、犬のように頬を押しつけた。それが、新子には愛らしく無邪気に見えた。

やがて、草原の末に、ベイカリの屋根が見えると、兄妹は駈けっこを始めた。

新子は、準之助氏と並んで、それを見送りながら、歩調は変えなかつた。

「貴女あなたは、当分結婚なさらないのですか。」いきなり準之助氏は、新子に訊いた。

「あら、どうしてそんなことを、お訊きになりますの。昨日きのうは、結婚生活をつまらないとおっしゃつたじやありませんの……それに、私は駄目ですわ。私が、結婚しますと、私の家の中心になるものが無くなりますの。私は、つまり働き蜂に生れついていますの。」と、明るくいつて、それから一家の状態を、恥にならぬ程度で、打ちあけた。

準之助氏は、一々しみじみと肯うなずいて聴いていたが、ふと兄妹達が駈けて行つたバイカリの通りを一台の自動車自動車が疾駆して来たのを見ると、ハツとして立ち止まつた。万一、子供達が自動車に触れはしないかと心配したのであろう。

だが、自動車が行き過ぎてしまうと、砂ほこりを浴びながら、兄妹はこちらを向いて手を振っていた。

二人が、お互に安心した拍子に、眼がかち合つた。

すぐ、その眼をそらしながら、準之助氏は、

「貴女は、子供好きですね。」と、いつた。

「ええ。」

「私の妻なんか、自分の子供でも、あまり可愛くないと見えますね。」

新子は、また返事に窮した。

「貴女がながくいて下さるといいですな。」

「なぜで、ございます。」

「貴女が、子供と一しよにいて下さったこの三日、僕は何となく安らかな思いでいましたよ。」

藤棚の下の、一番よい場所の卓子テーブルを占領して、子供達は二人を待っていた。

三

準之助氏の心に、とろりと艶なまめかしいわだかまりが出来ていることを、新子はハッキリ感じていたが、しかし新子は、それによって、心を動かされはしなかった。といって、それを煩わしいとも重くも思わなかった。ただ好意のある微笑をもって、のぞもうと思っていた。

初対面のとときから、準之助氏に好意と敬愛とを持ってはいたが、しかしそれが、どうこ

ろんでも愛慕になるとは思えなかった。

それに、彼女は美沢を愛していたから。

でも、こうして四人づれで、子供達には仮の母のように、準之助氏には、仮の妻のように、行動していることも楽しいことには違いなかった。

ベイカリの帰りには、森に入ってからではあつたけれども、軽井沢特有の雷雨に会ってしまった。小太郎と祥子とは、それをまた、面白がつて走り廻つたので、ビシヨ濡れぬになった。

別荘の前の道まで、走りぬけると、女中が傘を二本持つて迎いに来ていた。

女中は、準之助氏に傘を渡しながら、

「あの奥さまが、先刻さきほどお着きになりました。」といった。

準之助氏は、不意の知らせにいきさか驚いたらしかったが、すぐ常態に返つて、
「駅へ誰も迎いにいなかったのかい。」と、尋ねた。

「はあ、お電話も下さらないものですから……。」と、女中は弁解した。

新子は、今しがたの雷が、まだ空に鳴りつづけているような不安を感じた。

「ママのお土産みやげなんだろう。」

さすがに、兄妹は母来ると知ると、新子のさし出した傘にはいろいろともせず、小降りながら、まだふりつづいている白雨中はくうちゅうを、門の中にかげこんでしまった。

主人と二人並んで門をはいるのが、新子は何となく気が引けた。

主人は玄関から、新子は内玄関の方から、家へはいった。

濡れた衣類を着かえて、夫人のところへご挨拶に出ようと思つて、自分の部屋の扉を開けてみて、新子はハツとした。

それは、間違つて別室に入ったのではないかと思つたほど、容子が変わつていたからである。自分が使つていた机の上は、キッチンと片づけられ、そこに置いてあつた数冊の本は影もなく、女郎花おみなえしと桔梗ききょうとを生けてあつた花瓶も見当らず、ベッドの上の麻のかけぶとんもなく、棚の上のスーツ・ケースも無くなつていた。

あまりの激変に新子は、あつけに取られて、立ちすくんでいると、新子の帰宅をそれと気づいたらしい女中が、廊下をバタバタと後を追つて来た。

「南條先生！ たいへん、失礼致しました。でも、奥さまがいらつしやいまして、先生のお部屋が違つていると、おつしやるもんですから、お留守でしたけれども、早速お変えしたんですの、奥さまはおつしやつたことを、すぐ致さないとご機嫌が、悪いものですから

。「人のよさそうな女中は、オドオドしながらいった。

四

新子は、思わず身体が、ムーツと熱くなるような憤りいきどおを感じた。

奥さまの考えで、部屋が違っていたにもせよ、自分が帰って来るのを待つて引越させてくれてもいいではないか、たとい雇人であろうとも、他人の留守に勝手に、荷物を運び出すなんて……女中のせいではないと思いつながらも、かの女はつい険のある眼になって、

「そして、新しいお部屋は……」と訊いた。

「どうぞ、こちらへいらして……」と、女中は先に立った。

肩のあたりが、雨にぬれていて気持がわるく、一層ジリジリした。

二階へ上るといつても、女中部屋の脇からの裏階段で、母屋とは棟ちがいの中二階の部屋に案内した。

畳数は六畳で、同じような作りの部屋が二つ並んでいた。

とつつきの部屋は、物置になっているらしく、静子に当てられた次の部屋も、小さな窓

が一つあるだけで、何となく暗く、床まき香水を思わせるよい草の匂いなどはおろか、うかうかすればカビの香りでもしそうである。

隅にある安手な机と書棚、新子の荷物が部屋の真中に薄情そうに雑然と置かれてあるのを見ると、ものかなしくなつて、そのまま暇を告^{いしま}げて、東京へ帰りたい気持がした。

「では、ご免遊ばせ。」と、女中は新子の顔を見ないようにして、コソコソと階^{した}下へ行つてしまった。

新子は、目見得に來た女中のように、スーツ・ケースから着物を出して、ともかくも着かえてから、部屋を片づけた。

(これが、生活なのだ。これが世間なのだ。これが奉公なのだ。部屋は、これでちようどいいのだ。さつきまでは良すぎたのだわ)と、新子は妙に、イライラした自分の神経をなだめるように、胸の中でいった。

奥さまのところへ、挨拶に行くのが何となくおつくうで、不快で、しばらくの間ぼんやりしていると、さつきの女中が来て、

「奥さまが、お部屋でお目にかかるといつていらつしやいます。」と、いった。

奥さまの部屋は、二階に在り、子供達に案内してもらつて一度見たことがある。新子の

部屋から廊下を真つ直ぐに、三段ほど上つて母屋の二階へ出ると、主人の部屋と並んでいた。

バルコニーのある貴族趣味の、いかにも別荘らしい瀟洒しょうしゃたる部屋で、ぜいたくを極めていた。

白い色を多く使つた明るい家具が置かれ、バルコニー近い豊かなソファに、軽い紗のアフタヌーンを被きた夫人が、あだかも大公妃のような態度で、彼女を待っていた。

五

新子は、準之助氏と一しよに散歩に出たことについても、きつと叱言こいごがあるに違いないと思うと、女学校時代にやかましいオールド・ミスの先生に呼び出された時のように、丁寧に会釈すると、何かいわれるまでは、立っていた。

「どうぞ、おかけ下さい。」と、夫人は身近い椅子を指ざした。新子は、卑屈にならない程度で、愛想ふかく、ほほ笑みながら、腰をおろして落着くと、

「子供と一しよに来ないで、いろいろご迷惑でしたでしょう。主人から伺いましたけれど

も、子供の勉強を見て下さる時間割は、たいへんけっこうだと思えます。でも、貴女が子供達を遊ばして下さるのは、ご親切ですけれども、あまり馴なれなれ々しくさせないで頂きたいと思えます。家庭教師は、女中ではありませんから。先生としての恐こわさを無くしてしまふと、いろいろ弊害が多いと思えますから……そのおつもりで……」と、夫人は何か小さい卓上演説テーブルスピーチでもするように、ハッキリというのだまってしまった。主人と散歩してはいけないなどというような注意は、夫人自身の尊厳を害するとみえて、おくびに出さず、顧みて他をいったというような注意だった。

しかし、それも何かしら無理な注意で、

「はア。」と、新子は、憤りと口惜くやしさに顔を赤くしながらも、しとやかに夫人の言葉を受けた。

「それだけ、申し上げたくてお呼びしたのです。どうぞ、お引き取り下さい！」と、夫人はあくまで高飛車に、部屋を取りかえたことなどは、夫人としては当然すぎることにらしく、それに対する挨拶などは一切なかった。

新子も、こんな気持で、夫人とこれ以上対坐することは、堪えられなかったので、「失礼致しました。」と、せわしなくいつて、立ち去ろうとすると、

「ちよつと、恐れ入りますが……」と、ひどくやさしく夫人は、新子呼び止めた。

新子が振り向くと、夫人はステンド・グラスの張つてある白い卓子テーブルの上の、青磁の花瓶を指しながら、

「何でもようございますわ。これに、花をさして持つて来ておいて下さいませんか、庭に何かあるでしょうか。」

「はア。」新子は、花瓶をとり上げて、早々に部屋を出た。

新子は、文句を云われた後に、たちまち用事をいいつけられたので、驚きながらも、庭へ出て、ポンポン・ダリヤばかりを切つて、夫人の部屋へ持つて行くと、夫人は、

「ありがとう。それから、これを切つておいて下さいません。」と、パイパ・ナイフと

「英国近代短篇集」という書籍をさし出した。

不当な謝礼

一

新子は、しばらく夫人の傍で切られていない本の頁ページを切っていた。

夫人は、新子が傍にいることなどは、すっかり忘れたように、スリー・キャツスルの細巻を吸いながら、綺麗なファッション・ブックを漫然とながめているのだった。

新子は、切り終った本を卓の上に、そつと置いて、

「これでよろしゅうございませうか。」と、丁寧ていねいにいうと、

「はい。」と、夫人は、礼もいわず、ふり向きもしなかつた。叱言こいごとをいった上に、人を使つてと思うと、新子は少し苛いらいら々々して部屋を出た。

夫人は高飛車にかまえていながら、人使いは巧みな女性らしい。この分だったら、明日から、どんな風に使い廻されるかわからない、と新子は一方の肩をすくめて考えた。

六時になった。軌道の上を走っているように正確な、この家の生活は、六時になれば食堂に集まって夕食なのである。

今宵から、夫人の前で、かしこまって、子供達とも笑い興おどろずすることも出来ずに、ご飯をたべるのかと、新子が考えている矢先に、先刻の女中が上って来て、またひどく気の毒らしく、

「奥さまが、お食事は家族だけでなさりたいとのことで、今晚から貴女あなたは別に差しあげることになりました。」といいに来た。

(その方が、いい。その方が気楽だわ)と、思いながらも、新子はひどく淋しかった。

家族達ばかりの食堂で、新子の姿が見えないのに、料理がどんどん運ばれるので、祥子が一番に心配して、

「南條先生は？ 南條先生はどうしたの？」と、女中に二、三度訊いていたが夫人は相手にしなかった。準之助氏が、不審を起して、夫人に、

「どうしたの。南條さんは。」と、訊いた。

「今日から、別室で召し上つて頂くことにしましたの。」

「なぜさ、こちらでは、一しよでもいいじやないか、その方が賑やかで……」

「でも、家族と雇人とは、ハッキリ区別した方が、よろしいようですわ。」

「うん。そうか。」と、準之助氏は、素直にうなずきながら、

「しかし、今日は貴女が初めて来た晩だし、懇親の意味で、ここで一しよに食事をして頂いた方がよかつたねえ。」と云うと、夫人はやさしく、しかし同時に嘲るあざけような表情で、

夫君の言葉を聴いていたが、ニコニコしながら、良人おっとには答えず、子供の方に向いて、

「ねえ、貴君あなた達だつて、パパとママと四人ぎりの方がいいわねえ。ほかの人がいたら、窮屈きよくでしょう。ねえ。」といった。小太郎と祥子とは、びっくりしたように、母の顔を見上げたが、ママの顔が、その優しい言葉に引きかえて、厳しいので、

「うん。」と、いつてしまった。

あまりにも、部屋の有様が異なつてしまつて、新子は落着けなかつたし、物悲しさがなかなか薄らぐず、美沢に手紙を書いて、この間の手紙を早速取り消したいと思ひながらも、それも何となくものうかつた。

十時過ぎ、風が出て、庭の樹立に、ゴウとすさまじい音を立てた。

前庭に、突如自動車の警笛サイレンの音が聞える。不意のお客だろうか、階下が何かざわざわしている。そう思つていと三十分ばかりしてその自動車は帰り去つた。

間もなく、階下はしずかになつたが、その静けさの中に、ほのかに氷を砕くらしい音が伝わつて来る。新子は「おや!」と思ひながら、耳をすました。

ここの部屋からは、窓を明けると、闇に面するばかりで、何もうかがえなかつたけれど、常の夜とは異なつて、母屋の方が薄ら明るかつた。

新子が廊下に出ると、階段の口が、パツと明るかつた。新子は、まだ寝衣ねまきにも着更えていなかったもので、そのまま女中部屋の方へ降りて行つた。

すると、氷ひょうのう囊ふしを持つた女中に、パツタリ出会つた。

「どなたかお悪いの?」

「はア、お嬢さまが——」

「まあ、祥子さまが……どこがお悪いの？」

「お風邪を召したんでしようが、お熱が三十九度もおありになるんですの。ご夕飯がすむと、急にお熱が出て、今お医者さまがいらしたんですの。」と、女中も不安そうだった。新子は、さつき、祥子が夕立にぬれていく度もなくしゃみをしていたのを思い出した。

「そうお。私、お見舞いに伺いたいんですけど、伺ったらいけないでしょうかしら。」と、夫人に対する気兼で、おそろおそろ訊ねた。

「およろしいでしょう。お嬢さまは、よくお熱をお出しになるので、奥さまはいつもの熱だとおっしゃって、もうお居間へお引取りになったようですよ。」と、女中は新子の気を察したように云った。

女中の後から、随ついて行ってみると、祥子は、小さい寝台の上にグツタリとなっていた。なるほど、夫人の姿は見えず準之助氏だけが、病児の顔をじっと見詰めながら、枕元の椅子に腰をかけていた。

「お風邪でございますか……」と、静かに新子が訊ねたのに対し、父が答えないうちに、祥子がうるんだ眼を開けて、

「先生、祥子胸がくるしいの。さすって頂だい！」と、すぐ甘えかかった。

「ええ。どこが。」

「ここんとこ……」と、さも悩ましげに、掛ぶとんをおしのけて、左の胸を指した。

新子は、そこへかろく手をやりながら、

「さつき、雨におぬれになったのがいけないのでしょうか。」と、準之助氏にいうと、準之助氏は新子の方をチラと、意味ありげに見て、

「原因は論じないことにしましょう。でないで、とんだ責任問題が起りますからね。」と、苦笑しながら、小声でいった。新子が、夫人を憚はばかる以上に良人はその妻を憚はばかっているのだつた。

三

準之助氏の言葉に、新子も肩をすくめながら、病児がともすれば熱のために、払いのけようとする蒲団を、そつと小さい胸の上にかけて、その下に手をさし入れて、

「こうして、さすって上げましょうね。」と、柔軟な小さい肉体をさすり始めた。

祥子は、ウトウトし始めた。新子は、火のかたまりのように、ほてっている身体に驚き

ながら、こんなときあまりさすってはかえっていけないのだろうと思って、そつと手を引こうとすると、祥子はパツと眼を開くのだった。

静かに、静かにさすりながら、祥子の寝つくのを待つより外仕方がなかった。

「熱が高いので、肺炎を警戒するように医者が云っていました。」準之助氏が、低くつぶやくように云った。

「まあ。おかわいそうに、やつぱり、雨におぬれになったのが、いけなかつたのですね。」女中が居なくなつたので、新子は準之助氏の注意に拘らず、同じことをくり返した。

「そうかもしれません。しかし、僕達がそんなことを云い出してはいけません。妻が聴こうものなら、僕と貴女とで、病気にしたようなことを云い出しますからねえ。」

「でも、わるかつたわ。アメリカン・ベイカリで、もつと休んでいればよかつたのですわね。」

「いや、この子は、よく熱を出すんです。妻なんか、冗談にこの子のことを、熱出し機械なんて云っているくらいです。だから、安心し切っていますよ。」新子は、子供のうつらうつらと寝入った気配に、そつと手を引いた。

「眠つたようですな。どうぞ、引き取つてお休み下さい。もう十一時過ぎですから。女中

が、付き添っていますから。」

「ええ。でも、もう少しお傍にいたいと思います。ほんとうにはよくお休みになっていないようですもの。」

「そうですか。じゃ、しばらく傍にいてやって下さい。すぐ女中が、参るでしょうから。」
そういうと、準之助氏は、立ち上つて、階上の居間に引き取ってしまった。

間もなく、女中がはいつて来た。

「ご病気でも、奥さまはお子さまと別々にお休みになりますの。」と、新子はい訊いてしまった。

「奥さまは、万事外国風なんですの。あちらに四、五年いらしたものですから。だから、小さいお嬢さまなんか、ほんとうにお気の毒なんですの。」

自分をおんなに慕うのも、やっぱり母の愛に飢えているからだろう。そう思うと、新子はいじらしさが、胸の中に、しみ出して来て、あの高飛車な夫人に対する意地からでも、徹夜して、看病したくなつた。

小さい寢息は、時々苦しげに、せわしくなつた。そして、（あつい！ あつい！）と叫びながら蒲団をおしのけたりした。

「ねえ。しずかに、お休みなさい！ あしたまでには、きっとよくなりますわ。ねえ、ねえ。そうしたら、今日のつづきの漫画よんで上げましょうね。」

羽根蒲団の上をかるく叩いた。

女中と交替に、氷嚢をとり換えに行つた。

何時間経つただろう。女中は、台所の方へ行つたまま帰つて来なかつた。新子も、椅子の背にもたれて、わずかにまどろんだとき、部屋にはいった人の気勢けはいがしたので、ハツと眼を開けるとそれはパジャマを着た準之助氏であつた。

明け方近い病室に、なお止まつている新子を発見して、驚いて見つめている準之助氏の眼にいい知れぬ優しさが、漲みなぎっているのを見ると、新子は名状しがたい恥かしさに、一時に頬をそめてしまった。

四

優しい準之助氏の眼は、たちまち親しく怒りつけるような眼つきに変わって、新子を見ながら、拔足して病床に近づいて来て、

「あれから、ずーつとここにいらしたんですか。そんなことをしては駄目ですよ。それじゃ、貴女の身体がたまらない。第一、貴女の仕事でもないじゃありませんか。」と、好意に充ちた小言こことだった。

白々と明るくなつた静かな空気の中に、スヤスヤと祥子の寢息が通つていた。

「大丈夫……」何か云いつづけようとしたけれど、声がかすれているので、新子は微笑で、まぎらしてしまつた。

「大丈夫なものです。もう五時過ぎていますよ。早く行つてお休みなさい。」

「今から、眠るといふことも出来ませんし、小太郎さんの勉強がすんでから、ゆつくり休ませて頂きます。」と、新子は小声でいつた。

準之助氏はじつと新子の顔を見つめていたが、

「貴女の顔も、なんだか赤いようです。熱があるんじゃないやありませんか……」さつき赤くなつた頬が、まだあせないでいたのである。

「熱なんか……」と、いいながら、新子はい自分の額に手をあてると、

「どれ！」と、準之助氏は、無遠慮に新子の手首を取り上げて、脈拍みやくを探つた。

新子は、間がわるく、あわてて手を引つ込めようとしたが、そんなことをしては、なお

この場が色つぼくなるような気がして、静かに相手のなすままに委せていた。

「少し早いじゃありませんか。ムリをしちやいけませんな。女中を呼びますから、お引き取りになって下さい。」

新子は、すっかり睡気がなくなってしまうていたが、こうやって準之助氏と向い合っていることがきまりがわるくなつたので、

「それでは、失礼します。」というと、部屋を出て行つた。

新子の屋根裏に近い部屋は、電燈の灯つたままで、ひんやりと、明方の空気が肌寒かつた。

新子は、蒲団を伸べる気にもなれず、あかり灯を消したままで机の前に坐つた。

そして、準之助氏の指の下で、血の流れを伝えた自分の手首を珍しいような、恥かしいような気持で、しばらく見つめた後、自分でも脈を数えてみた。

脈が早かつたのは熱のせいではなく、準之助氏の思いがけない出現と自分に対する態度のせいであると思つた。

そして、準之助氏があれ以上、自分に親しみをみせるようであつたら、考えなければならぬと思つた。

そう思うと、たちまち美沢の若々しい面影がなまなま生々しく眼の中に浮んで来るのだった。

四日目の朝になって、祥子の熱がようやく、七度台に下った。

新子は、二晩はまるで、一睡もしなかつた。祥子の病室に徹夜していると準之助氏が時々、容子を見に来た。そして、新子に引き取るように勧め、新子はこれをこぼみ、その間に二人の感情や好意が、からみ合った。だが結局女中達よりも、新子の方が、夜通し付添っていた。その方が、祥子がよろこぶからだつた。

夫人は、祥子が病んでいても、午前は良人とゴルフに行き、夜は知合いの外人の別荘にダンス・パーティがあると出して出かけた。新子が祥子の看病をしていることなど、お yourself とは関係のないような顔をしていた。むろん、礼もいわなかつた。

今朝も、夫人の親類に当る木賀子爵という青年が、東京から三、四日の予定で遊びに来ると、夫人はその青年と乗馬で、鬼押出しの方へ遠乗りに出かけてしまった。出がけに、ちよつと病室へ顔を出し、そこに新子がいるのを見ると、

「この子の熱は、四日目には、きつと平熱になるんですよ。主人なんか、毎度大さわぎをやりませんでけれど——あまり子供を大事にし過ぎると、かえって結果がよくありませんからね。本なんかも、あまり読んでやったりなさらないように、病気のときなんかかえ

って神経を刺戟し過ぎますし、また本を他人によませて、聴くなんていい習慣じゃありませんからね。」

新子が、膝の上ののせていた「漫画常設館」という本を、ちらりと見ていった。自分が新子に本の頁を切らせたのを忘れたように。

しかし、新子は夫人が出て行くと、すぐ祥子に本をよんでやった。

祥子は、かわいそうな話と恐い話が好きで、アラビアン・ナイトの悪魔を壺へ封じ込める話など、幾度もくり返して聴きたがった。

小太郎も、祥子の部屋に遊びに来た。さわやかな午前だった。

女中が、はいつて来て、（旦那さまが、お呼びです）と、云った。

二階の書齋へはいつて行くと、準之助氏はひどく嬉しそうで、向き合っている新子の方まで、つい頬をほころばしたくなった。

「今、僕部屋をのぞきに行つたの、知っていますか。」

「いいえ、存じません。」

「子供達が、貴女をまるで、母親のようにして、甘えているんで、僕は扉ドアを開けずに、上へ帰つて来たんですよ。」新子は準之助氏の視線を避けるようにして、答えなかった。答

えようもなかった。

「僕は貴女にお礼をしたいんです。」

「お礼なんて——私が、何を致しましたかしら、祥子さんのご病気を、私が看病するくらい当然じゃございませんかしら。」

「いや、当然なことをしない女だって、沢山いますからな。僕にお礼をさせて下さい、でない、僕の感情が、どんなふうに爆発するか分かりませんよ。」

「そんなこと、おっしゃっては困りますわ。」

「じゃ、お礼を受けとつて下さるでしょう。」と云つて準之助氏は、自分用らしい白い角封筒を新子の前にさし出した。

新子は、それを断るには、たいへんな努力が要ると思つたので、素直に受けとつた。

うちぶところ
内 懐にしまつて、子供達の部屋に降りて来て、祥子の相手をしていたが、昼食のと

き自分の部屋へ帰つたとき、開けてみると、それは、思いがけない不当な大金であつた。

戯恋馬上行

一

ここらあたりは、スカンジナビアかどこか、北欧の景色に似ているという、薄白く霧のかかっている草野原で、土地の女の子が撫なでしこ子をつんでいる。

「このへんでお休みになりませんか。」

若さで、はち切れそうな青年紳士が、先へ打たせている同じ馬上の夫人に呼びかける。

「押出しまで行きましょうよ。休みなら千ヶ滝の坂の下へ、馬を預けて、ホテルでお茶を
ご一しよに、その方がいいわ。」

競走馬上りと見える流星栗毛のスマートな牝馬ひんばに、純白の乗馬服を着た夫人は、大公妃

のように跨またがつてゐる。しかし、声は新子に話す時などとは違つて、小娘のようにはずんでゐる。

つばの広い帽子の下で、双眸そうぼうがはれやかにまたたき、さわやかな風に頬をなぶらせ、夫人はまるで別人のようにはしやいでゐるのだ。

二、三町ばかり、軽い速歩トロットで進むと、眼下に新しい景色が展ひらける。それは小浅間の鬼押出しと呼ばれてゐる、流れ出した熔岩のかたまつた焼石の原である。

その景色と、その上に点出された馬上の二人と、まるで外国の絵のようだ。

熔岩の道は、だんだん爪先上りになり、やがてまた谷のような、くぼみの所まで出ると、夫人は手綱をしめて馬を控えた。

「下りてご覧になりますか。」黒鹿毛くろかげに乗つてゐる青年は、後から声をかけた。夫人はかむりを振つた。

「貴君あなたこそ疲れたのじやない？ 弱虫ね。」

「ご冗談を！ 僕は学習院にいたとき、これで伊豆半島一周の遠乗りをしましたよ。」
青年の盛んな答えを、嬉しそうな笑顔で受けて、夫人は馬を立て直すと、やや早い馳キャン走タで走り出した。

荒涼たる焼石の原から、柔かい緑の丘へ、二頭の馬はたてがみで高原の涼風を切る。

夫人は昵懇じっこんらしい百姓家に、馬を預け飼料かいばをやるように頼むと、鞭をステツキのよう
に持ったまま青年と並んでグリーン・ホテルへ行く坂道を歩き出した。

「逸郎さん、貴君、当分宿とまつて行くでしょう。」

「当分とまつて、二、三日のつもりですよ。」

「お家へ電話で断ればいいじゃないの。貴君は、いつまでも子供ね。」

足下に、山々にかこまれた広い平原が見え出した。

健康な男性美に富んだ青年は、立ち止まって、大きい呼吸をして、

「いいなあ！」と歎じながら、

「なぜ、前川さんを無理にもお誘いしなかつたんですか。」と訊いた。

二

夫人は、良人のことをいわれると気むずかしそうに、眉をひそめつつ、

「前川のことなんか、もう結構よ。私、二人の子供と、たった一人の男を相手に、もう十

五年も暮して来たのよ。前川なんか、何の刺戟でもないわ。あの人は、英国流の温厚な紳士で、そして無精で、本ばかり読んでいて。」

「それでけっこうな旦那様じやありませんか、貴女あなたの自由をちつとも束縛しない……」

「貴君は、なぜいやがらせばかりおっしやるの。若い方は、そんなふうな物云いはしないものよ。」

夫人は、艶めなまかしくいとうと、肩もすれすれに、青年に近よって、

「主人と一しよになんか来れば、この美しい景色が、台なしになってしまいわ。」そつと青年の肩に手を置いた。

「これ、りんどうじやないでしょうか。」彼は、突如、路傍の紫の花に、手をさし出すことで、巧みに夫人の手から離れた。

ホテルの喫茶は、二階の食堂の廊下に在った。そこから、このあたり一帯の異国情緒の風光が一望され、見晴しが美しいのである。

二人は、窓際に向い合つて席に着いた。

近代的で、スポーツマン・タイプで、清秀で明るい感じのこの青年は、綾子夫人の母方の遠縁に当たるといふ。夫人は、この青年を、彼女の「足下あしもと」にひざまずかせようといふ

意図でもあるように夫人の片言微笑には、孔雀くじやくが尾羽おぼねを、一杯に広げたような勿体もったいぶつた風情があり、華やかな巧緻な媚こびに溢れていた。

青年は、常に無邪気そうな、しかし時々気むずかしそうな、名投手の球チエンジ・オブ・ベース勢変化を思わせるような抑揚のある態度で夫人に對しているのであった。

「ほんとうに、長くて、私の遊び相手になつてよ。でないと、私身体をもてあましてしまうのよ。主人とばかり顔を見合せているのじや、息がつまりそうよ。」

「だって、様子さんが、ご病気だというじやありませんか。」

「いつもの風邪よ。あの子は、土地が変ると、きつと熱を出すのよ。ちつとも、心配することないわ。」

「見馴れない若い女の方が、付添つていらつしやいましたね。」

「今度来た家庭教師よ。」

「勝気そうな、美しい人じやありませんか。」

「おや、そんなことまで、いつ見たの。」

「チラと見たばかりですけれど。」

「ああいう人、私すかないの。ちよつと、乙にすましている女。だから、私思いきり、い

ろいろな用をさせようと思つてゐるの。私は、一般に同性は、嫌いなものね。同性を見てみると、何だかいらいらして来る性分なんだわ。」

その美貌と才能とに、あまりに自信を持ちすぎる高慢な婦人の通弊だと思ひながら、青年はだまつて、夫人の顔を見つめていた。

三

青年はシガレット・ケースを開けると、夫人に勧めた。

「何？」

「キャメル……」

「ごめんなさい。私、これしか吸えないの。」と、いつて夫人は、自分の赤革のケースから、スリー・キャツスルの細巻を出して、青年がライターをつけてくれるのを待った。

「私、三、四日のうちに、伊香保へ行ってみたいんだけど、貴君も行ってみない。」

「さあ！ 貴女と二人で……ですか。」

「逸郎さん。貴君、前川を恐こわがつてゐるようね。」

露わに、艶めかしい夫人の言葉に、青年は善良そうに、顔を染めて、苦笑しながら、首を振った。

「なら、私が恐いの？」

姉か何かのような上手うわての位置から、青年が顔を染めるのを、楽しい観物みものでもあるかのように、見おろしながら、しかも同時に媚を呈しながら、夫人が云った。

青年は、ほのかに首を振って、

「どちらも、恐いわけではありませんが……」

「ねえ。一しよに行ってみない。佐竹の伯母さんとこへ訊ねて行くといえればいいでしょう。私、ここもいいけれど、観みるものも聞くものもないから退屈するのよ。前川と話しするのとなんか何にもないし……」

夫人は、いつも高慢な態度を持っているが、しかしこういう若い男性に微笑を見せるということだけは、また別なことであるらしかった。

夫人としては、自分の媚態びたいが、男性にどんな影響を及ぼしそのために男性の眼に、どんな熱情が浮び、どんな不安が浮び、どんな哀願が浮ぶかを見ることが、楽しい刺戟であるらしかった。

しかし、この青年は、夫人のそういう態度には、免疫になっているらしく、一も二もなく、支配されているわけではなかった。

「そろそろお帰りになりませんか。」と、煙草を捨てて立ち上った。

「ほほ、もう帰るの？　じゃ、私達は食前の運動に來たと云うだけだわ。」夫人は、さも可笑しおかそうに笑いながら、ボーイをよんで勘定をすませると、ツカツカと階段を走り下りた。

ホテルを出たところで、

「貴君あなたは私の家に居るの窮屈？」

「なぜ？　決してそんなことはありませんよ。」

「じゃ、長くいらつしやい！　そして、私の相手をして頂戴！　前川だけじゃつままないわ。」

「僕だって、あまり面白い人間じゃないことをご存じじゃありませんか。東京じゃ、子供扱いで、まるで相手にもして下さらないじゃありませんか。」

「ほほほほほ。じゃ軽井沢だけの男友達アミイでいいじゃないこと、ほほほほほ。」

夫人は、その美しい長身をくねらせながら笑いこけた。

四

青年の顔は、一層あからんだ。が、しばらくしてから、思い切った風情で、

「いくら、親類でもあまり親しくしていると、つまらない誤解を受けますし……それに、貴女を好きになつちや、なおたいへんだし……」

「ほほほはほ。」青年の言葉が、おわり切らない内に、夫人はまたさも可笑しおかそうに笑い出した。青年は、驚いたように、夫人と顔を見合わせた。

「貴君のように、大げさな物いをする人はないわ。私達は、お友達同士じゃありませんか。いつまでも、貴君は私の好きなお友達よ。」いとしむあてような、艶やかな愛嬌に溢れている夫人の顔を、それ以上見るのが恥かしく、青年はまた視線をそらした。

「一しよに遠乗りをしても、用心する。パーティに行くのも危険だ。一しよに小旅行トリップに行くなんて一大事だなんて云うお友達は、一体どんな顔をしている。どーらちよつとこちらを向いてごらんなさい！」と、云いながら、夫人の手が無造作に、青年の顎に延びた。

青年は、真赤になりながら、いやでも夫人と顔を見合わせなければならなかった。彼は、

咽喉と胸がいくらかつまるといふような氣持がして夫人の手をそつと顎から押しつけた。

ちやうど、馬を預けてある百姓家の前へ来た。

「ほほ……。もう何にもお願いしないわ。でも、馬にだけは乗せてくれるでしょう？」青年は、夫人を介添して、夫人のほつそりした右の片足を支えて、馬背ばはいにまたがらせた。

再び馬上の人となった夫人は、薔薇ばらの花のように、ほこらしげに笑った。

並んで、馬を打たせ始めると、夫人は怒つてもいるように、軽井沢近くなるまで、物を云わなくなつてしまつた。

はなれやま 離山はなれやま のふもとまで来たとき、青年は、この氣まぐれの大公妃のご機嫌を取るつもり

で、実に用心ぶかくつつましく、不安げに訊いた。

「何か、お気にさわりましたか。」

「私が……。何を。」夫人は、いたずらいたずらした大きな双眸を、ジツと青年の方へ向けた。

夫人を敬遠しながらも、やはり青年は夫人の影響の下にあると見えて、やはり青年の氣持ちには落着きがなく、夫人の媚態の甘やかさに酔うていたのだ。

「だまつておしまいになつたから。」

「そうよ、貴君が、警戒ばかりするからよ。」そういいながら、夫人はかるく拍車を当てた。馬は、急に早い速度トロットに移った。

「危いですよ、そんな……」青年は、もう別荘地の道に出るので、夫人の無謀を制しようとする、夫人はわざと一鞭くれた。

競走馬上りだけにかんのいい牝馬ひんばは、すぐ蹶足かつかつになって憂々なんびとたる馬蹄の音を立てながら前川邸近い森の中に走り入ろうとしたように見えたが、何人かの悲鳴が聞えると同時に、たちまち馬が、竿立さおだちになり、タツタツタツと、二、三步後退した。

五

ちようど、別荘から出て来た新子と、折悪しく夫人の馬とが、出会頭になったのだ。

夫人も必死に馬を止めたらしく、ちよつと口が利けないほど、驚いているし、新子はあわてて馬を避けた拍子に、背後うしろへ倒れかかったらしく、そこにある白樺の太い幹へ、十字架にかかったような姿勢でよりかかつて、痛そうに顔をしかめ、鷲さぎのように片足で立っているのだった。

青年は驚いて馬から降りると、手早く馬を傍かたわらの木につなぎ、

「蹴られたんですか。」と、不安そうに、新子に近づいた。

「大丈夫よ。ただ、不意だったから、びっくりなさったのよ。ねえ、怪我なんかありませんよ。」さすがの夫人も、あなやという思いをして、胸をとどろかせているのに、なお平生だんの虚勢を捨てないのだった。

「大丈夫でしょう。ねえ。」と、もう一度云うと、すっかり不機嫌そうに、謝罪の言葉など一言もなく、二人の脇を馬に乗ったまま、通りすぎてしまった。

「足を、どうかなさったのですか。」そう云いながら、青年は取り敢あえず、新子の手を曳ひいて、彼女が落ちかかっていたくぼ地から、彼女を小径の方へ連れ出した。

「何でもごさいませんの、私、ぼんやりしておりましたので、随分驚いてしまつて……痛つ……」シャンとしようとする、足首が痛かったので、彼女は思わず声を立てて、青年の肩にすがつた。

「足をくじかれたのでしょうか。」

「いいえ。大丈夫です。どうぞ、いらつして下さいませ。」新子は、すぐにも自分の痛い足を見たいのに、青年がいるので、裾を揚げるわけにも行かず、夫人のお客様などの世話

になる気には、とうていなれず、ただ早く立ち去ってくれればと思っていた。

「手から血が出ていますよ。」と、云われて、新子は初めて、手首の痛みにも気がついた。白樺の幹ですりむいた傷らしかった。

彼女の白い手の甲に、うつすらと血が滲んでいた。

「無茶ですよ。あの人は、……乱暴に飛ばせるんだもの……」夫人のことらしかった。新子は黙って、そつと手首の傷を叩いた。

「貴女、僕の肩へすがって、いらつしやいませんか。もし、足をくじいているとすればなるべく動かさない方がいいですから。」新子は、ハキハキしている悪気のなさそうなこの青年に、うちとけてもいい好意を感じた。彼女は、わろ怯びれず肩にすがらせてもらった。

「でも、よかったですね。蹴られたりなんかすると、たいへんですよ。」

「あんまりあわてたもんですから、もつと落着いていればよかったですわ。」

「誰でも、あわてますよ。こんな道で、あんなに駈けさせるんですもの……」

夫人の高慢な態度を、新子に代って非難するように、新子を慰めつづけた。

圭子の仕事

一

新子の姉の圭子が、会員になっている新劇研究会というのは、M大学の文学科の教師をしている小池利男というフランス帰りの劇作家が、顧問兼監督をしていて、会員は大概良家の文化的の子女で、大学や専門学校へ通学している男女学生である。この春から第一回の公演として、アンリ・ルネ・ルノルマンの「落伍者の群」を、やるやると歌に唄いながら、結局学校の休暇を待つよりほかなかつた。

それに、劇場も夏場で、借りやすくなったので、S劇場を七月の二十五日から二十九日まで五日間だけ借りて、いよいよ公演の運びになった。

圭子は、みんなから推されて、女主人公^{ヒロイン}である「彼女」の役をやることになった。

最初は、切符を会員で分担して売ることになっていたが、いざとなると、思った三分の一も売れず毎日の小屋代、大道具代、衣裳代、弁当代、かつら代などの調達に、初日早々から、四苦八苦の有様だった。

しかも、どの費用も大抵は、その日払いで、ちゃんと払わなければ翌日から、小屋を開けてくれないので、苦勞知らずの若い連中は、初舞台を踏む興奮も嬉しさも、金策の苦勞で消されがちだった。

ただ圭子は、十四場の長い芝居に、どの場もどの場もやり甲斐があり、殊に「彼女」という役そのものが、貧苦に責められながら、純情と女らしさとで、わが命の最後まで「彼」を愛して、「彼」を援け^{たす}つつけるという役だけに、今度の公演でも、たとい困難があつても、自分があらゆる犠牲を払つて、五日間の公演を無事に済ませようといったような純情的な興奮に燃えていた。

初日の夜の十一時過ぎ、身体は疲労しているが、頭ばかりは興奮して、冴えてしまっている圭子は、昭和通りのマリキタという、スペイン風の酒場で、小池と差向いで、ジン・フィズの盃を、半分くらい乾していた。

小池は、快活な小柄な男だった。

熊手にした指で、ふさふさ落ちかかって来る髪の毛を、しきりと後へ高く搔きあげながら、眼の玉をくるりとむき、唇をとがらせて、

「これじゃ我々自身が『落伍者の群』になりそうじゃ。衣裳代をかけすぎましたな。もつと筒井を頼りにしていたんだが、あれが三、四百円は切符を売るといつていたんだが、『第二の亡霊』だけじゃ厭じゃというて、逃げ出してしまうなんて、あまり万事筋書通り過ぎるすなあ。」

「……………」

「この分じゃ、五日間はムリですな。第一、小屋代の工面が、つかんですな。」

圭子は、舞台の上の「彼女」のような気持になって、

「初めての公演なんですもの。いよいよ困れば、私何とかしたいと思えますの。」
女の一本気から、かえって落着いた度胸を見せて、じつと小池を見つめながらいった。

「いや、貴女あなただけに、心配をかける訳には行かないし、それに、毎日二百円はかかりますよ。切符代なんて、てんで集まらないし……僕は、すっかり憂鬱になりますな。」溜息を吐くと、小池は卓子テーブルの上に肘をついて、圭子を見た。

「初めての試みなんですから、誰の責任でもございませぬもの。私、出来るだけ、お金作りますわ。」

「貴女の『彼女』は予想以上の成功ですし、途中でなんか止よしたくないだろうな。さつき、久能さんが、賞めていましたよ。」

「まあ！ 久能さんも、見物にいらしっていたんですの。」

「ええ。あの人は新劇には、今でも熱心ですよ。」久能というのは老劇作家で、新劇団の先輩であった。

「私わたし明日は、十三場の幕まく切ぎれを、気をつけてやってみたいと思いますの。あすこ、今日は少し失敗だったと思いますの。」と、圭子は、若々しい身体の肺の豊かさを思わせるような、吐息まじりに、顔を輝かせた。

小池は、肘を起して、今度は足を張って、椅子を反りかえらせた。

「しかし、人生においても、演劇においても、先立つものは金ですな。」小池は、圭子の

顔をじつと見て苦笑した。

第三者が、冷静に観ていると、小池には、深いずるさではないが、毒のないずるさがあり、圭子の家に、相当の小金があると察し、また金離れのよい圭子の性格を、それと悟つて、わざと持ちかけている愚痴のようにもきこえたであろう。

「お金のこと、ほんとうに私、どうにか致しますわ。」

「それは、一番良いことのように、一番悪いことですよ。」

「なぜですか。」

「それは、貴女独りに、あらゆる負担を転嫁することですもの。」

「だって、私が自発的にやるんですから、いいじゃありませんか。私、舞台に出てみて、初めて自分の生きる道が分つたような気がしますの。」

「なるほど、貴女は情熱家だ。そうした気持で『彼女』をやるんだから、成功するはずですよ。しかし、貴女にムリをさせて、僕達が傍観するわけには行きませんか。」

「先生。大丈夫だと申し上げましたのに。私、母に話せばどうにかなると思っていますの。」
学問はあつても少うしお調子ものの圭子は、頼まれもせぬのに、つまらない役を買って出ているのだった。

「そうですか。それでは、一つお願いするかな、これこの通り……」小池は、卓子テーブルの上に、蛙が両手を張ったような形に、両肘を延ばすと、頭をつけて低頭してみせた。

「いやですわ、先生。そんなことをなすつて、おほほほほほ。」

小池はなかなか頭を上げなかった。圭子は笑いながら手を延ばすと、小池の頭を両手ではさんで持ち上げた。

三

圭子の母は、長女が芝居の研究会にはいつていることは知っていたが、まさか舞台に出るまで深入りしているとは、知らなかった。

今日は、この三、四日、研究会の集まりで、非常に遅くなるというて、出かけて行った。だから、十一時までは気に止めなかったけれど、その頃美和子が帰って来て、

「お姉さまは、今晚もきつと遅いわ、でも、お母さん心配しないでいいのよ、お姉さま、とても素敵なお仕事をしていらつしやるんだから……」と、母親をからかうようにいって、二階の寢床へ上ってしまった。

妹が帰った後、一時近くになつても、姉は帰つて来なかつた。母はいても立つてもいられない気持になつた。

いつそ、美和子を起して、様子を訊こうかと、二階へ上りかけたとき、路次の入口で、自動車が止り、走り込んで来る靴音がした。

こつちも走り出て、玄関を開けると、

「ああ、疲れちやつた。お母さん、まだ起きていらしたの。寝ておしまいになれば、よかつたのに……」と、圭子の顔は、口惜しいほどのんきだつた。

「まあ！ お前が帰るまでは寝られますか。何時だと思ふの……」と、母親らしい叱責の言葉に、圭子は応えもせず、

「眠いわ。」と、二階へ行こうとする。

「女世帯で、こんなに遅くなつたりすると、外聞が悪いつたらありませんよ。圭子！」

「もう、分つたわ。お叱言は、あした何うわ。とても、疲れているの。早く寝ないと明日がたいへんだわ。」と、せいぜいわがまま一杯なことをつぶやいて、早くも階段を上り切つてしまつた。

その翌日、十一時近くまで、寝ていて、食事に階下へ降りて来ると、いきなり、

「お母さん、お願いがあるのよ。」と、思い入った風情でいい出した。

「何……？」圭子が改まって、やさしい言葉を使うときは、お金の入用いりように定きまっているの
で、母親はたちまち警戒して、こわい眼で娘をながめながら無愛想にいった。

「お金がいるのよ。それも沢山なの。私、学校をよしてもいいから、私の学資にとつてお
いたお金を、今一度に出してくれない！」

「まあ。お前何をいうんですか。だしぬけに……」

「だって、そのお金がないと、私死ぬほど辛いのですもの。」と涙声になっていった。

「いくらくらいなの一体？」と、母は総領娘には、やっぱり甘かった。

「五百円いるの。」

「五百円！」母はあきれて、マジマジと娘の顔を見つめるばかりだった。

四

金の無心とは察していたが、娘のいい出した金額が、あまりに計算はずれなので、母は
ぼかんとして驚いているばかりだった。

「ねえ、お母様。そのお金がないと、研究会の仕事が、駄目になってしまふのよ。ねえ、私わたし学校を出て就職するにしても、この頃は口なんか、てんでないのよ。だから、研究会の方で、一生懸命劇の方を勉強して、いつそ舞台に立とうと思っているの。」

「それじゃ、女優さんにでもなろうというの？」

「ええ。いいでしょう。その方が、結局早道だわ。学校を出たって、新子ちゃんのような口だつて容易に見つからないことよ。それよりも思い切つて……」娘のいうことは、いよいよ出でて母親にとつて、意外のことばかりだった。

新子が軽井沢へ行くとき「今ウカウカしていると、親子四人で飢えるようなことになることよ。だから、お姉さんが学校を出るまでは、月七十円以上貯金を下げてはいけない。私がお給金を手をつけずに送るから、月百円くらいで暮して下さい。お姉さんや美和子が何といつても、余計なお金は出さぬように。」と、くれぐれもいい置いて行つたから、五百円はおろか、五十円だつて出してはいけない。だから、金の相談は断るほかはないが、それと同時に女優になるといつたような途方もない考えも、早く棄てさせなければ、亡き良人おつとに対して申し訳ないと、母は考えた。

「まあ！ ともんでもないことばかりいうのね。研究会なんか潰れてもいいじゃありません

か、潰れたらいい機会だから、学校の方を真面目に勉強して、卒業したら新子のように働いてくれないければ……。私達はどうなって行くのですか。」

「それが、お母さんの考え違いよ。学校を出るより、舞台の方を勉強した方が、どのくらい世の中へ出るチャンスがあるか分らないというのよ。」

「その女優になって世の中へ出るということが、お母さんは、嫌いなんですよ。」

「なにいつてるの。お母さんは、分らず屋ね！」

「お前こそ分らず屋ですよ。五百円なんて、まとまったお金を出せば、明日から私達は飢えますよ。」

「家に、そのくらいな余裕がないなんて考えられないわ。」

「家の経済は新子がお前にもよく話したはずじゃないの。」

「新子ちゃんのは、あれは誇張よ。あの人は、ああいう風に考えて、自分が一家のために奮闘するといったような気持ちを味わいたいのよ。」

「まあ、お前は新子や私の気も知らずに……」

母親が思いのほか強硬なので、圭子はいらいらした。少くとも、今日百円や百五十円は持つて行かなければ、自分をアテにし切っている小池に合わす顔がない。楽屋入りは三

時である。などと思うと、欲しい玩具おもちゃを買ってもらえない子供のようにかりんの茶卓の上に、ほろりと涙を落してはそれを指の先で潰していた。

「そんな無理難題をいってお母さんをいじめるもんではありませんよ。お前いくつだと思つているの！」そういつて、母は台所の方へ立つてしまった。

五

書留など、どこから来たのだろうと、圭子が不思議に思いながら玄關へ出てみると、それは新子からの手紙だった。

「判がいるんですね。ちよつと、待つてね。」と、立ちもどつて来て、茶筆筒の上に、針箱と同居している用筆筒の小引出しから、判箱を出して、書留用紙に判を押して返した。

圭子が茶の間に、帰つても流し元で、シャアシャアと水の音がするばかりで、母は戻つていなかった。

新子からの手紙は、もちろん母の宛名、お給金を送つて来るには時期が早すぎるのに書留とは、と思ひながら、母より先に見たつて差支えあるまいと、サリサリと封を切つてみ

ると、手紙と共に数枚の為替証書かわせだった。

そのとき、誰か部屋にはいつて来る気配がしたので、圭子は咄嗟とっさに手紙を懐ふところに入れてしまった。半ば発作的に。後の襖うしろが明いた。母ではなく、さつきから勝手に、顔を洗っていた妹の美和子だった。

「お姉さま、どうしたの。お母さまを怒らしたの？ ご機嫌がわるいったらないわ。」
妹の爽やかな調子に、圭子はいましがたの自分のあさましい所業に、面ほてりがして、一時に身内がカーツとほてって、返事をしないでいると、

「あら、お姉さまも時雨しぐれているのね。お母さまが、あの調子じゃ、私今日少しお小遣いをねだろうと思っているのに、絶望だわ。お姉さま、三円かしてくれない？」

「駄目だわ。私だつて！」やつと声が出た。

「え、駄目なの——切符を、十枚も売って上げたのに、少しコミッションよこしてもいいわ。」

美和子は、美和子としての不平をいいながら、タンゴのステップで、クルクル廻りながら、圭子の向いに、どしんと坐った。

「それどころじゃないわよ。研究会が火の車で、マゴマゴすると、小屋代が払えない始末

よ。」と、いい捨てながら、圭子は二階へ上った。

自分の部屋へはいると、さすがにふるえる胸を制して、為替をしらべてみた。金額二十円こがわせの小為替が、都合七枚、新子らしく、便箋へ簡明に走り書がついている。

こちらへ来ると、すぐお嬢さまが、ご病気で、徹夜で看病しました。これを、ご主人がよろこ欣んで下さって、沢山のお手当をいただきました。これは、どうぞすぐ貯金へ。ご主人へ、お礼状などは、お出しにならないように、そんなことはお嫌いな方ですから。

新子

母上さま

六

圭子は悪いと思いつつも、天の与える金のような気がして、胸が躍った。

(前川さんなんて、さすが大ブルジョアだけあるわ、百円や五十円なんて、私達の五円か十円かなんだわ、五十銭か一円なんだわ。新子ちゃんは、前川氏夫妻にとっても気に入った

のに違いないわ。きつと、これは当座のご褒美ほうびなんだわ」と、圭子は思った。（それにしても、このお金は母には思いがけない金なんだもの、私がとにかく借りて使っても、後で新子ちゃんの諒解りようかいさえ得れば、それでいいんだわ）大それたという気がなくてもないのを、圭子は強いてまぎらして、新子の便箋は、チギレチギレに裂いて、為替だけをハンドバッグに入れた。

その時、階下したから妹の声が出て、

「お姉さまア。」と呼ばれたので、ハツとして、

「何？」と、訊き返すと、

「あのね。いま、誰が来ましたかって、お母さまが訊いていらっしやるのよ。」と、美和子の声が、飛び上つて来た。

さすが、ドキツとする胸を押えて、

「いいえ。誰も……」

「でも、玄関が開きやしなかったかって？」

「ええ、押し売か何かよ、断つたのよ。」切羽つまったウソをいった。

下からは、それぎり何の応えこたもなくなったので、圭子はホツと、安堵の思いをした。

さつき、書留を見た刹那、為替証書を見た刹那、精しくいえば、無意識に懐へしまったまでに、わずか二、三分たらずの間に、圭子の心は、決していたのである。

このお金が、どんなお金であろうとも、自分のしていることが、どんなに無法であろうとも、ともかくもこのお金は、小屋代に——と思つたのである。しかも、母も美和子も、書留の来たことさえ、気がつかなかったのは、まことに幸運だったと、圭子の心は快哉を叫んだのである。

圭子は、にわかにな気づき、椅子の背に昨夜のままかかっているドレスを取つて、手早く支度をしてしまった。

母とも妹とも、口をきかず、怒つていような姿勢を取つて家を出ると、途中日比谷で下りて、その郵便局で現金に換え、三時少し前に劇場へ着いた。

小池は、一時間も前から来ていたらしい。圭子の顔を見ると、

「どうです、首尾は？」と、さすがに、不安そうにオズオズ訊くのを、圭子は快活な笑顔で受けて、

「上首尾よ！　でも、随分おかしな半端よ。百四十円、百五十円に十円足りないのよ。」
「けっこうですとも。けっこうですとも、それだけあれば、御の字ですよ。」と、こんな

人が、こんなにと思われるほど小池は相好そうこうを崩していた。

七

親姉妹おやきょうだいに対する内面うちづらは悪いくせに、他人にはひどく当りがよく、他人から頼まれると、いやとはいえないような圭子だった。

「それで今日と明日とは、どうにかかります。だが、問題は明後日ですな。」という小池に、

「明後日まででしたら、私きつと後を何とか致しますわ。」と、圭子はまた引き受けてしまった。

長女としてあまやかされ、わがままに育ったから、肉親に対しては、いつも無口で不機嫌で、殊にガツチリした新子に対してなぞ、始終いらいらしがちで、お互に語り合うようなことがなかった。だが、一旦「外面そとづら」となると、快活で愛想がよく、不景気のフの字も見せず、万事宜やかな顔などせずきれいごとで行こうという、お嬢さまの圭子だった。

その夜帰りのタクシの中で思うよう（お母さまに、もう一度おねだりして、ダメだった

ら……)。

圭子は、今朝判箱を取るために、用筆筒を開けたとき、甲斐絹かいきのごく古風な信玄袋がはいつているのを、チラリと見た。あの中には、貯金の通帳がはいつているはず——あれをそつと持ち出して……。

(だって、「落伍者の群」の「彼女」は、貞操まで、お金に換えてしまふんだもの。このくらいなことしたつて……)

その夜は、少し睡眠剤を飲んでから、床に就いたのであつたけれど、頭は大事決行の思考で、血が立ち騒いで、なかなか寝つかれなかった。

だが、そのうちに圭子は、気がついた。銀行の使いは、今までずーっと新子の役であつて、それに使う実印だけは、母が判箱には入れてないで、どつか筆筒の抽斗ひきだしの奥ふかくしまつてあるということ。……

通帳をそつと持ち出すことはやさしいが、母の眼をしのんで、筆筒の抽斗をかき廻して実印を探し出すことは至難であるということ。……

もつと、名案がないかしら……彼女は、暗闇くらやみの中でじつと眼を開けていた。

(そうだ。新子ちゃんに頼んでみよう、前川さんは、ちよつとしたことで、あんな大金を

呉れるんだもの。お給金の前借なんか簡単に出来るかもしれない)

家の生活がどうなろうと、母おやきようだい姉妹をどう詐だまそうと、乗りかかったこの船を降りて、なんの生き甲斐があるものか。芸術のためだもの、自分が本当に生きて行くためだもの、手段なんか、どうだって——と、子供らしい向いつ気で、そんなことを思いつくと、

(そうだ！ 新子ちゃん大明神だわ。明日の朝、早く電報を打とう！ そうすれば、明後日までに間に合うわ)

すぐにも新子が送金してくれるような気がして、ぞくぞくと嬉しくなってしまうた。
(それにしても、必死的な退のつびき引ならぬ電報の文句を！)と、圭子は考え出した。

愛人無為

一

樹の根に、くるぶし 踝を打ちつけて、青いあぎを残したけれど、痛みはその時だけで、手の甲の傷も、ほんのかすり傷だった。

それなのに木賀子爵をはじめ、夫人をのぞく人達は、新子の傷を心配してくれた。熱が下ったばかりで、起きられない祥子は、さちこ 新子の足に、ほうたい 繻帯を巻きたがった。

翌日は、もうさわってみると、ほのかに痛みを感じると言うくらいだった。

夫人も、少しテレていると見え、あれから新子に顔を合わせることを避けていた。

小太郎はその日夏休みの復習帳に、晴というのを時と書き、曇という字を雲で間に合わ

せているのを、新子に指摘されて、午前中廊下をかけ廻りながら、

晴を時と間違えた

曇を雲と間違えた

テリヤを輝や（女中の名）とまちがえた

という自作の即興詩を、奇妙な節をつけて、歌って歩いて、夫人から叱られて、一時からの復習の時は、殊のほか神妙であった。

新子は、二時から祥子の部屋にいたが、母夫人の入って来る気配がしたので、そこはかと、部屋を出たが、歩いてみたくなかったので、大好きな別荘前の諏訪の森へ、遊びに行つた。

地面が絶えずジメジメして、しだが生えており、空気がひんやりしていた。

横手の外人別荘から、小さい金髪の男の子が、ワイヤー・ヘヤードを連れて、どこどこまでもかけて行つた。

後は全く静かであった。

新子は、美沢が（墓地の静けさ）が好きなので、よく二人で弥生町の家から、谷中の天王寺に出かけたり、省線で横浜へ行き外人墓地を高見から、眺めたりしたことを思い出した。

この森を、美沢と一緒に歩きたいような希望が、頭の中に湧いた。

家の前途を、一人で背負って悩んでいる新子は、時には誰かに慰め^{いたわ}られたいような気がした。そんな気持で、美沢に会うのであったけれども、美沢がまた、どちらかといえば、新子に慰められる側の性格で、いわば新子は、美沢にとって姉的愛人だった。

だから、新子は今まで何^{なんびと}人にも労られたことがない。

準之助氏から、労られたのが初めてである。

昨日^{きのう}は、不当な大金を、お菓子をもらう子供のよう^{やすやす}に、易々ともらってしまった後で、相当考えてみたが、準之助氏の気持が、順逆いずれにもせよ、自分は順に素直に受けた方がよいと考えて、十円だけ自分のお小遣いに取っておいて、後は母へ送った手紙にも、もらった理由をかくさずに書いておいた。

不当な大金であるとは思ったが、それだけに母に送ったときの母の笑顔や、またその金に依つて、一家の生活と安寧とが、一月でも三月でも支えられるということは、新子にとつてはたいへんなことだった。

(たとい謝礼が多すぎても、私が小太郎さんや祥子さんに、誠意を尽すことで、それに相当して行けば……)とも新子は考えた。

ただ準之助氏がお金を呉れるときにいった言葉が、遠雷を聴くような不安を、今でもかすかに残している。

だが、とにかく他人からお金を貰うことはそれが生れて初めてのことであるだけに、新子は悲しかった。わが心があさましく寂しく思われる。

そんなことを考えながら、新子は冷たい樹の幹によりかかってぼんやりとしていた。

その時、彼女の眼を後から、誰かが無理に延び上つて、無理に延ばした細い指先で、眼かくしをした。

「知っているわ。小太郎さんでしょう。さつきから知っていたんだから、駄目よ。」

「ウソいつている。随分驚いたくせにねえ、驚いたでしょう……」

「ええ。ええ。」

小さい手を握って、眼から離して、前へクルリと引き寄せると、きつと準之助氏がしよだろうと、後を振り返つてみると、白いリネンの服を着た青年子爵が、二、三間後に立つていた。

子爵と新子とは、微笑ほほえんだ。

昨日きのう、傷の手当を、かなり親切にしてくれた。

「もう、お痛みにならないんですか。」

「ええ、もう。すっかりよくなりました。いろいろご心配をかけまして……」

「外人達のテニスのトーナメントがありますよ。見にいらつしやいませんか。」

「ええ。」

「小太ちゃんあなたが、貴女あなたがきつと、ここにいらつしやるから、誘つて行こうつて、僕を連れて来たんです。」青年は、何か闖入者ちんにゆうしやであるかのように、弁解した。この森が、まるで新子の森で、自分が無断ではいつて来た闖入者でもあるかのように。

「南條先生は、ここが好きだねえ。」小太郎は、感に堪えたようにいった。

「テニスは、あまり見たことがないんですけれども……」と、新子が青年に答えると、小

太郎は横から口を出して、

「野球なんかより簡単だよ。すぐ分るよ。カウン트의取り方、僕教えるよ。」と、ませた口のきき方をした。

「でも、小太郎さんは、また何かを何かと間違えるんじゃないやなくて！ おほほほほ。」
とからかうと、

「やい！ 南條先生の意地わる！」と、いつて笑いながら、武者振りついて来た。

三

新子も、祥子さちこが病氣になつて以来、一度行ったことのあるテニス・コートの前のブレッツで、クリームを買いだいたいと思ひながら、そのままになつていたので、同行することにした。

三人は、森を抜けて、陽のよく当る白い径を、旧道の方へ歩いた。

彼女の愛人の美沢は、早く父を亡くして母親育ちであるだけに、お洒落しゃれな細かい動作が、身体にしみついていて、いかにも美青年らしく見えたが、この青年はいかにも健康な、ス

ブーツでも鍛えたらしい若人という感じがした。

話しぶりも、明るくて、気が置けなかった。

新子も、本来の明るい**のびのび**した気持に還っていた。

旧道に出て、洋服屋や、ワエジタブルシヨッパ野菜店や、家具店などの小さな街を歩きながら子爵は、

「南條さんは、僕の名前ご存じないでしょう。木賀逸郎といいます。どうぞよろしく。」と自分で正式に紹介した。

「はア、私は南條新子と申します。どうぞよろしく。」と、新子がすっかり親愛の度を深めた微笑で、答えると、小太郎が傍そばから、

「逸郎兄さんは、愛嬌がいいんだつてさ。」と、いったので、子爵は急に真赤になって、

「小太坊、生意気なこというな！」と云った。

「だって、ママがパパにそう云ったんだものオ……」と、小太郎はすましていた。

コートのスタンドは、ほとんど外人ばかりだった。

子爵は、知合いらしいアメリカ亜米利加人夫婦と何か隔てなく、話し合っていた。新子は、子爵の英語を相当なものだと感心して聴いていた。

新子は、富も位置もあり、教養もあり、容貌にも健康にも恵まれている青年が、前川別

莊に来て、高慢な夫人の、相手をしているなど、本当に夫人が好きなのであろうか。それとも、愛人がないので閑暇ひまなんだろうか。どちらにしても、何だか少し気の毒のように思った。

しばらく見ていると、青年はズボンのポケットから新しい四角にたたんだ麻のハンカチーフを出すと、新子に渡して、

「顔をおお掩おおうていらつしやい。洋服ならいいけれど、和服で日焼けなさると、お困りになるでしょう……」といった。

新子は、笑いながら、大きなハンカチーフを拡げて、頭から天蓋てんがいのようにしながら、「安心しましたわ。貴君あなたには、やっぱり愛人アミーがおりになるんだわ。」と、初めて、本当の親しみを見せて、スパリとした口のきき方をした。

「なぜです。」青年は、驚いたように訊き返した。

「だって、レディにご親切だから……」

「じゃ、今までは僕に愛人なんかいないだろうと、心配していて下さったんですか。」
「だって、あまりお閑ひまのように、お見受けしましたの、ほほほほ。」

いたずらいたずらした新子の眸ひとみが、相手の言葉を誘い出すように輝いた。

四

トーナメント
試合おわが了ると、小太郎がアイスクリームを食べたいというので、三人はブレッツに寄った。そこで、新子はクリームを買った。

テーブル
卓子に、子爵は新子とさし向いに坐ると、キャメルに火をつけながら、

「貴女がさつき愛人アミイとおっしゃったのは、愛人か許婚いいなすけかのつもりで、おっしゃったのですか……そんな深い意味じゃないでしょう。それなら、いろいろありますよ。」

「ほほほほ。だから、安心したと申し上げたじゃありませんか。」

「何もなかったら、心配して下さるんですか。」

「ええ……」といって、すぐ（だって、前川夫人のお相手なんかだけじゃ、お可哀そうですもの）と、いおうと思つたが、小太郎が居るので、笑いながら黙ってしまった。

「僕の方こそ、心配していますよ。貴女のような方が、こんな腕白坊主の相手ばかりしていらつしやるんだつたら……」

「まあ。ひどいことをおつしやるわねえ。ねえ、小太郎さん！」

「逸郎兄さんは、男の人には、口がわるいんだよ。僕だって、男だろう。」と、小太郎がアイスクリームを、スプーンで口に運びながら、大人のように云ったので、新子も木賀も笑い出してしまった。

「私には、小太郎さん達をお預りしているのが、ほんとうに楽しい仕事なんですもの。だから、案じて頂かなくてもよろしいんですの。」と、新子が微笑で云うと、

「うむ。うむ。」と、子爵は、ちよつと真面目な表情になって、「貴女は随分勝気でいらつしやいますね。」といった。

「なぜでございますの。」

「前川^{マダム・マエカワ}夫人に泣かされないから、あの人に毅然として対抗しているから。」小太郎に分らないようにいった。

新子は、子爵の現実を避けない愉快な物いいに、明るくのびのびと笑った。子爵はつづけて、

「でも、それだけが楽しみじゃないでしょう。^{アミー}愛人だって、お在りになるんでしょう。」と訊ねた。

「ございましてよ。貴君のように複数でなく、単数で……ほほほ。」

「は、はア。これはたいへん失礼致しました。失礼ですが、先刻のハンカチーフをお返し下さいまし……」

相手のあざやかな応酬に、新子はポツと赤くなりながら、さつきから返しそびれてキレイに畳んで懐ふところにしまっていたハンカチーフを返した。

三人は、やがてブレッツツを出た。

若い男と女との会話は、全く磁石のような力を持っているものだ。まして、新子の情感に溢れたほがらかな言葉づかいは、相手にひしひしと浸み込んで行くような性質のものだった。

だから、わずかの間ではあつたが、子爵の心には、新子に対する深い親愛と好意とが湧き上った。

しかし、最後の言葉が、いけなかった。単数の愛人アミイあり！ それは（われに、近寄り給うな）と、いう警笛アラームのようにも聞えた。

五

子爵は、歩きながら考えた。単数の愛人つて、誰だろうか。まさか、準之助氏ではあるまい。でも、昨日、新子が負傷した時の、準之助氏の狼狽うろたえかたは、少し可笑おかしかった。それに、新子を見るときの情熱の籠った双眸！でも、まさかと子爵は、そんな考え方を捨てようとした。

両側の草原から、絶えず、清々しい香りが立ち上って、胸を気持よく柔らげるのであった。

小太郎が、大きい揚羽の蝶を見つけて、草原の中へ十間ばかり追いかけて行った。しばし黙っていた木賀子爵は、その機会に、

「マダムは、難物ですが、前川氏は、きつといい味方になってくれるでしょう。あの人は、元来女性尊重主義者だから……」

「まあ、なぜ……貴君あなたはそんなことをおっしゃるのですの。」

木賀の云い方に、すぐ賛成するかと思つた新子が、思いがけなく反撥したので、木賀は大きく見張つた新子の視線を、あわててそらしながら、

「僕が、あの人をほめては、いけないんですか。」と、タジタジしながら云つた。

「いいえ。お賞めになつても結構ですわ。でも、私とマダムと対立でもしているようにお

考えになつてはいやですわ。」と、新子は云つた。

木賀は、新子の慎みぶかい予防線に、感心しながら肯いた。

新子は、自分が準之助氏から、ある危険を感じるように、他人の眼にも、それが露わに映っているのかと思うと、いやだった。

だから、子爵のそうした観察にハッキリ抗議したのである。

きのうなんか、わずかに傷ついただけなのに、あの方はあんまり、あわてすぎていた。

(やつぱり、あんな不当な謝礼は、頂くではなかつたかしら) 金銭の收受は、男女の間をたちまち接近させるものではないかしら、と思つたりした。

白樺の繁みをぬけて、三人が母屋に近づいた時、バルコンの上で、お茶を飲んでいる準之助夫妻を、小太郎が、いちはやく見つけて、

「パパとママが、あすこにいるよ。」と、遠くから指さした。

前川夫妻は、まだこちらに、気が付かないようだった。

「とても、円満な夫婦のようじゃありませんか。」と、木賀子爵が、微笑しながら云つた。

「ご円満なのでしょう。」と、新子は、ちつとも皮肉を交えずに云つた。

「僕行つて、お茶をいただく！」小太郎は、一散に建物の方へ急いだ。

姉のために

一

熱は冷めても祥子は高熱が続いた後なので容易に床を離れることが出来なかった。

それだけ、退屈し切っていて、新子が病室へは行って行くと、すぐねだって、幼年雑誌や漫画の本を読んでもらった。その朝も、新子が病室へはいると、祥子は待ち兼ねていたように、

「ご本よんで！」といった。

「今日はまだよむご本ありませんよ。」

「動物園見物。」

「でも、これは三度目でしょう。」

「三度目だつていいの。」

「じゃ、およみますわ。」新子は、枕元に坐つて、読みはじめた。

サアどつちからみる？　ぼくライオンからみる。あたしゾウから。ゾウともおし。僕等はシシから。あらシシは十六ばんめにみるものよ。アア四四十六か。

祥子は、もういく度も聞いた洒落しやれであるのに、ニコニコうれしがつていたのであつた。

ちようどその時、扉ドアが開く気配がしたので、新子が顔を上げると準之助氏がいって来た。「また、動物園見物か。何度目だい？　お前が飽きなくつても、南條先生は飽き飽きしていらつしやるだろう。あんまり、先生をいじめちゃいけないよ。」準之助氏は、にこやかに祥子を叱つた。

「先生だつて、面白いのよ。ねえ、先生！」

「ええ。とても。」と、新子も真面目に肯いて読みつづけた。

準之助氏は、本を読んでいる新子と、仰のけに寝ながら、新子の読む声に聞き惚れて、美しい黒目を一章一章に、うごかしている様子とを、何か楽しい観物みもののようにしばらく眺めていた。

そのとき、あわただしい足音がして、扉がノックされて、

「どうぞ！」と、新子が答えるのも待たず、女中がはいって来て、新子に電報を手渡した。（今頃、何の電報！）と、思う胸騒ぎを、じつと抑えて、読み下すと、

アスマデニ三〇〇エンツゴウシテクレ、イノチガケニテタノム、アネ

と、いう電文だった。

姉の唐突な無法な依頼に、呆れて新子の顔は、サツと蒼ざめた。

一昨日の金は、着いたのだろうか。着いたとしたならば、その上に何の急用あつての金だろうか。恐らく母が入用の金ではあるまい。姉一人でいる金としたならば、一体何の金だろう。昨年あたり新聞でよく見た、左傾した女の人達が無理算段の金を作るように、まさかあの姉が急に左傾して、党へ出すとかいう金をでも作るわけでもあるまいに……。「どうなすつたんです。南條さん！」準之助氏に、声をかけられて、新子はハツと狼狽した。

「いいえ、つまらない用事なんですの。電報なんか打たなくっていいことなのですの、…

…ご免なさい祥子さん。先を読みましようね。」

ずいぶんながくかんがえてたのね。だから、カンガエルカンガエルカンガールで、だれいうとなしにそういつてしまったのさ……

だが、もう新子の声は、かすかにふるえて漫画の説明を読むには、一番不適當な声になつていた。

二

祥子も、新子の声のふるえに気がついたら見え、もう漫画からは眼を離して子供らしく気づかわしげな眼を、新子の顔に向けていた。

新子は、それでも祥子の注意を絵本に向けようとあせって、また一ページばかりも、読みつづけた。

「南條さん。本は、それくらいにしてどうですか。ねえ、祥子もういいだろう。」と準之助氏が口を出した。

「ええ。」と、祥子も父の意を汲んで素直に、うなずいた。新子は泣きたいような気持で、

本を下に置いた。

「南條さん、不意の電報なんて、よくないことに定きまっているものですが、一体どういう報せなんです。構わなかつたら、きかせて下さいませんか。」準之助氏は、たまりかねて訊いた。

「先生のママさんが、ご病気なの？」と、腺病質で、勘のいい様子までが、大きい眼みはを刮みつて、愛らしく新子に訊いた。

新子は、危うく涙になりそうな微笑で、首を振り、準之助氏の方を見上げながら、「ほんとうに、何でもございませぬの。姉のつまんない勝手にございますの。お聞かせするよな筋じゃございませぬの。」と、いった。

「じゃ、姉さんが、用事があるから、すぐにでも東京へ帰れとでもいうのですか。」

「いいえ、そんなことでもございませぬの。」

「じゃ……」準之助氏は、しばらく考えて「貴女あなたに無理な依頼でもして来たのですか。」

「ええ。まあ……」と、新子は言葉を濁した。

「依頼って、どんな性質のものですか。」

「つまらない、出鱈目でたらめな事なんでございますの。」

「というところ……」準之助氏は、じつと新子を見つめながら、追及して来た。

新子は、ちよつと身がちぢむような気がした。相手は、あくまで紳士的に、礼を失しないように自分の窮状を察してくれようとするのであつたが、それ以上は訊いてもらいたくはなかつた。

「あんまり唐突で、私にも、何が何だか分かりませんの。早速問い合わせの電報でも出してみようかと思つていますの。ほんとうに出しぬけで、……でも、ご心配して頂く筋じゃございませんの。」と、新子は、しっかりした態度で、準之助氏の好意を^{しりぞ}斥けた。

準之助氏は、新子の微笑にまぎらしている憂鬱そうな顔を、なおしばし見つめていたが、「貴女にも分らないとすれば、どうともしようがないですね。」と、いった。新子は、笑いながら、うなずいた。

「じゃ、先生電報が来ても、ここのお家にいるんでしよう。」

「ええ。いますとも、様子さんと一しよでなければ、東京へ帰りませんわ。」

「じゃ、すぐその間い合せの電報を打っていらつしやい！」と、準之助氏がいつてくれたのを機会に、新子は祥子の部屋を出た。

三

新子は、自分の部屋へ帰って来たが、姉の無理解に、腹が立って仕方がなかった。自分に、三百円の大金が、どうして作れると思つているのだろう。百四十円という金を送つたので、それに味を占めて、前川さんに借りてくれとでもいうのなら、姉にも似ず、あさましい考え方だと思つた。

無性に腹が立って、問い合せの電報も、断りの電報も、打つ気にならなかつた。自分に、こんな電報を打つてよこすなど、ただ自分を苦しめ悩まし、不愉快にするだけではないか。新子は、収まらぬ胸を落ちつけるつもりで、机の上に置かれてある、朝刊を取り上げた。朝の内に、主人が読み、その次に夫人が読む、夫人は朝寝であるから、新子のところへ新聞が廻つて来るのは、いつも祥子の勉強が了つてからであつた。

三面をザツと読んでから、文芸欄を開いて、随筆や時評などを漫然と読んでみると、ふと「新劇研究会の公演」という見出しが眼についた。埋草のように六号で組まれたものだが、姉が関係していることを知つていただけに、新子の眸はひきつけられた。

二十五日より今月末まで、S劇場で旗^{はたあげ}拳公演をしている、小池利男氏の統制下にある若い素^{しろうと}人の劇団だ。出し物のうち、ルノルマンの「落伍者の群」は、稽古が足りない恨みがあるが、どこか新鮮な力の溢れている演出だ。殊に白鳥洋子の「彼女」は傑出している。恐らく、今度の公演での唯一の収穫だろう。聡明な理解に充ちた演技だ。この人の未来を嘱望せずには居られない。(IT生)

読みおわると、新子は胸がおどった。姉の圭子が問わず語りに、
(妾^{わたし}、もし舞台に出るのであったら、白鳥洋子という芸名にするの。どう、白鳥洋子と、
いうの?)と、いったのを思い出したからである。

姉は、実生活に、のんきで出鱈目であるだけに、一方にこんないい天分が、かくさされているのだ。短い寸評だけでも、これ以上の認められ方なんて、ありやしないわ。

そう思うと、新子姉に対する感激で胸に、グツと熱いものが、こみ上げて来るのだ。た。

今の今まで、姉に対して、懐^{いだ}いていた不愉快な感情までが、カラリと拭われたように無くなってしまう。そして、姉がずーっと、自分よりも、貴い人種のように思われて来た。

(そうだ！ あの無心のお金も、きつと今度の公演に必要欠くべからざる金なんだわ。女優なんかになることは、大反対の母に断られて、止むを得ず、自分に訴えて来たのだろう。わずか、三百円で、姉の女優としての素質が、ハッキリ認められるのなら、こんなにやす安いことはないわ)

S 劇場の舞台で、観客を前にして、芝居をしている姉の姿が浮び上つて来た。「落伍者の群」なら、新子も読んだことがある。「彼女」の台辞せりふだって、切々きれぎれに覚えている。そんなことを考えていると、新子は姉に対する、肉親らしい感激で、さつきとは別人のように、興奮してしまった。

四

どうせ、実生活には不向きな姉である。

大空に向つて、翼を張り、自由に雄飛すべき天分の持主ならば、それを無理に、家庭生活の煩わしい鎖で、つなぎ止めて、平凡な生活を送らせるよりも、姉の思うままに芸術の世界へ、輝く脚フットライト光の国へ送り出してやるのが、妹としての、真の愛情ではあるまいか。

天才的な姉のために、自分が犠牲になってやるのが、妹として正しい道ではないかしら。前川さんにお金を借りるくらいの危道きしうを踏んでもいいのではないかしら。

今まで、姉の実生活的方面のみを軽蔑していた新子は、姉の他の輝かしい半面を見つけて、新子が実際的人間であればあるだけ、その光輝に打たれて、すっかり興奮してしまつた。

前川氏にお金のことをいい出すのはいやだ。しかし、その嫌さを忍んで、姉のこの機会を十分に生かしてやるのが、自分の義務かもしれないと新子は思った。

新子は、何か物に憑かれたようになって部屋を出た。前川氏は、まだ祥子さんの部屋にいるだろう。居てくれれば都合がよいと思いつながら、階下へ降りて行つた。

準之助氏は、新子の希望していたとおり、祥子の部屋に居て、今度は新子の代りに、祥子に本を読んで、きかしていた。

父と子は、にわかには晴れやかになつた新子の顔を、いくらか不思議そうに迎えた。

「どうなすつたんです……？」と、準之助氏が、まず訊いた。

「姉の電報の意味が分りましたの。」

「ほう。どういうわけだったんですか。」準之助氏は、けげんそうであつた。

新子は、折りたたんで持つて来た新聞を、準之助氏の前に差出しながら、劇評のところを指して、

「姉は、こんな道楽をしておりますの。白鳥洋子というのは、姉の芸名なのでございますの。」と説明した。新子の気持も言葉も、上ずっていた。

前川氏は、それに目を通すと、

「はア。これは、素晴らしい讃辞じゃありませんか。」と、新子の満足そうな笑顔に、やさしい愛情に充ちた眼を向けた。

「ええ。私もびっくり致しましたの。」と、新子はしおらしく合づちを打った。

「それで、先刻の電報は？」

「お金の無心なんですけれども、どうしてお金があるのか分りませんでしたの。これで、分りましたわ。みんな、学生ばかりですから、この公演の途中で、資金が足りなくなつて、困っているのだと思いますの。そして、私のところまで、あんなとばっちりのようなムリな電報を寄越したのでございますわ。これを見るまでは、何が何だか解らなかつたんですもの。」と、新子は、少し浮かれてでもいるように、喋りつづけた。

「そうですか。いや、それで安心しました。貴女のお姉さまなら、僕は欣んで後援しよう

じやありませんか。」

新子は、嬉しくなって、頬がカーツとなった。

五

「失礼ですが、電報では、いくらほどご入用だと云うのですか。」準之助氏は、続けて訊いた。

新子は、準之助氏と、おずおず眼を合せながら云った。

「もしも、こんなことが許して頂けるんです……私の月々頂くものを、半年分ほどまとめて、拝借できないでしょうか。」

「いや、いや、月給は月給、これはこれですよ。」と、準之助氏は、手を振りながら、

「そのくらいでいいんですたら、僕が貴女のお姉さんを後援する意味で、差しあげましょう。今日にでも、東京の事務所の方へ電話をして、お宅の方へお届けしましょう。」

「先日、あんなお礼まで、頂いて。でも、あれは、母の方へ送りましたのですが、母は芝居なんかには、とても理解がありませんから、恐らく姉の方へは、ちつとも廻らなかつたと

思いますの。」新子は、真赤に上気しながら弁解した。

「いや、ごもつともです。お年寄は、女優なんかになるといえば、恐らく大反対でしょう。と、そういつてから小さい娘に、

「祥子や、安心しなさい。先生への電報は、わるい報知しらせじやなかつたんだよ。パパは、ちよつとご用事が出来たから、『コンコン山のきつね』は、また後にしようね。」祥子が、素直にうなづくのを新子は、

「今度は、私がお読みしましょうね。」と準之助氏の膝にある本を受けとつた。

「四谷のお宅は、谷町でしたね。谷町の何番地ですか。」

「二十七番地でございますの。」

「お姉さんのお名前は？」

「圭子でございます。」

「ケイ、どんなケイです。」

「土を二つ重ねた。」

「分かりました。じゃ、出来れば今日中に届くように。遅くとも明日午前中に届くように。スリー・ハンドレッドでいいんですね。」と、念を押して、前川氏は部屋を出て行った。

新子は、前川氏の後姿うしろすがたを、ありがたく見送りながら、（いい方だわ。あの方が、私
のことを心の底でどう思つて、いらつしやるにせよ、とにかく、いい方だわ。こんな問題
に、こちらをちつとも、不愉快にせずに、あんなに美しくお金を出して下さるなんて！）
と、思うと、たまらない気持になつて、祥子にいった。

「祥子さんのお父さまは、何ていい方でしょう。ほんとうに、いい方だわ。」

何だか、祥子に頼ずりたい気持だった。祥子も、その大きい眼をかがやかし、

「そう。じゃ、先生もパパ好き。」

「ええ大好き。」

「祥子も好き、ママよりもズーツと好きよ。」

六

その日の午後、木賀子爵は急に東京へ帰ることになった。新子が小太郎の相手をしてい
る時に、女中が知らせに來たので、新子も小太郎と一しよに、玄関まで見送つて出た。

「やあ！ また、お目にかかりましょう。お元気で……」木賀は、明るい微笑と遠慮のな

い調子で、新子に云った。

相変らず、大公妃のようにすましている夫人が、木賀がそう云うと同時に、いやないちべ一瞥を新子に送った。

木賀が自動車に乗ってしまったから、夫人は、あわてて呼び止めた。

「逸郎さん。私、やっぱり駅まで送って行ってあげるわ……駅へ行くの少しおつくうだけれどいいわ……このままでいいんだから……」と、云いさして良人おととの方へ視線を向けて、「逸郎さんを送って行ってもいいでしょう。ねえ、ちよつと行って来ますわ。」と、云った。いつものとおり、傍若無人で良人の意志など問題でないようであった。

「ちよつとまた、支度しますから……」と、云つて、奥へ引き返すと、お化粧を仕直して、帯をしめ直したらしく、十分近くも皆を待たせてから出て来た。

自動車に乗った二人を、新子は丁寧に頭を下げて見送った。

サイレンの響きが、かすかになつた頃、準之助氏は新子に、

「四谷谷町二七でしたね、さつき電話をかけておきました。もし、お姉さんが留守だったら、劇場の方へお届けするよう、云い添えました。貴女からも、お姉さんに、電報をお打ちになつたら、どうですか。そして、お姉さんに、物質的なことは心配なさらないで、専

心に舞台の方を、おやりになるよう、激励しておあげになったらどうですか。」かゆい所に手の届くような心づかいだった。まるで、自分に対する親切と好意の権化のように思われた。

もうその人に対する心の警戒も遠慮も忘れて、頼もしく嬉しくありがたく思うばかりだった。

姉の歓喜、輝きに充ちた舞台姿などが、胸の内に浮び上って来る。

なごやかな感情と、充ち溢れる感謝とを、新子は、

「ありがとうございます。」と、簡明にいい表した。

不当な謝礼を貰った上に、不当なお金を借りる、慎まねばならぬと思いながら、結局新子は、準之助氏に甘えているのであった。

小太郎は、緑色の自転車に乗って、前庭を、クルクル廻っていた。

「どうぞ、いつまでも、僕の家に行らっして下さい。」

「それは、私の方からお願いすることですわ。」新子の言葉に初めて、媚態らしいものが、ほのめいた。

「僕は、いつも貴女に、今のような晴れやかな顔をして、いてもらいたいです。お困り

になれば、どんなご相談にでものりますよ。「気がつくど、準之助氏があまりに、身近にいるので、新子はハツとして一歩退いた。

姉の代りに

一

美沢は、新子からの手紙を受けとった。

おたより有難う存じました。

小さいお嬢さんが病気になったので、その方に気を取られて、四、五日お手紙を書けなかつたのですわ。でも、もうほとんどよくなつたので、私も安心しました。ところが三、四日前、私は無茶に走らせて来た夫人の馬と出会頭になって、驚いて樹にぶつつかりましたので、足を痛めましたの。わずかな傷でしたが、シヨツクの方が大きく、氣持がわ

るくなつて、お返事をすぐ書く気になれなかつたのでした。

今日は、また森に行つて、貴君あなたのことを思いました。ここの静かな森を、貴君と一しよに歩きたいと思ひましたの。

軽井沢は、ほんとに貴君に気に入らうなところすわ。何とか都合して、一日でもいから遊びにいらつしやいませんか。夜など、一人でぼんやりしているとき、貴君のお部屋の容子なんか、よく思い出していますのよ。今頃は物干しに、貴君はきつと朝顔の鉢をいくつも並べているでしょうね。いつも貴君の書棚の上にかかっている「読書随処浄土」というお父さまが、お書きになつたという字額が、すぐ目に浮んできますのよ。

ここでは、貴君とお話しするように、心からお話の出来る人は、誰もいませんの。……

七月も終りになつてから、美沢の通つてゐる練習所も閑散で、練習はほとんど休みになつたので、美沢は大抵家にいた。

この手紙も、昼を過ぎた暑い部屋でよんでいた。面と向つて話していると、センチメンタルなところは少しも感ぜられない新子ではあるが、手紙となると、お互に別れて半月以上にもなるせいか、ひどく熱情的になつたような気がした。

そして、新子の心はいつも、自分の身边にまつわっていてくれるような気がして、心強い感激を感じるのであった。

やはり、新子は自分を愛してくれているのだ。ただ、現代の女性が、多くそうであるように、愛情と結婚とを性急に、むすびつけようとしただけなのだと思った。

彼は、新子の手紙を二度くり返して読んだ。そして、四、五日の内に、一度軽井沢へ行ってみようと思いつ出した。

前川氏は、物分りのよさそうな人だから、新子を訪ねて行ってもおかしくないだろうし、初めての軽井沢を、新子に案内してもらって歩いたら、どんなに楽しいだろうと思ったりした。

そんなことを考えていると、つい新子と相對坐しているような楽しい気持ちになった途端、彼はマザマザと新子の肉声を、耳にしたような気がした。

「ご免下さい！」

二度目に、ハッキリと下から聞えた声は、ソックリ新子の声だった。（急に軽井沢から帰って来たのかな）そう思つて、胸をとどろかして、階段の口まで出た。

「ご免下さいまし！」

いよいよ新子のような声が、玄関から、あきらかに、ひびき上つて来た。

二

思いがけない——全く思いがけなく、それは美和子だった。

新子ならば、——彼は瞬間新子が来たと感じてしまったので——物をも云わず手を取つて、二階へ抱き上げてしまおうと思ひ、激しい情熱が顔一杯に露出むきだしになつていたので、

——意外にも洋装の美和子の姿が、ヒョッコリ三和土たたきの上に微笑むと、彼は表情のやり場に困つて、顔や心を冷静に引きもどすために、しばし黙っているよりほかに、方法がなかった。

「何を、びつくりしていらつしやるの？」美和子も、てれくさそうに、しかし、すぐと散る花片はなびらのように、表情を崩しながら、彼を見上げた。

「お上り！ 一人？」彼は、まだ妹の背後から、玄関へはいる新子を想像していた。

「上つてもいいの？」

「だって、遊びに来たんでしよう。」ようよういつもの自分に返ることが出来た。

「小母さまは？」

「今、ちよつと用達ようたしに出かけている。」彼は、そういうと、先へ大急ぎで、二階へ上ると、新子からの手紙を机の抽出ひきだしにかくした。

後から静かに上つて来た美和子も、いきなり男の部屋を訪ねて来た恥かしさに、落着けないらしく、

「大きいお姉さまが、二十五日からお芝居をしているのよ。私初日に見たけれども、割と評判がいいからもう一度見たいの。でも、一人で見るのもつまらないから、美沢さんでも誘おうと思つて来たのよ。坂を上ると、とても暑いわねえ。」と、クルリと美沢に背を向けた。そしてコンパクトを出して、顔を直し始めた。

ボイルの洋服が、汗でジツトリと背について、白い首筋と黒い断髪と、全体がなにか親しい、生々なまなましい感じであつた。

美沢は、妹にしてやるように、団扇うちわでその背をハタハタと煽いでやりながら、

「姉妹きょうだい、つて、どこか似ているもんだなあ！ 貴女あなたと新子姉さんとは、顔立ちはまるで違うから、面と向つて話していたんじや、ちつとも気づかなかつたけれど、声だけ聞くとまるで同じだ……」

「そうお、そんなに似ている？」

「似てるよ。さつき、姉さんかと思つてびっくりしたよ。それに美和ちゃんらしくもなく
気取つていたからさ……」

「だって、貴君あなたの家へ来るの初めてだし、小母さんいるんだし、少し気取つていったのよ
」。

子供らしく、艶なまめかしくいいながら、

「ありがと。もういいの。」と、美沢の手から団扇を取り上げると、ストーンと脚を投げ出
し、横よこすわり坐まに坐つた。

三

「お姉さんの芝居、なかなか好評だね。」と、美沢がいった。

「貴君も見たの。」

「ああ、一昨日おととい。」

「なあんだ！　じゃ、あれ見に行かなくつてもいいわ。ズー・イン・ブダペストつて、活

動見に行かない？」

ハッキリした二重瞼の大きい瞳を、浮気つぼく動かしながら、甘えかかった物いいをした。

暑い陽が、カツと部屋の中に射し込んだので、美沢は立って、簾すだれをおろした。

立ったついでに、階下したへ行つてお茶を持って来るつもりで、美和子の背後うしろを通ろうとすると、

「ねえ、どこへ行くの？」と、美しいしずく滴のような眼が、彼を見上げた。

「お客様には、お茶というものがいるからさ。」

「厭いややん。いやだわ。初めて来たお部屋に、一人になるの嫌い。ここにいて、ねえ！ お茶なんか飲みたくないわよ。お婆さんじゃないんだもの……」

「駄々だだつ子だねえ。じゃ、小母さんの帰るまで、飲まず食わずにいるさ。」と、いつて美沢が美和子と、さし向いに坐つてチェリイをつけると、美和子はすぐ羞はずかしそうに、唇の傍に手をあてたり、下眼づかいをしたり、いたいたしいほど、処女めいた表情をする。彼は、このお嬢さんを、いかに扱うべきか考えずには、おられなかった。

「靴下がとても、汗ばんで気持がわるいの。ちよつと、取つていてもいいかしら。」

「いいさ。」

美和子は、立ち上ると、それでもしおらしく、後を向きながら、スルスルと靴下を取ったが、かの女は彼の眼を、さっぱり恥かしがっていなかった。

「ねえ。随分毛深いでしょう。」

「うん。」

惜気もなく、前に出された裸の脚に、美沢は、ふーつと瞼や唇元を、温い風に吹かれたような気持で、

「僕なんか、キレイなものだ！」と、自分も、ちよつと浴衣の裾を、あげて見せた。

「厭やん。男のくせに、そんなにのつぺりしたの気味がわるい。」と、いいながら、盛んに自分のスカートを引張り降して、

「毛ぶかい人は、情が深いって！ 貴君なんか薄情なのよ。」まるで、年増芸妓のような言葉を、はずかし気もなくズケズケいった。

「頭の毛なんか薄いんでしょ……」と、のび上つて頭の頂辺をのぞきに来た。

美沢は、もう美和子の前では、何事も遠慮なし、横になって話ししようと、また美和子が、シユミーズ一つになろうと、それは何でもないことだと、軽快に感じられて来た。

「こんなものさ。」と頭を下げて見せた。

「立派ね。あら、あら、白髪があるわよ。」

「ウソをつけ、光線のせいで光っているんだよ。」

「あんなこといつている。二本あるわよ。取ってあげるから、ジツとしていらっしやい。」

四

美沢の耳の後に、美和子の手がふれて、頭を上げると、それが美和子の乳房を打つような感じだった。

雌めしべ薬びに抱かれた一びき疋の虫のように、美沢は、深々と呼いき吸きづきながら、

「痛っ!」

「それ、ごらんなさい。これ、白髪でしょう。白髪よ。」

「なるほどね。後は取らないでよろしい。」

「なぜ?」

「若白髪は金持になるんだろう。」

「そう云うわね。でも迷信よ。白髪なんか、ない方がいいわよ。」

「僕は、かつぎ屋だから……」と、あまりに近づくと、美和子の肌を遠ざけながら立ち上つて、片隅のビクトロラの蓋を払って、バツハのコンチエルトをかけた。

「美沢さんのところには、ジャズがないのね。」

「有る。二、三枚なら、レジュイナのカスタネットでもかけようか。」

「そんなのいや。もつと、ウツトリとのびのびするようなの、ないの。どら。」
立つて来て、レコード・ケースを掻き廻して、

「仕方がないわね。これでもかけましょう。」と、取り出したのは、ラヴェルのエスキヤール。

「そりやジャズじゃないぜ。」

「これの方が、ましだわ。」

「へえー。君、ちゃんと知ってるんだねえ。」

「そりやア知ってるわよ。新協なんか、もうせんから、シーズンになれば欠かさないのでよ。」

美沢は、美和子の中に、なにか新しいものを発見みけたように、彼女を見直した。

やがて、レコードが重くはなやかに、物がなしく、ひそやかに、あらゆる感情の交錯した音を、ひきずり出して、部屋の気分を一変させた。

「君が、音楽が好きだとは思わなかった！」

「あたし何でも好きよ。音楽も、文学も、恋愛も。」

「へえ！ 剛気だな。でも、恋愛だけは余計じゃないか。」

「三人姉妹でしょ。三つの階級があるのさ。上のお姉さまは、アリストクラット 貴族よ。新子姉さ

まは平民で、あたしはボヘミアン 芸術家よ。」

「なるほど、そうかもしれないな。」

「上のお姉さま、少しいやよ。家では、お高く止まって、結局皆に何かさせてしまうのよ。新子姉さまは、あまりに家のことを心配しすぎるのよ。つまり、貧乏性の損な性分なのよ。」

「君は？」

「ボクはね。とつても素敵さア。」

いきなり男の子のように、きらきらと眼を輝かした。

五

美沢は、いつの間にか、壁に背をもたせて、両足を前に投げ出していた。美和子と話している、人間の男と女という気がしなくって、ついそんな遠慮のない姿勢になつてしまふのだった。

美和子が、一茎の薔薇ならば、彼も一茎の植物の花になり、新鮮に軽快に、のびのびとした気持になるのだった。

コマシヤくれた頭のいい妹と話しているような気になつて、

「美和子ちゃん、君が素敵つて、どんな風に素敵なのさ？」と、訊いた。

「そりや、キミがいわなくつちや。」白々と男の子のような、あどけなさで云つた。

「チエツ、素敵なものか。僕に云わせりや、不良少女だぜ。」

「ああ、そう。私少し不良ね。」と、アツサリ肯定した。

「君は、正直だからいいね。」

「そこなんか、つまり素敵なんさ。正直でうぬぼれが強くなって、だから失恋なんかしたことないの。」

「失恋なんかしたことないって、第一恋愛したことあるのかい。」

「無いわ、でも、すぐあるかもしれないわ。」

「美和子ちゃんの好きなタイプの男って、どんな人？」

「例えば……」そう云いかけて、たちまち頬を赤くしたかと思うと、匂うほど、女になつてしまうのだった。

美沢は、美和子と話していると、自分の心が楽しく弾み上つて来るのを感じずにはいられなかった。

彼は、美和子を女らしく感じた途端、脚をひっこめて、たばこに火をつけた。

「あたしにも一本……」そういって、美和子は、美沢のさし出したチエリイの箱から、一本とり出して、可愛い手付で火をつけると、

「ねえ。活動シネマに行かない？」と、促した。

「こんな真昼に、暑いじゃないか。」

「冷房装置のある所へ行けば、ここよりは、よっぽど涼しいわ。」

美沢は、苦笑しながら、

「美和子ちゃん、僕も不良だぜ。あんまり、くつついていると、こわいぜ。」

「どうするの？」

「さあ！ 何をするか……」

「美沢さんなんか、こわくないわ。新子姉さんに、甘いところ、さんざん見ているんだもの。そんなおどかしきかないわ。ねえ、シネマへ行きましょよよ。」

六

時には、妖婦ヴァンブのように色っぽく、時には天真爛漫の子供のように無邪気な美和子を、美沢は持ち扱いながら、結局……妖婦ヴァンブらしいところには、眼をつむって、愛らしい少女らしいところだけを、見ておればいいのだと思った。

新子の妹として、映画へ連れて行ってもいいだろうし、こうして無駄口を利いていることも、新子を憫しのぶよすがにもなるだろうと思った。

しかし、彼の官能が、新子などにはとても見られないような、美和子の新鮮さに刺戟され、楽しまされていることは事実であった。

もう、一しよに出かけることになって、母親の帰りを待つ間に、美沢は美和子から、洋

服を着せられてしまった。

弟を連れて、親類の家に行っていた母が帰って来ると、美沢は美和子に母を紹介したが、その紹介が結局帰りがけの挨拶のようになって、美和子は美沢と連れ立って、弥生町の坂を逢初橋あいそめばしの方へ降りて行つた。

ここからは、浅草が一番近いので、二人は予定通り、大勝館へ行くことにして、円タクに乗つた。

大勝館で、美和子は「ズー・イン・ブダペスト」はお終いまで、神妙に見たが「ジェニの一生」になると、中途まで見て、

「ねえ、出ましようよ。」と、いった。

美沢は、見ても見なくてもよかつたし、美和子はのん気に見えても、帰りを急いでいるかもしれないと思つて、だまつていわれるままに、外へ出た。

「面白かつたわ。『ジェニの一生』なんていうの、いや。あれを中途まで見ている内に、散歩のプランが浮んだから、出てしまったのよ。」六区の雑沓ざつとうの中へ出ると、すぐ美和子がいった。

「まだ散歩するの。」

「だって、これからすぐ帰つても暑いわ。」

「どんなプラン？」

「私に委せて下さらなきやいや、貴君のお家の近くで蜜豆を喰べるのだけれど、その前にちよつと散歩したいの。」

時計は、まだ八時を少し過ぎたばかりであるし、美和子の子供っぽい願いを、無下に斥けるのも何となくいじらしく思われたし、

「うん。」と、いつてしまった。

うんと聞くと、美和子はもう、小走りに松竹座の前の大通りに出て、そこにいる「空車」の一つを、三十銭に値切つてしまった。

車へ乗つてから、美沢は訊いた。

「どこへ行くの。」

「訊いちゃいや。出来たら、眼をつむつていて……」

「僕を誘拐するの。」

「女ギャングよ。」そういつて、小さい右手をピストルの恰好にして、美沢の横腹にさし当てた。

「くすぐつたいよ。」美沢は、その手を握っておしのけた。

七

自動車は、美和子に命ぜられていたと見え、公園裏のコンクリートの大道を、入谷から寛永寺坂にかかつて、上野公園の木立の闇を縫い、動物園の前で止まった。

「どう、ここから池の端へ降りて、不^{しのぼす}忍の池の橋を渡って、医科大学の裏の静かな道を一高の前へ出て、あそこで梅月の蜜豆を喰べて、追分のところで、別れるの。少し長いけれど、いい散^{プロムネード}歩コースじゃなくて、さつき活動を見てから考えたの。」

美和子は真面目にしているのかふざけているのか分らないが、とにかくこのコースは、いかにも恋人同士が選びそうな人目の薄い散歩道である。こんな所を歩きたがるとすれば、女として彼女を警戒する必要がある。そう、美沢が思った途端、水銀のように変化の早い彼女はもうそれと悟って、美沢の警戒を柔らげるように、たちまち子供らしく無邪気に振舞うのであった。

「私、動物園とても好きよ。だから、今の活動もとても見たかったの。ほんとうに、今日

は楽しかったわ。私、お友達がみんな避暑に行っているから、とてもつままないの。新子姉さんはいないし、圭子姉さんは、芝居に夢中だし……」

「しかし、美和子ちゃんは不良だね。ここから、弥生町へ抜ける道を知っているし、四谷に住んでいて、梅月の蜜豆なんかたびたび喰べに来るのかい？」

「だってえ、そりや西片町にお友達があつたのよ、それから桜木町にも仲よしがいたんだもの。だから、この道は随分歩いたのよ。」

「だって、西片町から桜木町なら、逢初橋へ出た方が近いじゃないか。」

「そら、用事的时候はあつちを歩いたわよ。散歩のときは別よ。散歩って近道することじゃないでしょう。」

二人は、そんな無駄口を利きながら、清水堂の下の石敷の小径を歩いていた。

そこらあたりは、樹の茂みで闇が濃く、一人の人にも会わなかった。

「貴君は、不良だなんて云つたけれども、善良な紳士ね。」と、美和子は云つた。

「なぜさ……？」

「なぜでも、それに臆病ね。」

「何を生意気な、子供のくせに……」

「皆、私を子供と云うわ。でも、私もう子供じゃないわよ。何でも分っているのよ。」
彼女はちよつと立ち止まって、

「ねえ。美沢さんも、新子姉ちゃんがないで、寂しいでしょう。だから、私ちよつと慰問に来て上げたのよ。ほんとうはそうなのよ。」

「何を下らんことを！」

美沢は、本気に少し腹が立って来たので、美和子を振り捨てるように、足早に歩き出した。

八

美沢が、足早に歩き出すと、美和子はすかさず、追いかけて、

「ねえ。」と、改めて彼の腕にすが縋りながら、

「私、美沢さんに初めてお会いしたの、去年の三月よ。」

美沢が、だまっている、いよいよ美沢の胸に首をすり寄せながら、

「貴君、覚えていない？」

「覚えているよ。麴町の家でだろう。お茶を出して、すぐ逃げてしまったじゃないか。それから二、三度会ったけれど、いつも居るなと思う瞬間にパツと逃げて行ったりなんかして、ふざけたお嬢さんだと思つていたよ。」

「どうして、逃げたか知つている？」

「そんなこと知るもんか。」

「貴君に顔を見られるのが、とてもきまりが悪かったからよ。その頃から、私貴君に顔を見られると変だったのよ。」

組んでいる腕と腕との間が、しとしと汗ばんで、美和子の言葉を聞いていると、彼女の軽い腕が、千鈞せんきんの重みを持つて来る。

「ねえ。」美和子は、また立ち止つた。

「何だい。」

「貴君が欲しいと云えば、私あげるものがあるのよ。」

「ええ。」

思わず、その顔を見ると、その暗い闇の中で、美和子は眼をつむって、桜んぼの堅さを思わせるような型のよい愛らしい唇を、心持上へさし出して……。

美沢は、身体の中で、何かが砕けて行くような気がするのを、グツとこらえながら……これは処女ではないのだろう。

(もしそれならちよつとだけホンのちよつとだけ。花の匂いを嗅ぐだけなら) そうした意慾が、チヨロチヨロ燃えた。

「度胸がないのねえ。」

木の実のような赤い唇が、チラチラ白い歯をこぼして……。その言葉で、美沢は、鞭打たれたように、いきなり抱き寄せると、一瞬天も地もなかった。二人は、闇にとけたように……。

「厭いや。厭いや。そんなのいや。」

いきなり、美和子は美沢を突き退けると、三、四間先へ走った。

夢見心地を、つきのけられたのが、思いがけなかったので、息を弾ませながら、追いついた。

石燈籠が、ずらりと両側に並んで、池の端から、下谷の花柳界にぎわの賑いの灯が、樹間このまに美しく眺められた。

「ただ、お友達の印だけの、かるい接吻べいせがほしかったのに……まるで、恋人同士みたいな

こと、するんだもの、あんなのいや。」

近寄ると、美和子の顔が、頼りなげな、泣き出しそうな感じである。

一 いっきんいっしょう 擒 いっしょう 一 縦！ 子供と油断したが、これは天性の娼婦コケツトである。

(しまった!)と、美沢は刹那に感じた。

突風来

一

祥子は、綴方や童謡などを好んで、即興的につくるのに、小太郎は面倒くさがり屋で、数学や理科が好きで、国語ことに綴方など、大嫌いという性質であった。

だから、夏季休暇中の宿題となつてゐる綴方はもちろん、一日一日の日記帳の小欄に、たとえば（町でも屈指の財産家となる）とか（まことにもっともな話である）などという断片的な文章を用いて作る短文などは、一から十まで新子にまかせたきりである。そして、自分では何もしようとしないので、昨日きのう小太郎がパパに連れられて、国境平の奥の方に放牧の牛を見に行つたのを機会に今日の午後までに、宿題の一つである（夏休みの一日）と

いう綴方を作っておくように、指切りげんまんまでして約束した。

小太郎は、二時の授業時に、笑いながら、半截はんせつの用紙に、それでもやっとな枚と二行くらい書いて来て、新子にさし出した。

お父さまが、「牛を見に行こう」と、おっしゃったので、僕は洋服をきかえたり、サンドウイチチを作ったり水筒に紅茶を入れてもらったりして、仕度をした。軽便を降りて牧場まで歩いて行くと、暑くて、苦しかった。日向ひなたの草原に、牛が寝たり、立ったりしていた。牛の子もいた。お父さまが、「牛について行ってごらん」と、おっしゃったので、僕は「四足獣、草食獣、複数の胃で、はんすうする」と、いった。するとお父さまがニコニコした。

よく見ていると、仕度という字を、一度平仮名でしたくと書いてから、消して、仕度と直してあった。

この字は、四、五日前に、新子が支度の方が正しいと、教えたばかりであったので、彼女は、微笑を浮かべながら、しかしややきびしい調子で、

「たいへん、お上手だけれども、一字小太郎さんらしくもない間違いをしていらっしやるわ。ね、仕度は、支度の方が正しいと、この間云ったでしょう。」と、新子は鉛筆で、白い紙の端に支度とかいてみせた。

いつも、素直な小太郎であるが、嫌いな綴方を、やっと自分で作ったのに対し、とやかに云われたことが、すぐかんに触ったらしく妙に意固地になり、てれくさくなったらしく、「僕、それよく分らなかつたから、平仮名で書いておいたの、そしたら、ママが本字を教えてくれたんだもの。それでも、いいんだよ。」と、子供らしく、喰ってかかって来た。

「ええ、普通によく仕度とかいてありますけれど、それは間違いなんですよ。やっぱり支度と書かなけりゃ。」

「だって、僕が間違つたんじやないや、僕は平仮名で書いておいたんだもの。ママが悪いんだ、ママに怒つて来る！」と、云うと小太郎は早くも立ち上って、（アッ！）と云う間もなく、飛鳥のように部屋を飛び出した。

「小太郎さん、お待ちなさい！」と、新子はあわてて、後から部屋を出て、呼び止めたが、小太郎は綴つづり方かたの紙をヒラヒラさせながら、廊下を、首をすくめ、肩を怒らしたふざけた恰好で弾丸のように走って、二階への階段を一足飛びに上りきってしまった。

新子は、小太郎の後姿うしろすがたを見送りながら、これは大変なことになったと思つたが、今更ほど施こすべき策がなかつた。

「ママの嘘つき！」

「何が……」

「仕度つて字は、こう書くんじやないって！」

夫人は、美しい眉をよせて、

「ママは、その字ばかり使つていてよ。それ以外に、したくと、どんな字を書くんだろう。」

小太郎は、新子が書いた字を、母に示しながら、いった。

「こう書くのが本当だって、だから僕仮名で書いておいたのに、ママが余計なこというんだもの。ママなんぞに、直してもらわなければよかつた。」

夫人の眉は、たちまちピリピリと吊り上つて、

「そうお。それで、南條先生が、わぎわぎ貴君を、ここへよこしたの。」

「うん。」小太郎は、騎虎きこの勢い、そう答えた。

「じゃね、貴君の勉強の時間が了つたら、先生にお話があるから、この部屋に見えるようにいつて頂戴！」

「うん。」

母の部屋から、バタバタとかけ出した小太郎は、階段を降りようとして、下から不安そうに、上を見ている新子と顔を見合わせた。

「僕、ママにそう云つたよ。だって僕が間違つたんじやないんだもの。」と、声が高かつた。

母夫人は、小太郎の声に、新子が、すぐ階下にいると知ると、部屋から出ると、

「南條先生、下にいらつしやるの？」と、小太郎に云つた。

「うん。」

「じゃ、今の方がいいわ。すぐ、先生にママの部屋に来るように云つて頂戴！」

小太郎は、母の険しい言葉を聞くと、ようように、自分が調子に乗り過ぎて、とんだ失

策をして、南條先生を窮地に陥れたことに気がつくど、かなしそうに新子を見おろしながら、階段を下りて来てさつきとはまるで違つて、しよげ切つた容子ようすで、
「ママが、先生にご用だとさ……」と、すまなさそうに云つた。

三

今更、小太郎を咎めるわけにも行かず、といつて自分のしたことを後悔する気にもなれず……とはいえ、新子にとつて思いがけない災禍だつた。

小太郎が、不安そうに新子の顔を、見上げるのを、

「じゃ。ちよつと行つて来ますから、貴君はおさらいをしていて頂戴ね。」と、やさしくいつて二階へ上つて行つた。

夫人の部屋の扉ドアを、ノックすると、

「どうぞ！」と、いう馬鹿丁寧な返事に、新子は針の山へ入る思いで、部屋にはいつた。招じられたぜいたくな椅子にも、剣が植えてあるような思いである。

夫人は、かるく一つ咳をしてから、

「後でもいいんですけれど、私いいことをためておくの、いやな性分ですから、すぐ来ていただきたいんですの。私が教えた仕度という字、違っておりますの？」と、単刀直入であつた。

「……………」

新子は、夫人の勢いを避けて、だまつていると、

「ああ書きますと、誰にも通じませんかしら……」

「いいえ、通じますわ。」

「そうですね。通じれば、それでいいじゃありませんか。」

「はあ。」

「言葉というものは、通用するということが、第一じゃありませんの。貴女は、英語の方は、お精^{くわ}しいそうだからご存じでしょうが、保護者^{パトロン}という字だつて、本当に発音すれば、ペイトロンか、ペトロンでしょう。」いかにも、外国に行ったことのあるらしい、しゃれた発音であつた。

「はあ。」

「でも、パトロンはパトロンでいいじゃありませんか。もう、それは日本語なんですもの。」

それを知ったかぶりです直すのこそ、おかしいと思ひになりません。それから、大統領のリンコンだつて、本当はリンカーンでしょう。でも、リンコンというのも、それで何だか、昔風でなつかしくつていいじやありませんか。」

「はあ！」

「日本の言葉にだつて、間違つてそのまま通用している言葉が、沢山あるでしょう。殊に仕度という字なんか、十人の中で七、八人まで、仕度とかいていやしませんかしら。」

「はあ。」

「十二、三の子供の綴方に、仕度と書いてあつたからといって、それを一々直すには及ばないと思ひますが。」

「はあ。」

「もつとも、子供の間違ひを直すのと同時に、親の間違ひを直してやろうと、おつしやるのなら、これはまた別の問題ですが……」

「まあ！ 私に、そんな……」

「だつて、小太郎を、私のところへおよこしになつたのは、貴女でしょう。」

「まあ決して……」

四

そこまで、夫人が、いったとき思いがけなく小太郎が、ひよつくり部屋の中へはいって来た。

子供心にも、新子のことが心配になり、先生のために、何か一言釈明したかったのであろう。夫人はすばやく、それを見つけると、

「小太郎さん。貴君は、あなた下へ行つておさらいをしていらつしやい！」と、いった。

「だつてえ、おさらいといつても、僕は今日まだ、何にも先生にしてもらつていないんだもの。」と、鼻にかかった声でいうと、夫人はすぐ威丈いたけだか高に、

「あなた、ママの云うことを近頃聞かなくなつたわねえ。早く行つて、おさらいをしていらつしやい！」と、これも新子への当てつけに、聞えた。

小太郎は、不平らしく、しかも新子の方を、心配そうに、ちらつと見て、部屋を出て行つた。

新子は、こんなときには、あつさりあやまと謝つた方がいいと思つたので、

「私、何の気もなく、ご注意したので、奥さまのおっしゃるような、そんな気持で、ご注意したのじゃございませんわ。」と下手に出ると、夫人は新子の顔を、ジロジロ見ながら、「仕度が間違いで、支えるという字をかくのが正しいにいたるところで、ここにたいへんな大問題がございますわね。」と、夫人は前よりも、更に開き直った口調だった。

新子は、夫人が更に何を云い出すのかと、呆^あつ氣に取られて、夫人の顔を、ぼんやり見上げていると、

「子供の教育についてですねえ……」と、改まった言葉に、

「はい。」と素直に受けると、

「些^{ささい}細な誤りを訂正して下さる利益と、親の云うことにも間違いがあるという観念を植えつける害悪と、差し引きが付くものでしょうかしら……」それは、思いがけない鶴の一声だった。

「まだ、十二、三の子供なんですもの。仕度なんていう字を、どう書こうと介意^{かまわ}ないと思えますの。だが母としての私の云うことを、あれが信じなくなつたとすると、これは取り返しのつかない一大事じゃございませんかしら。」

「はあ、ごもつともで。」新子は、そう云わずにはいられなかった。

「貴女は、失礼でございますけれども家庭教育の本末を顛倒てんとうしていらつしやらないでしよ
うか。」

新子は、先刻から、馬鹿馬鹿しくなり、こんなことで云い争つても、つまんないと思つ
ていたが、こうまで夫人が、カサにかかつて来る以上、もうこの仕事をよすほかはないと
決心した。

五

綾子夫人は、指先で椅子の腕を軽く叩きながら、今までの態度を、急に無雑作な調子に
崩すと、いった。

「第一貴女に、家庭教師としての嗜たしなみを知つて頂きたいんですよ。」

それは、もう露骨な侮蔑であつた。新子は、夫人の物の云い方に半ばあきれながら、顔
色を蒼白くさせて、きつと夫人の顔を見守つた。

この相容れざる二人の間には、ささいな問題から思いがけない突風が、吹き起つたので
ある。

夫人は云いつづけた。

「第一、貴女が私の家にお客に来てゐる若い男の人と、すぐ馴々しくなつて、散歩に出たり……また最初ご注意したと思いますが、貴女は家庭教師として、来て頂いてゐるんですから——決して私の家の親類でも家族でもないんですから、子供達とあまり親しくして頂いてはこまるんです。子供達が貴女を女中のように、使い廻すようになったらおしまいですからね。子供に本を読んでやるなどということは、女中のすることですからね。」と、一氣に云うと、綾子夫人はいかに積もる忿懣ふんまんの情に堪えないと云うように、椅子の背に身体をもたせて、絹よりもなめらかな麻のハンカチーフを両手の中でもみしだいた。

新子は、女性としての悪徳である、嫉妬心、高慢、わがまま、邪推というような物ばかりを、つつしみもなく、さらけ出す夫人に対して、思わず冷笑が浮び上るのを、ジツと嘯みしめながら、椅子から腰を浮かせると、一步退いて、ハッキリと、

「私の致しました一々のことが、そんなにも奥さまのお気に召さないとすると、致し方ございませんから、おひまを頂きたいと思ひますけれど……」と、云つた。

新子が、充分謝りもしないで、すぐ反抗的に出た態度が、グツと夫人の神経を、いらだたせたらしく……。

「私は、貴女にそんなことを云わせようとして、お呼びしたわけじゃないんですわ。ただ、お年若な貴女に、ご注意をしたかったまでなんですの……」と、わざと少し声をやわらげて云った。夫人の趣意は、新子を思うさま、やつつけることであり、新子が、今までの家庭教師に比して、ずっと秀れていることを、心の内では認めているだけに、これを機会に追い出そうという肚はらではなかつた。

しかし、もう新子の心は、定まっていた。

「ご好意はありがとうございます。でも、この先お邪魔致しておりますも、奥さまのご希望どおりになれますかどうかですか！」

綾子夫人は、新子の最後の言葉を聞くと、サツと顔色を変えて、肘掛椅子から立ち上ると、

「では、どうぞご自由に。」と切口上だつた。

六

新子が出て行くと、夫人は左右の手の中指と母指おやゆびとを、タツキタツキと交互に鳴らし

ながら、姿見の前へ歩いて行って、自分の姿や顔をにこやかに眺めながら、香水を耳や喉につけて、心の中で、

（この次は、若い男の家庭教師を雇うことにしよう。女なんか真平だわ）と考えた。

その時、厳格な表情をした準之助氏が、はいつて来た。

夫人は、腕かけ椅子に、深々と腰をおろすと、しおらしい表情で良人を見上げた。

「どうしたのだい？ 一体、小太郎が綴方の字を間違えて、それで南條先生が……」と、準之助氏のいいかけるのを、夫人は領きながら、引き取って、

「小太郎が、貴君に何か申し上げましたの？ほんとに、何でもないつまらない、ことな
んですの。」

夫人は、笑いながら、ごく自然に良人の片手を握って、

「そう？ だって、私も少し驚いているんですよ。あの人くらい、高慢で、しかも自我の強い人だったらありやしないわ。私が小太郎に仕度という字を仕^{つかまつ}ると教えたのが、違っていると云って……」

「支度は仕ると書いたら、間違いか……」

「ほら、貴君だって、仕るとお書きになるでしょう。それを支^{ささ}える度^{たく}が正しいと云って、

小太郎をわざわざ私の処へ訂正によこさなくつてもいいじゃありませんか。それじゃ、私だつていい加減不愉快になるじゃありませんか。それに、あの人子供と少し馴れすぎるし、逸郎さんなんかと、すぐ散歩するのだから、どうかと思ひますのよ。だから、その点も、ちよつと注意しましたの。すると、もう開き直つてよすというんですもの。」

「ふむ。」準之助氏は、呼吸をのんだ。

「私だつて、今までの家庭教師よりは、あの人よつほど、いいと思つていますわ。でも、ああ高慢で素直でないとなると考えますわねえ。それに、私がちよつと注意したら、すぐ跳ね返して来て、お暇を頂きたいというんですもの。（どうぞご自由に）というほかないじゃありませんか。」

「しかし、子供達は、とても南條さんに馴れているじゃないか。南條さんが来たために、小太郎なんか、ずーつと勉強するようになったと思うが……」

「ですから、私もあの人に出て行つてくれなんて、ちつとも云いませんのよ。でも向うから暇をくれと云う奉公人に、主人が頭を下げて、どうぞ居てくれとも云えないじゃありませんか。あの人も、少し高慢なところが、瑕きずですわ。もう、少し素直だとほんとうにいい人なんですけれど。」

「ふむ。」準之助氏は止むを得ずうなずいた。夫人がこうも円転滑脱、弁舌さわやかに、自分の立場を明らかにした以上、こつちからそれを崩しにかかることは、たいへんである。下手に、かかつて行けば、たちまちヒステリックに不貞くされてしまうに違いないのだ。夫人が、まだ表面だけでも体裁のいいことを口にはしているのを、よいことにして、新子を引き止める承諾を求めるのが肝腎だと考えた。

雷雨の中

一

準之助氏は、もの静かに云いつづけた。

「しかしね。かわりの先生を雇うにしたって、すぐにいい人はないに定きまっているし、折角小太郎も勉強ぐせが付いたのだし、ともかく夏休み中だけでも、南條さんに居てもらおうじゃないか。」

「ええそりや、あの人私に謝って来さえすりや、今日のことは何も無かったと思ってあげられるわ。」と、夫人は大いに寛大なところを見せた。

夫人も、新子が居なくなると、折角自分にまつわらなくなった様子や小太郎が、何かと

うるさくなるに定きまつてゐるし、それに八月の十日頃に一度、一人で東京へ遊びに帰ろうと思つてゐるので、その留守中新子がいた方が、子供のために安心だと考へてゐるのである。夫人の言葉を聞くと、準之助氏の表情は、急に明るくなつて、

「どうせ、よすにしたところで、南條さんは僕のところへ、挨拶に来るだろうから、そして、お前の意のあるところをよく伝えて……」

夫人は、もう面倒だというように、小さい欠伸あくびを噛みころしながら、

「でも強いて居てくれなくつても私はいいんですよ。」と、まだ嫌がらせをいつていた。

「お前今日きょうゴルフへ行くんだらう。」と、準之助氏は、それとなく気を引いてみた。新子を説得するには、相当曲折があらう。それには、夫人が家に居ない方がいいと思つたからである。

「今日はよそうと思つてゐますの！」

「なぜ？ 今日、村山夫人と勝負をつけるのじゃなかつたのか。」

「あの人の相手は、真平だわ！ あんな汚いプレイをする人きらいだわ。」

「たいした気焰だね。」

「貴君あなた一人でどうぞ！」

夫人に、そう云われたとき、準之助氏は新子と話をすることについて、別のことを考えついた。

「じゃ、僕一人で、行つて来るよ。」そう云つて、準之助氏は夫人の部屋を出た。

自分の部屋へ歸つてみると、事件の発端を作つた小太郎が、所在なきやうに、大きな椅子に、足をブランブランさせながら、悄気しよげかえつて、父をむかえた。

「パパ！」

「何だい。」

「南條先生泣いているよ。泣いちやつたよ。」

「先生どこに居る？」

「お部屋にいる。僕、先生のお部屋をのぞきに行つたら、お机のところにかうしているの、きつと泣いているんだよ。ママこわいから厭さ。」

「お前が、余計なことを云うからいけないんだよ。」

「だつてさ、南條先生、東京へ歸つてしまふだろう。そしたら、僕はかまわないけれど、祥子が困るでしょう。」分別のある大人のような口調だった。

二

新子は、部屋に帰ると、一しきり口惜し涙にむせんでいたが、それが乾く頃には夫人に対してあまりに思い切った態度を取ったのを、後悔していた。

夫人との間には、何の貸借かしかりもないが、準之助氏に対しては、そうは行かなかつた。姉のために、あんな大金を借りたばかりである。相手が、どんな好意で貸してくれたにしろ、自分は月給の中から、いくらかずつでも払おうと思つているのに、ここで夫人と争つて出してしまうば、あまりに義理が悪すぎる。この家へはいる時、路子さんからも、特別に注意されていたのに、もつと隠忍すべきであつた。

準之助氏に、何と云い出そうかと、思い悩んでいたので、部屋にそつと、はいつて来た小太郎の手が、肩にかかるまで気がつかなかつた。

「はい、先生！ これパパから。」肩に置かれた小さい手から、眼の前に白い紙片が降つた。

「まあ！ 小太郎さん。」振り向いた新子の顔が、案外笑顔であつたので、小太郎も笑つた。

「さよなら。」でも、小太郎はまだ少し、テレていると見え、ふぎけたおじぎを一つして、すぐ部屋を駆け出して行った。

新子は、レター・ペイパーを二重に折った書付を開けてみた。

今日のことごかんべんありたし。なお、お願いしたきことあり、今すぐサナトリウムの前にて、お待ち下されたし。

と、書いてあった。

このわずかな文字は、彼女を生々とさせた。もうすべてのいきさつを知っている準之助氏が、自分を引き止めてくれるのだろう。もし、そうなれば、自分も難きを忍んで、夫人に謝りに行こう。彼女は、準之助氏が自分を部屋へ呼ばないのは、夫人を憚はばかっているためであろうと思った。その方が、自分も話しやすい。

彼女は、コンパクトを出して、涙のあとをザツとかくしてから、部屋を出ると、別荘の裏口から森を抜け、草の小路を真直ぐに、外人の経営している療養所サナトリウムの赤い建物の方へ歩いた。

アカシヤの並木がつづき、近く小川のせせらぎが聞えて来る。夏の午後とも思えない静かさである。ここまで、歩いて来ると、新子の気持もずうっと、落着いて来た。

その辺あたりを行きつもどりつ歩きながら、そのあたりの風光から、かの女は非常に佳い音楽や、よい絵画や、よい物語を感じていた。美沢さんなどは、このあたりを、どんなに欣ぶだろうかと考えたくらい、すっかり平靜な彼女になっていた。

三

彼女が、アカシヤの幹にもたれて、今来た道をふり返ったとき、ゴルフ・パンツにハンチ鳥打の紳士が歩いて来るのを見た。それが、準之助氏の若々しい姿だと気づいたとき、新子の頬に自然な微笑が溢れた。

「お待たせしましたね。」と、準之助氏は近寄つて来て、彼女とさし向いにちよつと立ち止まると、

「あちらへ歩きましょう。」と、新子を誘った。新子も、うなずいてアカシヤの並木道を、やまのて山手の方へ並んで歩き出した。

準之助氏は、しばらくの間無言だった。

右側の林の中を、見えがくれに小川が流れている。時折、鶯うぐいすが鳴き、行く手の道を、せきれいが、ヒヨイヒヨイト、つぶてのように横切つて飛んだ。

N博士の別荘から、左に折れると、落葉松からまつの林の間に、外人の別荘地が少し続き、やや爪先上りになった道を、峠の方へただわけもなく歩きながら、準之助氏はまだ黙っていた。黙っている相手をどう扱つていいか、新子はやや困惑しながら、しかし自分の方から話しかける場合でないので、やつぱり黙つて歩いた。

峠道にかかると、楓かえでや樅もみやぶなの樹などが、空もかくれるほど枝を交していて、一そう空気がひんやりとして陽の色も暗くなった。

ポタリと頬に露が、

「雨じゃないでしょうか。」新子は立ち止った。

「いや、樹の雫しずくですよ。お疲れになりましたか。」と、準之助氏は立ち止つて、おだやかに云つた。

「いいえ。」と、新子は首を振つた。

静かな空気の中で、パツとマッチの火が白く光つた。準之助氏は、うまそうに煙草を吸

いながら、

「いかがです、ずーっと、このまま子供達の面倒を見て下さいませんか。」と、云った。

「はア。」

新子は、準之助氏の長い無言の散歩が、何を意味していたかが、そのときハッキリと分った。

主人として、新子の釈明も求めず、また良人おっととして妻のために弁明もすることなく——
そういうことは、新子に不愉快な感情を再現させることだと知って、ただ新子の気持をいたわり、落ちつかせ、平静をとりもどすまで、ブラブラと散歩をして、折を見て結論だけを云った準之助氏の言葉を、新子はうれしく思った。

「妻は、もう何でもありませんよ。貴女あなたも、さっきのこと、もうお忘れになって下さいませんか。」

「はア。奥さまにお詫びに行こうと思っておりますの。」

「そうですか、それはどうもありがとう。それでホッとしましたよ。」急に、準之助氏は、明るく微笑した。

四

「ほんとうに居て下さるでしょうね。大丈夫でしょうね。」準之助氏は、もう一度くり返した。

「私の方でおねがい致しますことですわ。」新子は、こんなに甘えさせられては、いけないと思いつつも、嬉しくなった。

「貴女が、いらつしやらなくなると、小太郎も祥子さちこも、ガツカリしますよ。僕もガツカリします。どうぞ、これからも、つまらないことは、気にかけて、のびのびと貴女らしく、子供の面倒を見てやって下さい。どうぞ、これは改めて僕のお願いです。」若者のように、情熱のこもった言葉だった。

「お話は、これですみました、ついでに、この次の丘の上まで行きましょう。軽井沢が一目に見えますよ。おつかれでなかつたら、ご案内しましょう。」にわかには、少し硬くなつた声——しかしまことに、何気なく新子を誘った。

準之助氏は、新子が、病的にわがままな夫人と、いつかきつと衝突することを心配していた。しかし、聡明な新子のことだから、うまくバツを合わせてくれるだろうと思つてい

たのが、思ったよりずっと早く、事件を起してしまった。小太郎から、事件のあらましを聞いたとき、これはいけないと思ひ、新子がこのまま去ってしまうことを考えると、身のどつかを扶えぐり取られるような気がした。それほど、新子はもう、彼の心の中に深くはいつていた。

だから、新子と会つて、新子に止とどまつてくれるように頼むまでは、何かが咽喉下に突っかけて来ているような感じだつたが、こんなに簡単に話が付いてみると、すべてがそのまま楽しい散歩に變つていた。

妻が、やかましいけんじよ権女であればあるほど、その眼を忍んで、含みのある青い色のうすものに、絹麻の名古屋帯を結んだスラリと伸びた、しかし、どことなく頼りなげな新子と、二尺と離れず歩いてることが……準之助氏にとつて、何か恐ろしい何かすばらしい冒険のような気がして悲調を帯びた彼の恋心を深めるのであつた。

二人はあまり、お互同士を意識していたので、やがて間もなく雨となる前ぶれのように、霧が一さんに、峠の樹々の間を薄白く、駈け降りているのに、気がつかなくつた。

準之助氏は丘に上つたら、新子と一しよに見下す軽井沢が、どんなに美しいだろうかと考えていた。

新子は、準之助氏の何かしきみした、いつもふつくりと、自分の為に、冷たい風を遮ってくれるような態度を、身に浸みてありがたく思った。が、しかし、それと同時に、なんとなく息づまるような、勿体ないが迷惑だという気持ちがしなくてもなかった。それは、こうした場合における年齢の相違から来る悲しい間隙とでもいわれようか。

五

そこらあたりからは、いよいよ深く樹が茂り合っていて、太い幹に、山葡萄やあけびの蔓が、様々な怪奇な姿態でからみつき、路傍の熊笹や雑草も延びほうだいに延びている。と、ザツザツと異様な音がしたので、新子がドキツとして、思わず準之助氏の方へ肩を寄せると、径のすぐ傍から、一羽の雉子が飛び出した。雉子の方でも、驚いたらしく、バタバタとたちまち、繁みの奥へ低く飛んでかくれた。

「まあ！ 雉子なんでしょうか。」新子の声が、思わず明るくはずんで、巧まぬ媚を含んでいた。

「雉子ですよ。この辺には、雉子や山鳥が時々いますよ。僕達の散歩を歓迎してくれたの

でしょう。心憎き雉子ですよ。」

「いっそ、飛び出すなら、傘を持って来てくれると、よかったのに。もう、引き返したら、よろしいのじゃないでしょうか。何だか、夕立になりそうでございますわ。」新子も、少しふざけながらいった。

「はははは。でも雉子の貸してくれる傘なら、やまぶき山麓の葉かなんかで、軽井沢の夕立の役には立ちませんよ。夕立になるのかな。」と、不安そうに、樹の間をすかして空を眺めた準之助氏の顔にサツと一陣の風が吹き降して来た。樹々の肩が、その風で一斉にかしいだを見ると、大粒の雨が、樹々の葉を、まばらに叩いて渡った。

「これは、いかん！」

準之助氏は、いささかあわて出して、

「さア降りましょう。ここで降られてはこまる。なるべく濡れないように、樹の下を歩くようになさい！」と、新子を促した。

が、一町もそうして、坂道を下ったとき、吹き下しの疾風に、足許もおぼつかなく、二人は一時立ち止った。新子の着物の裾も袂も、千切れそうに、前へハタハタと吹きなびいた。髪が頬に、ベツタリとひきついた。その凄い風と同時に、一層陰惨な感じのする暗さ

が、周囲の繁みから湧き始めた。

「この峠の下に、外人の古い別荘が、二、三軒あつたでしょう。あすこまで、とにかく降りましょう。そして雨宿りをさせてもらいましょう。サア。」と、促されて、また半町くらい、足早にかけ下つた。

一の疾風に、つづいて第二第三の疾風が、空に鳴り林に響いて、樹々の葉が、引く潮に誘われる浜砂のように、サーツと鳴つて、一瞬底気味わるい静寂が、天地を領した。と、たちまち眼の前の、ぼーつとした仄ほのぐら暗い空を切り裂いて、青光りのする稲妻が、二三条ほどのジグザグを、たて豎にえがいた。殷々いんいんたる——と云うのは都会の雷鳴で——まるで、身体の中で、ひびき渡るような金属的な乾いた雷鳴が、ビリビリと、四辺あたりの空気を震動させた。

六

新子は、天変地異に対する恐怖の念で、半ば意識を失つたような気持で、準之助氏の方へ駆け寄つた。

「大丈夫！ だいじようぶ！」と、云う準之助氏の声も、次に、豆のはぜるような音を立てて襲つて来た雷^{ひょうう}雨の音に、かき消された。

二人は、一心に、径^{こみち}を下つた。ゴルフ扮装^{いでたち}の準之助氏は、何のことはなかつたが、新子のフェルトの草履は、ビショぬれになり、白足袋^{たび}に雨がしみ入る気味のわるさ。もう、落葉松^{からまつ}の林^{はやしみち}径^{みち}に出ているのであつたけれど、雨はますます猛威をたくましくして、落葉松の梢は風に吹き折られそうに、アカシヤは気味わるいほど、葉裏をひるがえして、風に揺られ雨に痛振^{いたぶ}られていた。まして、雑草や灌木は、立ち止るひまもないほど、雨と風とに叩き潰されていた。

「こちら！ こちらですよ。」と、いつか鳥^{ハシチンク}打^{うち}を失くしてしまつていた準之助氏は、もう両袖をじつとりと濡らしている新子の手を取つて、その落葉松の林の中に、見捨てられたように、建つている別荘の軒先^{のきりぎり}にかけ込んだ。

樹の細い梢など、あわれにも吹き千切られて、投槍のように飛び、樹の葉はクルクルと、不吉な紋様^{もんじやう}をえがきながら、舞い上り舞い落ちた。

雨の水沫^{しぶき}は、別荘の軒下にまで、容赦なく吹き込んで、雷はしきりなく鳴り渡つて、絶え間なくあたりの空気を震わせ、嵐のシンフォニーは、今や最高潮に達していた。

別荘の扉を、ほとほと叩いていた準之助氏は、にわかに元気な声をあげた。

「貸家だ、貸家だ。ここにハウス・ツー・レットとかいた紙が、剥がれている。これはちよどいい。ちよつと失敬しましょう。ここじや水沫がたいへんだ。待っていらつしやい！　ここは開かないから、僕、裏へ廻つて入口を見つけて来ますから。」と、雨の中へ飛び出して行つた。

新子は、夕立に悩まされながら、しかしそのために、夫人に対する感情の名残が、吹き飛ばされ、洗い去られたような気がした。そして、今までかなり遠い距離に立っていた準之助氏と、お友達か兄妹かのように、手を取り合つて、自然の暴威と戦っていることが、何か物めずらしく、物新しく、びんのおくれ毛が、頬にくつつくのを気味わるく思いながらも、心は興奮し、はずんでいた。

間もなく、傍の窓硝子を、風雨に抗しながら、わずかに開けた準之助氏が、

「玄関は、内から鍵がかかつて、とても開きそうにもありません。貴女は裏口から廻つていらつしやい！」と、叫んだ。

新子も、軒下に立つてゐることは、とても辛かったので、いそいで軒つたいに、雨を避けながら裏口の方へ廻つた。

と、勝手口は閉がつていたが、そこから一間ばかり向うの半間ほどの入口の扉が開いていた。そこからはいつてみると、バスと洗面所との間の廊下で、空家らしい気持の悪い温気をたたえて、壁や天井が薄白く光つてゐる。外人が建て、外人が住んでいたらしく、畳の敷けそうな部屋は一つもなかった。

食堂らしい部屋を通りぬけて行つて、準之助氏の居ると思われる部屋をソツとのぞくと、そこは、サロンらしく壁に薪をくべるらしい大きい炬が切つてあり、中は山小屋らしく作られており、腰の低い窓が、いくつか開いてゐる。

その一つの窓を開けて外を見ながら立つてゐる準之助氏は、

「やあ！ よく降る！」と、盛んな自然の大暴れに、嗟嘆の声をあげてゐた。

家の中は、不気味に薄ぐらかつた。椅子も卓子もなく、ただ粗末な食堂用らしい曲木細工の椅子が、ただ一つ塵にまみれて、棄て置かれてあつた。

この薄闇は、普通の夜の暗さなどよりも、ずっと気持がわるかつた。そここの隅々か

ら、奇怪な幻像でもがうごき出しそんな気味わるさを持つていた。

ある恐怖と圧迫を感じて、新子は扉口ドアではいりわずらっていた。

その上、ときどき窓からサツと流れ入る電光の紫線は、いよいよ部屋を物すごく見せた。新子が、そこに立ちわずらっているとき、電光の閃ひらめきとほとんど同時に、硝子板ガラスを千枚も重ねて、大きい鉄槌で叩き潰したような音がした。たしかに、近くへ落雷したのだと思うと、新子は心が一層寒くなった。

準之助氏も、扉口ドアに人形のように、息を吞んで、立ちすくんでいる新子を見ると、彼もまたある胸苦しさを感じているらしく、すぐには呼び入れようともしなかった。

「こわいわ！」だまつていると、息づまりそうなので、新子が勇気を出して、口を開いた。「僕もいささかこわいですよ。中へおはいりなさい。一緒に居ましょう。」と、準之助氏は、窓ぎわから離れた。

二人は、両方から部屋の中央に歩み寄った。

一足先へ、この空家にはいった準之助氏の心には、新子に対するなまめいたある感じを抑えることが出来なかった。

嵐に包まれた家の中に、二人ぎりである。お互に、身近く立っていると、準之助氏は、

さつき坂を下るとき、手を取ってやった新子の雨にぬれた生暖かい肌の感触が、ゾツとするほど、心の中に生き返って来た。

家庭の嵐

一

夕立は、その始まり方の凄^{すさま}じさ、速^{すみ}かさと同じように、幕切れもアツケなく早かつた。雨は水沫^{しぶき}だけのよう^{こまか}に、空一面に、細く粉のように拡^{ひろ}がった。風も、それに準じて、勢いを収めて、見る内に、山の頂きには青空が顔を出した。

雷の八つ当りは、もう大丈夫だろうかと検^ためすように、森の中でかっこうがホルンを吹奏した。

天と地との間には、もう鬱積がなくなつたように、快い風と光とが躍りはじめた。見事なトサカを持ったレグホン種の真白い雄^{おんどり}鶏が、納屋から飛び出して、ときを作つ

た。

白い綿雲が邪魔扱いにされて、低い空をグングン流れて行く、一番いたぶられた月見草や芝草が、綺麗に露で化粧をして、あまやかな土から、徐々に頭をもたげかけている。

別荘の窓が、一つ一つ開けられる。

綾子夫人の部屋からは、スキーパの魅惑的な恋の歌が、流れ出す。階下の子供部屋から、

小太郎が、

雨、雨、降れ！ 降れ！

母さんが

蛇の目でお迎え嬉しいな。

ピチ、ピチ、ジャブ、ジャブ、ラン、ラン、ラン。

と、歌いながら飛び出して来た。

準之助氏は、水を吸って重くなった靴を、三和土たたきに脱いだ。靴下から湯気たぎが出ている。

「やア。パパのびしょぬれ！ 野良犬みたいに、なっちまった！」

小太郎の歓声に、準之助氏は、人知れず頬を染めて苦笑しながら十分ばかり先へ帰した新子が、目立たないで帰れたか、どうかを考えながら、二階へ上って行った。

レコードが、ピタリと止まると、笑った夫人の顔が、廊下へ現れた。

「まあ！ たいへんね。どこで、雨にお逢いなすったの。」

「クラブ・ハウスから、一番遠いコースにいたんだよ。早く引き上げればいいやつを……と、何気なく弁解した。

「あら！ じゃ、やつぱりゴルフに行つてらしたの。杉山、どうしたんでしよう。折角、車を持つてお迎いにやつたのに。」

準之助氏は、ギョツとして思わず、妙な顔をした。

「杉山は、キャデイに訊いても、ハウスの人に訊いても、今日はお見えにならないと云つたつて、帰つて参りましたのよ。」

（失敗しまった！ 妻の不断に似合わず、いやに氣のついたことをしたもんだ。これじゃ、ゴルフに行つたと云うんじやなかつた！）と、後悔したが駟しも及ばず。

「杉山の探しようが、下手なんだ！」と、強引に嘘を云つて、部屋へはいろいろとすると、夫人は、

「早く洋服をお脱ぎになつて！」と、追いかけて来ながら、「ハンチングも、大変でしようね。どこへお脱ぎになつた！」と、訊いた。

「あの強い風にたまるものか。持つて行かれてしまったよ。」

「夕立の中を、よつぽど歩いていらつしたのね。妙な方。」

さりげない夫人の言葉にも、浄玻璃じようはりの鏡をさしむけられたようにすべてを知つていられるのではないかと不安だつた……。

最後の電鳴のはげしさに、思わずすがりついた新子を掻き抱くと、どちらからともなく、唇を合わせてしまった楽しい秘密も……。

準之助氏は、身体全体が、カツと熱くなつて、いそいで己れの部屋へはいると、扉ドアを立ててしまった。

新子が濡れた足袋たびを脱ぐと、十の指は、爪まで色を失って、冷たく、凍えていた。手の指も、ハツと呼吸いきを吹きかけないと、自由にならないほど、冷え切っていた。高原の夕立は、都会のそれとは違つて猛烈で、雨が冷たかつた。準之助氏より、十分ほど早く歸つて来た新子は、和服でもありかなりひどく濡れてしまつていた。

女中達に騒がれるのを厭いとつて、コソコソと自分の部屋へ上つて来たのだけれど、いくら注意して歩いても廊下しずくに、雫の落ちるほどあさましく濡れた我身であつた。

手早く、銘仙の着物に着換え、帯もシャンと締直し、髪も手がるつかに束ねなおし、気を落ちつけるように机の前に、坐つた。

途端に、聞き馴れたスキーパの独唱が、夫人の部屋から聞えて来た。新子の好きな、そして美沢も愛好している「グラナダ」という、古いレコードである。

何という不可思議な心理だろう。新子は、三十分前の自分の気持が、自分でも分らなかつた。美沢とは、二年近い交際で、最初から好きで、だんだん愛するようになり、二人ぎりで居る機会も多かつたにも拘わらず、美沢が自分の手を握つたことだつて、二、三度しかないのに、……準之助氏は、さのみに愛してもいず、一言だつて愛を語つたわけでもないのに、どうして、あんなに脆もろくも唇を許してしまつたのだろうか。

新子は、自分の気持が、不可思議でならなかった。やはり、あんな大金をもらつたという弱味が、いつかしら自分の心を、あの人の方に傾けていたのかしら。新子は、そう思うと、急に悲しくなつた。

三

言葉に出して愛をささやかれ、言葉に出して愛を求められる場合は、女性の心は、ピンと張り切つていて、理性が働き感情が冴えて、容易に肯かないものであるが、すべてが行動で、その時と場合との機はずみに乗つて来られたのでは、ちやうど先刻の夕立のように、身を避ける間もなく、濡れてしまうのではないかしら。

準之助氏も嫌いな人ではない。しかし、ああも簡単にはと思つと、新子は、自分のしたことが自分で信ぜられない気持だつた。

そうした、いろいろな後のちの思いに、打ちひしがれていた新子は、準之助氏が帰つて来たこともレコードが一時止まつたことも、気が付かなかつた。

しばらくしてスキーパの「グラナダ」が、その盤の裏にある「プリンセス」に、変つ

ているのに、気がついたただけであった。

あの曲が、了つたら夫人のところへ行こう。あまり、時が経ち過ぎて、不自然にならない内に、謝りに行こう。しかし、主人とあんな風なことをした後で、謝りに行ったのではないかと、新子の心は暗かった。

ほんとうは、これを機会に、この家を出た方がいいのではないかしら、それが、準之助氏のためにも、自分のためにも一番いいのではないかしら、自分と準之助氏との関係が、これ以上進まないうちに。

自分は、あの方からお金を借りている。しかし、あの方に唇を奪われた。どんなに低く評価しても、処女の唇、その価五百金、千金に価しないだろうか。

スキーパの音が、高く高くなる。新子の心は、悔いと悲しさに、揺れ動かされていた。雨によごれた顔を、クリームでふき取り、鏡を出して、化粧を直そうと思つたが、鏡を見るのが、とても辛かった。

主人とのがあつたために、夫人との間にわだかまりが出来たような気がして、夫人の部屋へ行くことが、とてもおつくうだった。

しかし、もうやがて、夕食の時間である。謝りに行くのなら、今の内、でなかつたら、

今日中には、機会を逸してしまう。

かの女は、やつと勇気を出し、自分で明るい気持を作りながら、夫人の部屋の扉をノックした。

「お入りなさい！」

新子は、扉をそつと開けて、静かに足を踏み入れたが、容易に夫人の顔を振り仰ぐことが出来なかつた。

「あら！ 南條さんだったの！」珍しいことがあるもんだと、いわぬばかりの口調であつた。

四

「先ほどのお詫びに参りましたの。先刻は……」と、いい難きを忍んで、立つたまま丁寧に小腰をかがめると、夫人はひどく上機嫌で、

「まあ。こちらへ、おかけなさいましな。」と、招いた。

夫人と相對して、長くはいづらいので、早くこつちの意を伝え、早くこの部屋から逃げ

たいので、

「はア。」と、ありがたく受けたものの、椅子にはかけず、その脇に立ったままで、「私、奥さまさえ、許して下さるのでしたら、やっぱりお子様達のお世話をさせて頂きたいと存じますのですが……」と、細々した声で、詫び入ると夫人はさも面白そうに、陽気な表情で、ながめながら、

「南條さん、貴女、主人とこのことで、お話しになりましたの？」と、明るく訊ねた。

「はア。」と、思わず返事したが、すぐハツとなつていると、夫人はかまわず続けた。

「主人と、いつどこで、お話しになりましたの？」

新子は、ギョツとして、眼顔で夫人の心中を探るように、顔を上げた。

「南條さん、貴女、さっきの夕立のとき、どこに行つていらつしやいましたの。」友達のよう、隔てのない物云いで、夫人の眼はいたずらっぽく、輝いていた。

「旧道の方へ出かけておりました。」新子は、よんどころなくそう答えた。

「そうお。じゃ、その道で、主人とお会いになつてお話しになりましたの。」

「はア。」退引のつびきならず、新子は真実の先端を、チョツピリ夫人に打ち明けた。

「そうお。」夫人の笑顔が、急に権柄けんぺいずくな常の顔に変わった。

つと立ち上つてビクトロラの傍に行つて、またスキーパの曲に、針をあてがうと、ビクトロラに寄りかかるような姿勢をしながら、嘲笑を浮べて新子に話しかけた。

「貴女の散歩は、時を選ばないのね。おかげで、主人は、ハンチングは風に取りられたというし、そりやビシヨぬれで、ひどい目に会つて、帰つて参りましたよ。」

新子は、身内から、サツと血が引いて行くような感じだった。

「南條さん。さつきは、貴女からひまを取るといふお話でしたが、今度は私から、今すぐひまを取つて頂くことに致しますわ。どうぞ、出来るだけ早く、この家からお引き取り下さい！」

(出て行け！) 西洋の映画にあるとおり、扉^{ドア}を指ささんばかりであった。

五

祥子^{さちこ}の誕生した頃には、すでに前川夫妻の間には、大きな愛情の間隙が、出来ていた。

一つの屋根の下に住み、外面はあくまで夫妻であったが、しかし良人^{おとと}は、心の中で妻に、さじを投げていた。が、生得上品な性質である上に、外国に長くいたために、女権主義者^{フェミニニスト}

であり、平和主義者であり、煩わしいことが、嫌いであるので年々悪妻の強さを発揮している綾子夫人を、当らずさわらず、取り扱うことに馴れてしまったのである。

その上、愛児の生長が彼を家庭につなぎ止めているのと、酒をたしなまず、花柳界の趣味を解しないため、路傍の花に心を奪われることなく、上部うわべだけは善良な良人であった。

だから、綾子夫人は、良人を信じ切り、良人で得られない刺戟は他の男性から求めていた。そこへ突然、新子が出現したのである。今までは（悪妻である。イヤな女性である。しかし、一旦結婚した以上、あきらめる外はない。こういう妻に対して、辛抱するのも、また一つの人生修行である）と、考えていた彼の眼に、たちまち華やかな一つの幻覚が浮び、遠く桃源の里を望み見たような心のと きめきを感じはじめ、生活が急に生々いきいきとなって来たのである。

が、不意に時節到来、今日お互に緊張し切迫した気持で、散歩しているとき、雷雨に逢い、平調を失った——あるいは平調を失う口実を得た彼は、思わず新子の顔を腕の中に抱いてしまったのである。

にわかに、新子を愛人と云つてもよいほど、身近に獲えてしまった彼は、自ら非常な覚悟をしなければならなかった。

(このことで、新子を絶対に不幸にしてはいけない。どんな犠牲を払っても、あの人を幸福に!)と、彼はそう思った。彼が以前読んだ英国の小説に(恋愛はしてもいい。しかし、そのために相手を不幸にするな。それが、恋愛をする場合の男子の心得である)と説いたのがあった。

妻には、絶対に悟られないように、そうして新子さんを出来るだけ、幸福にするように、こうなった以上、それが自分の義務だと準之助氏は考えていた。

浴室から上つて、セルを出させて着、食堂へ来てみると、幼い兄妹は、食器棚の後に付うしろいている大きな鏡に向つて、何か面白そうに騒いでいる。

その子供達の姿を見ながら、自分とあなつた以上、新子が自分の家族達と同じ屋根の下に住むことは、あの人にとつて不愉快ではないかしら、よき愛人を獲たことは、子供達によき家庭教師を失うことになるのではないかしら、……自分は結局子供達のもの奪つたことになるかしらなどと、思ひはしきりに新子の上に置かれてあつた。

と、扉が開いて、夫人がはいつて来て、席に着いた。見ると、彼女は外出着を着て、美しく化粧している。

六

良人は、妻に対して傷もつ脛すねの、いつもよりも優しく、

「どこかへ出かけるの……」と訊いた。

「ええ。ルーシイさんのところに、サツパー・ダンスがありますの。行かないかって、添田さんに誘われましたの、八時半頃に迎いに行くつて、電話がありましたから、支度をしてしまつたんですの、お食事少ししか頂かないわ。」夫人は、普段より、ズーツとおとなしい。準之助氏は、ホツと安心して、

「沢山集まるのかい。」

「ええ、フランス大使のお嬢さまや、松平侯爵夫人なんかいらつしやるらしいわ。……貴あ方は、この頃少しもお踊りにならないわねえ。ゴルフも一時ほど熱心じゃないし、今に肥つておしまいになるわ。」

「肥つたら、わるいだろうか。」

「肥つた男なんて意味ないわ。私、嫌いよ。ダンスにも、お出かけなさいましよ。たまには。」

と、ひどく愛想がよかったが、でも今宵誘おうとするのでもなかった。父母の会話を外よそに兄弟達は、喰べるのに忙しい。殊に小太郎の健啖ぶりは、痛快と云うよりも、親の眼からは、あの小さい身体のどこへはいつてしまうのかと、ハラハラするほどで、スープと肉と、その後のトルヴィルというケチャップで、色をつけた鳥めしのような前川家自慢の料理を、大きい皿でおかわりをして喰べている。

「よく喰べられるね。お腹大丈夫かい。」と云う良人の言葉にも、夫人は興味がなさそうに、子供達の方は見やりもせず、レヴァ・トーストばかりを、少しずつ、ちぎってたべている。

と、前庭に、自動車のはいって来る音がした。

「添田さんが、見えたかね。」準之助氏が問うと、夫人は笑いながら、首を振って、

「違うでしょう。まだ七時ですもの。」

「じゃ、誰だろう。お客さまか。」

「いいえ、私の用事。」と、答えたままだまってしまった。

自動車は、五分間ばかり止っていたと思うと、すぐエンジンの音を立てて、軋きしみ出る気配がして、やがて時々鳴らすサイレンが、だんだん遠くなつて行った。

軽井沢へ来てから、昼間あまり、かけずり廻るので、夕ご飯がすむ頃には、もう眠くなつてしまう小太郎だった。

眼の上を、ちよつと不機嫌そうにしかめながら、

「眠いよ！ ママ、もうお湯にはいらなくてもいいでしょう。」

「あんまり食べるからですよ。ご飯中、ねむくなるなんて、そんなお行儀のわるいことや駄目ですよ。顔だけでも、洗つてからお休みなさい。」という母に祥子が、

「ねえ、ママ、様子、明日から南條先生に教えて頂いてもいいでしょう。」と訊いた。

「そんなことは明日になってからで、いいじゃありませんか。」ときめつけた。

七

母の不機嫌な顔を見て、祥子は危くベソをかきそうになりながら、

「だつて、お熱なんか、もう先せんからないわよ。」と、云つたが、夫人はもう返事をしなかつた。ベルを鳴らして、女中を呼ぶと、子供達を連れ去るように命じた。

そして、手ずから良人に、コーヒを注いで、手渡しながら、

「私が、貴君あなたよりも善良な人間であることを、今日悟りましたわ。」と、子供が居なくなると、果然ねちねちした調子に変わった。まさに遠雷の音をきくような気味わるさであった。準之助氏は、少しあわてて夫人の顔を見直した。

「貴君は、ウソつきですわねえ。少くとも、あの南條という家庭教師よりも……」

たちまち、遠雷は頭上に来た。しかも、夫人は意地わるく、呆気に取りられている良人の顔の前で、微笑した。

準之助氏は、もう万事発覚したのかと蒼くなっていると、夫人は静かに、

「私やはり、家庭教師を替えることに致しましたわ。」

「どうして？」準之助氏は、思わずせきこんだ。

「だって、あんな散歩好きの人、ほほほ……困るわ。夕立の中で、散歩するような人、ほほほ困りますわ。貴君あなたも、ご一しよであったそうですね。そりや、偶然ご一しよになったのでしようけれど、それを貴君が私におかくしになったことは、困りますわね。もちろんあの女がそうさせるように、仕向けたんでしようけれど……。ほほほほ、私がやきもちなんか焼いているとお考えになると、それは貴君の誤解ですわよ。私、貴君がまさかあんな女を、何とも考えていらっしやらないこと、よく分っていますのよ。私、あんな人に対

して、やきもちを焼くほど、自分をみじめたらしく考えたくないんです。その点では、充分貴君を信じていますわ。多分、私に対するお話をあの子となすったんでしょね。それは、よく分っていますの。でも、私、貴君があの子と話をなすったことをおかくしになったということが、気に入らないんですの。……」

（悪魔が吹かせる風は、^{プライド}誇という声がすると云うが、この女も悪魔だ！）準之助氏は、自分のした悪事を悔いるよりは、妻の人を人とも思わざる思い上った考え方を憎悪する心が、燃え上った。

夫人は、平然として云いつづけた。

「夏休み中、家庭教師がなくなっても、差支えはないと思いますし、あんな散歩好きの人だと、どういうところを、ウロウロするか分りませんし、狭い軽井沢ですもの、貴君とご一しよのところなんか人に見られたら、私の顔にかかわることですものね。子供なんか誰にだつて、馴れますわ。何もあの人に限るわけのものではありませんわ。」

夫人の性格の中には、やさしさとか素直さとかは、薬にしたくもなかった。すべてが、皮肉で、意地わるで、厭がらせで、しかも鋼鉄の針のように、鋭かった。

だから、素直に、正面からやきもちを焼くなどということは、彼女の^{プライド}誇が絶対にさせな

いことである。

(どう? こう、私が云えば貴君は、何も文句はないでしょう)と、そんな眼顔で、準之助氏をながめやりながら、夫人はもうこのことは、片づいたと云わんばかりに、

「何時かしら、添田さんは、随分遅いわねえ。」と、空うそぶいている。

準之助氏は、心の中の烈しい動揺を、じつと抑えて、

「南條さんは、帰るとすれば、いつ帰るのかね。」と訊ねてみた。

「あの人も、憤り虫らしいから、私に暇を出された以上、一晚だつてこの家にいないでしよう。もう帰ったのかもしいわ、貴君にご挨拶もしないで。そうそう、さっきの自動車、あれで帰ったのかもしれないわ。」

溫柔な良人の顔を、馬鹿にしたような笑顔で見やった。

先刻、自動車のエンジンや警笛が聞えた時、不思議がつて訊くと、白ばくれてだまつていながら、今になって、と思うと、準之助氏は思わず、湧き上る怒をじつところらえたが、顔の表情は、あやしく歪んだ。

そのゆがみを、夫人はすかさず見て、立ち上つて、呼鈴よびりんを押すと、

「ご心配なら、女中を呼びますから、お訊きになるといいわ。」と、いった。

女中を呼んできいてみたとして、新子がいるはずはない。すべてが、夫人の思惑どおりに行われたに違いない、新子にすぐ支度をするように命ずると、きっと女中を通じてこんな風にいったに違いなかった。

（お帰りになるんですしたら、子供達が食事をしている内に、帰って頂きたいんですの。子供達が貴女のお帰りになるのを知って、うるさくつきまとったりすると、ご迷惑でしょうから。主人にも私からよく申ししておきますから、直接ご挨拶なさらなくとも、いいと思いますの。でも、強いてお会いになりたいんですしたら、お止めは致しません）

とにかく、一刻もいたたまれないような、言葉で新子を追い出したに違いなかった。すぐ、夫人の押した呼鈴に応じて、女中がはいって来た。

夫人は、だまつたまま、良人に、

（お訊きになっては！）という、顔をした。準之助氏は、さすがに夫人の前で、夫人に踊らされて、そんなムダな問いを発したくなかった。

「別に用はなかった。テーブルの上を片づけてくれ。」といった。

常に、つねにそうであるように、夫人とは是非を論ずることは、出来なかつた。論ずれば、そこに大破裂があるだけだつた。

準之助は、今も夫人の巧妙な、意地のわるい仕打ちの前に、うんともすーともいえず、ズシーンと重く暗く、心が沈んでしまい、ただ一刻も早く夫人が外出してくれればと祈るばかりであつた。

だから、彼は夫人が、誘いに來た添田夫人と一しよに出かけるが早いか、すぐ新子の部屋に駆けつけてみた。

机と座蒲団のほか、その人のらしい荷物は影もなく、室内塵一つ止めない寂しき、整然さ——準之助氏は、急転直下の勢いで、自分の心が、地の底へめり込んで行くのを感じた。「おい！ おい！ ちよつと。」彼は、階段の所へ出て來ると、そこから近い台所の召使を呼んだ。

太つた身体をよちよちさせて、駆け上つて來た旧い顔の女中に、もどかしげに、「南條先生は、何時に發つた！」とかぶりつくよう。

「先生は、七時半の汽車でお帰りになりましたんですが。ああ、まだ申し上げも致しませ

んでしたが、先生からお心づけを頂戴致しましたんで……」

「杉山いるかい。」

「ただ今奥さまのお伴で……」

「こまったな。旧道の何とか云うタクシ、あすこへ電話をかけて一台急にと云ってくれ。」
「はい。」

もう、八時近い。しかし、先刻食事の時に聞いた自動車で行ったのなら、新子も汽車に乗り遅れて、駅でマゴマゴしているかもしれない、それがただ一つの心頼みで……。

自分に、一言の伝言もなく去らなければならなかったとすれば、妻の態度がどんなに辛^{んらっ}辣であつたかが想像される。恐らく、新子は自分とも再び会わないつもりで、この家を去つたのかも知れない。準之助は、失踪した愛人を、追いかける青年のように、焦慮し緊張していた。

駅までの道を、思いきりスピードを出させたので、雨でこわれた路面のため、準之助の身体はいくども弾んだ。

だが、駅に着いてみると、上りも下りもしばらく間のあるという待合室や、プラットホームは、寂として人影もなく、準之助は今さらのように、心を抉^{えぐ}るような悲しみに囚わ

れてしまった。

新子は、自分にとって最初の恋人である。

むろん、先刻の行為は、穩当ではなかった。

しかし、それが妻に分っているわけではない。妻に分っていることは、雷雨の中で、二人がどこかで会ったかもしれないということである。たったそれだけのことで、罪人をでも叩き出すように、新子を追い出すということが許せるだろうか。

準之助は、他人を一步も仮借しようとしないう、夫人の増上慢に、……その無残な仕打に、良人として、いな一人の人間として、呪咀じゆその叫びを上げずにはいられなかった。

（俺は、キレイ事が好きだった。平安を愛した。だから、俺は、お前に辛抱したんだ！

しかしこうまで、俺を侮辱するなら、俺も人間としての自由と、男性としてのわがままを發揮してやる。こんなことで、新子さんを俺から奪ったつもりでいるのか。俺は、今までの十倍もの強さで、新子さんを追ってやるぞ！）

そんな憤りいきじおや決心が、彼の心を縦横に飛び違った。

荒む心境

一

新子が、昨夜四谷の家に帰ったのは、十二時過ぎであったが、昼の酷暑に乾き切っている都会の空気は、夜になってもまだむしむしと暑く、殊に建てこんでいるこの裏街では、まだ縁台に出ている人もあり、戸を閉めない氷店もあるくらいで、新子の家も、今しがた美和子が帰って来たばかりらしく、家族は起きていた。

時ならぬ時の新子の不意の帰宅に、みんな不吉な想像しか湧かせなかつたが、誰も新子に遠慮してその理由を深くは訊かなかつた。

新子も、それを幸いに、妹と一しよに二階へ上ると、いち早く寝衣ねまきに着かえて、床の上

に四肢をのぼした。が、軽井沢の冷々した夜気にひきかえて、夜半過ぎても汗ばむほどの東京の暑さと、昼から引きつづいている胸のもだもだしさのため、容易に寝つかれず、幾度も寝がえりして、二時を聞くまでは、寝わずらっていたが、間もなく文字どおり、前後不覚な深い眠りに落ち、部屋に射し込む暑い午前の日ざしに、眼が覚めるまでは、夢も見ずに眠ってしまった。

眼覚めてしばらくは、頭の中に何もなかった。昨日きのうのことさえ跡形もなかった。ただしみじみと手足をのぼし、眠れた朝の、頭の明らかさで、ひどくわが家が、しんみりと楽しい場所に思われた。

静かに頭をめぐらすと、淡いピンク色のシユミーズ一つで、朱塗りの鏡台を光線の都合を計って、畳の真中に持ち出して、化粧をしている美和子の姿が、ピチピチした新鮮な、一枚の油絵のように眺められた。

パチパチ眩しそうに、愛らしく目ばたきしながら、姉の方をチラと見て、

「お姉さま、死んだ人のように眠ってたわよ。」と云った。

美和子の手元から、甘い香料が強く匂って来た。

「美和ちゃん。急に綺麗になったわねえ。」新子は、驚きをそのまま、言葉に表して云つ

た。

一心に鏡の中を見入りながら、横顔で、満足そうな笑顔を見せて、

「みんながそう云うのよ。だから少し嬉しがつてるの。」と云うのを、

「顔でうぬぼれるのはおよしなさいね。みつともないから……」と、云いながら、それを機会しおのように、身を起した新子はまたびっくりしてしまった。

美和子の鏡台の前には、実にぜいたくな化粧品が美々しく並んでいるのだった。

「あーら、あなた貴女。こんないいものを使っているの。」

新子自身、教養ある女性の趣味として、せめて化粧品だけは、筋の通ったよい匂いのするものを使いたいという欲望をやっと抑えているだけに、妹の使っている七円もするウビガンのケルク・フルールの小さいやさしい瓶に、非難の眸を向けずにはいられなかった。

二

「圭子姉さまが、この間あいだ資生堂で、ドウランを買う時、一しよに買いなすったのよ。」

美和子は、云いわけをしながら、小さい唇に、タンジルウジューの紅をつけている。

「そのほかは、みんなマックス・ファクター専門なの？」

妹を非難する新子の心も、鏡台の前の各々好ましい形をしたマックス・ファクターのクリームやローションや粉こな白粉おしろいの瓶の形の好もしさに緩和された。

新子も、それを見ている内に、一瞬いそいそとした気持になり、そのまま美和子の立つた後に坐つて、コールド・クリームで顔を拭き始めた。

「ねえ、お化粧品だけは、いつでもこんなに使つていたいわ。ねえ。お姉さま。私、指輪だの時計だの帯どめなんか、ちつともほしくないの。」

「貴女、随分お洒落しゃれになつちまつたのね。」

「ええ。」

あまりに、釈然とした返事だったので、思わずおかしくなつて後うしろをふり向くと、ついぞ見馴れない、洋服をすっぽりと頭から被つていた。

ギンガムか、トブラルコか、何かしら木綿のゴワゴワと音のしそうなものだったが、そのくせ着てしまうと、どんな絹物シルクでも、この味は出まいと思われるほど、ピツタリと、はち切れそうな身体の線に合つて、それがむき出しの肩と、胸についているシイクな桃色のレースの飾りに調和し、小さい美和子の身体がとても色っぽく見えるのであった。

「いつこさえたの、お手製じゃないわね。」

「相原さんの作る銀座のクロバーよ。」

「あんなところじゃ、木綿ものだって、シルクと同じくらい、仕立代がかかるんですよ。」

「布地きれじは、全部で三円五十銭しかしないのよ。仕立代は、相原さんの方の、つけにしておいてもらったの。」

「そんなことしたら、悪いじゃないの。仕立代いくらくらいなの。」

「十円くらいでしょう。……ねえ、似合うわね、シルヴィア・シドニイみたいじゃない？」

「……」

「何を、そうお調子に乗って、浮々しているの。貴女少しおかしいわねえ。」

「ふうん。」と、ちよつと恥かしそうな、含み笑いをしながら、

「だつてえ。この頃とても、楽しいんだもの。今日は、そら日曜でしょう。日曜は坂を上ることに決めたのよ。」

「何を云ってるのか、お姉さんにはちつとも分らないわ。」

「お姉さまなんか、軽井沢へ行つて、先生なんかしているからいけないのよ。日曜日には

坂の上にある家を訪ねることになっているのよ。まだ解んないのかなア。」

これは、靴下を穿きながら、うつ向いて、小さくいった言葉であった。が、にわかにかまって、

「お姉さまは、もう軽井沢へいらつしやらないの。」と、訊いた。

三

「もう行かないわ。九月になったら、会社か雑誌社のようなところに、就職を頼んでみるつもりよ。」

「お姉さまが、もうずーと、家にいらつしやるんだったら、私お願い……って、話があるんだけど……今日じゃなくてもいいのよ。」

「貴女さえ、いそいで出かせないんなら、今日だって、いいことよ。何よ。」新子は美和子が恋をしているのだと直感した。

ちよつと会わない間に、まるで新しい生命を吹き込まれたように、美和子は生々としていた。以前から、快活でお転婆ではあるけれど、つい一月前の美和子には無かったような、

抱きしめてやりたいような、女らしい弱々しさが、生氣とともに、媚々びびと彼女の全体から感じられた。

新子は、よく小言をいうものの、心の中では美和子を愛していた。

お転婆で、茶目で、母に世話をやかせるところの多い妹ではあるが、新子は姉よりも、ずーつと愛いとしがっていた。

もしも、恋をしているのなら、早く様子を聞いて、最初の恋を遂げさせてやりたかった。(誰にだって、愛されるに違いなく、どんなに愛されたって、いい娘だもの) そう思つて、新子はやさしい微笑を、美和子に向けた。

美和子は、なぜかあわてて、姉の眼をそらしながら、

「お姉さまは、結婚なさる？」と、口ごもりながら、いきなり訊いた。

「結婚するって、誰と。」

「しようと思えば、誰とだって出来るじゃないの。誰かと結婚しようと思つてらっしゃるかつて、伺つてるのよ。」と、急に意地のわるい物云いをした。

「おや、こわいのね。私、結婚しようなんて思つてる人なんかいないわ。あつたつて、なかなか出来ないもの。どうして、そんなこと訊くの？」

「ほんとうに、本心からそう思ってたらしやるの？」

「気味がわるいわ。もちろん、本心からよ。」

「で、安心したわ。私、お姉さまは、美沢さんと結婚するつもりかと思っていたのよ。で、なんだつたら……」

新子は、いきなり真正面から、不意打に、胸を衝かれたような思いで、美和子を、じつと見据えた。

美和子も、強い眼で、その視線を受けながら、

「私、お姉さまが、軽井沢へいらした後で、美沢さんに会ったの。」と、云いつづけた。新子はそう聞くと、眼の前に立っている妹へも、また美沢に対しても、等分に、心の底から浮ぶ瀬のないような、厭いやな気持ちに暗くなりながら、思わず、せき込んで、

「それでどうしたの……？」と、訊いた。

四

美和子も、ハツとするほど、その瞬間に、姉の顔にはげしい影が通り過ぎ、嫉妬いきどおと憤り

と悲しみの色が満ち溢あふれたので、さすがの妹も、それ以上臆面もなく、物をいい続けることが出来なかつた。

かの女は、洋服ドレスのひだをピタピタたたくと、姉に背を向けて、縁の方に歩いて行き、欄てすり干にもたれて、ぼんやりと晴れている空に、眼を向けてしまった。

「ねえ、美和ちゃん。貴女美沢さんと、なにか約束でもしたというの？　ちゃんと聞かせて、頂戴！」新子はたまりかねて、一時に動きの取れなくなった気持を、そのまま言葉の調子に表して、美和子を追及した。

「美沢さんて、いけないのよ。」

「どうして！」

「だって、日曜日ごとに会おうって、約束しちまうんですもの。」

「いつ、そんな約束したの。」

「この前の日曜日よ。あんまり、色々訊かないでよ。お姉様。」

「それで……それで、貴女いつもり？」新子は、口が利けなくなっていたが、それでもまだ健気けなげに、涙だけは抑えていた。

美和子は、クルリとこちらへ向いた。

「美沢さんは、お姉さまに、悪いといっていたわ。でも、美沢さんもいっていたわ。新子さんは、僕と結婚するつもりはないんだって。……私は、お姉さまが、許して下さいれば、あの人と結婚するつもりでいるの。」新子は、茫然としてしまった。たちまち、愛人からも肉親からも、馬鹿にされたような、深い悲しみを感じた。

彼女は、妹の前で泣いてはならぬと、グツと喉もとで、悲しみをこらえながら、「許すも許さないも、ないけれど。だって……」と、云いさして、こらえ切れなくなり、妹から顔をそむけた。

美和子も、涙をこらえていた。彼女は、自分が、美沢と交際することが、こんなにまで姉を苦しめるとは思っていなかった。幼かったとき、姉がよく玩具おもちゃなどについての無理を聞いてくれたほどの手ぬるさで、許してくれると思っていた。だって、お姉さまは、美沢さんに不即不離だったんだもの、私の方がハッキリ愛しているんだものと、思っていた。だから、姉がこんなに狼狽し、こんなに悲しがると思わなかった。それで彼女も、悲しくなつて、うつむいて、靴下の爪先に、ぽたりと涙を落した。

しかし、もうどうすることも出来なかった。

その涙も、一分も経たない内に収まってしまふと、かの女は、姉に露骨にいつてしまつ

た晴々した幸福の方が、ムズムズ強くなった。

お姉さまは、何とかあきらめて下さるに違いないと思った。

日曜日ごとに会おうということは、本当は美和子の方からいい出したので、今日も美沢がほかに用などの出来ない内にと、一刻も早く出かけたかった。

「お姉さんが、こんなに急にお帰りになると思わなかったんだもの……だから不意にこんなこといつちやつて……」いいわけにもならぬことをいいながら、階下へ降りる機会を、計っていた。

五

美和子が階下したに降りて行き、やがて格子戸の開く音がして、外へ出て行ってしまおうと、新子は急に泣き出した。

つもりつもった涙で、一たんこぼれ出したとなると、後から後からと止める術すべもなかった。

妹を心から非難することも出来ず、美沢を深く咎とがめる気にはなれなかったが、ただ自分

だけが、羽根をむしられた鳥のように、寂しい悲しい気がした。

家のため、姉きょうだい妹いのためにと思つて、思い立った家庭教師の仕事だった。美沢と、ひたむきに結婚まで進まなかつたのも今自分が結婚してしまつては……母が……妹が……と思ふ心づかいからであつたのに。

だのに、たつた半月しか東京を離れていない間に、美沢も妹も、自分からはるかに遠い人間になつてしまつてゐるのだ。

軽井沢へなど行かなければ……と、やや涙の納まつたひまに思い返すと、悪夢のような昨日きのうのことが、準之助氏の面影と共に、ハッキリと甦つて来た。

あのあやまちも、軽井沢へ行つたためだった。夫人に対する意地と反感と、準之助氏から受けた同情と好意と自然の脅威を前にして、人間同士がお互にすがりつこうとする本能から、ついあんなあやまちを犯してしまつた。

何だか、自分自身が、頼りなく、哀れまれて、大げさな感傷に揺り立てられて、容易に泣き止むことが出来なかつた。

「新子ちゃん、どうしたの。新子ちゃん。」

階下から隣の部屋へ、上つて来ていたらしい圭子が、聞きつけて、びっくりしたように

はいつて来た。

姉にとがめられて、ピタリとすすり泣きは止めたものの、まだ肩がふるえていた。

「どうしたのよう。」

容易なことで、取りみださない平生の新子を知っているだけ、圭子もこれはよほど、重大事と思つたらしく、しゃがむと姉らしく肩に手をかけて、

「ねえ。どうしたの。」と、不安そうにうかがうと、

「放つておいて！」と、新子は肉親らしい遠慮のない邪慳じゃけんさで、姉の手から身を引いた。

「何でもないのよ。放つておいて。お姉さんなんか、あっちへ行つちまつてよう。」と、

切れ切れにいいながら、また泣き沈むと、圭子はもの珍しいような、困つたような表情で、
「ほんとに、どうしたの。子供みたいに、ねえ泣くのよして。どうしたのか、おっしやいよ。」と、無理につつぷしているのを起しにかかる。

「お姉さんの知つたことじゃないの。あっちへ行つて！」力いっばいよけられて、圭子は明かに不満の色をうかべ、

「まるで、ヒステリイね、前川さんのこと、ダメになつたの。」と、立ち上りながら、手もちぶさたに妹を見おろしていた。

六

新子は、姉から前川家のことをいわれると、にわかにもまた、いやな気持になってしまった。姉から、あんな非常識な無心が来なかつたら、あんな事件も起らなかつたかもしれない、また起つたにしたらと、金銭上の負い目さえなければ、もっと朗かで居られたのにと、この惨めな暗い気持の原因のいくらかは、姉にもあるような気がして、急に語気も荒々しくなつて、

「前川さんのことなんか聞かないですよ。そんなことを心配するくらいなら、あんな心ない無心なんかどうしてするの？」と、いった。

姉も、少しタジタジとなつて、

「それは、私がわるかつたわ。でも、あのことで、前川さんの方がダメになつたのじゃないでしょう。だって、あの無心は快く聴いて下さつたんですよ。あの翌日、お使いの人がちゃんと届けて下さつたんですもの。私、随分感心したのよ。前川さんて、何という人の方かしらつて、ご主人がいい方？ 奥さまがいい方？」

「……………」

新子が、ますます不愉快になって黙っていると、

「お二人ともいい方なんでしょう。そうして、芸術に理解の深い方ね。それに、第一貴女がとても、信頼されていたんでしょう。これじゃ興行ごとに、切符の百枚や二百枚は、引き受けて下さるだろうと思つて、私すっかり嬉しくなっちゃったのよ。」と、勝手なことを話し出すので、新子はすっかり憂鬱になつて、だまりつづけていた。

「ねえ。」

「……………」

返事をしないでいると、姉の手がまた肩にかかった。

「私、お目にかからなくなつても、前川さんという方想像が出来てよ。だから、貴女が急にダメになるなんて、考えられないの！ ねえ、どうしたの？ 私だって、ガツカリしちゃうわ。」

姉の利己的な考え方に、あきれて涙も出なくなつてしまった新子は、顔を上げて姉の顔を見直した。

「貴女、ほんとうに前川さんのところよすつもりで帰つたの。一体、どうして？」

「お願いだから、今訊かないで……」

「でも、よしたことはよしたの。」と、なおしつこく訊くので、新子はうるさそうに、「ええ、前川さんのところはよしたの。でも、それだけが悲しいのじゃないのよ。いろんなことが、一しよくたになつて悲しいのよ。」と、ややこらえ性のない人のように、恨みっぽく、姉にも少し当てつけていうと、また涙になりそうなのを、やつとこらえた。

「新子、起きたかい、起きているなら、ご飯たべたらどう。ここが、片づかないから。」と、母が階下から声をかけた。

「はい。ただ今。」新子は、それを機会に姉を棄てて、下に降りた。

七

下の茶の間には、もう夏の陽がカツと反射して明るかった。

新子は、茶卓の前に、まだ尾を曳ひいている悲しい気持を、紛らわすように、朝刊を展ひらいて坐った。

母は、ギヤマンの壺から、梅ぼしを小皿にわけて、茶を入れてくれたが、

「どうしたの。新子、額が狭くなつたみたいよ。たいへんな顔をしてるわねえ。どうしたの。」心配そうに尋ねた。

「何でもないのでよ。」と、母にも少し、すねて答えると、

「何でもないって！ 昨夜^{ゆうべ}だって、あんなに突然帰つて来て、顔色もよくなかつたし、こつちだつて心配で、昨夜はろくすっぽ眠りもしなかつたのよ。話しておくれ、ほんとうに、どうおしだい？」

「どうもしないわ。ただね、前川さんの方、もうダメになつてしまったの。どうも、奥さまと、うまく行かないの。今朝起きてそのことを考えていたら、つい悲しくなつて！ でも、もうなんでもないので。」

「お父さまがね、生きていて下さつたら、お前に他人^{ひと}さまのご飯をたべさせるようなことは、しないで済むのに……お父さまも、もう五年生きていたいとおっしゃっていたが……奥さまはむずかしい方らしいと、初めからお前も云っていたね。あんなに遅い汽車で、若い娘を帰しておよこしになるなんて！」愚痴まじりに、母の声が悲調を帯びて来た。

新子は、母に狭く見えると云われた額のあたりをさすりながら、つとめて快活に、

「汽車なんか、私が勝手に遅い汽車に乗つたのよ。そりゃ、お子さん達は、とても素直で

可愛いのよ。私に、とてもよくなついで、女のお子さんなんか、病氣中、まるで私がお母さんの代りなの。だから、ご主人が、あんなに沢山お金かね下さったのよ。ねえ、お母さん！

あのお金、どうなすった？ 月末の払いをして、少しは残ったでしょう？」と、訊ねると、

「お金つて、何だろう。」と、母は、げげんそうに、目を刮みはった。

「あら、いやアね。お嬢さまが、ご病氣の時、私がよく看護してあげたので、そのお礼として、お金を頂いたから、その内私十円だけお小づかいに取っておいて、後は書留で送ったはずよ。」と、新子も興奮して説明した。

「知らない。初耳よ。そんなこと！」

「まあ！ 着かなかつた？」新子は、驚いて母の顔を見つめた。

「いやだわ。大金よ、お母さま。」

「いくら。いつ頃送ってくれたの？」

「百四十円、十日くらい前。」

「まあ！」母もあきれて目をまるくした。

八

母は、どうにも臍ふに落ちないという眼を、新子に向けながら、

「まあ？ おかしいわねえ。十日くらい前だって、一度だって、家を空けたことはないんだがねえ……」と、云いさして、台所に向い、

「おしげさん。」と、婆やを呼んだ。

「はい。」と、婆やがそこから、顔を出すと、

「十日くらい前に、家へ書留が来なかつたかしら。」と、訊いた。

婆やは、ちよつと首をかしげると、

「そうですね。いつか、上のお嬢さまが、書留らしいものを、お受けとりになつたようでごいませすよ、たしか。」と、云つた。

そう云われて、母と新子とは目を見合わしたが、新子が、

「お母さま。じゃ、私お姉さまに訊いてみるから……」と、腰を浮かすのを、母は、
「新子！」と、おずおず呼び止めた。

新子を姉娘のところにはやることは、母としては何となく恐ろしかった。

「え！」と、探るように、母の前に、もう一度坐り直すと、母はもう涙を浮べていた。

「圭子はねえ。この十日くらい前まで、ひどくお金を欲しがって、わたしも四、五十円は出してやったんだが、いくらでも欲しがるので、お前に云われたこともあるし、ハッキリ断っていたんだが、それが十日前くらいからピツタリ強請せびらなくなったので……」母は、早くも姉娘を疑っているのだった。

「じゃ、お母さまは、私の送った書留を、圭子姉さんが、だまって使ったと思っていられないの……」

「まさかとは思うけれど……」母は暗澹あんたんとしていた。

「じゃ、私お姉さんに訊きいてみるわ。もしそうだとすれば、お姉さん、あんまりヒド過ぎるんですもの。行って訊くわ。お姉さまに。」と、決然として立ち上ろうとすると、

「お前が訊いたんじゃ、姉妹喧嘩になっちゃってしまっただもの。私があとで訊いておくから……でも、そんなお金があつたら、どれだけ助かったか分らないよ。先月は、美和子も随分お金を使うし……いくら、貯金を減らさないようにしたって一文も外から入って来ないんだからねえ。お前が折角送ってくれるものは、そんな風になっちゃってしまっし……」母は、堪え性のない涙をボロボロ膝の上に落していた。

妹が妹ならば、姉も姉だった。

新子は思わず、舌打ちの出そうな自棄やけくそな気持が、胸もとヘジリジリと焼けついて来た。

心なき姉

一

その翌朝のことだった。

宵の化粧を、すっかり拭き取った……そのために一層子供らしく、軽い開いた唇の間に、安らかに正しい呼吸が通^{かよ}っている、美和子の寝顔を、新子は複雑な感情で眺めていた。

肉親の姉のことも、先々の生活のことも、一切考えない、どうでも一緒になりたいと、しやにむに突進する美和子の情熱に、顔負けした新子は、一時は茫然としたが、しかし心の中は荒^{すさ}み切っていた。

もちろん、一步も二歩も間隙のある恋愛であつたにしろ、お互に理解し合つた愛情を堅

く信じていた美沢が、かように速かに自分の手から離れるとは思っていなかった。

むろん、やんちゃな妹が、何をいおうとも、もう一度美沢に会って、相手の気持を確かめたい未練が、切実に湧いた。しかし、美沢の心が変わっていないとしても、美和子があきらめるはずはなく、結局は姉妹のあさましい競争合になって、お互に気まずい思いの数々を、味わわなければならぬと思うと、今更美沢に手紙一つ書きにくく、電話一つかけにくいような、割切れないものが、心の底に澱んでいた。

美和子が、眠そうに細目を開けた。静かに、首を廻らして、ジッと姉の視線を迎えた。

「もう何時……?」

「八時半頃じゃないかしら……」そう答えた新子の気持は、不思議なくらい、平静なものになっていて、自分でも気づかない内に、姉らしい微笑を向けていた。

「ねえ。お姉さま。昨夜よく、お休みになれた……?」寝起きとも思われないほど、ハッキリと晴々した声に、新子は、

「そうね、貴女が帰って来て、唄を歌っていたのは知っていたけれど、眠ったふりをしてたわ。なぜ?」と、正直に訊き返した。

「ううん。」と、美和子は、身を転じてしまった。

そうされると、新子はまた平靜な氣持が、グラグラとこわされかけたので、靜かに床を離れて階下へ降りてしまった。

すると、新子の下りるのを待ちうけていたように、圭子が、

「前川さんから速達よ！」と、白い封筒を差出した。ちよつと、かつがれたのではないか、と思ひながら、受け取った。が、まさしく裏に元園町のアドレスを刷り込んだ前川氏の手紙だった。

その白い封筒を、サリサリと裂いたとき、新子の氣持は、決して平らかなものではなかった。

いろいろ貴女に、お詫びしたいことばかりです。僕も昨夜遅く帰つて来ました。一刻も早く貴女にお目にかかりたく、その上、お詫の言葉と僕の氣持を聴いて頂きたいのです。今日午前中は自宅に、午後は会社にあります。いずれかへ、ぜひお電話をねがいます。電話が、ご都合わるき時は、お手紙を。会社の電話番号は、銀座五六八一です。一刻も早くお目にかかりたいと思います。

文句は、短かったが、新子は相手の、青年のような熱情に打たれずにはいられなかった。

二

手紙を読み了^おえた新子に、

「前川さんも、東京へ帰っていらつしやるの？」たちまち、^{かたわら}傍から姉が、余計な詮索を始めた。

新子が、だまっていると、

「何て云つてよこしたの、貴女にすぐ帰ってくれと云うんでしよう……」だまっていると、もつと余計なことを云いそうなので、

「ほんとうは、私奥さまと喧嘩をしてみましたの。ご主人にご挨拶もしないで帰ってしまったので、心配していらつしやるの。でも、どうにもなりやしない！」

「だって、折角手紙下さるんですもの、行って会っていらつしやい。今度は、関係していらつしやる会社の方にも、使つて下さるわよ。」

「いやよ。もう、前川さんのお世話なんか二度とならないことよ。」

「そうお、それでも、ご主人だけには、挨拶して来るといいわ。私のためにだって、あんなにして下さったんですもの。」

「……………」

新子がだまっていると、

「私も、お礼に顔出ししなければいけないわねえ。」と、とんでもないことを云い出したので、

「よしてよ。お姉さんが、余計な所へ顔を出すのは。」と、ハッキリ抗議した。

まるで、この半月ばかり、姉のために奉仕したような気がしていやだった。何から何まで、勝手なことをして（前川さんへお礼に行く）もないものだと思った。

新子は、姉との小うるさい問答を避けて、二階へ上った。そして、美和子を追い立てるように、階下へやると、前川氏への手紙を書き始めた。

会いたくないことはなかった。自分独りが、こづき廻されているような、悲しい気持ちを慰めてもらうのには、前川氏に会うのが、一番だったが、こんな迷まい子みたいな今の気持ちで、前川氏に会うことは、避けたいと思つた。今日など会って、こちらの悲しみを話し、お互に慰め合つたりしていると……そこまで考えると、空恐ろしくなつたので、このまま

会わないか、でなかったら、当分の内でも、会わないことにしたいと思った。

ただ今、速達を頂きました。私の突然な帰京で、お心を乱してすみません。何とか、一言ご挨拶すべきであったと後悔しています。

お詫びなどと、おっしゃられると、かえって困ります。私も、軽井沢にいたときのこと
は、みんな夢であったと、忘れ棄てるように努めますゆえ、貴君様も、あれは夢であつ
たとお忘れ下さいませ。折角のお手紙ですが、今お目にかかりますのは、何となく恐ろ
しい気が致しますゆえ、もつと時が経つてから、一度お目にかかせて頂きます。蔭な
がら、お子様のご幸福とご健康をお祈りいたします。

前川様

新子

電話など、到底かける気はしなかった。

前川氏は、午前中家で新子からの電話を待ち、午後から会社のビルディングへ行き、交換手に電話がかからなかったかと訊いてみたが、いいえ、どなたからもという返事であった。冷房装置が、妙に肌寒く、少し偏頭痛を感じ、絶えず新子からの電話が気になり、留守にした間に、たまった文書に目を通す気にもなれなかった。こんな、絶えず気がかりになるのであつたら、いつそのこと会うべき場所を指定した方が、キツパリしてよかつた。電話をかけてくれなどというのが、無理だった。手がるに電話を借りる家がなければ、この炎天に自動電話へ行かねばならず、などと考えて後悔しながら、あきらめ悪く、会社を出たのが、六時近くであつた。

家へ帰つて、一人で食事をするのも憂鬱なので、東京倶楽部へ立ち寄つて、食事をした。顔見知りの連中は、みんな避暑へ行つたとみえ、ここも淋しかった。

家へ帰つてみたが、高原の涼風に馴れた身には、いわん方なく暑かつた。洋館の居間には、風が通らないので、浴衣ゆかたに寛ぐと、庭に面した下座敷の十二畳のガラス障子を明け放つて、冷たい飲み物を前に、涼を入れてみると、縁側に女中がピツタリと坐つて、

「あの、南條さんとおつしやる方が、お見えになりました。」と、しかつめらしく云つた。

「えっ!」と、思いがけないことなので、訊き返すと、

「若い女の方でございます。」という。あまりの吉報なので、かえって信じられず、

「おかしいな。軽井沢に行っている南條先生かい?」と訊き返すと、

「さあ。私は、南條先生には、お目にかかったことはございませんけれど、多分その方でございます。若い、美しい方でございます。」と云う。

準之助は、そう答えられると、もう疑う余地はなかった。(電話をくれ)と云ったのを相手はまだるしとして、直接に来てくれたのである、あの人が、こんなに簡単に手がるに(妻も一しよに帰っているという危険もあるのに)来てくれるとは思わなかった。——ともあれ、早く会いたい。にわかいきいきに、生々いきいきとあわて出した。

「応接室へ——暑いだろうね、どこも……」

「はあ。」

「と云つて、ここじやわるいし。応接室へ、煽風器をかけて、冷たいものを差し上げて……」おのずか自ら弾む口調で、命じると、浴衣ではわるいと思ひ、さつき脱いだ黒いじょうふ上布じょうふに着かえ、応接室へ急いだ。

だが、応接室へ、顔をのぞかせて、思わず、

「あつ！」と、小さくはあつたが、口に出して叫んでしまった。彼は、訪客を新子であると信じ切っていたのに、彼が部屋へはいると同時に、立ち上った女性は、全然見知らぬ女性であった。しかも新子くらい美しい……。

四

準之助がげんなりした面持で、一步を部屋の中に進めると、見知らぬ美しい女性は、たちまち立ち上って、愛嬌深く笑った。その唇くちもと元で、準之助は、やっとこの女性は、新子の姉妹であると思ひ当った。かれも初めて、親しい笑いをもらして、軽く一礼した。

「妹だと思ひになったのでしよう。私、新子の姉の、南條圭子でございます。妹がいろいろお世話になりました……」鹿つめらしい挨拶に、

「いや。どうぞ、おかけ下さい！」と、席に落着かせた。新子の電話を待ちつづけた準之助には、思ひがけない姉の訪問は、多少とも心うれいことだったが、同時に新子が病気にでもなつて、その断りに姉をよこしたのではないかと、少し不安になっていた。

新子よりは、二つくらいは上の二十三、四であろうのに、新子よりもむしろ妹に見える

ほど、整い過ぎた美貌で、しかも笑うとたちまち子供じみてしまつて、いうことも世間知らずな、お嬢さま氣質が染みついていた。

「私、どうしてもお礼に伺わなければ、気がすみませんでしたの。ほんとうに、あんなに後援して頂きまして、有難う存じました。何か持つて参ろうと思つたんですが、まだお目にかかったことがないので、どんな物が、お気に召すか分りませんので、お花ならと思ひまして……」と、パラフィン紙の中から、強烈な匂いをこぼしている、アメリカン・ビュウテイと呼ばれる赤みを含んだ黄バラの花束を、準之助の前に差し出した。

若い女性から、花束を贈られたような例のない彼は、微苦笑を浮べて、

「これは、どうも恐縮ですな。」と、いいながら受け取つて、マントルピース 柵の大理石の上に、人形でも横たえるように、大事に花束を置いた。

そして、席に帰ると、

「新子さんは、ご病気ですか。」と、先刻から気にかかつていることを訊いた。

「いいえ。私、新子にも内緒で、お礼に伺つたんですの。新子は、直接お礼に行つたら、いやだと申したのですが、私の気持として、お礼に参らずには、居られなかつたのですの。ありがとうございます。あの……劇は、よつほど、お好きでいらつしやいますの。」

こちらが訊いた新子のことなどは、てんで触れようとしなかった。自分のことしか話せないわがままな、しかし悪気のない性質だということが、感ぜられた。

「はア、昔は好きでしたが……」

「学校時代には、ご研究になりましたの？ 何かお演^やりになったことなどございません……」 演劇以外には、人生にやる仕事がないと云わんばかりの演劇至上熱の中に、相手を引きずり込もうとするような訊き方だった。

「とんでもない、ただ見るのが好きなばかりでした……」と、準之助は、あわてて打ち消した。

五

演劇マニヤともいふべき、圭子は少しもたじろがず、

「でも、そういう方も、頼もしいんですわ。私なんか、最初は見るばかり、読むばかりで満足したり、興奮したりしておりましたんですが、お友達の間研究会というのが出来まして、新しい戯曲を訳したり、朗読したりしています内に、どうしても舞台に立たねば、

収まらなくなりましたの。だから、先日の公演を機会に、学校の方はよしまして、舞台の方へ専心したいと思うようになりましたの。まだ、自分の天分には、十分な自信は持てないんですけれども……」

「はア。」一気に、喋りまくられて、準之助氏は、呆れながらも、しかし悪い気持はしなかった。涼やかな娘らしい声と、邪気のない、一本気な心の底が、見通せるような女性なので、微笑と共に肯いてみせた。それをよいことにして、圭子はすぐ話をつづけた。

「あのお金を届けて下さいましたときは、ほんとうに大助かりでございましたの。みんな学生ばかりですから、お金はちつともございませんでしたの。あの日も、劇場の借賃が払える払えないで、騒いでいましたの。ところへ、あのお金が来たものですから、みんな躍り上つて欣よろこびましたの。あの奥さまも、劇がお好きなのでございましょう。」

「いや、妻は……」

「まあ、お好きじゃございませんの、それは残念でございませう……私また奥さまもお好きで、奥様のお口添もあつたと思つていましたの……」

「いや。しかし、大変よい評判で、結構でした。軽井沢に居りましたので、新聞の批評だけで、舞台は拝見しませんでしたか……」

「それは、残念でございましたわ。初舞台ですから、充分工夫が出来ませんでしたの。あんな風に賞められると、かえって何だか頼りない気が致しますの。九月には、モルナールのものをやることになっていきますの、その方が私の柄にあうんじゃないかと思つていますの。」

「はア。」準之助は、圭子の絶間ない饒舌に、少し辟^{へきえき}易しながら、シガーに火を点じた。「もう、明後日から稽古にかかることになっておりますの。劇団にはお金はちつともありませんし、この間の興行の借金が、結局いくらか残りまして、今度はうんと切符を売らなければなりませんの。」言葉尻が、みんな子供のような笑顔で、消えてしまう女だった。「僕も出来るだけ、後援致しますよ。」準之助は、半分義理で、半分好意でそう云った。「あら！ いいえ、そんなつもりで申し上げたのじゃございませんわ。」と、パツと小娘のように、顔を赤くした。

六

顔を赤らめた圭子の、お喋りはしていても、どこか初心^{うぶ}なところのある容子^{ようす}に、準之助

は好意を感じて、ニコニコ笑っていると、圭子はまた喋り出した。

「私達の会にも、筒井子爵の息子さんが、パトロン格でいらつしやりましたの。その方が、費用なんか持つとおつしやるので、その方を当^{あて}にして、やりはじめたんですが、この間の公演のとき、配役が不満で、間際になって、およしになりましたので、それでスツカリ予定が狂って、あわててしまったんですの。ほんとに、そんな役不足なんかおつしやる方は、芸術を理解していらつしやらないんですわねえ。」

「はア。」準之助が、大人しく聴いているのをよいことにして、どこまで続くか分らないお喋りであった。

こうした演劇熱に夢中になるような姉を持ち、母や妹を控えて、一家の中心として働こうとしていた新子を考えると、自分の新子に対する行為が、結局新子の職業を奪ったことになったのが、ひどく悲しまれた。新子に対する償いのためにも、また自分の助力で、一つの研究劇団が興行を続け得るといふ楽しみのためにも、少し金を出してもいいと考えた。

「じゃ、劇団には基本金というものが、ちつともないんですか。」

「はア。」

「稽古を始めるのにも、いろいろお金がいるでしょうな。」

「交通費なんか、自弁なんですの。でも、貸席の費用とかお弁当とかそれに宣伝もしなければなりませんし……準備に四、五百円は……」

「ちよつとお待ちなさい！」と、立ち上ると、準之助は部屋を出て行つた。

だが、五分と経たない内に、歸つて来た。

準之助の中座を、気にしていたらしい圭子は、

「ほんとうに、もう失礼いたしますわ。」と、いいわけのようなことをいいながらも、準之助氏が、席に落ちついて、吸^すさしのシガーに火をつけると、また喋り出した。

「私に、もつと力があれば、費用なんか申しましたの。でも、お金があると、何かといいですし、つい新子に、あんな無理なんか申しましたの。でも、お金があると、何かといいですわね。方面は違いますけれど踊りの花柳登美さんなんか、舞台衣裳に、お金を糸目なくおかけになるので、あの方の芸が、それだけ引き立つんですわねえ。」と、少し脱線気味である。

「失礼ですが僕貴女の劇団の基金として、これを差し上げることになります。」と準之助氏は、袂^{たもと}から白い封筒を取り出すと、圭子の顔を見ないように、卓^{テーブル}の上をすべらせた。

七

圭子は、差し出されたその白い封筒を、一眼見ると、興奮に明るんでいる顔を、一層赤くして、

「いけませんわ。」と指先で、押しもどした。

「お収めになつて下さい。失礼ですけれども。」

「だって、いけませんわ。今日はほんとうにお礼にだけ、伺ったんですもの。困りますわ。公演が近づきましたら、ご無心に上るかもしれないかもしれませんが、今からこんなにして頂くなんて、いけませんわ。」

「いいじゃありませんか。公演の時は、公演の時として、また切符をお買いしましょう。」

これは、基金のような意味で……」

「でも……」と、云いながら、圭子はしばらくもじもじしていたが、

「どうぞ、お収め下さい！」と云う準之助の言葉に、圭子は一大決意を示したような表情で、

「じゃ、私個人としてでなく、研究会へ下さるものとして、頂戴してもいいでしょうか。」

と、云つた。妹に、文句を云われた場合に、自分の責任を軽くするための準備であろう。

「それで、結構です。」と、準之助が、微笑しながら云うと、

「では、有りがたく頂戴致しますわ。」と、云いながら細かいきれいな指で無造作に、その封筒を取り上げると、舞台から持つて来たような眼顔で会釈をして、ハンドバッグの中に収めた。

その封筒を収めてしまうと、さすがの圭子も、自分本位のおしやべりをしばらく中止したので、準之助氏はやつと、こちらの云いたいことを云つた。

「新子さんにも、お目にかかりたいんですが、そう貴女からお伝えして頂けないでしょうか。」と、圭子はちよつとあわてて、

「あら、だつて先刻も申しましたとおり、私新子に内しよで伺つたんですもの。でも、いわ。私、それとなく新子に、早くこちらへお伺いするようにすすめますわ。」と、上目づかいに企まざる媚こびが溢れた。

「どうぞ。」

「それから、新子のことですが、奥様に何かお気に入らないことがあつたようですが、家庭教師の方がいけないようでしたら、何か外に適当な……。」と、初めて姉らしい

ことをいいかけた。

準之助は、にわかには真面目な顔になり、圭子に皆までいわさず、

「はあ、それはもう。僕は全力をつくして、あの方のために計るつもりです。」といい切った。

重なる負目

一

初めは、美和子かと思つたほど浮々と上機嫌で、ジャズを鼻音で唄いながら、二階へ上つて来た姉が、いきなり新子の部屋に、ニコニコした顔を見せると、

「私、驚いたわ。」と、いった。

「何が……」と、新子が、ぼんやりしていた顔を上げると、

「貴女あなたに、内緒にしておこうと思つただけれど、いわずにいられないわ。ねえ。」

「何？ 一体。」

「私ね、やつぱり、前川さんのところに、お礼に行くことにしたのよ。」

「お止しなさいったら……」

「いやアね。人の話を半分しか聞かないで……もう行って来ちやったのよ。」と、圭子は、福引の一等でも当てたように、得意な表情をした。

「嘘でしょう。いつ？ 行く暇なんかないじゃないの。」

「今行って来たのよ。」

夕景、銀座へ行くといつて出かけた姉であった。新子は姉の非常識に、半ば呆れながら、「いやだわ、お宅へ行ったの。前川さん、びっくりなすつたでしょう。まあ！ ひどいことするわ！」^{はげ} 烈しい非難をこめた。しかし、それは姉に通ぜず、

「前川さんて、素晴らしい紳士じゃないの。あんないい方ないわ。私ね、貴女が厭^{いや}がつていたから、内緒にしておくつもりだったけれども、前川さんに言^{ことづつて}伝を頼まれちゃったのよ、貴女に、至急会いたいって！ 令夫人は、帰っていないらしいわ。」

「いやだわ。行くのおよしなさいって頼んでいるのに、内緒に行つて、そんな余計な言伝なんか頼まれて！ お姉さまが直接お礼に行つたとしたら、私もう一生行かなくつてもよくなつたわ。」と、厭味を云つてから、重ねて、

「でも、もうこれから、前川さんのところへお芝居のことで、話しになんか行つたら、私

本気で怒るわよ。」と、つけ加えた。

「そんなこと、今更云つてもダメだわ。前川さんのようないい方ないわ。今日、私この前のお礼しか云わないのに、黙って研究会へ寄附して下さったのよ。随分沢山なお金を……」

「まあ！」新子は、険しい顔で、姉を見上げた。

「そんなに、私に怒つてもダメだわ。私個人で頂いたんじゃないんだもの、研究会へ下さるとおっしゃるんですもの。私一人で左右すべきものじゃないんだもの。」と、新子の非難を外らそうとする姉を、新子はうらめしく睨みながら、

「一体いくら頂いたの？」と、詰った。

「驚いたわ。私ね、二、三百円だろうと思つたの、それが、そうじゃないの。だから、あまり軽く頂きすぎたと思つて後悔しているの。」

「それを、お姉さまは、私と関係なしに貰つたとおっしゃるの？」新子の声は、ふるえていたが、

「まあ、そうよ。」と姉はすましていた。

「お姉さんッ！」正面に見据えて、こう呼びかけた新子の声には、押え切れぬ腹立ちの殺気を含んでいた。

「何よ。」圭子は、あくまでシャアシャアと、眼元で茶化しにかかるのを押えて、

「お姉さんのすることは、まるで乞食か、泥棒のようだわ。」と、鋭く罵^{のの}つた。

「何が……」と、あまりにひどい言葉づかいに、さすがの圭子も、色を変えて、白けかえった。

「乞食よりも、泥棒よりも、もつとひどいわ。泥棒だって、親姉妹のものなんかは、盗^とりはしないとと思うわ……お姉さまは……お姉さまは……」新子は、押えても湧こうとする悲憤の涙を、グツと呑み込みながら、

「お姉さまは、私がお母さまに送ったお金まで、無断で盗ったじゃありませんか。」と、云い切った。姉には、このくらい思い切つて云わなければ通じないと思つたし、一方つもりもつた鬱憤が、一時に爆発したのであつた。

圭子は、思いがけなくも、自分の弱点を突かれると、普通の応対では敵^{かな}わないと思つたらしく、たちまち不貞^{ふてくさ}腐れて、眉一つ動かさず、（それがどうしたの？）と云うような顔

をして、新子の視線を受けかえしていた。

「そして、あんな非常識極まる電報をよこして……私が、何をしに軽井沢へ行っていたと考えていたの。私は、あの電報を見ただけでも、腹が立ったわ。まるで、滅茶なんですよ。私は、すぐ断りの電報を打つつもりであったの。ところが、前川さんに、あの電報が来たことが分ってしまったて、色々に云つて下さったから、ついお姉さんの出鱈目でたらめが成功したのよ。でも、あれだけで、もう沢山じゃないの。たった、半月かそこら、お世話になつた前川さんに対して、あんなご恩になることだつて、随分肩身が狭いじゃないの。それなのにこれ以上、お姉さんは、何をなさろうと思つていらつしやるの。私に、前川さんの前で、顔も上げられないような、口も利けないような、恥かしい思いをしろと、おつしやるの、お姉さんには、受けてはならない人の恩を受けるといふことが、どんなことだか分らないの！」圭子も、唇の血の気がなくなるほど、蒼くなりながら云い返した。

「分つていればこそ、貴女の代りにお礼に行つたじゃないの。」

「だったら、なぜ、お礼を云つただけで帰つて来ないの、物ほしそうな顔をして、そんな大金を貰つて来るの、まるで、泥棒猫が、投げてくれた魚の骨に味をしめて、ノコノコお座敷へ上り込んで行くような恰好じゃないの。凶々しいにも程があつてよ。」

三

新子は、憤りいきどおで身体が、熱くなっていた。今まで比較的、平穩無事であつたために、軌きみ合うことなしに過ぎた二人の性格の鹵車こしやが、今やカツカツと音を立てて触れ合つてゐるのだつた。なまじ、相手が肉親であるだけに、つい言葉も、ぞんざいになり、一旦云い出したとなると、真正面から遠慮会釈もなく、切り込む新子の太刀先たちさきを、あしらいかねて、圭子はタジタジとなつたが、すぐ立ち直ると出鱈目な受太刀を、ふり廻し始めた。

「私が、前川さんから、いつ乞食みたいに、お金を頂いたと云うの……。貴女は、お金と
いうものに対して、俗人根性を持つてゐるから、そんなことを云うんだわ。前川さんは、
演劇の愛好者だわ。その方が芸術のために、下さつたお金は、浄財よ。それを頂くことな
んか、恥でも何でもないわ。だから、私前川さんに、個人で頂くのではない。会として頂
くと云つてお断りしておいたわ。だから、個人としての私が、恩に着ることはないし、ま
して私の妹である貴女が、眼に角を立てて、ワイワイ云うことではないわ。」
「おだまりなさい。下らないわ。前川さんは、私の姉としての貴女だから、会つたのよ。」

私の姉の貴女だから、お金を呉れたのよ。あの方、演劇愛好者でも何でもありやしないわ。そんな、空論で私をゴマかそうとしても、駄目だわ。」

「貴女の云っていることの方が、よっぽど空論だわ。俗人の余計なおせっかいだわ。」

「私の云っていることが、おせっかいと思うのなら、私お姉さんを軽蔑するわ。お姉さんみたいのが、役者馬鹿と云うのだわ。昔の千両役者のように、お給金を沢山取っているのなら、お金の勘定も知らないような役者馬鹿も愛嬌よ、他人に迷惑がかからないんだから。お姉さんなんか、まだ役者になり切らない先に、役者馬鹿になられたら、傍はたの者がたまたまないわ。私が送ったお金をゴマかすなんて辛抱するわ。私の迷惑になるようなお金を、他人様から貰って来ることだけは、かんにんしてもらいたいわ。……お金が、そんなに必要でしたら、私の知らない演劇愛好者から、いくらでもお貰いになるといわ。前川さんかただけはよして頂戴ね。」

「……………」

姉は、すねて口をきかなかった。

新子は、やや言葉を柔らげると、

「ね、返して来て頂戴！ 家へ持つて帰ったら、新子に叱られましたからと云って！」

「バカバカしい。あんたの指図なんか受けないわよ。」
そう云うと、圭子はサツと、隣の部屋へ引き上げて、聞いていた境の襖をピシリと音を立てて閉ざした。

四

新子は、姉と云い争つてから、すぐにも前川氏を訪ねて詫を云い、そのついでに、今後は一切かまってくれないように、頼んでおかないと、姉がいい気になって——また自分への意地も手伝つて——何をし出かすか分らないと思つた。

しかし、準之助氏に電話をかけようと思うと、あんな手紙を書いた後だけに、何となくわだかまりが出来て、つい三日ばかり経つてしまった。

東京へ帰つてからの、打ちつづく悲しさ腹立たしさに、食慾が衰え、新子は急にやせてしまったように、思われた。

夜は、美和子と床を並べて寝るので、妹が黙っているにつけ、喋るにつけ、その背後に在る美沢のことを考えて、いつまでも心が冴え、やがて思考から来る疲労と悲哀の圧力と

で、押しつぶされたように睡眠に入るのは、いつも二時過ぎだった。朝は、夜の間に入れ知らず流した涙がにじみ拡がって頬をぬらしているのだった。

今朝は、部屋の中が暗く、いつものように暑くなかった。美和子は、心地よさそうに眠っている。起きて、窓から見ると、雨である。サツサツと横なぐりの夏の雨である。八月とは思えぬほど冷たかった。

新子は、今日は準之助氏に電話をかけようと決心した。姉の問題もあるが、しかし、今よるべき一縷いとちるの糸もない新子のよりどころのない心の寂しさが、そう決心させたのかもしれない。

十時頃、近所の酒屋から電話をかけると、

「新子さんですか、僕は、もう会って下さらないものだときらめて、明日は東京を離れようかと、思っていたところです……」せわしない興奮した声が、新子を何となく微笑ました。

正午ひる、昭和通りのレストウラントAで、会おうという約束で、電話が切れた。

家へ帰って、久しぶりでどこことなく、ふくらみを持った気持で、鏡台に向うと、新子はまた一層気持が改まった。

姉きょうだい妹いとは背そむき合い、美沢までも情けなくも自分を見棄て去った現在いま……彼女は、鏡に向つて己おのれの顔を眺めてみると、この頼りない自分の姿を、そのまま見せてもいい相手は、前川一人のような気がした。

彼女は、入念な化粧をした。汗がにじみやすい、夏の化粧は浮き立って、思うようにはしにくいものであるが、今日は肌が冷たく秋の初めのように、白粉も紅も、肌によく落着いて心地よかつた。

姉よりも地味な好みの、たった一枚持っている上布じょうふの着物に、淡い色あわばかりの縞の博多帯で、やや下目にキリりと胴を締めて、雨よけのお召のコートを着て、新子は十一時、四谷の家を出た。

ただ一人、円タクの片隅に小さくなって……しかし、思案深げな双眸の下の頬には、ウツトリとした明るみが、久々に忍び上つていた。

五

八階まで、エレヴェーターで運ばれて、雨の日の午ひるの、さすがに閑散な広い食堂の、口

ビイに足を入れると、葉巻をくゆらせて、準之助氏が一人、横顔を見せていた。

新子は、そのまま立ち止って、準之助氏が、こつちを振向いてくれるのを待っていた。

「やあ。」

「私の方が、早いつもりでしたのに、お待たせしてすみません。」

新子は、微笑しながら、準之助氏のかけているソファに間隔を置いて坐った。連れが揃ったと見て、給仕が早くも、メニューを持って、料理を訊きに来た。

「何になさいます。」と、準之助氏が新子を顧みた。

「何でも。嫌いなものごさいませんから……」

「僕と同じでかまいません？」

「どうぞ……」

「じゃね、ポタージュ、お魚のムニエール。マカロニ・ア・ラ・イタリアン。それだけ貰おう。」給仕は下って行った。

「先日は、姉が突然伺いまして、ほんとうに申し訳ございません。」新子の顔は、恥じらいで赤くなっていた。

「いや、僕は、貴女の代りに、お姉さんが来て下さったことも嬉しかったですよ。」すら

すらと苦笑まじりに、そう云う準之助氏の言葉に、

「え？」と、新子が眼を上げると、

「そのくらい、僕は貴女をお待ちしていたと云いたいのです。」

と、冗談めかしく、サバサバ云つてのけて、準之助氏は、新子に姉についての詫言など、云わせまいとする。

「あの晩、僕、すぐ貴女を馭まで、追いかけたのですよ。女房の容子で、貴女がどんなに嫌な気持で、帰られたかがよく解りすぎて、僕もとても厭な気持でした。だから、翌日、軽井沢を引き上げて来たのです。」準之助の気持も、新子の顔を見た時から、興奮し、はずみ上つて、何となく浮々としてゐるらしかった。

「お待ちせしました。」給仕が、食卓の用意の出来たことを知らせに来た。二人は、ごく親しい連れのようになり、食卓に着いた。こうした寛くわんいだ気持になったのは、初めてである。窓からは、雨に黒々と濡れている街の屋根が、遠くはるかに眺められて、雨が降つていても、ここ食堂の光線は、豊かに明るかった。準之助は、窓外に眼をやつて、ナプキンを拵げながら、

「我々と雨とは、縁があるんじゃないですか、あの日も、今日も……」あからさまに、楽

しい思出を辿るような視線で、そういう準之助氏の言葉に、

「え、ほんとうに。」と、答えたが、何だか情しじょうを迎えるような調子であったことに気がつき、自分一人で羞かしくなり、頬が熱くなつた。

六

もはや雇傭関係のない——主人でなく、家庭教師でなくなつた二人の物いいは、自然と、わけ隔てがなく、フオークをときどき、休めて優しく話し合つた。

「姉に、あんなことをして頂くと、ほんとうに困りますわ。姉は、演劇狂なんですもの、そのためには、どんなことをしても許されると思つていらっしゃるらしいんですもの。この先、どんなご迷惑をおかけするか……」

「いいじゃありませんか。僕は、ああいう方も好きですよ、一本気で……貴女よりもずっと、子供みたいで……」

「いやでございますわ。そんな比較なんかすつて？ もう、どうぞ私達姉妹のことは、捨てておいて頂きたいんですの……」

「それが、そうは行きません。僕には……」肩のこりの除れるような、遠慮のない会話になり、新子は準之助氏に会ってよかったと思つた。

「なぜでございます。」

「なぜって、僕は今まで、あまり道楽のない男だったんですから、月々ある程度の出費は、何とも思いませんし、貴女のお姉さんを後援するなんて、僕にとっては嬉しいことですし……それに圭子さんは、僕を演劇愛好家に定めてしまっているんだし……」

「まあ、いやだわ。姉が、つけ上るはずですわ。」と、いったが、しかし新子は準之助の鷹揚おうような気持が、うれしくなつて、つい笑つてしまつた。

「それに考えてみると、僕という悪い人間は、貴女を失業させたことに、なっているんだから、どんなにしても、その償いをしなければいけないし……」

「あら、そんな理窟りくなんか、ございませぬわ。」

「ありますとも、大有りですよ、圭子さんが見えた次の日、僕は貴女の手紙を見て、悄しよげてしまいましたよ。これぎりじや、僕は貴女を、たいへん不幸にしたことになるんですもの。だから、これぎりになるなんて、僕はたまらないと思ひましたよ。だから、貴女がもし、あのまま、僕と会つて下さらないとすれば、せめて縁につながるお姉さんの仕事でも、

後援して貴女に対する自責の心を、少しでも慰めようと思っていたくらいです。」

「まあ！」新子の気持は、だんだん準之助氏の言葉によって慰撫され、甘やかされていた。「今日はまるで、思いがけなかつたのです。もう、あきらめて明日は、軽井沢へ行つて、女房と替ろうと思つていたのです。だから、どんなにうれしかつたか知れやしません。ねえ、新子さん。」初めて親しく名を呼んだ。

「何でございます。」

「貴女、何かご自身でやってみたいとはお考えになりませんか。」と、しんみり訊かれた。

七

デザートのはネデュウ・メロンをスプーンですくい上げながら、

(何かしませんか……)と、云つてくれた準之助氏の言葉を、新子はいぶかしげに、眼で訊き返した。

「お姉さんの外に、妹さんもおありになるんでしょう。」

「はア。」

「あのお姉さんは、生活なんて、てんで考えない方でしようし、妹さんはどうですか……」
「……………」新子の顔に、苦笑の影が浮びかけて消えた。

「妹さんも、頼りにならないのでしような。と、貴女独りで、働いていらっしつても、追つかないじゃありませんか、何か、ご商売でもお始めになった方がいいじゃありませんか。」

「ほんとうに……」新子は、目を伏せて、こんな親切な人が母方の伯父でもあつたら、どんなに好都合だろうかと思つた。

「でも、女のする商売つて、どんなものがございましょうかしら、それに……」

（資本金も要りますし）と、いう言葉を、差し控えた。

「僕も、どんな商売が女性に向いていて、有利か研究したことはありませんが、まあ場所を撰んで『酒場』を出すか、『洋品店』をするか、洋裁の心得のある方だったら、婦人、子供洋服の店を持つとか……」

「……………」

「婦人雑誌に、そんな記事が時々出ているようですが、レコードを売る店なんてどうでしょう。小ギレイで……」

準之助氏は、好意づくめのよい人であるし——またその好意の根に、一々野心のわだかまっているような性質の人でないことは、ハツキリ分つていても、この相談に乗って、この上ともこの人の世話になることは、自分で退引のつびきならぬ羽目に自分を追い込んで行くような気がした。

「因循こそく姑息な地味な商売より、当りさえすれば儲けのある水商売の方が、やはり女の人には向いていると、云わなくてはいけないでしょうな。思い切つて、『酒場バ』か『喫茶店』——この頃、銀座に流行はやつていますな——ああいうものを、やってみては如何いかですか。」

「はア。」

「もつとも、お始めになる意志が、おありになれば、僕がよく人に頼んで、場所も経営方法も調べさせておきましょう。」

「はア、でも、そんなにまで、お世話になることは、ございませんもの。何かまだ、私が働けるような口でも、ございましたら……」と、新子は婉曲に断つた。

密会の如し

一

新子が、婉曲に断ろうとするのを、準之助氏はてんで受けつけず、

「いや、就職口を探せとおっしゃるのなら、僕はどうにでもして探しますが、しかし現在の女事務員の月給なんて、結局三、四十円ですからな。貴女一人のお化粧代あなたと交通費になるかならないかですからな。……もつとも、貴女お一人の小づかいさえあればとおっしゃるのなら、それで問題はありませんけれど……」

そういわれてみると、その通りだった。結局特殊の技能を持っていない限り、女一人で働いて一家を支えようなどということは、妄想に近かった。

新子が、伏目になつて黙つていると、準之助氏は続けていった。

「お姉さんの演劇熱の後援も、僕は欣んでやりますよ。しかし、僕はその十倍も、百倍も熱心さで、貴女の生活の後援がしたいんです。そして、貴女の生活を安定して、貴女に幸福になつていただきたいんです。でないと、僕は一生寝ざめがわるいですからな。」

「そんなに、お世話になる筋はございませんもの……今までだつて、余分なことをして頂いたんですもの。」

「いや、筋がなければ、こちらでお願いしますから、そうさせて頂けませんか……」準之助氏の頬が、青年のそれのように、あかあかと輝いた。

「僕は、何かの意味で、僕の傍そばから貴女に離れて頂きたくないんですよ。貴女をお世話したため僕が貴女に、何かを求めやしないかというご心配なら、どうぞご無用にねがいたいのです……この間の夕立のときは、僕も全く発作的で、貴女にどうおわびしていいか……あの償いのためにでも、僕はあなたのために、どんなことでも致したいのです。その代り、このままで、路傍の人にだけはなつて頂きたくないんです。」

中年の男子の、胸の中に鬱積した思慕の熱情といったものが、ふつふつとして、たぎるのを聞く気がした。新子は、身体中が熱くなり、じつと坐つていられないようななやまし

さを感じた。

「ですから、どんな誓言でも、どんなお約束でも致しますから、僕に世話をさせて頂けませんか……」じつと、見つめられた眸の強さに、新子は眼をしばたきたきながら、

「まあ……そんな心配なんか致しませんわ……心配しているのは、私自身の心ですわ。私、あまりお世話になっていると……」新子は、そこまでいって、食後のマスカットの一粒を、そつととり上げた。

「だから、お互に邪心なく、天空海闊に、お世話になったり、世話をしたりしようじゃありませんか……月も濁らず、水も濁らず……」

「そんなこと出来ませんわ。またいつどんな夕立が来るかも分らないんですもの。」と、新子は恥かしげに微笑した。

二

「はははは。」準之助も、新子のユーモラスない方に、うちとけて笑いながら、

「だから、お互に、これからどんな夕立にも、一しよに降り込められないよう、気をつけ

ればいいと思います。殊に僕は必ず慎みますよ。」と、心に誓うようにいった。

額で、準之助氏の視線を受けながら新子は、だまって味わうように準之助氏の言葉を、聞いていた。

「僕の、前によく友人と行っていたクララという小さい酒場バーですが、客がとても多いんですよ。二十三と二十の兄妹が、二人限りぎりで三千円ばかりの資本ではじめたのですが、この頃なんぞ兄の方は金廻りがよくて、競馬などに行つてるといふ話……食物くいもの商売は確かにうまく行きさえすればいいですよ。」

「はア……そのお話、私よく考えさせて頂きますわ。」

「ああ、それは、……僕は、貴女が、どんなことなされても、前にも申しあげたように心安く援助させて頂きたいんですから、よくお母様ともご相談なすつて……」と、そこで、準之助は、葉巻を出して、火を点じながら、

「コーヒは、あちらで頂きましょう。」と、云つて、立ち上った。

また、さつきの待合室のソファに、二人並んで腰をかけると、新子は一時間も食事に時間を費ついやしたことに気がついて、

「今日は、会社の方は……？」と、訊ねた。

「僕はもう、今日は会社の方へは参りません。貴女、何かご用事でもおありになるんですか……？」と、訊ねかえして来た。

「いいえ。私は浪人でございますもの。」と、新子は、笑いながら云った。

「はははは、じゃア、もう少しご一緒に居て頂いても構いませんね。シネマでも見ましようか。僕と一しよじやいけませんか。」

「いいえ。どうぞ。」新子も、もうしばらく準之助氏の、やさしい言葉に慰められていたかった。

「どこがお好きなんですか……？」

「帝劇なんかで観るのが好きなんですけれど、……いま、何を演やつておりますかしら……？」

と、云うと、準之助氏は、立つて行つて、ロビーの隅に置いてある、新聞の綴とじこみを持つて来ると、広告欄を開けて指を辿り始めた。

「『裏街』つてのを、演やつておりますよ。」

「あ、それは、たいへん評判の映画でございますわ。」

新子は、一ト月前ぐらいに、予告で筋を知っている、可憐な、アメリカのお妾めかけ物語を、

もう一度頭の中に浮ばせて、人知れず、胸をときめかせながら、

「それ、ご覧になります……？」と、われから誘うように、準之助氏を見上げた。

三

帝劇を出たときは、ちよつとの間、夕霽ゆうばれにあがりそうに見えた空も、また雨は銀色の足繁く降り出して、準之助氏のラサルという、素晴らしく長い車台の車に送られて、四谷の家近く、だがるべく近所の人の目にふれない所で、おろしてもらった時は、六時とこの間に冬の日の暮のように暗く、運転手が開いた蛇の目に、点滴の音が、さかんであった。

「ねえ、よくお考え下さって！ 僕まだ四、五日は、こちらにいますから、どうか会社の方へ電話を……」と、やさしく云ってくれた準之助氏の言葉を耳の底に、走り去る自動車を見送っていた。

一しよに居ると、頭のとっぺんから爪先までいたわりの限りをこめた、柔かく暖かいものに包まれているようで、相手の好意が、しみじみと有がたく感じられる。だが、それだ

けにどっか、気のつまる感じがして、

（お夕食もどうですか）と、云われたのに（家で待つておりますから——）と、云つて、断つたのは一人になつて考えたい心持もあつたし、長く一しよにいてはズリ落ちて行くよくなる自分の心を、引き止めたい気持もあつた。

姉も妹も居ない薄暗い家の中に、ぼんやり独りになると、なんとなく心が滅入り込んで行つた。美沢に対する未練までが、心の中に残つていて、一度美沢にあつて、美和子のことを思い切り詰つてやりたい気持の湧く傍から、粋な酒場を開いて、浮れ男をあやつりながら、しかも道徳堅固に暮してみるのも面白かろうなどと、とり止めもない物思いがつづいた。

どんな世話になつても、自分さえちゃんとしていれば、何をいい出す前川氏でもないことが、ハッキリ分つたが、しかし肝心の自分が、ちゃんとしておられるか、どうか。あの夕立の時だつて……と、思うと今見たばかりの「裏街」の女主人公のことなどが、思い合わされ、正統な結婚以外の男女の間は、どんな純愛で、結び付いていようとも、結局悲しいものだと思わずにいられなかつた。

八時過ぎると、二階へ上つて、床の上に身を横たえて、たてどい 樋を落ちる雨音を、さみしく

聞いていると、美和子が明るい顔で帰って来た。

何も見まい何も聞かまいと、薄い掛蒲団の下で、ジツと眼をつむって、寝入りばなを装っているのに、

「お姉さまア。眠っているの。ウソでしょう。お姉さまったら……」と、またしても気になる、からかい気味の言葉である。

「何よ。うるさい。少し気分がわるいんだから、静かにしてよ。」と、にべもなく、つっぱなして、眼をつむるのに、

「気分が悪いなんて、ごまかしても駄目よ。さつき、見ちゃったもの。いいところを！」と、いわれて思わず、眼を刮みはつて、

「貴女も帝劇へ行っていたの？」と、語るに落ちた。

四

小さい机の端に、灰皿とも飾りとも付かずに、置いてある綺麗な小皿を、手元に下して、美和子はこの頃吸い覚えたらしい無器用な手付きで、チェリーの煙を、もくもくとただ吹

き上げて、

「だって、随分目に立ったわよ。あんなブワブワとした珍しい自家用に、スマートな紳士と一しよに乗り込むんだもの。あの人、誰？」新子は、その話をさえぎって、

「美和ちゃん、貴女誰と帝劇に行っていたの？」と聞き直って訊いた。すぐ（美沢にも見られたかしら！）と、ワクワクと、胸先に苦しさが来たからである。

「クライヴ・ブルックみたいじゃないの。あの人誰さ？ お姉さまが云えば、美和子も云うけれど……」顧みて他を云うと、いった調子で、美和子は狡こウカツ猾らしく、姉の質問をそらして、自分の問いのみを主張した。

「あれ、前川さんよ。」新子は、妹を問いつめる必要上、覚悟をして、アツサリ云った。

「へえ——。前川さんって、あんなに素敵な人なの、驚いた——とても立派ね、……」

「貴女は、誰と行っていたの。」新子は、すかさず訊いた。

「私はね……云うのよしとこうつと……」

「ずるい！ 仰おつしやいな。」と、下から見上げる姉の眼に、かち合うと、すぐあらぬ方に、視線を外そらして、

「あの人つたら、とても慌てて、……私達は、切符を買ってはいるところ、お姉さま達は

出るところでしょう。あの人雨に濡れるのに、大急ぎで外へ飛び出して、石柱にぴったりと家守やもりのようにくつついて、あの自動車をいつまでも恨めしそうに見送っていたわ。それで、くさつちやつて、もう活動なんか見るのよそうというのよ。……美沢さん、やつぱりお姉さんが、随分好きだったのね。」大きな上眼で、天井を見上げたまんなま、美和子の言葉ことばを聴いていた新子の口尻に、びくつと力が入った。瞳の色は、飽くまで冷たかったが、微かすかにせまつた眉や、顎あごのあたり、胸底の懊おうのう惱のうをじつと押しこらえている感じが、歴ありあ々りと浮び上った。

姉のそうした表情を、妹は露ほども気がつかず、

「直感ね。私は、今日美沢さんと、一しよに出かける時から、何となくお姉さまに逢うような、逢つたら困るような気がしたのよ。でも、パツタリ出で会くわさなかつたし、……それにお姉さまも一人じやなかつたでしょう。何だか、くすぐったいような、妙にサバサバしたような、安心したような気持になつちまつて、でも活動は一時間ぐらいしか見なかつたのよ。それから、銀座へ出てフロリダへ廻つたの。だって、美沢さん、滅茶滅茶に騒ぎたいというんだもの。……」

五

新子が、黙って聴いているので美和子もさすがに、気がさしたのか、ちよつとの間口くちを閉とじていたが、やがてしんみりと、

「美沢さん、お姉さんがよつほど好きだったのね。だからつまりヤケになって騒ぎ廻ったわけよ。それに、私も悪いことしていたのよ。お姉さまが、軽井沢から帰ったことを、あの人に全然だまっていたのよ。だから、あの人帝劇でお姉さんを見つけたとき、すつかりびっくりしてしまったのよ。フロリダから、近所のバーへ行ったら、美沢さん、ハイボールを二杯も、飲むのよ。そして酔っぱらって、新子さんに、言伝ことづてがあるというのよ……」

「何ていったの？……」小さく思わず、口に出して呟いた。

「僕は、新子さんの幸福も不幸も解りません、サヨナラって！ 云ってくれと云うの。お姉さんをあきらめて、しまつたらしいのよ。あの前川さんを、お姉さんの愛人かパトロンかと思つたらしいのよ。あの方とお姉さん、何でもないの？」

「うるさいわよ。」姉は、つい険しい声で、きめつけると、顔をそむけた。さすがの美和子も、姉によつほど悪いと思つたらしく、手早く寝間着に着換えると、電燈を消して、床

の中へはいつてしまった。そして、しばらくすると、この大胆なる恋愛ぎようじや行者は、もうかすかな寢息を立てているのであった。

考えまい考えまいとしても、頭の中に一杯拡がって来ることなら、いつそ考えて考えぬいて、疲れた時に眠ることにしよう、新子は眼さえパツチリ闇の中に、開けてしまった。前川氏とたった一度一しよに、シネマを見れば、美沢に見つけられて、美沢が美和子と一しよに遊ぶ口実にもなれば、美沢が自分を思いあきらめる最後のとどめになるなんて、何という馬鹿馬鹿しいことだろうと苦笑したいくらいだったが、しかし、それを美沢に会って弁解する必要も感じなかった……。

自分が一家のためだと思つてしたことが、いたずらに姉の演劇熱をそそり、妹のわがままを増長させ……前川氏の家庭を騒がし、奥さまにイヤな目に会わされ……だから、今後自分としてはあまり殊勝な心がけで行動するよりも、もっと大胆に……。奔放に、前川さんにおねがいして、いつそバーでも出してもらった方が……。

バーを開くとしたならば（イザベル）、アンドレ・ジイドの小説の題でもつけようか。（サフォ）（エンマ）（クララ）（レオカデイ）（マニユエラ）でも、人の名は粹だけれども、少し地味だし……。

音楽の曲名をつけるとすると、

(グラナダ) (ダルダナス) (ラ・カンパネラ) (カプリース) あんまり華美で仰山な名
はいやである。口ずさんで楽しい明朗な名がほしかった。(バー・アイリス) (バー・ミ
モザ)

雨の音はいつか絶えていた。

妹や美沢のことを考えると、とても不愉快だった。美しいバーの名前でも、考えている
方がせめてもの慰めだった。

バー・スワン

一

溝板を飛んで来る板裏草履の音がして、勢いよく格子戸が開くと、

「南條さん、お電話ですよ。」と、酒屋の小僧さんの声が、家の中を、つん抜けた。

食卓をかこんでいた姉きょうだい妹は、一様に視線を合せたが、新子は、前川氏からだろうと思ふと、大いそぎで立ち上ろうとすると、美和子が、

「あたしよ。」と、厳しく云うと、早くも茶の間を横ッ飛びに飛んで、駈けだして行つた。思えば、前川氏に呼出しの電話番号は、教えてなかつたものをと、新子は、われ知らず頬を染めて、また箸を取りあげた。

間もなく、

「ゼヤーズ、ア、ランプ。シャイニング、ブライト、イン、ア、キャビン。イン、ザ、ウインドウ、イツツ、シャイニング、フォア、ミイ。アンド、アイ、ノウ、ザット、マイ、マザー、イズ、プレイイン……」と、鼻にかかった、甘ったるい声で、晴れ晴れと唄いながら、美和子が帰って来た。

「誰から……？」圭子と新子が、同時に訊いた。

「お友達……フォア、ザ、ボーイ、シー、イズ、ロンギン、ツウ、シイー……」頭を、コクリコクリとうなずきながら、

「もう、ご飯食べないわよ。」と、二階へ上ってしまった。

新子は、美沢からだったのだろうと、推察して、いよいよ目の前に、ぴたりと冷たい鉄扉を立て切られたような気持になった。後で、前川氏に、手紙で（「酒場」を、させて頂くことに決めました）と、書いてやろうと、咄嗟とっさに思案しながら、自分の心の傷口をいたわった。

美和子は、洋服を着て、化粧して降りて来ると、すぐ、新子の肩につかまって、

「お小遣いが欲しいの、……」と、いった。

「一ト月に、二十円で足らなくて……この頃は三十円くらい使うって、お母さまがこぼしていらしたわよ。使い過ぎるわよ。」

「使い過ぎるも、過ぎないもないわ。実際けちくさいんだもの。お友達に気がひけて仕方がないわ。」

「交際つきあいを、お断りすればいいじゃないの。昨夜ゆうべシネマに行ったばかりだし、……」新子は、意地の悪い皮肉な顔をした。

「お姉様のひどい人、……いいわ、文無しだつて、どうにかなるわよ。」と、ぷーんとして、くるりと後うしろを向いてスタスタ行きかけるのを、母親が、

「この日盛りを、病気になつてしまうよ。お止しなさい。」

「氷じゃあるまいし、とけやしないわ。」母にまで、八ツ当りして、靴を穿いているのに、新子は立つて行つて、

「お姉さんだつて、お金ないのよ。これだけ、持つていらつしやい。」と、出してやるのを、

「不要いらないわ。」と、後向きのまんま、格子戸を締めて、駈け出してしまった。

その日の晩、十二時はとくに打つたのに、つけっぱなしの電燈の下に、蚊帳は広々と、美和子の寢床は空であつた。新子も、反感めいた気持ちで、空っぽの寢床に背を向けて、今夜は美和子の帰らない内に、どうでも寝つこうとし、寝つくために、何か下らない古雑誌でも読もうと、床を這い出して、机の前にいざり寄ると、階下からのびやかに、母が上つて来る足音がした。

「おや、起きてるのかい。」と、近寄つて来て、小声で、

「ねえ。どうしたんだろう美和子は。遅いつたつて、こんなことは今までにないんだけど……」不安げに云つた。

「大丈夫ですよ。」美和子のことなんか、誰が心配してやるものかと思つた。

「だって、もう一時になるのよ。」新子には、連れが美沢だと判っているだけに、心配する気にはなれなかつた。

「相川さんのところにも行つて、泊つてしまつたんでしよう。」母への気安めを云つた。「だって、お友達は、みんな避暑に行つたと云つて、こぼしていたんだが……」

「じゃ、避暑地へでも誘われたんじゃない。今日、出がけに、お小づかいを欲しがっていったもの……」

「そうかしら。こんなに遅くなつちや、心当りへ電話をかけるわけにも行かないし……明日帰つて来たら、よく訊き質ただして叱つてやつておくれ。私の云うことはバカにしてちつとも聴かないんだから……」母親は、なおクドクドこぼしながら、階下したへ降りて行つた。ガ―ゼの浴衣ゆかたを着た母の姿が、空気の抜けた風船のように、小さくあわれに見えて、気の毒であつた。だが、新子はもう、美和子のことなど、心配してやる気はなかつた。

美和子は、思いきりよく美沢に呉れてやれ！

そして、その心の傷を癒すためには、前川氏の好意に甘えて、風変りの新生活に、飛び込んでみよう。そのために、一家の生活が安定を得れば、母だつて喜ぶに違いない。新子は、そう決心すると案外、気持が落着いて、眠ることが出来た。

翌朝、眼がさめたのは、八時であつた。美和子の床は、昨夜ゆうべのまま、少しも乱れていなかった。午後になつても美和子は帰つて来なかつた。二時頃、母親が美和子の心配で、昨夜ろくろく寝なかつたらしい表情で、二階へ上つて来た。

「美沢さんのお母さんが、何か話があるといつて、お見えになつたのよ。お前は、よく知

っているのだから、お前降りて来て、話をきいてくれないか。」新子は、また胸を衝かれるような気がしたが、すぐ落着いて、

「すぐ行くわ、少し綺麗になつて……」と、毛の落ちかかっている生はえぎわ際へ、手をやった。

三

年寄同士のくどい挨拶の、頃を見計らつて顔を出そうと、茶の間で、座敷の話を聴いていると、案に違わず、美和子は美沢と、昨夜一夜を過したらしい。

新子の母は、思いがけないことばかりで、（まあ？）とか（おや！）とか、いう感嘆詞ばかりで答えている。

（新子は、長い間お交際つきあひしていたようですが、美和子までが、そんなお交際していようとは、驚きましたね）と、あつけに取られている。

美沢の母の話によると、美和子は昨夜美沢と一しよに、鎌倉か逗子かへ遊びに行つて、今朝二人で美沢の家へ帰つて来たが、（家へ帰ると叱られるから、小母さまが行つて、話をつけてくれ！）と傍若無人の駄々を、こねているらしかった。

「新子！」と、母がその時呼んだので、新子は境の襖をあけて、上半身をのぞかせた。新子とは幾度も会ったことのある美沢の母は、愛想よく蒲団から、身を退らせて、挨拶した。「しばらく……軽井沢の方へ、おいでになって、いらしたそうで、少しおやせになりましたよう……」

「はア。」新子は、やさしく笑った。

「昨夜は、ご心配をおかけして、相すみません。美和子さんが、宅の方にいらつしやいますのですよ。」

「あの人、ほんとうにわがままで、ご迷惑をおかけしてすみません。」新子は、もう覚悟していたことなので、素直に答えることが出来た。

「いいえ。」美沢の母は、ちよつと新子の心持を探るさぐるように、ジツと視線を合せて、新子の澄んだ静かな瞳にぶつつかると、安心したように、

「何ですか。こう、藪やぶから棒のようなお話ですけれど、……若いもの同士で、あやまちのありません内に、いつそ美和子さんを、私の方へいただきたいと思うんでございますけれど……」

「美和子でございますか。」美沢の母の言葉が終わらない内に、新子の母が、びっくりして

訊き返した。

「はア。昨夜なんぞも……」美沢の母は、ちよつと思ひ計るように、そこで止してしまつて、新子に、

「貴女とも、一度よくご相談したいと、思つてはおりましたんでございますけれど……」
そう云われて、新子は顔を真赤にしたが、しかし、しつかりした調子で、母へ、

「お母さん、美和ちゃん、子供みたいですけど、あれでよくいろんなことに、気がついてるんですし、それに音楽なんかよく解るし……いっそ、お願いして、美沢さんに貰つて頂いたら、どう？」と、云つた。

新子の母は、（貴女は、それでいいの？）と、云うように、眼顔で、パチパチしばたいた。

四

新子は、勇敢に事件に直面して、冷静に己れを持した。そのために、ヒステリックにもならなければ犠牲主義も振りまわさなかつた。美沢をアツと云う間に美和子に取られてし

まったことも、考えれば今までの新子の生涯にいく度かあったことと、大した相違はなかったのである。

綺麗な着物は、姉圭子に、新子はいつも、そのお古を、大きい方のお菓子とは、それは、いつでも妹の美和子にあたえられるにきまつていた。幼い時代が過ぎて、大きいお菓子が、愛人になって、それを妹に渡してやっただけのことである。それっきりの話である。こうした我慢には、好い加減馴らされている新子であった。東京下町の小学生が唄いはやす（真中まぐそ、はさんですてろ）と、いうのが、南條家の新子の場合なのである。姉は年上なるがゆえに威張り、妹は年下なるが故に甘やかされる。

とは云え、美沢に対しては、よい気持はしなかつた。余りにも、たやすく見替えられたわれとわが身が憐れまれ、その打撃に無神経になるまでには、相当長い時日がかかると、覚悟しなければならなかつた。覚悟の土台を築くために、自分で自分の傷を癒すために、新子はいよいよ決心した。

もう母にも相談しなかつた。新子は、簡単に、前川氏へ、

先日は失礼致しました。帰宅致しまして、いろいろと、思案致しました。厚かましく、

万事おすがり申すことに決心致しました。何分よろしくお取計らい下さいませ。
妹は、この秋に、結婚致すかもしれない。私も自分本位の生活が致しよう存じます。
私は「酒場」の名を、いろいろ考えております。

新子

その返事は、その翌日、速かにもたらされた。

——お手紙拝見、先日お別れしてから、知人に、適当な場所や家を探してもらったりしておりました。銀座裏に、芸妓家の売家があること、……しかし、貴女からのご返事があるまでは、空なものでありましたが、お手紙ですっかり勇み立ち、僕もちよつと見て参りました。場所もなかなかよろしく、隣りは煙草店、建て方ひとつで、気持のよい「酒場」になることと思います。あまりこつちに長く居りまして、具合が悪いので、明後日軽井沢の方へ参るつもり、明日午後は暇ですから、よろしければその家見にいらつしやいませんか。午後一時、省線四谷駅前で、お待ちうけます。
いらつしやれば、別にご返事には及びません。もしご都合が悪ければ、ちよつと電話

でお知らせ下さい。僕が、昨夜考えた「酒場」の名、バー・スワン、いかが、……妹さんご縁組のよし、貴女のご辛労たいへんでしよう。では、お目もじの上、いろいろと失礼。

準之助

投函して、二時間くらいで来た速達のような手紙であった。

新子は、その手紙を見ると、その日の内にも、準之助氏に会いたいように思った。

五

万事を、準之助氏に頼んで、八月は何ということなしに、暮してしまった。

九月も、半ばになった。

空は、一面にどんよりとした層雲で包まれているのに、街の裾から、カッと落日の光がさし込んで、暗い通りに、建物の倒影が、クツキリ落ち、行きずりの人の顔など、眩しいほど、鮮あざやかに見える。バサバサと葉の茂った街路樹に、生あたたかい風が、ゆるゆると当る、

季節境せいかいの荒模様の夕暮であつた。

「家が落成しましたから、見にいらつしやい。六時頃なら、僕も行っていきます。」と、今朝準之助氏から電話がかかつて来た。

銀座の表通りから二つ目の裏通りの新橋寄りで、芸妓屋が二、三軒並んでいる場所で、うり貸家の紙が、斜ななめに貼られてあつた家を、（ここですよ）と、一度見せてもらったぎり、落成するまでは見に来ないで下さい、という準之助氏の言葉を、堅く守つた故、どんな家になつているか、少しも想像がつかなかつた。ハッキリ覚えていた場所を、円タクの運転手に教えたが、そこへ行つてみると、危く通りすぎそうになつて、

「あ、ここ、ここ。ここだつたわ。」と、思わずはずんだ声を上げてしまった。

周囲が周囲だけに、モダンな表構えの家が、劃かく然ぜんと目に立っていた。見るからに、南欧風の明るく小ぢんまりした構えで、扉は何か作りつけているらしく、開け放たれて、紺の半纏はんてんを着た男が、ぼしようの鉢植の蔭で、チラチラ動いていた。よくも短日月の内に、こんな変装が出来るものだと思われた。

滑るような床張りの中央に、古物らしいイタリイ製の水盤が置かれて、低いゆつたりしたソファに椅子が、木製の美術的な小卓をかこんで巧みに配置され、白い壁にとりつけて

ある目を楽しませるだけの飾棚や、壁にかかっている見事な織物や金属製の飾物、どの一つにも豊かな詩趣と、驚くばかりの贅ぜいが、こらされていた。つき当りのスタンドの上の壁の、水彩画の中に、スワンが二羽、長い頸を延ばしていた。

「バー・スワン」準之助の明るい気持が、新子の眼の前に躍り出した。

「バーテンの後うしろから、二階のお部屋へ行かれますよ。」大工の棟梁らしい男が新子に話しかけた。

バー・スタンドの後に、四畳半の部屋があり、そこから二階へ行く狭い階段がある。上つて行くと、こぢんまりした一室が、居心地よく裝飾され、スプリングの心地よいソファ・ベッドや、三面鏡や、簡単な衣裳箆筒が置かれていた。その行き届いた快さに、新子は茫然として立っていた。

六

その時階下から、

「新子さん、二階ですか。」と、久しぶりに聞く、なつかしい準之助の声がした。

「はア。下へ参ります。」いそいそと、思わず声も動作も、弾み上って、親しきと感謝で、明るく相好を崩した新子が、階段をかけ降りて、店の間に立まっている準之助の側そばへ、近々と寄った。

「しばらく。どうです、少しはお気に召しましたか。」

「まあ、こんなに何から何まで、して頂いて……相すみません、軽井沢からは、いつお帰りになりました？」

「四、五日前ですよ。毎日ここへ寄っていたんですが、すっかり仕上ってからと思って、お電話しなかつたんです。」

イの一番のお客のように、二人は卓をはさんで、ソファに腰をおろした。準之助は大工に、

「電話は、やつぱり奥の方がいいね。四畳半の上り口の壁にとりつけてもらいたい。」

「へえ——。板だけでも、とりつけておきましょう。」

「まあ、電話まで……」新子は、包みきれぬうれしきで、笑顔でうつむいていた。下手なお礼をいうより、黙っていたかった。（大恩は謝せず）という古語がある。こんなに何から何まで、してもらっては、（ありがとう）などという言葉を、何百遍くりかえしても足り

ないと、新子は思った。

「バーテンダーは、頼んでおきましたよ。フランスにしばらくいた男で、カクテルには、自慢の腕を持っています。偏屈ですけれど、人間はごく正直な男ですから、洋酒の仕入れなど、一切委^{まか}せたらいいでしょう。貴女は、カウンターをやつて、女^{ウエイトレス}給^{まか}は気持ちのいい少女を二人くらい傭つたらどうですか。」

「はア。」

「開業も、縁起のよい日がいいと思つて、そんなことをよく知っている人に聞いたんですが、貴女は六白だから、今月は縁談金談はいいんです。十二日が大安でしたけれど、貴女の年には凶の日で、二十日の先勝がいいんですつて……」

「まあ……そんなこと、お気になさいますの？」

「ははははあ。こういう水商売は、縁起をかついだ方が、いいのじゃありませんか。」準之助は、首をすくめて笑つた。

「警察への届けなどは、こちらでやります。貴女は、明日でも新聞に広告して、貴女の気に入るような女^{ウエイトレス}給^{まか}を見つけて下さい。」

「はい。」新子は、長い言葉が出ないのであつた。

「貴女、よくご覧になって足りないところがあつたら、遠慮なく云つて下さい。パーテンダーになる鈴木という男に万事頼んでおきましたから、大抵大丈夫でしょうけれど……表の看板のネオン・ライトは薄紫がよくありませんか。」

「はア……」新子は、危うく涙になりかけるほど、有頂天な嬉しさに浸っていた。

義勇女給

一

もう、母や姉きょうだい妹いに、少くとも母には、だまつているわけには行かなかつた。

しかし、故わけもないのに、前川氏に立派な店を持たしてもらつたといつたら、母は理解できずに、不安に思うだろうし、わがままな姉は、またいい気になって、前川氏にどんなことを頼むか分らないと思つたから、ただ前川氏に頼まれて「店の監督」になつたといつておけばいいと思つた。

綾子夫人も、とつくに帰京しているので、前川氏は妻の手前早く帰ってしまったので、新子も家へ帰つたのは、七時半頃だつた。母一人のところでは話せばいいものを、新しい生

活に入る嬉しきは、おさえ切れず、つい美和子の居るところで、話してしまった。

「まあ、その酒場、前川さんが、おやりになるの？」と、美和子が訊いた。

「ええ、お道楽でおやりになるんですって。」

「素敵なんでしょうね。」

「ええ、とても気持のいい家よ。」

「新聞広告なんかしたって、なかなか美人なんて来ないわよ。私のお友達に、適當なのがあるわ、つれて来てあげるわ。」

新子は、美和子を見ながら、妹も満更役に立たないこともないと思った。美和子のお友達だったら、女学校は出ているし、モダンな娘だろうと思った。

「だって、貴女のお仲間、そんなところで働くような境遇のいないじゃないの？」

「いるわ、一人。働きたい働きたいっていつているの。もう先、仲のよかった人よ。ちよつと、可愛い人よ。」

「そうお。じゃ、早速連れて来て見せてくれない。」と、美和子の側へ坐ると、美和子も興奮しているらしく、美しい鶯のように、眼をかがやかしていた。

「お姉様ア、美和子も、手伝わしてよ。ねえ、いいでしょう。私、知合いのボーイを沢山、

引っぱって来るわ。」新子は、初め美和子が冗談を云っているのかと思ったが、彼女はますます双眸を輝かして、

「美和子なら、いいじゃないの。お互に監督し合えばいいわ。前川さんは、スマートで、お金持なんでしょう。お姉さん、一人じゃ危いわ。」

「何を云っているの！ 貴女は、美沢さんと結婚するのじゃないの。」

「そんなに、早く結婚なんかしないわ。つまらないもの。それに、美沢さんの月収、いくらもないのよ。美和子のお小遣いくらい自分で稼げばうれしいわ。ねえ、美和子を使つてよ。明日あした一しよに、お店へ行くわ。」新子は、やはり美和子には、後で話せばよかつたと思つた。

「いやですよ。およしなさい。」

「ほんとうに、美沢さんのお母さんも、どうおつしやるか分らないし……」そば傍から、母が口を出した。

「とにかく、開業の時お友達をつれて、行つてみるわ。行つてみるだけなら、いいでしょう。」と、ずるそうに笑つた。

二

いくらお膳立が整い、箸を取るばかりになつているとはいえ、無経験な仕事であるだけに、開業日が迫ると共に、足の地に着かない、わくわくした落着かない気持がした。

二、三日して、美和子が、お友達の杉田よし子という少女を連れて来た。顔立のいいというわけではなかったが、色白で骨ほね細ほそで、誰からも嫌われはしないといった型の、いかにも酒場バーの女給に、ふさわしい娘であつた。

準之助氏が、以前会社に使つていたという給仕上りの娘を、一人世話してくれた。色の浅黒いチンマリかわいい顔立で、身体もガツチリしていて、いかにも働けそうだった。妙子と呼ぶことにした。

案内状は、主に準之助氏の知人関係に配られた。

二十日、いよいよ開業の日である。美和子が、（お姉さま、今日だけは、わたし、とにかく手伝つてあげるわ）といつてくれたのが、頼もしく思えたほど、心配だった。

四時に店を開けてみると、最初一時間半ばかりは、お客がなかったが、六時近くになると、珍しいもの好きな銀座マンが一人はいり、二人はいり、ソファと椅子とに坐り切れず、

予備の小椅子まで持ち出す盛況であつた。

手伝いに来ただけの美和子が、一番大車輪で、お客の注文など、一つも間違えず、

「お新規さんよ。キング・ジョージが二つ、それからソーセイジが二つ。」などと、よし子や妙子を使い廻しての奮闘ぶりに、新子はなるほど、妹が自信ありげに、手伝いたがるはずだと、スタンドの陰で、微笑しつづけていた。

それに、ベビー・エロと云つてもよい、美和子の白いスカートに黄色い腕なしのブラウスをつけた姿は、あらゆるお客の注視の的となり、いつの間にも名を訊かれたのか教えたのか、

「美和子さん。美和子さん。」と、ひっぱりだこになっていた。

新子は、美和子の持つている性的魅力の強さに驚きながら、（妹を使えば、お店の繁昌は疑いなくけれど、でも使うのはいやだし……）と、迷っていた。

準之助氏は、もし都合がつけば開店の景氣を見に来るといつていたが、とうとう来ず、九時近くになつて、電話がかかつて来た。

「どうです、景氣は？」

新子は、わくわく胸を躍らせながら、

「たいへんな景気よ。ちよつといらつしやらないこと？」

「もう、家へ帰つてしまつたのです。」

「まあ、お家から？」

「はあ。」

「つまないわ。」

新子は、物足りない気がして、ついそんなはずばな言葉づかいをしてしまつた。こうして家を持たしてもらつたと、ただ出資者というものに対する感情以外のものが、もう胸の中に出来上つていたのであつた。

三

上々吉の開業日の、あくる日だつた。

まだ暮れて間のない七時頃に、美和子はお友達を五人連れて、勢いよく乗り込んで来た。その中に、相川さんというお嬢さんは、新子も一、二度顔を見たことのある美和子の親友だつたが、他の四人は見知らぬ青年達で、美和子のいわゆる男友達らしく、ボーイ・フレンド美和子のその

青年達に対する態度は、傍若無人であつた。

「ねえ。お姉さま、このくらいお客様を連れてくれば、大したものでしょう。みんなお酒飲みを集めたのよ。それに、勘定少し高く取つても大丈夫よ。特に、この人はねえ……」と、美和子は、背の高い、眼鏡をかけている青年の肩に、馴々と手をかけて、

「大村さんという、大ブルジョアなの。」と、無遠慮に云うので、初めてバーのマダムの如く、愛想のよい笑いを浮べながらも、心の中では……妹がこんなに誰彼なしに、媚態を見せても大丈夫なのかしらと、恨みを忘れて、美沢のためにハラハラするのであつた。

皆が、お店の一角に、席を占めると、美和子はピクトロラの傍に飛んで行つて、レコード・ボックスから、「ボレロ」を取り出してかけた。店の中は急にロマンチックな気分になり、新子までが妹の大胆な言動に、辟易へきえきしながら、やはり楽しい気持になつて行つた。男達の前には、ビールが、美和子と相川さんの前には、バーテンの創案の、アルコール分の少いアヴェック・モア・カクテルが運ばれた。

「美和ちゃんのお姉さんのために、チェリオ！」青年の一人が、そう云つて、みんなが一斉に盃を拳げた。

「美和子のためにも、チェリオ！」美和子は、自分で盃をあげた。

「美和子ちゃんも、何かお祝いすることがあるのかい。」と、青年の一人が云った。

「大有りさ。美和子、今に結婚するかもしれないのよ。」

「おや。誰とさ。」

「誰とだつて、いいじゃないか。今に分るさ。」美和子は、男の子のような口をきいていた。

だんだん客が、立てこんで来た。

八時近く前川が、友達二人と、客のようにすまして、はいつて来た。そして、音楽や、若々しい笑い声や、酒の香りに、濁りかすみながら、陽気な空気の渦巻いている容子に、満悦しながら、美和子達のグループのすぐ隣に、腰をおろした。

新子は、前川がはいつて来たのを、目ざとく見つけたが、ちようど他の客に、サービスしていたし、よし子も妙子も、物を運んでいたのので、誰もすぐには注文を訊きに行かなかった。

それを知ると、美和子は、お友達に、

「美和子の女給ウエイトレスぶりを、ちよつと見せるわよ。」と耳語すると、たちまち自分の座席テーブルから立ち上つて、前川の卓子に行き、

「いらつしやいませ。何をお持ちしましょうか？」と、訊いた。

「ウイスキー。オールド・パーがいいね。」

「皆さん？」

「ああ。」

前川は、こんな可愛い少女を、いつの間に新子が見つけたのだろうと、驚きながら答えた。

四

(ああ)と応じた前川の言葉に、ひとこと人言を真似る鳥のように、美和子も、

「ああ。」短く同じように領いて、ジツと見ていたが、いきなり親しげに眸を輝かせると、

「分ったわ。あなた貴君ですのね。」と、云った。前川は驚いて、首をかしげ、

「貴君ですのねって、何です？」訊き返した。

「いいの。いいの。何でもないの。」と、女学生風な親しげな物云いを残して、バー・スタンドの方へかけて行ってしまった。

「可愛い子ですね。少し酔っていますね。」

「そうだね。」前川の連れは、そんなことを呟き合っていた。

新子は、前川がどんな種類の友達と一しよに來ているか分らないし、——もつとも、ここへ來る以上、自分が挨拶に行つて構わないだらうけれど、なるべくなら、普通の客のように扱うのがいいだらうと、いつの間にか日陰の女がするような心配を、している自分が、淋しく思われた。それにしても、帝劇で前川をチラリと見て知っているはずの美和子が、連れも構わず、下らないことを云い出しはしないかと不安になつた。

美和子は、バーテンに前川の註文を通すと、姉の傍に飛んで來て、耳のうしろ後で、

「お姉さまのあの人來ているわよ。」と、いやな云い方をするのを、

「何を云つてるの。あなた貴女、お連れがあるから、つまらないこと云つちやダメよ。」と、たしなめると、

「心得ていてよ、私、妹だとも云わないわねえ。女給のような顔しているわよ。ステキ、ステキ！」新子が、重ねて注意をしようと思つ間に、美和子はもう、バーテンからウイスキーの壘とリキュールと落花生とをのせた銀盆を、すまして前川の席へ運んで行つた。

このよやうな、男性を相手の「酒場」になぞ持つて來ると、美和子はいよいよ天成のコケ

ツトだった。幼い時から、お伽話と実際の差別がつかなくなったり、人前に立ってワイワイもてはやされると、いよいよ有頂天になる性質は、たちまちその本領を發揮して、人に對する奉仕というようなものでなく、彼女自身がその空氣の中に溶け込んで、浮れ出^{うか}してしまふのであつた。彼女の楽しさが即ち男を喜ばす言葉や仕草となつて現われるのであつた。前川が新子の妹だとは、到底氣がつかないほど、彼女の女給ぶりは板に付いていた。

「君幾つ！」

「十八……」

「何て云うの——」

「まだ名前、ついてないの。多分ミミということになるでしょう。」

「本当の名は……」

「只^{ただ}では教えない！　ここイかけさしてね。」

独りでかけている前川の隣に、ぴったり寄り添つて腰をかけると、そつと自分の連れにいる隣の席へ、（どうですか？）というような意味のこもったウインクを送つた。

五

いきなり、脇へ腰をかけられた前川も、二人の連れも妖精じみて、美しい少女へ、マンジリともしない眼を向けていた。

美和子ぐらいの年頃の、まだ場所馴れしない娘であったなら、こうも男達の視線を、ジカに自分の上に集められたら、気怏きおくれしてはに candish しまうに違いない。美和子も、少し心臓の鼓動がはずんでいるが、かの女はそうした自分の気持を、速やかに言葉に表せる、開放的な性質を持っている。

「いや、そんなにご覧になつちや。テレてしまうわ。」と、ウイスキーの注がれたリキュールを、前川の方へ、押しすすめた。

前川は、一口なめるように舌の上へ落とすと、喉が乾いていたところなので、カーツと味の解らないほど、口全体が熱くなった。

「炭酸水をもらおうかな。」

「はい。」美和子は、側に来かかったよし子に、

「ウイルキンソンにコップが三つ、ぶつかきを入れて、持って来て頂戴！」と、いった。やがて、よし子が運んで来ると、

「貴女もいらつしやいね。」といいながら、

「私も十六ミリだし、貴女も小型なもの、ここへ二人かけられてよ。」と身体全体で、前川をグツと押した。無遠慮で乱暴だが、しかし色つぼくなま艶めいた仕草だった。前川は、ウイスキーと炭酸水とを別々に、口に運びながら、

「君達二人とも、初めて？」と訊ねた。よし子は、温順おとなしく眼を伏せて肯うなずいたが、美和子は、

「そうよ。ここのマダムも初めてよ。お店も新しい、ホラ唄にあるじやないの……」

「唄にあるって……」前川は、陶然とした気持に、揺られながら、訊き返した。

「ええ、船は新造で、船頭さんは若い、河は新川、初上りって……」

「へえ——、しやれた唄を知っているんですね。」と、これは前川よりやや年若の連れの人、それまでマジマジと美和子を眺めていたのが、初めて口をきいた。

「ええ、唄なら大抵知っているわよ。音楽家よ、わたしは……」

「何か歌って下さいよ。」

「いやよ。私『歌わせてよ』じやないわよ。まだ、お酔いになっていないのに、聴かせるものですか。」

「じゃ、酔ったらきかせてくれますか。」

「ええ、そして毎晩、お店へ来て下さるといってお約束をして下さらなければ……つまり、どうぞゴヒイキにということなのよ、分つて……」と、冗談ともつかず、真面目ともつかず、美和子はペコリと頭を下げた。

六

いかにも、あどけない少女らしく見えていて、男心を捕えるのに妙を得て、奔放自在、しかもどつかに才気の閃きを見せて艶治えんやである、こんな少女を、一体どこで見つけて来たのだろうと、前川は感嘆しながら、心の底まで楽しくなっていた。二人の連れの一人が、前川を先生と呼ぶのを早くも聞き覚えて、

「ねえ。先生、グウ、チョコキ、パツをしない？」と、可愛い握り拳を出した。

子供のやる気合ゲームで、相手がグウを出せと云つたら、それに誘われないように、チョコキかパツを出さねばならない。

前川は、小太郎や祥子の相手をさせられているだけに、

「グウ、キヨキ、パツよろしい、君なんか一ひねり……」と、自信を以て始めたが、アツサリ美和子に負けてしまった。

「じゃ、僕と……」連れの一人が代ったが、これは前川より、もっと手がるに片づけられてしまった。

「じゃ、この次、三回勝のジャンケン。三回つづけて勝てばいいの。」と、別のジャンケン遊びを始めたが、これも美和子は、可愛いかけ声に拘らず、どこか気合がすぐれていて、相手の気を釣つて、巧みに勝ってしまった。

その時、新子がサービスしていた客が帰つたので、ようやく、前川のところへ来て、挨拶したが、みんなは美和子とたわいなく遊ぶのに夢中であつた。美和子は、それと気づくと、芝居気たつぷりに、「マダムここへおかけにならない？」と、わざと席を立て、笑いもせず、新子の袂たもとをとらえて、坐らせようとした。

「この人は、とてもいい子だね。」と、前川は楽しそうな眼で、新子を見上げた。新子は、前川が、美和子が、自分の妹であると知つたら、どんな顔をするだろうと、苦笑せずにはいられなかった。美和子は、前川を姉に委せると、自分はまたお友達のグループにはいつて、そこで賑やかにさわぎ出していた。

前川の一行が、しばらくしてから勘定をすませて、帰りかけると、美和子は後を追うて、前川の背後にすがりつきながら、

「ねえ。あした来て下さる？」と、甘えかかった。

「ああ来よう。」

「きつとね。私六時までに来ているわ。」戸外まで送り出して、前川の肩を、「サヨナラ」と云つて、軽く叩いた。

搔き乱す者

一

二夜、夜更よふかしが続いたので、朝は深い眠りで、明るくなつたのにも気がつかず、新子は、十一時半頃、やっと眼を覚した。傍の美和子は、まだ綺麗な寝顔で、しんしんと眠っていた。枕元に、美和子宛の速達が来ていた。表おもてがき書の筆蹟が、努めて違えてあるようだが、どこか、美沢のそれらしかったが、裏を返しては見なかつた。新子は、美和子を起してやろうと思つたが、止してしまつた。

昨夜、お店で前川がご不浄に立つたとき、（明日二時、ちよつと来ます）と、行きずりにささや囁いたので、早く店へ行かねばならず、大急ぎで化粧をした。

姉の幸福は、自分もちよつと嘯^{かじ}つてみねば、気のすまないような美和子に対して、新子はある煩わしさを覚えていた。美和子が、毎晩のように、お店に現われると、結局美和子が、バー・白鳥^{スワン}に駕^がする王女になつてしまうような気がした。だから、今日も美和子が、（一しよに行く）などと云い出さない内に、サツサと家を出かけてしまいたかった。どこからか聞えている昼間の演芸放送が、ニュースに代りかけても、美和子は起きて来なかつた。

銀座へ来たのは、一時半を過ぎていた。店には、もう前川が、会社のひまを盗んで来たらしく、帽子も被^{かぶ}らず、やつて来ていた。

「お待ちせしました。」

「いや、僕も今来たばかり……」と、右手に持った金属性の鳥籠を、どこへ置こうかと、部屋を見廻していた。

「まあ。カナリヤですの……可愛いこと。」

「いま来がけに、そこでフラフラと買っちゃって、水盤の上へでも吊ろうかと思つてゐるんですが……」

「可哀想ですわ。お店じゃ。夜更しをして、煙草にむせて、お酒に酔つて……」

「じゃ、貴女のお部屋にしますか。」

「ええ。」と、新子が手を延ばして、籠のてっぺんを持つとうとすると、

「僕が、持つて行つて、上げますよ。ウツカリ持つと、水をこぼしちまう……。」と、前川は籠をぶら下げて、新子の部屋へ上つて行つた。新子も後に従つて行つた。カナリヤが、籠の中で怖れるように、忙しく短く、鳴いている。カラリカラリと前川は、カーテンを開いて、出窓の上に鳥籠を安定させると、新子を振り向いて、何と云うことなしに微笑した。

新子も同じように、微笑しながら、この世に幸福を盛る器があるとすれば、自分はその中にいるような、晴々したのどかな気持ちになつていた。もつとも、その器の中にいるだけで、ほんとうに幸福であるかどうかは、別問題であつたが……。

二

しかし、そうした幸福感が、間もなく妙に新子を切なくした。なぜといえ、前川は、小さい椅子にかけて、葉巻をくゆらせながら、開店景気とはいえ、この二日間の売上げの

好かつたことを話し、でもこれが当分続くとしても、やがて常連だけになり、そこで初めて店の収入が決まるというような、その場合の新子の気持とは、およそそぐわなない話をし始めたからである。新子は味気なく、物足りない気がして悲しかった。

「会社の方、まだお仕事があるんじゃないですか？」

「いや、別に。帽子やステッキを持つてくれば、会社へ帰らなくてもよかつたんです。でも、今日は六時まで、家に帰らなければ……」

「祥子さんや小太郎さん、お元氣なんでしょう。」

「ええ、しよつちゆう、貴女のことを云つて、会いたがっていますよ。それに、路子も、たいへん貴女に、すまながつています。今度、何か機会を作りますから、子供をご覧になりませんか。」

「ぜひ、どうぞ。」

話していても、新子は何となく不満である。もつと外の話がしたい。もつと心に触れる話が……こんな話で飽きたらないのは、結局前川を愛しているためだろうか。と新子は、自分の心を探ってみている。前川とても、同じ気持であろうか、他愛ない話を、あれやこれやとしながらも、容易に腰を上げかねていた。時間ばかりが、切なく過ぎる。突然、

「お姉さまア。上にいらつしやるの！」ハツとするほど陽気な声が出て、バタバタと、階段を上つて来る足音がした。

「僕、居てもかまいませんか。」と云う、前川の言葉の終らぬ内に、部屋の中へ、美和子が飛び込んで来た。

「あら！」前川を見ると、さすがに顔を赧あかくして、「お姉さま、ちゃんとご紹介してよ。」と、恥かしそうに、前川から顔をそむけて、姉の肩に甘えかかった。新子もつい、おかしくなつて、笑いながら、

「前川さん。妹の美和子でございます。」と、紹介した。

「そうですか。昨夜は、あんなに僕達をおかつぎになつて！これは驚いた。」と、前川はびつくりして、美和子を見直した。

「だって、私はどこの方だか、分らなかつたんですもの。お姉さまのお世話になつてゐる前川さんだとは夢にも知らなかつたんですもの。すみません、どうも。」と、早くも別なウソをつく円転自在な美和子に、姉は心の中で、何かしら油断のならぬ気がした。

いきなりはいつて来た美和子をたしなめる気持も手伝つて、

「貴女、こんなに早く何しに来たの？」と、新子が詰ると、

「カツトが、こんなに伸びちやつたんだもの。美容室に行くの。」と、前川に愛らしい笑顔に向けて、ちよつといいよどみながら、新子の耳に口を寄せ、

「それで、お姉さまに、お小遣を頂きに来たの。お小遣じゃないわ。二日間のお給料としてでもいいわ。」と、前川にも聞えるように囁いた。新子は、苦笑しながら、

「もうそんな……」といいながら、五円札を出してやると、わるびれもせず、ハンドバッグをパチンと聞けて、中に入れて、今度は前川の方へ向いた。

「晩に、またいらつしやるでしょう。」

「いや、晩には来られません。」

「いけないわ。嘘をおつきになつちや、昨夜私とちやんとお約束なすつたのに……」長い睫毛を、しばたたきながら、詰った。

「ご免なさい。今日は、都合がわるいから、改めて約束の仕直しをしましょう。明日きつと来て、あなたのサービスぶりを拝見いたします。」と、やさしくいうと、すぐそれに甘

えて、

「じゃ、もうお帰りになるの。」と、訊いた。

「ええ、僕ノウ・ハットだから、会社へ、帽子を取りに行かなければ……」

「あら、帽子なんかいいじゃありませんか。今晚、いらつしやらない罰に、これから銀座で何かご馳走して下さらない。私、あわててお家で、何も喰べて来なかったの。お腹、ペコペコなの。ねえ、お姉さまも、一しよにお出かけになるでしょう。」

「何を云っているの。前川さんにご迷惑なことを云っちゃ。」

美和子が、前川に対して、あまりに無遠慮なので、新子が真面目な表情をしてたしなめると、美和子はケロリとして、

「お姉さまは、前川さんと歩くのにおいや？ 何とか云われやしないかと、心配なんですよ。私は、平気だわ。私は、前川さんと一しよに歩いたって、伯父さんかパパのようにしか見えないんだもの。ね、そうじゃありません？」新子は、不愉快になってだまつたが、前川は冗談に、

「パパは、ひどいでしよう。」と、抗議すると、

「だって、美和子の覚えているパパは、前川さんくらいだわ。ねえ、お姉さま。」と、姉

の気持などおかまいなしに同意を求めた。

四

新子は、ますます不機嫌になつて、

「そんなご迷惑なことを云わないで、早くカットにいらつしやい。熊の子みたいな頭をして……」と、美和子を追い立てにかかったが、美和子は立ち上ろうとはせず、

「独りで、何か喰べるくらい、つまらないことないわ。お姉さま、一しよに行つてよ。」と、ねだるのを、前川は、取りなして、

「じゃ、僕も、会社へ帰る途だし、昨日サーブスしてもらったお礼に、ちよつとつき合ひましょう。」と、前川は立ち上つた。そうした前川の親切気を妨げる手もないので、新子はだまつていた。

「ああ！ 嬉しい。」美和子は、もう馴々と、前川の側へ立ち寄っていた。新子は、妙に胸騒ぎを感じずにはいられなかつた。

美和子の心は、まるで水銀のようである。美沢の美貌と芸術家であることに魅せられて、

フワフワと恋愛したように、今度は前川のありあまる物質を背景とした中年の紳士姿に、どう影響されるかもしれないものではなかった。

「美和子ちゃん。貴女、速達が来ていたの、急用じゃないの？」と、美沢のことを思い起させようとしたが、

「あれは、何でもないの。」と、あつさり答えて、

「じゃ、お姉さまは、いらつしやらないのね。じゃ、出かけましょうか。」と、前川を促した。

「じゃ、また……」と、挨拶して、美和子とともに出かけようとする前川に、

「お転婆で、わがままで、ほんとうに困るんですよ。どうぞ、甘やかして下さらないように。」

と、云うと、前川は新子の言葉を、姉としての謙遜としか解さないらしく、

「いや、なかなか明朗なお嬢さんですよ。」と、微笑しながら、美和子の後を追うて降りて行った。

前川さんが、まさかまだお乳の香のにおいとれない美和子などにも思っても、子供ながらにくせも二くせもある妹だけにいやだった。といって自分も一しよについて行くことは、は

したない気がして……。もつとも、美沢の場合にだって、何も云う権利のない自分であるから、前川氏の行動に対して文句を云えるはずもなく——いな、心をうごかすはずでもないのであるが、何となくやるせなく不安になるのをどうすることも出来なかった。前川が置いて行ったカナリヤの籠に面してぼんやり立っているうちに、なぜかしら寂しくなつて、新子はぼんやりと涙ぐんでいた。

五

二人ぎりで、鋪道を歩いて行くと、さすがに美和子は話がないらしく、カツカツとハイヒールの靴音を立てて、おとなしく一步後からついて来た。

快活で、こだわりのない、こんな妹が新子にあることは、いろいろ好都合だと思った。

第一、この妹にねだられるのを口実に、毎日スワンへ通うことだっておかしくないし……。この間中から、新子がお召の着物に、ハイカラな縞の博多帯ばかりをしめているのが気になってきた。よく似合うし、趣味も悪くはないが、あまり同じものをつづけているので……。何か新しい着物を贈りたい、と思いつながら機会がなかったが、今日妹と歩くのは好

都合だ。妹に何か買ってやるのを、キツカケに、新子に新しい着物を買おう、そうすれば自然でいいと、万事綺麗事好みの前川らしい考えが、胸の中に浮んで来た。

「お腹とても空いているのですか。」と、後へ微笑ほほえみかけながら訊くと、

「ええ、ペコペコよ。」

「デパート百貨店の食堂なんか嫌いですか。」と云うと、げげんな顔で、

「デパート百貨店に、用事がおありになるの？」

「ちよつと、松屋で買いたいものがあるんですが、貴女のご意見も伺った方が、いいかもしれないので、一しよに行つて頂こうかと……。」と云うと、早くも悟つて、

「ああ、解つたわ。お姉さまに、何か買ってお上げになるんでしょう。いいわ。私が見立てるわ。その代り、私にも何か買って下さるんでしょう？」

「もちろん、そうなるでしょうな。」前川も、幾分ふざけて云つた。

松屋まで歩くのは、ちよつと辛かったので、そのの駐車場から、円タクに乗つた。

「買物を先にしても、大丈夫ですか。お腹が空いて倒れることなんかないですか。」と云うと、

「もう、お腹の空いていることなんか、忘れちゃつたわ。何を買つて頂こうかと、考えて

いるのよ。もう、ご飯なんか、どうだっていいわ。私、ひとりで後で頂いてもいいことよ。
」と、たちまち發揮する勝手坊主に、前川は苦笑しながら、

「貴女は、どんなものがいいんでしょうか。」と訊くと、美和子は小さい頭をかしげ、

「美和子、欲しいもの、いろいろあるのよ。でも、デパートなんかには、ないかもしれないわ。ローヤルで、サンダル・シューズをあつらえたいし、ヴァニティ・ケースもほしいのよ。」と、買ってもらうにも、自分の趣味は、主張しようとする。

「じゃ、お好みのものを。とにかく、松屋で、お姉さんに上げたいものを、見立てて頂いてから。」

「おお、うれしい。とても素晴らしい。でも、お姉さまの方が、私よりズーツと幸福だわ。」と、云った。

六

三階の呉服売場へ、真直ぐに行こうと、自動車を降りると、人ひとこみ混をわけて、真直ぐにエレヴェーターの方に歩き出す前川の後から、チョコチョコと美和子が、追いかけて来て、

一しよにエレヴェーターに乗ると、前川がためらいもせず、

「三階！」と、命じる背中に、美和子は混んでいるので、蟬のように、くつついたまま、「前川さん、女みたいに、よく知ってらっしゃるのねえ。」と、低くささやいた。前を向いたまま、前川は苦笑を浮べていた。

もう九月の二十日過ぎで、百貨店には、ボツボツ秋の新製品の陳列で、ひとえもの単衣物の良いものなど見当らないばかりか、いつか綾子夫人と一しよに来たとき、新子のために目星を付けておいたお召の単衣など、シヨウ・ケースから姿をかくしている。前川は、うず高く積んである反物を、一反ずつ見る気にもなれず、ウロウロしていて、顔見知りの番頭などに、つかまるのも厭だった。場内を一巡して、またエレヴェーターの前に戻って来て、美々しく飾られている帯地の陳列を眺めていると、美和子が、

「あれ、ハイカラな帯ね。お姉様には少し華美はでかもしれないけれど……」と、海老色の繻し子ゆすに、草花の刺繡のしてある片側帯かたがわおびを指した。そこへ目をやりながら、前川は、その帯の隣にある古風な更紗を、巧みに近代風な図案にした袋帯を見つけて、これは新子に似合うと思つた。

「その隣のは、どうですか？」と、美和子に訊ねると、彼女は生意気そうに、しばし見てい

たが、

「悪くはないわ、少し高そうね。」と、陳列の帯がすだれのように垂れている中に、首を突っ込んで、値段を調べた。

「七十七円だわ。袋帯にしては高いのね。」と、もどつて来た。

「これがいい、これに定め^きましょう。」傍に立っているシヨップガールを、眼でさし招くのを、美和子が、

「あら、お買いになるの。お姉さまいいわねえ。」と、云った。

前川は、今日は夫人が、長唄のお稽古に行っているので、デパートへなど来るはずはないが、しかし万々一ということもあるので、大いそぎで金を払うと、包んでくれるのを待ちかねながら、

「食堂は上へ行きましようか。下へ行きましようか。」と、美和子に訊いた。美和子は、何となく気落ちのした顔で、店員の手から、帯の包みを受け取りながら、

「下がいいわ。お姉さま、羨^{うらやま}しいわ。」と、云った。

七

美和子が、姉を羨んで、しょんぼりしてしまったのを、慰めるため、エレヴェーターで降りながら、

「美和子さんの結婚のお祝いには、何か素晴らしいものを、プレゼントしますよ。」と、お世辞をいった。

「あら、お姉さま、お喋りだわ。そんなことまで、ご存じなの……。でも、まだ分らないの、どうなるか……。いま、ビフテキを喰べながら、お話しするわ。私、ちよつと煩悶してるところなの……。」と、男の子のように、明るくいった。実のところ、前川の如き中年の男にとつては、美和子のような年頃の女の子の、いうこと為すこと、一々が思案のほかであつた。

酒しゃあしゃあ々々と、自分の結婚のことについて、馴染の浅い大人をつかまえて、底を割つた話をするかと思うと、下の食堂へ行つたときは、その話はケロリと忘れたように、自分一人の食事を、わる怯びれもせず、註文して、紅茶一杯でつきあっている前川になぞ、一切気を使わず、プディングを頼んだり、果物を取つたりしているのであつた。

何本目の煙草に、火を点けながら、前川は実感をそのままに、

「美和子さんなんか、煩悶なんかありそうもないですがね。」という、美和子は、子供のように、かんむりを振って、

「大在りなの。おおあそのね、結婚しようっていう人が、愛してくるってところまで、まだ行っていないの。私に対して、ただ遊び相手みたいな気持ちしか持ってくれないんだもの。それが、しゃく癪なの。」

「だって、もう結婚することに、きま定っているんでしよう。」と、美和子の素直な告白に、微笑ましくなって、やさしく云うと、

「それが、とてもおかしいの。あんまり、その人と遊び過ぎてしまって、私お家へ帰らなかったの。それで、その人のママさんに、お家へことわりに行ってもらったの。するとそのママさんが、気を廻してしまって、お母さんや新子姉さんと、縁談なんか始めてしまったの。少し困っているのよ。」

「いいじゃありませんか。遊び過ぎるくらいなら、貴女だってその方かただって、お互に好きなんですよ。」

「私は好き。でも、その方は私が好きかどうか疑問なのよ。その方だったら、新子姉さんをととても好きだったの。今だって、きっと好きだと思わ。」と、アケスケな話に、準之助

は、思わず引かれるように、美和子と視線を合わせて、相手を見つめた。

「じゃアつまり、お姉さまと、愛人関係だったんですか。」と、緊張して訊いた。

八

新子に愛人があったかどうかは、前川にとって、かなり気にかかることだった。

「ええ、そうだったのよ。」と、美和子はアツサリ肯定してつづけた。

「でも、美沢さんって方、^{かた}気が小さくて神経質でしょう、お姉様はデンと落着いている方でしょう。だから、いつまで交際^{つきあ}っていても、あまり発展しないのよ。ところが、この夏、お姉さまが軽井沢へ行ってしまったでしょう。その留守に淋しがりやの美沢さんは、少し^{やけ}自棄で、私と遊んでしまった形があるのよ。……ところが、この頃、たちまちつまんなくなってしまうたの。だって、結婚っていうことになるのと、美沢さん、とてもいらいらしてしまっているの。一しよにいても、ちつとも楽しくないの。だから、私お姉さまのところへ、毎日手伝いに行くのよ。」

「だって、貴女は好きなんでしょう、その人が。」前川は、新子にも関係のあることなの

で、もう一度改めて訊き直した。

「ええ、そりゃ……でも、私フラフラだから、自分でもとても困るわ。お姉さんのお店へ行っている、何だかあんな仕事、ほんとに自分の性に適^あっているような気がして、この頃、結婚なんかどうでもよくなってきたのよ。」

あんまり、物いいが率直で、かえって嘘か真実か、区別がつかないような美和子に、前川は思わず苦笑を浮かべながら、胸の中は、前にいる美和子のことよりも、新子のこと一杯だった。

新子に、つい最近まで愛人があったとして、それが今美和子と結婚しかかっているとしたら、前川はその結婚が滞りなく、早く纏^{まと}まってほしかった。新子の周囲には、愛人らしいものの、翳^{かげ}影も落ちていない方が、のぞましかった。こうして、新子の面倒を見て、いつかどうしようという野心は、神に誓つてないと前川は自分で思っている。また軽井沢で、自然の力と境遇の偶然性に駆られて、ちよつと唇を触れただけでも、その怖い報^{きこ}いが、踵^{きびす}を接してやって来た。だから、懲^こり懲^ごりしている。清浄に、潔く、心持の上でも、その野心の芽を摘み取っているのであるが、しかし自分があきらめているだけに、新子の周囲も、掃^{きよ}き浄められたものであって、ほしかった。自分が足を踏み入れない聖域には、

他人にも足を踏み入れてもらいたくなかった。だからその美沢という男は、早く美和子と結婚してほしかった。

「でも、その美沢さんという方は、いい方じゃないんですか。」と、前川がおだてるように云うと、

「そりやとても。……新子姉さんだつて、随分好きだったのよ。」いたずらつ子の美和子は、知つてか知らずにか、前川を更に心配させるような返事をした。

九

新子が、美沢という男を好きであつたと聞かされて、前川には急に、自責の気持が起つた。二人の相愛関係が破れて、美沢が、美和子の方へ走っている原因には、自分というものがあつたのではないかと思つたからである。自分が、新子に必要以上に、親切にしたばかりでなく、あの思いがけない雷雨の中の出来事のために、二人の關係が崩れたのではないだろうか。自分は、新子の良人おとこにも愛人にも、成り切れなくせに、徒らいたずに新子の運命を狂わせているのではないかしら。そんなことを思うと、自分は今一層、新子を慰め、いた

わる責任があるような気がした。

（あの演劇マニヤの圭子さんと、この恐るべき妹と、新子さんも大変だな）と、前川は考えながら、無邪気そうに、バナナを喰べている美和子を眺めていた。

「ねえ。サエグサへ、一しよに寄って下さる。」

前川は、腕時計を見ながら、「もう、五時ですな。いかがです。貴女が一人で、ゆっくりお買物なすった方が、楽しくありませんか。僕、ご費用だけは差しあげておきますから。」

「ええ、それもそうですけれど……じゃ、こうして下さらない。——サエグサだけ、つき合って下さらない。サエグサから、私をローヤルまで、円タクで送って下さって、それから会社へいらしてもいいわ。」

前川は、苦笑しながら、「サエグサは、すぐ前でしよう。」

「ええ、だって厭だわ。私、お姉さまのために、ここへ来て、もう頭なぞ、やってもらいう暇がなくなつたんですもの。それなのに、私の買物となると、おっぽり出されるなんていやだわ。それに銀座なんか、少しの間だって、独りで歩くの、間がぬけているわ。」前川は、仕方なく肯いて立ち上った。

松屋を出て、電車通りを横ぎり、その洋品店の前で、前川はショウウインドーを見ながら待っていた。美和子は、十分もかかって、自分の好みのハンドバッグを撰み出すと、表で待っている前川のところへ来て、

「ねえ、ハンドバッグと靴とで、お姉さんと一しよに、七十円くらいまではいいでしょう？」

前川は、美和子らしい得手勝手な金額に微笑しなら、「どうぞ。」と云った。

愛情と嫉妬

一

その夜は、特別上機嫌の美和子が、若い会社員風の五人連れの席に一人交じって、十二時近くまで唄を歌つたり、卓子テーブルと卓子テーブルとのわずかな隙で、ダンスをしたり、おしまいには、ハイボールのやり取りをはじめた。男達は、面白がって美和子にばかり飲ませるらしく、美和子はすっかり酔っぱらってしまい、前髪を切り下げている円顔は赤くなって、まるで可愛い金時のようであった。誰彼かまわず、しきりとからんで行く醜態に、新子はひきずるように、二階へ上げたが、しみじみこれでは困ると思った。

一時に店を片づけて、美和子を介抱しながら、自動車に乗ったが、美和子は車が動き出

すと、気持が悪くなつたらしく、水のようなものを、ゲラゲラ吐き出した。

「困りますね。何か敷いてくれませんか。」運転手は、ブツブツ云いながら自動車を止めた。

新子は、妹の浅ましさに泣きたいような気持で、脊^せを撫でてやると、美和子は思いがけなく、運転手に啖^{たんか}呵を切り始めた。

「あなたの車なんか、よごさないわよ。ヨツパライを乗せてるんだから徐行してよ。お金なら、いくらでもまして上げるわよ。」運転手は、苦笑しながら、しかし云われたとおり、静かに走り始めた。

美和子は、姉の肩に身をすりつけて、

「ねえ、楽しいわ。」と、酒臭い溜息をした。

「楽しいもないわ。そんなになつて醜態だわ。明日からお店へ来るのお断りだわ。」

「お姉さまの意地悪！」と、一層新子の胸に、顔を埋めて、甘ったるい泣言を云い始めた。「美沢さんなんてエ、駄目なの。美和子、酔っちゃったから、ほんとのことを云つちまうわよ。美沢さんなんか、心ならずも、私と仲よしになったもんだから、今になって何か云うと、私にばかり責任を被^{かぶ}せたがるのよ。男の癖にイ……」にわかに、しくしくと涙^{はな}をす

すり始めた。

かと思うと、ニコニコ子供のように笑い出して、

「お姉様が、前川さんを好きなわけが、今日はとてもよく分ったわ。あんないい方ないわ。やっぱり、男は四十近い人がいいわね、こちらがどんなわがままをいったってフウワリ受けとってくれるんだもの、いいわ。あたし、お姉さまがつくづく羨しいわ。」

新子は、まるで軌道のない星のように、どこの星座へでも、侵入して来る妹が、つくづく恐ろしくなった。

二

新子は、いくら肉親の妹だからと云つて、許せないような気がして、自分の胸に落ちかかるようになって来る美和子の身体を、グイと押し返しながら、

「何を云っているの。私が、前川さんを好きだとか何とか、そんな卑しい想像はよして頂戴よ。私は前川さんと、ちゃんとお交際つきあしているんですよ。そんな余計なことを云うのなら、もう絶対に、お店に来てもらいたくないわ。」と、色かを易かえるばかりに烈しく云った。

さすがに、美和子も少ししよげて、車が溜池から四谷見附へかかる間、だまっていたが、またケロリとして云った。

「わたし、もう美沢さんなんかと結婚するつもり、ちつともないわ。わたし、思い切つて、スワンの女給になつて、前川さんから月々お小づかいを貰つて、遊んでいる方がよつぽど楽しいわ。」

「美和ちゃん！　あまり出鱈目をするのよしなさいよ。私、あなたが美沢さんと、どうなつていいのか知らないけれども、美沢さんのお母さんが、あんな話を持ち込んで来た以上、そんなに簡単に中止することは出来ないはずよ。女なんて、そんなに軽々しくするものじやなくつてよ。そんなことをすれば、だんだん自分の値打ちが下つて来てよ。」と、運転手には聞えないように、小声ではあつたが、かなり険しくたしなめた。

「だつてエ……」

「だつてじゃないわよ。私だつて前川さんに、お世話になる筋はないのを、眼をつむつて、お世話になつているのに、貴女あなたまでがご迷惑をかけるなんて、手はないじやないの。貴女が、あの方にあまりウルサクするのなら、私あのお店なんかよしてしまうわ。」

「だつて、そりやお姉さまの、つまらない心配よ。前川さんなんて方、お金が沢山あるん

だもの、向うでして下さることを、こちらで心配しなくつてもいいじゃないの。今日なんか、このハンドバッグのほかに、靴をかうお金まで頂いたの。」と、宵に前川と別れてお店に帰つて来たときから、気がついてゐる、あまり気取りすぎて、美和子には、地味じゃないかと思われる鹿革しかがわのヴァニティ・ケースを、とり上げて姉に見せた。

「お金で貰うなんて、下品ね。」

「いいじゃないの。美和子には美和子の考えがあるから、放つといってもらいたいわ。お姉さまは、姉だからと云つて、私のすることに責任を持つことないじゃないの。私は、最初あの方とお店で知合いになつたのよ。お客と女給としてだわ。あの方だって、私個人に興味を持つて、親切にしている下さるのかも分らないわ。」酔つぱらっている故せいもあろうが、姉を姉とも思わぬ不敵な妹に、新子は暗然となつて、もう口が利けなくなつた。

「お姉様ア。なぜ黙つていらつしやるのオ。前川さん、これから毎日いらつしやるよと云つたわ。あたし、これから甘えちやうの。とても、いい人だもの。」

朝風には、もう秋のさわやかな冷気が、感じられた。簀戸すどのかなたに、冴々と青空が、広がっている。新しい生活の最初の馴れない疲労が、ズキズキと背中や後頭部にうずいていた。それに新子は、昨夜美和子のあさましいまでの醜態を見、前川に対する気持を聞かされてすっかり憂鬱になり、床にはいつてからも容易に寝つかれなかった。

妹と一人の男の中に、みにくい争いをするのが嫌さに、美沢は思い切って、妹に与えたつもりでいたのに、子供が玩おもちゃ具に飽きるように、美和子はたちまち美沢を放り出して、新子の生活に侵入して来て、今度は新子を向うに廻して、前川の寵ちようを争うつもりでいるらしい。今度は、身を避けるのにも避けようがなかった。まだ子供だし、なすがままに委せて見ていればよいようなものの、子供とは云え、どこかに逞たくましい機智ひらめが閃き、それに持つ生れた少女魅力ベビィ・エロを備え、何をするか分らない出鱈目さがあるし……。

美沢との関係が、なまじ純潔で、誓いの言葉一つ交していなかったし、唇さえ接したことがなかったため、たちまち妹に奪われてもどうすることも出来なかったように……前川とも、ただ精神的な繋がりだけで、一度の突発的な接吻以外は、何のとりとめた間柄ではないだけに、新子は、妹が前川の身边に、からみつくことは不快だった。

昨日きのうだって、前川と美和子とが、一しよに店を出て行った後は、仕事も手につかないほ

ど取乱していた自分が、自分で分っていたし……。これから先も、自分が、前川には遠慮があつて、思うことの三分の一も話せないのに、妹がああ調子で、渾身こんしんの力を振つて甘えかかつて行つたら……。しかも、あの奔放自在な媚態で……。などと、考えて来ると、新子はいらいらして乾いて来る自分の心を、制しきれなかつた。

これはたしかに嫉妬である。しかもかなり烈しい嫉妬であると、気がつくと、その嫉妬の底に在る、前川に対する愛情に、初めて気がついたように、新子は我ながら狼狽した。これは、今の内に善後策を講じないと、どんな悲しいことになるかもしれないと考え出した。自分がどんなに叱つても制しても、どうなる妹でもないし、母にはむろん手に負えないし……。新子は考え迷つた末、いつそ美沢に頼んで、美和子をしっかりと捕まえてもらうのが、一番いいことだと思つた。美沢だつて、母をよこすくらいだから、結婚してくれる気持はあるはずだし、一度美沢に会つて、美和子に対して、どんな気持を持っているのか、よく訊き質ただした上で、美和子をウロウロさせないように監督してもらおうと思つた。それが、昨夜の内にまとまつた、新子の思案である。

四

新子は、およそ二月ぶりで、美沢に手紙を書くとなると、無理矢理に押し込んだり、駆逐したりしていた感情が、一々新しい生命を吹き込まれたように、心の隅々に甦って来て、とても平静な気持で、美沢に呼びかけ、美和子のことを書き出すことが、出来にくかった。無意味な小唄の小曲を、幾回となくくり返して、口ずさみながら、自分の感情をまぎらしてから、やっと手紙を書き始めた。

久しいご無沙汰、おゆるし遊ばせ。

ご存じのことと思いますが、私すっかり変りましたの。ただ今、銀座のバー・スワンという酒場で傭いマダムを致しておりますの。

突然ですが、妹のことで貴君と一度お話ししたり、お願いしたいことがございますの。それで、近日中にお目にかかりたいのですが、ご都合おしらせ下さいませ。店の方は、四時からでございますから、それまでなら結構でございます。時間と場所は、そちらで決め下さいませ。

書いてしまうと、気の変らぬ内に封をして、ハンドバッグの中に入れてしまった。

新子は、とりとめては、美沢を憎いとも思っていないかったし、恨んでもいなかった。再び、逢い戻りたい未練もない代りに、心の上で、背いたとか背かれたとかいうような、ハッキリした感情はなかった。こうした結果になったのは、自分の心の上にも、一本調子になれなかった責があるし、美沢にも多少の責任はあるが、半分までは妹が悪いのだと思っていた。今では、美沢が妹を引き受けてくれて、良い良人となってくれればいいと、願っていたし、当座には幾分でも、妹の行状を直してくればと望んでいた。もつとも、ジツと眸をやる青空に、滲み拡がる美沢の面影の中には、再び手の届かぬ、貴く得がたい初恋の味が、あるにはあつたけれど……。

午後家を出て、ポストのある所へ来るまでに、(厭だ。美和子のことなんか、成行にまかせて、美沢さんに会うことなんか、よそうかしら)と、新子はハンドバッグのパチンを開けて、手紙を破り捨てようとしたけれど……。

しかし、今は前川の、愛情を底深く蔵した庇護の下に、どうやら息づいている自分の生活を、これ以上美和子に掻き乱されなくなかった。美和子などにどうされる前川氏だとは思得なかったが、しかし自分の方が、美和子に刺戟されて、前川氏とこれ以上、深入り

することの方が、恐ろしかった……。

五

美沢へ手紙を出してしまうと、新子は美沢との気まずい会合を早く片づけたいと、返事が来るのが、気がかりだった。

だが、返事は、その翌日も翌々日も来なかった。

三日目に、新子が三時頃に、お店へ行つて、お掃除をして、開店の準備をしていると、時計が四時を打ったばかりに、フラリとはいって来たお客があった。逆光線で初めはフリーのお客かと思っていると、それが思いがけなく美沢であった。新子は、瞬間、ドギマギしたけれど、すぐ他意のない微笑をかれの眼に送った。しかし、美沢は眉の間に、筋を作つて、少しも笑わなかった。

ソファと椅子に、^{テーブル}焦茶色の卓子をはさんで、二人の間にしばらくの間、沈黙がかぶさつた。やつと、新子は、

「どっか、外へ参りましようか。」と、云つたが、美沢は首をふるばかり……。新子は、

わびしい気がしながらも、

「美和子のことなんでございますが……」と、話を切り出した。美沢は、味気なさあじきそうな眼を、ボンヤリ新子に向けた。新子は、その眼をなるべく意識しないように、

「貴君のお母様からも、お話がありましたし……美和子も、貴君と結婚したいように申しておりますんですけど、……この頃美和子は、まるで貴君とも、全然お目にかかっていないようだし、一体どうしたんでございましょうか……」

美沢は、無言である。つねさえ、あまり口数をきかない人が、何か一杯抗議を盛った沈黙で、向い合われると、新子は勢い、自分一人で喋りつづけるほかはなかった。

「それに、この頃の美和子は、まるで結婚前の娘とは思われないようなことばかり致しておりますの。頼みも致しませんのに、この店へ手伝いに参りまして、毎晩遅くまで、お客さまの相手をして、酔っぱらったりなんか致しますの……。貴方あなたのお話があるのに、何ですか、することなすこと、私には腑ふに落ちないことばかりですの……。だから、一度貴君にお目にかかつて、貴君ご自身の美和子に対するほんとうの気持を、お訊きしたかったんですの。」

しかし、美沢はまだ無言であった。

「私も、いろいろお話しいたしますわ。貴君のお気持も、うかがってもいいんですわ。…とにかく、改めて美和子の姉として、貴君にお願いしたいと思ひますの。」

美沢は、やつと苦笑して、

「お互に、あさましい話をするようになりましたね。」と、云った。新子とともに、やや笑った。

「だって、仕方ありませんわ。」

（貴君も、私も同じように失策をしたんですもの）と、後の方は心の中で云った。

六

二人とも、やや核心にふれた物云いをしたので、思いがけなく、心の角かどが除とれ、新子は急に話しやすくなった。

「美和子ね。まるで、とり止めがなくて、手こずっているんですよ。貴君が、結婚して下さるおつもりなら、貴君に監督をお願いしようかと思つて……。私の云うことなんか、てんで聴かないんですもの……」新子は、以前の親しみが、半分以上、甦甦ったような物云い

が出来た。

「いや、美和子さんなんて、誰の手にだつて負えるもんですか。あの人の気持なんか、僕になんか分かりませんよ、千変万化ですよ、僕なんかいい加減、引っぱり廻されていたんですよ。……」そう云つて、美沢は、改めて眉をひそめた。

そう云われてみれば、おとな温和しく純真な美沢に、美和子を操る力など、最初から無かつたことに、今更のように気がついて、新子は更に、味気ない気になった。

「それよりも……」

美沢は、じつと新子の眼を見つめながら、

「僕は、貴女のお気持が聴きたいんですよ。貴女は、どうして軽井沢から、帰つて来ながら、すぐに僕のところへ、手紙なり姿なり見せてくれなかつたんですか。」と詰なつて来た。「その時、すぐにも貴女に会えたら、こんな妙ちきりんな三角関係なんか、出来なかつたんですよ。僕も、いけなかつたですけど、新子さん！僕は、貴女に洗いざらい打ち明けて、美和子さんとの話は、打ち切りたいと思つてやつて来たんですよ。」

新子が、何か物云う隙もなく、後をつづけた。

「美和子さんは、貴女とはまるで違う。明るくて、無頓着で、超人的な魅力を持っていま

すよ。それだけに、誘惑されたり、征服慾を誘われたりするものの、心の底からの愛情の動きなんかちつとも感じられませんね。あの人は、心を持たない女ですよ。結婚するには、感覚的な刺戟や、性的魅力の有無などということよりも、心の愛情が一番大切なんじゃありませんか。あの人は、ただあそびのお友達ですよ。ほんとに、心を委せておけるような……」

「でも……貴君のお母様のお話では……」

「母のことなんか云わないで下さい。美和ちゃんは、あんな年寄なんか、掌中に丸め込むのは、お手のものじゃありませんか。それも、僕をほんとうに愛しているからじゃなく、ただ興味本位の一時のお芝居なんですよ……だから、もう飽きてしまつて、僕のところへなんか寄りつかないじゃありませんか。」

藪を突ついて蛇！ 美和子の煩わしさを突き去ろうとして、思いがけなく、美沢との煩トラブルラブルをつつき出した形である。

美沢も、なお言葉をつづけた。平生、口数の少いだけに、こうなるとその切々とした述懐に、力が籠こもつて来るのである。

「貴女が軽井沢へ行かれた後、不意に美和ちゃんに、訪ねて来られて、その晩か次の晩に、接吻をしてしまつて失敗しまつたと思つたんです。何の深い考えもなく、全く突発的な出来事だつたんです……しかし、僕は、貴女にすまないと思ひました。」

そう云われると、新子は自分をアテこすられているようで、身が竦すくむ思いがした。しかし、（私も、それと同じことがあつたんです。全く突然で、深い考えもなく……）とは、告白できなかつた。

美沢は、新子の表情が易かわつたのを、自分に對する非難だと思つたらしく、

「だから、僕は貴女が、お帰りになるのを待つて謝ろう、いさぎよく貴女の制裁を受けようと思つていたのですが、貴女は美和ちゃんから、どういふことを聴かれたのかもしれないが、今日まで一切何も云つてくれないでしょう。勝手なうぬぼれかもしれないが、口に出して云わなくつても、お互に愛人同士だと思つていただけに、貴女の無言は、貴女の氣持を見失つたように思われ、ボンヤリしてしまつたんです。それに、僕は自分で犯した罪があるだけに、自分の方からは凶々しく、貴女の方へ働きかけることが出来なかつたので

す。その内に、貴女と前川さんとが……あの方、前川さんでしよう……帝劇から出るころを見てしまったんです。失恋とは、こんなものかなあと思うほど、みじめな気持ちになつてしまつたんです。美和ちゃんとのことなんか、あの人から渡される芝居の役柄のような立場を、苛々いらいらしながら、勤めていただけですよ。」

言葉づかいは改まつていたが、心のままを素直に打ちあけられて、新子は悲しかった。軽井沢から、帰つて来て、すぐにも美沢のところへ行かれなかつたのは、自分にも美沢と同じあやまちがあつたからである。

美沢が苦しんでいたくらいは、自分も苦しんでいたのだ。と、急に泣けるくらい、悲しくなつて来たのをこらえて、

「ごめんなさいまし……」と、云つた。

「貴女は何を謝るんですか。」

美沢は、駭おどろかされたらしかつた。美沢は、あやまつてはもらいたくなかつた。謝つてもらうかわりに、許してもらいたかつた。

（そう。美和子のことなんか、どうせあんないたずらつ兎相手のことですから、何とも思つていませんわ）と、云つてもらいたかつた。

しかし、新子の心に、前川の落している翳影は、かなり大きかった。新子は、自分の心持を打ちあげ、お互に許し合つて、三月前の二人に帰るべく、あまりに複雑した気持になつてしまつていた。

八

「貴女が謝ることはない。僕は、ちつとも貴女に謝つてもらおうと思つて来たんじゃない……悪いのは、僕だもの。失策をした僕としては、勝手な云い草だけれど、僕に過ちがあるにしろ、貴女が一度も僕を詰らずに、冷然としているんで、僕は何だか貴女が恨めしくなつてしまつたんだ。貴女とは、お互に随分好きだなんて、思つていたことが、全然僕の独り合点だつたんだと思つた。すると、何から何まで厭になつてしまつて……」

そう云いながらも、美沢は自分の云いたい気持が、ハツキリ掴めなくなつたように……自分に対しても、新子に対しても、もの足りなさや、苛立たしさが、湧き返つて来たように、綺麗な眉や眸を、高い鼻の上へ、きゅつと寄せてしまつた。

だが、美沢が何を求めているか、何のために苛立たしくなっているかは、新子にはよく

分っていた。つまり、自分の愛である。どんな形式でもいいから変らざる愛を示す一つの言葉である。それが、分つていながら新子は、素直にそれを与えることが出来なかった。

美和子のために、新子は美沢をあきらめてしまったはずであった。美和子と醜い争いをするのが嫌で、美沢を美和子に呉れてやったつもりでいた。しかし、もしそれならば、美沢が美和子との関係を告白し、それが感覚的な一時の過ちであったことを謝っている以上、……また美和子が、美沢に対して、ケロリとしてしまっている以上、美沢を許して、以前のような愛人関係に……いな雨降つて地豎まるように、前よりもっと具体的な愛の誓いを交してもいいはずではないか。新子自身さえ、それがそうなるべきはずであると思いなから、気持はその方へ、ちつとも動いて行かなかつた。

「貴方のお気持よく分つていますの。でも、私軽井沢から帰ると、いきなり美和子から聞かされてしまったんでしょう。その上お母さままでいらしたんでしょう。それですっかりもう決心しましたの……それに、私も母を抱えておりますし、あんな出鱈目な妹を持っていますし、姉は家のことなんか、かまってくれませんか……結局、独立して何か商売がしたくなつてしまつて……」

「じゃ、つまり貴女は前川さんに、この店を出してもらつたんですか……」

答刑ちけいを受けている囚人のような声で、切れ切れに云う美沢の言葉には、言外の意味も含まれていて、新子はギョツとした。

九

前川に店を出してもらったかという露骨な問いは、新子のそこだけは触ってもらいたくないと思つている心の点に、触れたので、新子は咄嗟とつさに答えられず、だまって卓子テーブルの上を目を落した。

そうした態度は、つまりその質問を肯定していることなので、美沢はすっかり絶望的になつてしまつて……。

「貴女のお手紙にある、変つたと云うのは、どういう意味ですか……。」と、つい皮肉な怨え言んげんを云つてしまつた。

「それは……」

何か適当な弁解をしようと思つたが、結局前川との微妙な関係は、とうてい美沢には理解してもらえそうもないので、

「つまりバーなんかに出るようなことになったことを云ったのですけれども、私別に前川さんに、ヘンな意味でお世話になんかなくていませんわ。」と、答えながらも、新子の声は心持ふるえていた。美沢は、すぐもろく折れて、

「いや、こんな質問は、僕としては余計なことでした……大変失礼しました。しかし、貴女がもう、以前のお心持に還かえって下されないことだけは、僕に分ったような気がします。……そういう風に考えてもいいんでしょね。」

これは、美沢としては、最後の質問だった。

しかし、新子の唇は、かすかに動いただけで、言葉は出なかった。

美沢は、新子の心の奥が、のぞかれたような気がして、索然としてしまった。

こんなに緊張した空気の中へ、いつ戸外からはいつて来たのか、美和子が、

「あら、真暗ね！」と、扉口で、電燈のスイッチを押そうとしている声が出た。新子はハツとなつて、にじみ出していた涙をかくした。

いつか夕闇が迫つて、部屋の中は物の文色あやめも分らないほど暗くなっているのを、二人とも気がつかなくなつたのである。電燈の光は、ボックスにさし向いになつて二人の姿を、美和子の前に、ありありと照し出した。

「まあ！ 駭おどろいた、美沢さんとお姉さまなの！ まだお客さま、誰も来ないの。」

「……………」新子は、妹の言葉など、耳にはいらなかった。

美和子とても、さすがにその場の空気に馴染みたいものを感じて、少々鼻じろんだような表情であったが、すぐ美沢の脇へ腰を降して、涙の跡の歴ありあり々と見える、姉の顔を見やりながら、

「二人で美和子の悪口を云っていたの？」と、二人の気持を救い、併せてちんにゆう 入いりて来た自分の気持も救おうという、よく考えた、さりげない言葉であった。

歩み寄る心

一

しかし、姉も美沢も、そんなことは縁が遠いと云うように、笑いもしなければ、美和子を見ようとしなかった。美和子も、取りつく島がなく、マッチを卓子テーブルの上で、カタカタと、弄もてあそびながら、急に大人っぽい片頬笑いを浮べると、

「美沢さん。この間中じゆうから、姉さんと三人で、話をしたいって云ってらしたんだから、ちようどいいわ。ねえ、いい機会だわ。あたし瘦我慢うせまってことが、一番きらいだわ。あたし、潔いさぎよく退却するわ。お姉様達二人で、仲直りなさいよ。」

年も行かぬ、打見うちみには子供らしい美和子だったが、その笑い方と云い、言葉と云い、涙

ぐんで、ゴタゴタ云っている美沢や姉を 憫 笑し、しらじらしく眺めているというよう
な、底知れない大胆さが含まれていた。

「美沢さんもお姉さまが思い切れないし、お姉様だつて、瘦我慢で超然として、いらつし
やるなんて、可笑しいわ。美和子如き問題じゃないわ。バツが悪かったり、つまらない意
地を張つてるなら、美和子が握手さしたげる……」と、顎にかかっている美沢の手を、い
きなり左の手で掴みかかるのを、美沢はかるくふり払うと、それをキツカケのように立ち
上つてしまった。

美沢の態度が、唐突だつたので、新子もハツとなつて立ち上つた。

「さよなら、美和子さん、僕は君とはもう会わないよ。いいだろう。それから、新子さん、
貴女とも、もう会う必要はありませんね。」

美沢の顔は、能面のように、無表情であつた。

「いいわ。結構よ。」美和子は、亢然と、それに答えると、一散に奥へ走つて行つた。

新子は引き止める口実もなく、何もいうこともないのに、このまま別れるのが、何とな
く悲しく、別れるにしても、お互に心をいたわりながら別れたいと思うと、今五分でも十
分でも、話がしたく、ズンズン扉口の方へ歩き去る美沢の後を追うて、横飛びに戸外へ

飛び出すと、男の足早く、もう五、六間も歩き去っていた。

「美沢さん！ 美沢さん！」あたり 四辺を気がねしながら、呼んでみたが、美沢は瘦せた肩を、そび 聳やかしながら、後もふり返らず歩きつづけた。

「ちよつと！ ちよつと！」新子も、小走りに後を追いかけたが、美沢はその四つ角へ出ると、駐車場の円タクの一つに、相場も定めきず、

「まあ！」と、おどろ 駭く新子を尻目に、飛び乗ってしまった。

二

美和子は、姉と美沢とが、前後して戸外へ飛び出してしまうと、美沢とこのまま別れてしまうことが、何となく劇的で、かえって胸の轟くような亢こう奮ふんを覚えて、彼女らしく激しい音楽が聴きたくなった。彼女は、エレクトロラの蓋を払って、コンチタ・スペルビアのスペイン歌謡曲をかけると、自分も小声で共に和しながら、酒場の中を、一、二度行きつもどりつした。

その時、扉ドアの開く音がした。美和子は、姉でなかったら、女給のどちらかだろうと思っ

て振向きもしなかった。

「今晚は！ いいご機嫌ですね。」それは、思いがけなく前川だった。

「あら、いらつしやい！」たちまち、美和子は何事もなかったような朗らかさに返って、
明るいそうぼう双眸そうぼうに一杯の微笑みを湛たえて、

「お姉さまかと思つたわ。今日は、お早いのね。」

「お姉様は、どうしたんです！ 今日は、まだ来ていないんですか。商売不熱心ですね。」

「ううん。違うのよ。」美和子は、含みのある微笑を浮べながら、さりげなく、

「おかけにならない？」と、前川に椅子をすすめた。

前川が、ソファに腰を下すと、美和子も近々とかけながら、

「お姉さま、今しがたまで居ただけれど……貴君あなたが、まだいらつしやらないと思つて……

……

と、思わせぶりな物云いである。

「買物にでも……」

「そうでもないの。」

「ほほう。じゃ、お友達でも……」

「ええ。つまりお友達だわねえ。」

「そうですか。」と、前川が素直に受けているのが、物足らず、

「云つちや、お姉さまに悪いかしら……」と、前川の気を引いておいてから、

「美沢さんね、ホラお姉さまの愛人だった人ね、その美沢さんが、さつきここへ来ていたの。そして、一揉めひとめしたのよ。」

前川は、さすがにいい気持がせず、

「揉めるって、どうして……」やや、せき込んで訊ねた。

「つまり、美沢さんは、私と結婚する気持なんかないのよ。ほんとうに、愛しているのはお姉さまで、私とのことなんか、一時の戯れだと云いに来たんだわ。ふふふ……」

美和子は、わざと仰ぎょう山やまなしかめつつらをして、低く笑ってみせた。前川は、不快なシヨックを感じて、云うべき言葉がなくなった。

「それで、お姉さま、美沢さんを追って出て行ったのよ。今頃、しんみりと、どっかの裏通りを散歩してるんだわ。私、つまらないわ。」

そう云うと、美和子はエレクトロラにかけ寄って、コンチタのレコードを、アンコールした。

三

街角に、美沢に取りのこされた新子は、ぼんやりしている間に、

「ハイ・ヨウ！」と、目の前を走りすぎる、お座敷へ急ぐらしい芸妓げいしやをのせた人力車の梶棒に、危うく突き飛ばされそうになって、身を避けると、場所にも在らず、悲しくなつて涙がユルユルと流れて来た。

こんな気持ですぐお店へ帰つて、美和子と顔を見合わせるのがいやになって、銀座の電車通りの方へ、一人フラフラと歩き出した。

一思いに、ワツと泣けてしまえば、さぞせいせいするだろうが、いろいろ複雑な気持が入り交じっているだけに、悲しみは重く鈍く、胸にわだかまっています、何も持っていない両手に、頼りない淋しさをそそられて、両方の袖口に、手を差し入れて、我とわが胸を抱くような姿勢で、新子はネオン・サインのにももなく、続いている銀座の街を、それから二十分ばかり、ぼんやり歩いた。やがて致し方のないことであるというあきらめに、悲しみを心の片隅に追いやつて、もう客も来ているであろうバー・スワンへ、戻るべき道を辿たど

つたのである。

お店へ帰ってみると、客は三組ばかり来ていたが、美和子はと思つて、見廻すと、先刻まで自分と美沢とが、さし向いになつて坐つていたボックスに、思いがけなく前川と、さし向いになつて坐つていたのである。

前川が、こんなに早くと思つていかなかっただけに、新子は少しあわてたが、前川が向うむきになつているのを幸い、外のお客にはちよつと目礼しただけで、二階の自分の部屋へ逃げるように上つて来た。

さつきの美和子の、美沢に対する態度を見ると、もう美沢などには何の執着もないことが分つたので、また美和子らしい出鱈目さで、前川に対してどんなことをやり出すかも知らないと思うと、一刻も油断のならぬような気がしたが、といつて美和子と争つて、前川のご機嫌を取ることは、死んでもいやだと思つたし、美和子が前川の卓テーブルへ行つてゐる以上、近づくのも汚らわしいような気がしたが、それでも、そのままに傍観するのにはあまりに焦いらいら々として来る心だつた。新子は、それがハッキリ嫉妬であることが、自分で分つた。なにか心も身体も疲れて、壁に背をもたせ、両足をなげ出して坐つていたが、階下したのことが気にかかりながら、どうしても降りて行こうという気持にはなれなかつた。

二十分間もそのままの姿勢でいると、

「お姉さま、降りていらつしやらない？ 皆様お待ちかねよ。」と、声だけは天真爛漫に、美和子が階下から呼んだ。

四

新子が、ありあまる思いで黙っていると、

「お姉さまア！」と、呼びかけながら、たちまち階段を上って来る騒々しい足音がした。

その足音を聞いている内に、新子の胸の中には、自分でも思いがけないほどの激しい憤りいきどおを、妹に対して初めて感じた。

「お姉様！」扉ドアの外で、もう一度呼んだ。

「何をして、いらつしやるの？」と、云いながら、美和子が姿を現した。新子は、なお顔をそむけたままで黙っていた。

「前川さんも、さつきから見えているのよ。知っていらつしやるんでしよう。皆さん、お待ちかねだわ。」美和子が、口を利けばきくほど、それだけ鬱然と新子は、この妹が憎く

なつた。

努めて、静かに、しかし冷やかに、

「貴女、お家へ帰ってくれたらどう——もう、ここへ来てほしくないのよ。私は……」
と
いった。

美和子も、さすがに、姉の厳しい様子に、ちよつと目を逃そらすようにして、真面目な表情をしたが、すぐに不貞ふてくさ腐れて、白々しく、

「へえ——。美沢さんとの喧嘩の、飛ばつちりが、わたしに来るの？ 迷惑だわ。」と、
いった。

新子は、自分が男だったら、何か手ひどい一言をいって、部屋の外へ突き出したい衝動を感じた。

「お姉様が、帰れといったって、階した下のお客様達は、みんな美和子びいきだわ。」美和子は、そんなことまでいった。

言語道断な気がして、新子が蒼白い顔で、グツと黙りつづけているので、美和子も仕方がなく、

「降りていらつしやらないのならいいわ。その代りに、前川さん、お帰りになっても知ら

ないわよ。」

黙っている新子にも、気になるにくりしい捨台詞すてぜりふを残して、サツサと下へ降りてしまった。階段の中途からは、はやいつも口ずさむ小唄になり、わざと最後の二、三段は飛び降りたらしい騒々しさと、自分のことを何かおどけて報告したらしく、階下のお客達の笑う声や、美和子の甲高い声がかきこえて来た。新子は、身内の慄ふるえるような口惜くやしさを感じた。美和子など、もう妹とは考えまいと思つた。姉の幸福なら、どんなものでも、立ち入つて来て自分も味わわねば承知せず、しかもそれを制せんとする姉の手を、チクチクと針で刺す——奇怪な動物のようにさえ感ぜられた。新子は口おしさといきどおらしさで、涙が流れ出すと、たちまち糸の切れた珠数じゆずのように止め度なく落ちた。

五

泣いている内に、頭が熱して来て、しまい終には、悲しさも口惜しさもなく、ただ無暗むやみと涙が出て来た。自分でも、こうしては、止め度がないと思つたので、気を転じるために、階下へ降りて行ってみようかと思ひながら、一時涙を納めてみたが、頭の芯がポーツとし

ているし、こんな気持では、誰の話相手にもなれないと思ったので、（もう、階下へ行くのは止そう）と、新子は、狂的に頭を振りながら、また泣けそうになっていた。

三十分も経つてから、やつと涙を納めて、考えると、いつか美沢のことは忘れて、階下にいる前川の姿だけが、大きく心の中に浮んでいた。

こんなに、自分が降りて行かないのに、前川さんは、何かの方法で、自分のことを訊ねてくれてもいいのといったような、甘えたような怨み^{うらみ}っぽい気持で、また涙が出そうになった。

それとも、前川さんは、もう帰ってしまったのかしら、そうとすれば少し薄情な、と思つた。

美和子が、つまらないことを云つて、前川が気を悪くして、帰つたのではあるまいかと思つと、不安な気がして、容子を見に降りて行こうかと思つたのだが、しかし美和子の声^{こゑ}がきこえて来ると、また降りて行くのが、いやになった。

子供に返つたような、新子自身にも、どうにもならない気持だつた。

しかし、ともかくも、顔を直しようと、鏡台の前に腰をおろした。重い椿の花^{はなびら}片のよう
に、眸^{まゆ}が泣き腫れて、すべすべしていた。

そのとき、いきなりノックの音がしたので、新子は、ハッと我に返った。

足音も、気配も、感じなかったのに、……もう一度ノックが続いた。

（前川さんだろうか。こんな顔しているのに、困るわ）と、思いながら、しかし嬉しくてたまらなかった。

（おはいり下さい！）と云おうと思ったが、もしも美和子であつたら、シヤクだと思ったので、立つて行つて、扉ドアを開けると同時に、

「どうなさつたんですか。」と不安そうに訊かれて、新子はやっと微笑しながら、かぶりを振った。涙でよごれた顔もかまわず、むけながら、

「お帰りにならなかつたんですの？」と、云った。

「帰れますか。心配で……しかし、ほかに客がいるのに、僕が上つて来たら、可笑おかしいので、苛いらいら々しながら、下で待つていたんですよ。」と、云いながら、新子の傍へ坐ろうとするので、新子はあわてて片隅に片づけてあつた椅子を取り出して、前川にかけさせた。

妙に興奮している新子は、ただ前川が自分のことを不安に思つて、上つて来てくれたことだけで、無上に嬉しく、言葉には云えぬ歓びを、微笑で示すほか、術すべがなかった。

六

思ひ切り泣いた後の、開け放しの心を、のぞかれているような恥かしきで、ほほえ微笑んでいたが、新子は間もなく、緊張した、不安げな準之助の無言に、何か自分の方で、云わねばならないことを感じた。

「あのね。美和子が憎くて、泣いてしまいましたの。みつともないでしょう。」と、少し甘えて手を頬に当てながらいった。

準之助は、キャメルの灰を、無意識に、畳の上に落しながら、

「もつと、ほかのことがあつたんでしよう。美和子さんから聞きましたよ。どうなすつたんです？」と訊いた。

新子は、首を振りながら、ふとぶつつかつた準之助の眼の中に、いつの間にか、愛人同士らしい複雑な表情が宿っているのを見て、あわてて眼を逃そらせながら、自分でもいい加減な返事の出来ない気持になりながら、その場合無難な返事として、

「美和子が、何を申し上げたのでしょうか？」と、彼女の方から訊ねてみた。

「美和子さんの話では、美沢さんという方が、さつき見えたそうですね。」

「ええ。」と、新子は、素直に肯うなずいた。前川は、そこでちよつと躊躇ちゆうちよしていたが、

「その方は、美和子さんと結婚なさるはずになっているが、貴女は以前、その方が好きじゃなかったのですか……」と、いつて、あわてて後をつづけた。

「もつとも、僕が、そんなことを、お訊きする資格は少しもないんですが……」と、弁解した。

新子は、前川に対して、気持の上で、いつわりをいつても、仕方がないと思つたので、素直に柔らかに微笑みながら、

「ええ。」と、うなずいた。

「じゃ、貴女が軽井沢へ来ていられた間に、その方と美和子さんが仲よくなつてしまったわけですか。」

「ええ。」

「じゃ、こんなことは、僕として自惚うぬぼれているか、しれませんが、僕があんな軽はずみなことをしたために、貴女と美沢さんとの間が、変になつたというのじゃないでしょうか。もしそうだと僕はたいへん心苦しいんですが……」

しかし、前川のぎごちない言葉半ばに、新子は静かに首を振つて、打ち消した。前川は、

だまつていた。

新子は、もつと前川から、いろいろなことを訊かれたく思ったので彼女は静かに眼を伏せていた。

「じゃ、美沢君の気持が、美和子さんの方へ行つたのですか。」

新子は、かすかに首を振りながら云つた。

「それでもありませんの。」

「じゃ、……」

前川は、何か云おうとして、じつと新子の双眸を見つめた。

七

「じゃ美和子さんが、あの調子で美沢さんに働きかけるので、貴女が身を引かれたという訳ですか……」と、前川は初めて、事の真相に触れて来た。

「ええ。まあ、それもありますの……」新子は肯きながら、静かにいった。

前川は、新しい煙草に、火を点じながら、やや厳格な調子で、

「しかし、貴女が本当に美沢さんが好きなら、何も美和子さんのために、身を引くには当らないじゃありませんか。それに、美沢さんという人は、もちろん貴女の方が好きなんでしょう。こんなバーなんか、お廃よしになつて結婚なさればいいじゃありませんか。」前川は、出来るだけ公正でありたいらしく、感情を殺していった。

「まあ、貴君まで、私をいじめていらつしやるわ。そんな好きだったら、たとい相手が妹だつて、身を退ひいたりなぞ致しませんわ。」新子は、初めて自分の心をうち明けた。

「じゃ、問題はないじゃありませんか。そんなに、瞼まぶたの赤くなるほど、泣くには当たらないじゃありませんか。」乱暴にいいながらも、胸の中には、火のように、いとおしさが、こみ上げて来ているのだった。

「あら、だつて——美和子は、美沢さんをほんとうに好きでもないくせに、誘惑したように……今度はまた！」と、いつて新子は、その平生の賢さに似ず、なまめかしいまでの羞しに……
恥ゆうちに、もだえて両手で顔を掩おほうた。

「今度は、またどうしたと云うんですか……」

「今度は……羞かしいわ。」

前川は、新子の云おうとして、いることが分っているに拘らず、それを新子に云ってもら

いたい慾望に燃えて、

「今度は、どうしようと云うんですか。」

新子は、顔から両手を離し、その熱くほてっている頬を撫でながら、

「だって、あの子出鱈目なんですもの。貴君にだって、どんなことをするか、分らないんですもの。さつきだって、私が階下へ降りないと云うと、じゃ前川さんがお帰りになっても知らないなんて、憎まれ口云うんですもの。私が、持っているものには、すぐ手を出たがるんですもの。とても憎らしいわ。」

美和子を憎みながらも、いじらしい媚態の内に自分に対する愛情を告白している新子を、前川は限りなくいとおしく思った。

「新子さん、美和子さんなんか、問題じゃないじゃありませんか。僕がどんなに貴女のことを思っているか……」

前川は、今まで抑えに抑えて来た激情が、一時に溢れ出して、前後不覚になると立ち上って、壁によりかかっていた新子をしっかりと、自分の方へ抱き寄せた。

夫人策動

一

十月になつてから、いくらか日が詰まっているとはいへ、七時といへば、まだ夕暮の、そこはかかないあわただしさが漂っているのに、広い邸の中はしんとして、寂しいほど静かであった。

外出姿の綾子夫人は、三面鏡の前に腰かけて、粉を落さないように、もう一度近々と鏡に顔を寄せて、白粉をつけ直しながら、

「ツル。ツルや。」と、激しく隣室にいる女中を呼んだ。緊張した表情で、扉口にかしこまった女中へ、

「もう一度、会社へ電話して、何時頃お帰りになったか訊いてよ。」と、叱りつけるような口調で命じた。女中は、倉皇そうこうとして下って行った。

知合いの医学博士の夫人が遊芸好きで、ちようどいたいたいけな祥子さちこくらいの女の子に、本式に日本舞踊を習わせていて、その踊りの師匠の花柳何某なにがしの春秋二度の発表会に、今日がその子の初舞台である。

帝国ホテルの演芸場へ、お義理に引き受けた切符、日頃の交際の手前、ちよつとだけは顔出しをしなければならなかった。

一人で行くことに決めていたのだけれど、出がけに急に気が変つて、その子の踊りだけを見ればよいので、それが終つてしまった後の時間潰しつぶに、良人おととと一しよに銀座でも歩こうと、急に良人を誘う気になり会社へ電話をかけさせた。と、お帰りになったという。食事をすませて来るのかと、一時間ばかり待ったのに、前川はまだ帰って来ないのであった。わがままな、憤りいきどおやすい夫人は、じりじりして来、こうなつて来ると妙にしつこく、良人を残して外出することが出来なくなつた。

電話をかけに、下へ行つた女中が妙に遅いので、自分も階下に降りてみると、扉ドアの半開きになつている電話室から、

「はア。まだお帰りになつていらつしやいません。」と、いう別な電話を受けているらしい声が、また、じりじりと癩癩かんしゃくにさわつた。

「もう多分、お帰りになるだろうと思ひますが、ハッキリしたところは……」と、背後に、夫人の気配を知つてオドオドと、受けているらしい女中に、

「誰から？」と、激しく訊いた。

「はア、うかがつておきます。」となお先方へ返事しているので、

「誰だつて訊いているのに……」と、小声で烈しくいうと、女中はあわてて送話器に、手をあてながら、

「南條様とおつしやる方でございます。」と、小声でいった。

「南條！ 女の人？」

「はい。」夫人の嶮けわしい顔色に、女中はわがことのように顫ふるえていた。

「お貸し！」夫人は受話器をひつたくつた。

前川夫人は、女中を押しのけながら、

「もし、もし……」と、きびしい口調で呼びかけた。

「こちらは、ぜひ二、三日の内に、お目にかかりたいんですの。だから、ぜひご都合を伺つておいて頂きたいんですの。お願いします。」相手は、まだこちらを、女中とばかり思いなながら、電話を切ろうとするのを、

「もし、もし、あなた貴女、どなた誰方です。」と、夫人は鋭い氣勢で問いかけた。相手は、語調の急に変つたのに、気がつき、少々まごつきながら、

「あら、先だつて、伺いました南條圭子と、おっしゃって下されば、ご主人はご存じでございませう。」と、云つた。

頭に在つた新子とは違つているし、声もたしかに、新子ではないし、しかし夫人は語調を変えず、

「もし、もし、南條圭子さんですつて！ 私前川の妻の綾子ですが、主人にどんなご用でございませうか。」と、切口上で訊くと、

「あら……」と、小さく、しばらく間を置いて、

「まあ、とんだ失礼を致しました。まあ奥さまで、いらつしやいますか。私、お宅にお世

話になっていました新子の姉で、ごございますの。妹が、いろいろお世話になりまして……と、言葉が改まった。

「まあ、新子さんのお姉さま。そうですか。それは、とんだ失礼を……あの主人に、どんなご用でございますか。」

姉が主人と交渉があるとすれば、妹の方がより以上に何かあるかもしれないと、女らしい敏感さで、ピンと神経を緊張させた。

「あおう、劇の方の後援をして頂いておりますの。」

「何でございますって……」

「劇、あのお芝居でございますの。私達、お芝居をやっておりますの。」

「新子さんも……」

「いいえ。私だけ……」

「まあ……それは。」

「はア、前川さんには、随分お世話になっておりますの。九月の公演にも、切符を沢山引き受けて頂きましたの……」

姉を、そんなに後援するのは、妹と何かある！ 夫人の心には、もう嫉妬の焰ほのおが、えん

えんと燃えながらも、言葉だけは、いよいよ丁寧に、

「そうですか。それは、ちつとも知りませんでした。私も、劇の方は、嫌いじゃないのです。前川から、何も話がありませんでしたから、ちつとも存じませんでしたの。でも、劇のお話でしたら、私も、出来るだけのことを、致しますわ。今、主人は、いませんけれどいらつしやいませんか。」

姉を引き寄せて、目ざす妹の消息を知ろうという夫人は、にわかには友達のような親しい物云いをした。

三

学問はあつても、人の好い圭子は、たちまち嬉しそうに、

「ありがとうございます。明日でも、ご都合がよければ、伺わせて頂きますわ。」と、云うのを、

「これから、すぐでもいいわ。その代り、すぐいらつしやいませね。」と、夫人はさり気なく誘った。

「でも、夜分でございますから……」

「こっちは、少しも構いませんわ。どうぞ……その代り、なるべく三十分以内にね。」

「じゃ、うかがわせて、頂きますわ。」と、電話は切れた。側に、おずおずと立っている女中へ、

「もう、会社の方へ、電話しなくてもいいわよ。」と、云った。女中は、まだオドオドしながら、

「一度かけましたんですけれど、お話し中でお待ちしている内に、今の方から、お電話がございましたので……」と、相すまなそうな女中の云い訳を、背中で聴き流しながら、二階の部屋へ帰って来ると、綾子夫人は、もう一度鏡の前に、苦っぽい笑いを浮べて、腰をかけた。

もう、四、五年前から、夫婦らしいことは、年にいく度もないという前川である。それだけに、外に女を作るような良人ではないと、夫人は信じていた。もちろん、夫婦生活は不満であった。夫人は、前川氏を意地悪く、真綿で首を締めしめるような苛め方いじをして、つまり精神的にサジズムによって、その不満を癒いやしているような傾向があった。

南條新子に対して、前川が何となく、好ましい感情を持つていたから、事に

かこつけて、暇を出した。二人の間は、それぎりだと思っていたのに、思いがけなく、新子の姉という女からの電話である。姉にまで余計な後援をしているとすれば、新子にはどんな後援をしているか、知れたものではない。その上、気がついてみると、この頃前川の帰り方が、以前よりはずーっと遅くなっている。一昨夜も、自分が歌舞伎から帰ってみると、良人の容子に、自分より、ホンの一足前さきに帰つたらしいところがあつた。

(これは、とんだ大きな尻尾を掴んだかもしれない!)と、夫人は憤りいきどおとともに意地の悪い快感を覚えて、何も知らぬらしくあわてて飛んで来る新子の姉を待つ気になつたのである。電話の容子では、与くみしやすいと見て、少し調子を合わせながら、新子のことを洗いざらい、訊ただき質してやろうと考えたのである。

四

新子の姉を待つているうちに、前川夫人は何か思いついたように、呼鈴ベルを押して女中を呼んだ。

「いまの電話の人、ちよいちよい来たことあるの?」と、やや優しく訊ねた。

「いつか一度、いらしたことがあるそうですが、私はお取次ぎいたしませんでした。九月中に、一、二度お電話がかかりましたことは、存じております。」女中は、まだ恟きようき々ようとしていた。

「そうお。」と、顎であちらへと示しただけでももう顧みず、また鏡に向ったまま、考え始めた。

女道楽の主人が、嫉妬ぶかい夫人を、操る手管を考えるように、夫人は、良人と新子と新子の姉との三人をどんなに扱うべきかを心ひそかに考えていたのであった。

これは、前にもいったように、夫婦らしい愛情からの嫉妬というよりも、冷えた夫婦愛が内攻して起る病的なものであるだけに、性質が悪性で、相手を苛めぬいて、出来るだけ嫌がらせて満足を得ようというのである。

良人が、自分をほんとうは、少しも愛していず、ただ上部うわべの調子だけを合わせていることも、とつくに承知していた。だがそのために、今まで放蕩ほうとうしたこともなく、長い物は巻かれる主義で、ひたすら家庭平和を保持している良人が、物足りない以上に、憎らしくさえ思っている。こんないい機会に、良人を取っちめて、ご都合主義の仮面をとりはずしてやりたいという肚はらもあつた。

つい、目と鼻の四谷からであるから、二十分とは経たない内に、圭子は前川邸を訪れて来た。

応接室に通されて、腰をかける暇いとまもなく、上機嫌の夫人に迎えられて、初対面の圭子はすっかりうれしくなっていた。

「どうぞお楽に。私一人でしたけれど、新子さんのお姉様だというもんだから、ついお目にかかりたくて、お呼びしたのよ。ご迷惑じゃなかった？」と、夫人は言葉遣いもやや碎けて、しかもそれだけ親しみをを見せて、こぼれるような愛嬌だった。

「いいえ、どう致しまして、奥さまにお目にかかれて光栄ですわ。」

「失礼ですけど、舞台の方に關係していらっしやるだけあって、おなじきょうだい姉妹いでも、あなたの方が、ずっとお美しいのねえ。」

「あらまあ！」と、圭子が、うれしがるのを見て、夫人は新子とは違って、芯のないいかにも善良そうな圭子を、いよいよ料理しやすいと、見てとったか、気楽な、碎けた笑顔を向けながら、

「それに、あなたとなら、ほんとうのお友達になれそうだわ。」と、つづけざまに好餌をなげる。

五

鬼も棲^すみ、蛇^{じゃ}も棲まん夫人の心の中を知らず、圭子は、夫人の愛嬌に眩惑され、前川さんも、良い方であるけれど、奥様は一倍ました、何という気の置けない、いい方だろうと感嘆していた。

夫人は、心の爪は、油断なく磨^といで、しかも面^{おもて}は、笑みこぼれながら、

「新子さんとも、あれからまだお目にかかっていないのよ。今どうして、いらっしやるの。あの方、ずーっと私の家に、居て頂きたかったのよ。それが、ちよつとした行き違いで、急に帰っておしまいになつて、私ガツカリしているんですよ。子供もよく、なついでいて、ほんとうにいい方だったわ。今、どうしていらっしやるの？」

「まあ！」と、圭子は正直に呆れてしまった。妹の話では、奥さまとの感情の衝突で、たまらなく厭^{いや}であるらしい容子であったが、この奥様のどこが、そんなに厭なのだろうか。

見たところ、賢そうで、親切そうで、しかも現在、暇を出した後までも妹のことを案じていてくれるのではないか。圭子の考えでは、これはどうしても、新子の心が、わがままで、強情であつたとしか考えられなかつた。

「奥様が、そんなに思つていて下さるのに、あの人わがままなんですのね。」と、心から気の毒そうに、申し訳をするると、

「いいえ。新子さんが、悪いわけでもないのよ。原因といえは、子供のけんかのような。ちよつとこうなのよ……」と、夫人はますます親しみをを見せて、支度という字を、自分が小太郎に仕度と教えたことから、それが新子に支度と訂正されたことだけを、全部の原因のように面白可笑しく話した。すると、圭子は、たちまち、夫人に同情して、

「妹のことを、悪く云うのは、おかしいですけど、それがあの人の欠点なのです。ちよつと、ペダンチック誇学的で、融通のきかないところが。まあそんなことで、奥様に楯ついたりなんかして、ほんとうに相すみませんわ。ほんとうにそんなことで……」

「いいえ。私も、そんなことに拘泥こたわるのでなかつたんですの。私さえ黙っていれば、何もなかつたのに、ついあんなことになつて、ほんとうに、お気の毒なことになつて……」
と、夫人はいよいよ凶に乗つて、慈愛ぶかさの限りを見せた。

「ご存じでしょうか、私が、劇の公演のことで、どうしても、お金が入用になりましたので、新子に無心しましたところ、新子が前川さんをお願いして、お金を出して頂きましたので、やっと公演の始末が出来ましたの。」

「それは、まだ新子さんが軽井沢にいらした時の、ことなんですの。」夫人は、肝心な点だけは、ちゃんと釘を打っておくのだった。

「はあ、左様でございます。そんなご恩になっていきますのに、いきなり帰って参りましたので、家でもみんな、びっくりしてしまいましたの。ほんとうに、奥様のお心持が分つたら、新子もきつと、面目なく思うだろうと、思いますの。私が代ってお詫び致しますわ。」と、圭子は、もう一度頭を下げた。

六

新子が軽井沢にいた頃から、もうそんな金を前川が与えていたなど、おどろ駭くに足る新事実であったので、綾子夫人は、急に緊張しながら、

「おや、そんなこともございましたの？ 主人は、無口な方ですから、私に何にも申しま

せん。だから、ちつとも存じませんでしたわ。ですから、お電話だけじゃ、よく呑み込めないんで、お呼びしましたのよ。私も、新劇はとても好きでございますの……」

「まあ、うれしい！」

「もと、新興座が分裂しない前に、後援者達で作った火曜会というのが、ございましたでしょう。私、あれに、はいつておりましたの。だから新興座の公演は、替り目ごとに、見に参つたものですわ。」

「まあ。左様でございますか。じゃ、ぜひ私達の劇団も、後援して下さいませんか。どうか。まだ、学生が多くて、未完成でございますけれど……」

「いいえ。その方が、かえつて熱があつて、いいですわ。貴女なんか、ご器量はよし、舞台にお立ちになったら、見事でしょう。」と、おだてると、

「いいえ。でも、初演のときは、割合好評でございましたの。」と、たわいなく得意になるのを見すまし、

「それで、新子さんも、その方面のお手伝いでもして、いらっしやるの？」と、さりげなく訊ねた。

人生行路、決して左右を見ない、左右どころか、自分がこう思ったら、道のない所まで

も、ズンズン歩いて行きそうな、漫画的にまで、真つ正直な圭子も、ここでさすがに、ちよつと思案するのであった。

妹が、バーに出ることなど、圭子は大反対なので、そのことについて、新子とは話も一切せず、何事も訊いてもみないが、しかし母や美和子から、間接に聴いたところによると、新子は前川氏が関係しているらしい酒場の、カウンターをやっているとのことである。

それを、夫人が何も知らないのは、可笑しい。

云つてよいか、どうか、ちよつと思案したが、しかし、こんなに親切な夫人に、物事をかくすのは、いやだったし、もしいつたことで、新子が迷惑をするとすれば、それは新子が何か、後うしろぐら暗いことをしているからで、新子自身が悪いのであるという風ふうに考えた。「それとも新子さんは、何もしていらつしやいませんの？」と、やさしくもう一度訊かれて、圭子はずいに、我が事のように頬を染めて、

「お恥かしいんですけれど、ただ今酒場バーに出ております。」と、云つた。

「まあ、酒場バーに、じゃ女給さんですか。」と、夫人の言葉には歴々ありありと、嘲りあざけと侮蔑あざけとが強く響いた。

「いいえ。カウンターのようなことをしているようでございます。」圭子は、あわてて打

ち消した。

七

新子が、バーに出ていようななどは、さすがの夫人も思いがけないことだった。だが、この頃前川氏が、時々酒気を帯びて家に帰って来ることを、それに照し合わせると、良人と新子とを掩おほう膜が、一皮一皮めぐり取られて来るような気がして夫人は意地のわるい快感に、興奮しながら、しかし表面はあくまで、冷静に、

「たとい、カウンターにしろ、あんな方が、バーに現われるなんて、勿もつたい体ないじゃございませんか。あんなに、教養も学問もおありになる方が……そんなにまで、身を落しておしまいになるんですたら、私前川とも相談して、どこへでも、お世話致しますのに。」と、あくまで思いやりぶかい言葉であった。圭子は、ぼんやりと、

「でも、何ですか前川さんのお世話で、はいつたようなことを申しておりましたが……」と、云ってしまった。

「まあ！ 前川の世話！ そんなこと、私にはちつとも申しませぬの。おかしいですわね

え。でも、前川の世話だと致しましたら、あの人も考えなしですわ。そんな場所へ新子さんを、お世話するなんて、軽率きわまることですわ。」そう云いながら、もうハツキリ良人と新子の尻尾を掴み得たという、あさましい快感で、モヤモヤ逆せ上つて来た。

これ以上叩けば、もつとどんな大きい埃でも出て来るかもしれない。幸いに、この圭子という人物が、白紙のように表も裏もなく、その上こちらの思うとおり、どうにでも染まりそうである。夫人は、自分の策略の成功にひどく、上機嫌になって、

「その酒場、やはり銀座ですの。有名な家？」と、訊くと、

「いいえ。新しい家で、私名前は存じておりませんの。私、バーなどへ出るの大反対でしたから、よく聴いておりませんの。」と、云う圭子の答に、ウソはなさそうである。

「ほんとですわ。バーへ、お世話するなんていやですわねえ。でも不思議ですわねえ。主人はあまり、お酒も飲みませんのに、人様のお世話の出来るほど、バーに馴染があるんでしょうかしら。」

圭子は、また当惑した。美和子の話では、そのバーは、前川の資本に依るといふことであるが、そんな当てにもならないことを、前川夫人に話しすることは、何か失礼なような気がして、それには返事をしなかった。だが夫人は、しつこく、

「聞かせて頂戴な。もつと詳しく——ねえ、二、三日のうちに、よく調べてね。私主人をいじめて、新子さんを、どうしてそんなところへお世話したか、叱ってやりますわ。そして、その償いに、もつといいところへお世話するよう申してやりますわ。だって、バーなんか、いけないじゃありませんか。」と、云った。圭子を、体よくスパイにしようと云うのである。

夫婦の愛憎

一

圭子は、夫人が酒場バーを嫌うのも、新子の身を惜しんでくれればこそと感激もし、またそんなに、夫人の蔑いやしんでいる、バーに出ている妹の代りに、顔を赤らめながら、

「はア。」と肯いた。

「貴女あなた、その酒場バーに行つてご覧になりませんか？」と、夫人は抜け目なく訊いた。

「いいえ。私も、奥さまと同じに、妹が酒場バーへなど出ますの、大反対なものですから、行きもしなければ、それについて、訊ねも致しませんの。ただ、銀座裏とだけは、聞いておりますの。」と、相手にバツを合わせながら答えた。夫人は、さり気なく、

「じゃ、お帰りになりましたら、貴女私にお会いになったということは、どなたにも内証にして、そこがどんな筋合のバーだか、前川も時々行くのかどうか、調べて下さいませんか。そして、私にも知らして下さいませんか？ 私、主人をからかってやりたいんです。私新子さんを酒場バーになどご紹介するの、怪けしからないと思いますから、証拠を掴んでおいて、たしなめてやりたいと思いますの。その上で、主人にすすめて、主人の会社にでも、ちゃんとお世話するように、申しますわ。私、新子さんは、ちゃんとした方で、充分働きのある方だと、思っていますのよ。あんな落着いた、かしこい方、職業婦人などには、もって来いですわ。」と、口ではそう云いながら、さすがの夫人も、一切自分には秘密で、新子をバーになぞ入れたりしている前川のことを考えると、勝気なだけに、かえって、口く惜やしさで、胸がふるえて来るのだった。だからさつきから続けていた愛想笑いが、急にゆがんで、いい気で新子の世話などしている良人おとこに対して、出来るだけ辛しん辣らつな復讐手段を、考えることで、すっかり興奮していた。この圭子を、手先に使って、主人が少しも気つかない内に、新子をそのバーから、追い出してしまうなども一策だが、しかしもつと、主人と新子とを、驚倒させる方法はないかしらと、しきりに考えながらも、圭子には、ちよつと気を更かえたように、

「そう、そう。貴女のご用事の方を、お留守にしては、わるいわねえ。この次の切符、お引き受けすればいいんでしょう。」と、気がるく云ったので、圭子は、

「はア。」と、嬉しがった。

「いくらのお切符なんですの。」と、もう、女らしいケチな打算が動いて、圭子が、

「一円に二円でございます。」と答えると、

「じゃ一円の十枚、二円の五枚お引き受けしますわ。それでよろしいでしょう。」と、かさにかかっていってしまうと、夫人の愛想のよさに、百円くらいは引き受けてくれるものと、思っていた圭子は、アテがはずれながらも、

「はア、ありがとうございます。」と、意気地なく、礼をいわねばならなかった。

「その代り、新子さんの酒場の正体を、明かにして下さらなければいやよ。主人をからかってやるの、私とても面白いんだから……主人が、つまらないお世話をしているんですから、私の方が、きつとお力になれるわ。」と、また他意ない微笑を浮べた。

圭子を、わざわざ玄関まで送り出し、圭子がジャリジャリと小砂利に音を立てて、植込のかげにかくれてしまうまで、夫人は女中とともに見送っていた。

「蒸して来たわねえ。曇ったんじやないかしら……風がないもの……」と、女中にやさしく口をききながら、夫人は二階へ上った。

しかし、自分の居間にはいかず、良人の書斎にはいると、その壁にとりつけた電燈ライトだけを、ポツと灯して、大きいライティング・デスクの前に立つと、乱暴に電気スタンドの鎖を引いてから、まず真中の抽出ひきだしを、タツプリと開けた。その中には、その人の性格らしく、不要なものは、一物もなく、右側に関係している会社の書類が幾つかキッチンと置かれ、便箋に封筒、疲労回復薬と、頭痛薬などの小さい瓶が、二つ三つ、夫人の探している新子からの手紙など、影もなかった。

圭子の話から推しても、手紙の取りやりくらいあるかもしれない。良人を、のっぴきならぬように、取って押えるには、何か物的証拠をと、探しているのだが……。

今まで、夫婦間に、何一つ隠すところのないために、どこに一つ鍵のかかっているとこ
ろもない、この机こそ、こうなつては屈くつきょう 竟きやうのものである。袖に五つ、抽出しが付いて
いる。その一つ、一つを、そつと、いじった形跡の残らぬように、何かないかと調べはじ

めた。真白な紙片の中まで、ハタハタと振ってみたりした。だが、最後の抽出しまで何物も、見出すことが出来なかつた。

夫人は、少し気落ちがして、最後の抽出しにはいつているピストルや、双眼鏡や、使わない琥珀こはくのパイプなどを、空しく味気なく眺めながら、いつもながらキッチンとボロを出さない良人の態度が、机にまで示されているような気がして、妙な苛いらだ立たしさを感じていた。夫人は、その時少し疲れを覚えて、腰をおろしたが、ふと先刻二番目の抽出しに、はいつていた良人の小切手帳のことを思いついた。あらゆる問題は、金銭に關係している。そう思うと、夫人は良人の小切手帳をとり出して、バラバラめくりはじめた。

夫人は、月々経常費として、二千元ずつ良人からもらっている。もつとも、臨時の買物などする時は、別であるが。だから、良人の小切手帳は、その二千元の支出を除けば、全部良人の身辺の費用に当てられたはずである。八月から九月にかけての日付を探っていると、控えの方に何の名目も書かれずに振り出された金額が、ザッと計算して、八千円余に上っている。

もしや、新子へとは、すぐ疑ったが、しかし、金額があまりに、大きいので、良人がそんなに新子へと思うと、ちよつと信じがたかった。

しかし、姉の演劇運動の後援をするくらいでは、新子にはどんなことをしてやっているかもしれない、その酒場も、案外良人が出してやったのかも測りがたい。もし、そうだったら、良人と新子との関係は、もうかなり深いところまで、行っているのに、相違ないと、夫人の頭の中には、嫉妬から生れるみにくい臆測が充満した。

気がついてみると、もう八時を廻っている。夫人は、驚いて階下に降りると、女中を促して、自動車の用意をさせて、帝国ホテル演芸場へと急がせた。

着いてみると、医学博士のお嬢さんはもう舞台上で、「鷺さぎむすめ娘」を踊っている。満員の客席の間を、足音を忍ばせて、座席に着いた。

祥子さちこと同年でも、ずっと小柄な、いたいけな幼子おきなごが、白く濃く白粉を塗り、青く光るほど紅を塗って、人形のようなおかつばで、重たい衣裳をつけて、踊る舞台は、佐四郎人形を見るようであった。長唄連中は、勿体ないような顔ぶれである。撥ばちおと音が冴えて、美しかった。踊りは、もう半ば以上進んでいて、町娘の衣裳でくるくる日傘を廻していた

子は、黒ん坊に衣裳のしつけを取られて、鷲の本性を現し、合の手の、にぎやかにも、おどろおどろとした無気味な音につれて、

獄卒よも四方に群がりて

鉄杖振り上げ鉄くろがねの

牙きばか噛みならし、ぼつ立たてぼつ立

二六時中がその間

くるりくるり追廻おいめぐり追廻り

と、帯に描かれた狐火を、ゆらゆらさせて、いみじく、涙ぐましくなるほど懸命に、踊りぬいていた。終ると、割れるような拍手であった。

夫人は、案外無関心に、その舞台を眺め終ると、早速舞台裏へかけ込んで、踊り手のお母さんに、お祝いやら、お世辞やらを述べた。

その周囲に、ウヨウヨしている顔も、みんな知合いの奥さまやお嬢さまなので、その人達と無駄話をしてから、連れがないので、この次の「三社祭」を見たら、銀座で買物でも

して帰ろうかと、大分味気ない顔付で、パーラーの方へ戻って来ると、思いがけなく、木賀子爵が独りで、綺麗な婦人達の中で、紅茶を飲んでいた。

「あら、貴君あなた見えていたの……」

夫人は、たちまち賑やかな笑顔で、近づいて行った。

四

引き受けた切符が、あり余っていたので、木賀の妹達には、送っておいたのだけれど、ハイカラの妹達も、来はしないだろうと思っていたのに、木賀が来ているので、夫人は驚くとともに、急にうれしくなった。

「貴君がいらしっているとは思わなかった。……主人を誘わなくて、よかったわ。」夫人はちよつと体裁のよい嘘を云った。そして、

「よつほど、貴君暇なのね。」とからかった。

「いや、あるお嬢さんの踊りをちよつと見たかったから……」

「どなた……」と、夫人はプログラムを拡げた。

「（四季）の中の春を踊った人。」

「知らないわ。今来たばかりですもの。もう、大きい方でしょう、年の……」と夫人はからかうような眼まなざし差で、木賀を見上げた。

その時、開幕のベルが鳴った。

「じゃ、貴君もご用が済んだし、私もお義理を果してしまっただからこれを見たら、一しよに出ましようか。銀座へ、一しよに行つてほしいわ。」

「ええ。お供しましょう。僕は、もう出てもいいんですよ。」

「だって私来たばかりで、帰つちや少し、可笑おかしいわ、この踊りが終つてからにしましょう。これが済んだら、貴君勝手に出て、私の自動車の中で待っていて頂戴！」と云つて、二人はそろそろ座席へ行く、人混ひとごみの中で別れた。

やはり小さい子供達同士の「三社祭」の悪玉、善玉の踊りが終ると、夫人はサツサと退場して自分の自動車へ行つてみると、木賀はもうとつとくに乗っていた。

自動車が、山下門の方へ動きかけると、夫人は小声で、

「春を踊った人、岸田千枝子と云つたわねえ。どこのお嬢さん？」

「いや、ちよつと……」

「おかしいわねえ。その人の踊りをわざわざ見に来るなんて！ だから、逸郎さんは、近頃私のところへなぞ、寄り付かなくなっただわ。」

「いや、そんな訳じゃないですよ。ちよつと、縁談のある相手ですが、僕はもちろん断るつもりでいるんですが、仲人が、内山の伯母さんだもんだから、ちよつと当人くらいは見ておかないと、ウルサイんでね。」

「じゃその方とは会ったことないの？」

「もちろん……」

「それなら、かんにんしてあげるわねえ、逸郎さん、とてもニュースがあるの。降りてから話すわ。」

銀座の電車で、自動車が止まった。

五

資生堂で買物をすませると、その向い側の喫茶部で、夫人はボックスで、木賀ときし向いになった。

「さつきいったニュースって、何ですか。誰のニュースですか。」

「今夜聞きたてなんだけれど……誰のことだと思う？」

「分りませんよ。そんなこといったって！」

「ほら、この夏、貴君が軽井沢に見えたとき、南條って、家庭教師がいたでしょう！」

「ええ、南條さん！」木賀は、ちよつとその名前をなつかしそうに、くり返した。

「あの女が、銀座のバーに出ているんですって！」

「女給にですか？」

「カウンターという説もあるけれど、おなじことじゃない、どうせ。」

「だって、あの人……そんなタイプの人じゃないけれど……何か急激な変化があつたんですね……」と、木賀は実に意外に思いながら、軽井沢で見た、清すがすが々しい、しかし澄んだ色つぼさのある新子の全体を、ハッキリと思い浮べながら、そういった。

「貴君、酒場バーへよく行くらしいから、知ってるかと思つた……案外逸郎さんあたりが、どこかへ紹介したのじゃないかと思つたわ。」

「ご冗談でしょう。僕は、夢にも知らなかつた！」

「じゃ、貴君、あの人が、どこにいるか、探してご覧になったら、どう？」

「探して、どうするんです。また家庭教師になさろうとするんですか。」

「いやな人！　だって、男の人って、知っている女が、バーへなんか出ると、とても興味を持つんじゃない？　だから、貴君も、かの女に会って、かの女の変り方を見るのも面白いんじゃないかと思って……」

「うむ。」

木賀も、一目見たときから、好ましきで一杯だった人だけに、夫人に唆そされると、興味を感じずにはいられなかった。その人の立ち働いているバーの容子などを、想像しながら、「誰からお聞きになりました？　前川さんから？」と、訊ねた。夫人は、あわてて首を振って、

「いいえ、前川から、聞きはしないのよ、また私がああの女が、銀座にいることを知っているなどと、貴君前川にはいわないで頂戴ね。いったら絶交よ。」と、いった。

「前川さんもそれと知ったら、探しそうですか。」

「その危険もあるし、ほかに私が考えていることがあるの。とにかく、あなたああの女の在ありかり家を突き止めてくれない？」

圭子を使っている上、木賀も参加させて、どちらからか、事の真相を、一刻も早く知り

たい夫人の心である。

六

長い間の接吻——それは、偶発的でも、突発的でもない……。

前川の気持は、青年のように昂揚し、幸福と歓喜に躍り上った。もちろん、それ以上のものを求めようなどという気持の起らないほど、理想主義的なものであった。

持つて生れた平和な性しょうから、不満な家庭の味気なさに安住することに努め、内にも外にも、人間らしい色彩を失いかけていた彼である。

若い純情な、愛し合う男女が、最初の接吻に、陶醉し、それ以上の邪心がないように……前川も、嵐もなく夕立もなく、心と心とが相触れて獲た新子の唇に、充分満足し、青年のような歓喜に躍り上っていたのである。

仮に人生を五十とするならば、あと十年足らずの前川なのだが、恋愛ヌキの漁色だけに、感溺している知己のAやBを、心の内に思い起しながら、

（俺は君達と少しは違うのだ！）と得意な気持さえ、胸に湧いて来た。

珍しく、十二時近くまで、スワンで過ごして、日比谷から議事堂横を、自動車で走り過ぎながら、前川は幾年ぶりに、生甲斐のあるような楽しさを感じた。

しかし、そんな多くの男性が、そうであるように、敬遠して独りにしてある夫人に、何か気の毒のような気がして、妻にも一層優しくしなければならぬというような、明るく物が考えられて来るのだった。

門をはいつて、植込から見上げると、夫人の居室に、水色のカーテンごしに、ぼつかりと灯がついているのが見える。

彼がモザイクの三和土たたきに、靴を脱いでいると、珍しく夫人自身が、階段を走り降りて彼を迎えた。

前川の楽しい気持は、そのまま他愛ない微笑となつて、夫人を見た。

「おや、大変なご機嫌ね。」と、夫人は、グツと前川の胸元に、近寄つて来ると、若妻のように、前川の唇のまわりの匂いを鼻でクンクンかいだ。

「お酒召し上つたのね。」

「うん、お止しよ。」と、やさしく肩に手をかけて、押しつけようとしながら、前川は久しぶりで、夫人を抱いだき上げたいような気がした。

しかし、夫人は彼の手を冷たく退けながら、ごく平かな調子で、

「どこで召し上つていらしたの……」と、訊ねた。

「うむ。ちよつと、お客したもんだから……」

「へえー珍しいのね。」

夫人は彼の鼻の先で、馬鹿にしたように、笑つた。前川は、角に触れられたかたつむり蝸牛の
ように、有頂天の氣持から、たちまち身を縮めて、スワンのマッチなぞ、どこへも入れて
来なかつたかと、改めてズボンのポケットに、手をしのばせた。

「踊りの会、面白かつた？」

「面白いはずがないじやありませんか。」

夫人は、冷たい返事をしなから、共に階段を上つて来た。

前川は、一段ずつ、冷ひゃしさまされて行く夢心地であつた。

七

階段を上り切ると、夫婦の部屋の分岐点である。

夫人の部屋は左へ、前川の書齋、居間、寢室は、右へぐるりと建物を廻るような配置になつてゐる。前川は、さりげなく夫人の顔を見ながら、

「眠い！」と、いった。そして、すぐ続けて、

「おやすみ！」と、別れの会釈をした。すると、夫人はその手を喰わず、ニヤニヤ笑いな
がら、

「お待ちなさいませ。少しお話がしたいわ。」と、いつて右へ前川に、ついて来た。

「眠いし、疲れているし……、話なら明日にして……。」と、逃げようとする、

「厭よ。用事の話じゃないんですもの。貴君ったら、いつでも私が話をしようとする、
鹿爪らしくお取りになるけれど、たまには無駄話だつてしたいわ。私眠くないんですもの。
眠れそうにもないし、少しの間、話し相手になつて下さるご親切が、あつてもいいと思
うわ。」

「だって、遅いよ。もう十二時過ぎてるし……。」

「それは、貴君が遅くお帰りになるからいけないのよ。意地悪ね。」

そんなことをいいながら、夫人は執拗な態度で、前川の寢室へまで、はいつて来た。

前川は、内心薄気味わるく思いながら、ソファにかけた夫人に背を向けて、ネクタイを

解き始めた。

「ねえ。」

「……………」

「下世話に云うでしょう。ほら、四十を過ぎて始まった道楽は、なかなか止まないって！

心配だわ、私……………」

変に、女房らしいことを云い出されて、前川は思わず、クスリと、唇くちびる辺へんに笑いを浮べて、

「何を話し出すかと思えば、そんなつまらんことを。ふざけているのかい！」と、碎けて訊いた。

「いいえ、真面目よ。だって、この頃お酒は召し上るし、それに以前よりお帰りが幾らかずつ遅いし……………それに、何だか私の眼にさえ、急に若々しくお成りになったように映るんですもの……………いい加減、気になつてしまいわ。貴君、何かお出来になつたんじゃない？」

前川は、首筋に、氷片を落されたような気持ながら、しかし色には出さず、

「おかしなことを云うね。何か出来たつて、何が……………」と、とぼけて訊き返すと、

「愛人か……………そんなものよ。」前川は、ドキツとして黙つてしまった。しかし、夫人はさ

る者、ニヤニヤ笑いながら、

「ねえ……」と、眼顔で押しして来た。

八

前川は、急所を突かれながらも、それが夫人の臆測にすぎないと知ると、ホッと安心して、

「そんな冗談にも洒落しやれにもならないことを云うものじゃありませんよ。そんなことを云えば、貴女だつて、この頃は頓とみに、美しく若々しいじゃありませんか。」

「嘘おつしやい」

酒の下地で、常よりは、やや図々しい前川に、夫人はちよつと業腹ごうはらで、ヒステリックに、その話を打ち切つて、別の手を考えていた。

習慣で、どんなに遅くつても、就床前に必ず歯を磨く前川が、室内の奥についている洗ウオッシュユ・スタンド
面所オッシュユ・スタンドの方へ歩いて行く後姿うしろすがたに、

「ねえ、冗談は冗談として、ちよつとご相談したいことがあるの家庭教師のことで……」

と、云いさして、夫人は、良人の背中中でちよつと舌を出してから、追いかけて行つた。

四方白い、小さいタイル張りの部屋の中で、前川は黙っていた。夫人は、入口からのぞき込みながら、

「ねえ……」と、押しかけた。

「二学期が、はじまつてから、もうよつぽどになるでしょう。やはり、家で勉強見てやつた方がいいらしいんですの。それでいろいろ探しているんですけど、適當の人が、なかなかないので。貴君、なんかお心当りないこと？」

前川は夫人のために、その小さい部屋に閉じ籠められたような、気味の悪い感じで歯ブラシの音と水音とで、返事の出来ないことを示していた。

「ねえ、なぜ黙つていらつしやるの？」と、夫人は跣足すあしで、二、三步はいつて、良人の顔をわざわざのぞきに來て、

「ああ、口を磨いていらつしやるのね。じゃ、お待ちするわ。真面目に、ご相談したいことがあるのよ。」と、云いながら、また入口の方に、引き返したが、前川がブラシを使い終るのを待つて、

「ねえ、新子さん！」と、いきなり云つた。

「ええっ！」前川が、スワ事こそと、あわてて訊き返すと、夫人は、良人の顔を、ジロジロ見ながら、言葉はあくまで、尋常に、

「どう、私、新子さんにもう一度、家へ来てもらおうかと思っているの……」と、云った。
「家へ、もう一度！」意外な言葉に、前川は、鏡に映るわが顔へ、思わず声を出して呟いた。

「ほら、あの南條さん。貴君も、随分ごひいきであつたじゃないの。」夫人の声は、浮々とはずんでいた。

「しかし、あの人をなぜ呼び戻すのだ！」前川は、全く夫人に、ほんろう翻弄されている形だった。

九

「だつてねえ。」夫人の声は、極めて柔かな響きを持っていた。「私、随分探したんだけど、結局南條さんくらい、いい人ないと思うんですもの。」

前川は、夫人の表情を読みたくなり、思わず洗面所トイレットから、身を出しかけた。が、また

思い直して、手先をゴシゴシと洗い始めた。

「それに、子供達も、時々思い出して、淋しがっているようですし、貴君さえよければ、私、明日にでも手紙を出して、あの人に来てもらいたい。貴君、宿所ご存じでしょう、貴君がご存じなけりや、路子さんに訊いてもいいの。」

前川は、夫人の一言一言に、誘導訊問をする刑事の心理のように、意地のわるい計略が、かくされているように思われ、これは一問一答と云えども、油断をしてはならないと思つた。

新子の現在を知つてか知らずにか、自分と新子との關係を、嗅ぎつけているのかいないのか……前川は、酒の酔もすっかり吹き飛ばされて、酔ぎめの後の常より一倍冴える頭の中で、彼も夫人の心中を計るべく、作戦を考えねばならなかった。

「ねえ、貴君もご異議ないでしょう。あの人に、もう一度来てもらうこと……」

（本気で云つてるのかな）と、前川もつい思った。しかし、つねに肚と口との違う、しつかりものの夫人である。彼は、少し苛立たしくなつて来た。

「ねえ。」夫人は、しつこくくり返した。

「僕は、不賛成だね。」前川は、とにかく受け返した。

「あら、どうして……貴君、前には随分ごひいきじゃなかったの……」

「……………」前川は、返事に窮して、また手を洗った。

「ねえ、いつまで顔や手を洗っていらつしやるの……」

「うむ。」冷静を装っているつもりでも、つい取り乱したと、前川は後悔しながら、さりげなく、彼としては幾分傲然たる態度で、トイレトから出て来た。

「ねえ。あの人に来てもらいたいわ。手紙を出しても、いいでしょう。」

「一度、よしてもらった人に、また来てもらうなんて、可笑しいじゃないか。それよりも、高等師範の学生か何かで、適当な人は、いくらでもあるだろう……」前川は、一語一語に気をつけ、芝居の台詞でもいうように、静かに云いながら、夫人の眼を探るように、ひたと視線を合わせた。

「だから、よさせたのは、私軽率だったんだから、私あの方と会って、潔く謝つてもいいのよ。でも、可笑しいわねえ、貴女が反対をなさるとは、おほほほほほ。」

夫人は、前川の窮状を知っているかのように、氣持よげに笑った。

前川は、笑う夫人の眼の中に、邪悪な喜びの影を見たように思った。何か新子について聞込んだに違いないと思うと、今宵くちづけの感激も消えはてて、当惑せずにはいられなかった。

「でもあの方、まだ職業が見つからないで、お困りになっているのじゃないかしら……もしそうだと私、いよいよ呼び返してあげたいの……」夫人は、まことしやかに、眼を輝かした。前川は、容易に動かされず、

「僕はとにかく賛成しない。他の人を雇った方がいい。」と、藪蛇やぶへびにならないように簡単にいった。

「でもなぜ新子さんを、もう一度呼んだらいけないの？」

「そんなハッキリした理由はないさ。あるはずがないじゃないか、しかも一度、貴女と感情の衝突をした人を……」

「だって、それは私が悪いと思うから、謝るつもりなの……」

「しかし、謝ってもらって、来たところが、あの人もいい気持はしないだろうし、貴女だって、きつと何となくそれに拘泥こたわるだろうし……」

「貴君妙だわ。とても、妙だわ。貴君が反対なさるなんて妙だわ。」夫人は、前川の鼻の先で、チラチラ笑いながら、つぶやくように云った。

妙だと云われれば、妙に違いないだろうと思うと、前川はいよいよ不愉快になってだまつてしまった。それにしても、片足をあげれば、その片足に、他の足を挙げれば、その足に、とりもちのようにくつついて来て人を窮地に陥れて喜ぶような夫人の性癖を、今更のようにな、憎々しく感ぜずにはいられなかつた。

「じゃ、私路子さんと、相談して、とにかく、新子さんの内意を訊いてもらうわ。向うで、来たいといえ、貴君だつてご異存はないんでしよう……」

「およしなさい！」前川は、つい苛いらいら々して来て、いつになく険しい声を出した。

「まあ！ そんなにまで、反対していらつしやるの。ああ分つたわ。じゃ新子さんが来ると、貴君の方で何かお差支えがおりになるの？」

「そんなものが、あるわけはないじゃないか。」前川は、あわてて打ち消した。

夫人は、先刻から前川のあらゆる表情動作を、すっかり読み取って、まず今宵はこれでもいい、あまりしつこく責めると、かえって前川に警戒されるに違いないと思つたので、口まで出かかつた小切手帳の問題は、そのままにして、

「そう。じゃ、私もう一度考え直してみるわ。でも、新子さんという人、後で考えるとだんだんよくなるわ。」前川には、全く謎の言葉を残して、アツサリ部屋を出て行った。

敵か味方か

一

今まで、家^{うちじゆう}中で婆やの次に、起きていた新子が、夜更^{よふか}し続きで、つい寝坊になり、この頃では十一時過ぎまで、寝てしまつても、なお頭の重い感じである。

女らしい始末の悪い母親と、だらしない圭子と美和子と、それに肝心の新子までが寝坊をすると、家の中は常に雑然としている。新子も、十二時近くに起きたのでは、朝食がひどく不味^{まず}い。味気ない気持で、食卓で朝刊をひろげると、ラジオの昼間演芸が、今日は新協の放送である。新子は、時計を見上げながら、スイッチを入れた。ベートーヴェンの第五シンフォニーが、たちまち家中に、溢れ出した。

美沢の家でも、よくレコードで聞いた馴染の曲だし、しかも渾然たる絃楽の、その中の一挺のヴァイオリンは、美沢の手で奏でられていると思うと、新子は、ジツと放心したように、聴き入っていた。

十月の半ばで、美沢がこの頃になると、いつも神経衰弱になる季節だといって、厭がっていたのを思い出した。

（今年は、私を清算して美和子も、清算なすったようだから、かえって激しい生彩で、芸術に精進していらつしやるだろうが、私は……）と、考えながら、新子は何か恥しきで、身内が熱くなつた。

大恩は謝せず——新子は今のようになつてしまつては、前川に礼をいうことさえも、空々しいほど、世話になり過ぎ、新しい好意を辞退するのが可笑しいほど馴れてしまつている。酒場は成功して、一夜の売上げが少い時で、五十円、多ければ百円に上つている。その上、店が安定するまでの費用という名目で、開店当時、前川から三百円ばかり貰つた。

新子も、草履を買つたり、好みの帯止めを買つたり、ドロンウオークの麻のハンカチーフを、半ダース買つたり、実用というのではない、形のピチリとした足袋たびを買つてみたり、そうした消費は、女性にとっては不思議な魅力を持った快樂である。

このような状態では、激しい恋慕もなく、媚^こびる気持もなしに、こうした生活を与えてくれた前川の愛撫を待つことになるであろう。現に昨夜は、恋愛に近い情熱で、前川の愛撫を待った自分ではないか。このまま進めば、結局自分のすべてを与えて、一茎の日かげの花、パトロンと愛人との関係に、青春の日を棄^すてて行くのではあるまいか。

新子は音楽を聴いているうちに、だんだん気が沈んで来て、出ばなのお茶の味さえ消えていた。

二階から、この頃連夜の稽古で夜更しをしている姉が、だらしない寝^{ねまき}衣姿で降りて来て、新子と向い合いに、

「あ——あ。」と、欠^{あくび}伸しながら、ドサリと坐った。

二

「昨夜^{ゆうべ}は、私より遅かったわねえ。」新子は、自分も慰められたいような気持で、姉にやさしくいった。

「うん。昨夜は、ほかの人の都合で十時から稽古だったの。切符は売らなきゃならないし、

たいへんよ。」姉は、新子の気持などお構いなしに、自分のことだけを云って、

「美和子居ないかしら。」と、訊ねた。

「知らない……ちよつと、出かけたんじやない。」

「煙草が欲しいんだけど……」

「婆やに、買いにやらせば、いいじやないの……」と、新子が云うと、煙草のことは、それぎりにして、

「美和子、もう酒場のお手伝いはしないんだって……」と、訊いた。

「もう、そんなことお姉さんに云つたの？」昨夜のいさかいを、早くも姉に告げたのかと思つと、新子は美和子の口の軽さに、腹が立つて来た。

「昨夜、私が帰つたら、まだあの子寝てないで、階下でガヤガヤ云っていたの……」

「そうお、ちつとも知らなかつたわ。」

「私、美和子から、貴女あなたの酒場のこと、いろいろ訊いたわ、美和子のところへ来るお客も、随分あるんだってねえ。」

「……」新子は、不愉快になつて、だまつていた。

「それに、新子ちゃん。貴女、少し嘘つきねえ。」

「なぜ……」

「前川さんの関係している酒場に勤めているなんて、本当は、前川さんが貴女のために作ってくれたお店だつていうじゃないの？」

「……」新子はびつくりして姉の顔を見上げた。

「かくされると、いい気持はしないわよ。」

「何を云っているの。美和子のような子供に、何が分るもんですか。」

「あの子は、あれで子供じゃないわよ、そんなことにかけてちや私達より、ずーっとカンがいいんですもの。私、美和子の云つたことを信ずるわ。」

「だって……あの店、誰のものだか私知らないわ。ただ、前川さんが、経営しろとおっしゃるから私引き受けているだけよ。私、勤めているつもりだわ。」

「だって、貴女のお部屋はあるし、電話はあるし、立派なものだと云うじゃないの。私、小池さんなんかを連れて行つてもいい？」

「どうぞ。いらしつて頂戴！ 歓待するわ。」新子も、騎虎きこの勢い、やや棄鉢すてばち気味にいった。

「今度の公演のポスターが、昨日きのう出来たからお店にかけておいて頂戴よ。それから、お客

さんに切符売れないかしら。ねえ、三十枚くらい売ってくれない。」圭子は、薄情そうな顔付で、そう云った。

「ええ。」新子は、懽然たる表情で、味気ない返事をした。すると、圭子はいきなりニヤニヤしながら、

「一体、貴女と、前川さんとどういう関係なの？」と、訊いた。

三

姉の露骨な端的な問いに、新子もグツと詰まったが、あわててはならないと、胸を落ちつけて、

「何だって、そんなことお訊きになるの？」と、訊き返した。

「だって、前川さんの貴女に対する親切なんて、度に過ぎていると思うわ。」

「だって、初対面のお姉さんだって、度に過ぎた後援をして下さる方だもの。」新子も、負けずにやり返した。

「それもあるわねえ。」と、圭子は、素直に肯うなずいてから、「でも、美和子の話では、前川

さんは二階の貴女の部屋へ上つて行つて、一時間も二時間も、話し込むというじゃないの。だから、私心配になつて訊いたのよ。」

またしても、ひどい美和子の告げ口に、新子はカツと上気しながら、

「だつて、そりやお店の経営や、売上げや何かの話だつてあるじゃないの。」と、答えたが、新子は口惜くやしきで、涙が出そうだった。

「そう、それならいいわ。私だつて、貴女が世の中にあるように、前川さんを卑しい意味でパトロンにしているとは、考えたくないの。そんなことをすると、前川さんの奥さんにだつてすまないと思うわ。」

「……………」

決して快くは思つてはいない、前川夫人まで引合に出しての、無慈悲な姉の非難に、新子は胸がつまつて、口がきけなかった。すると、圭子はニヤニヤして、

「でも、何の關係もなしに、やつているとしたら、貴女も相当なもんね。私は、頼もしい妹を持つて心強いわ。」と、云つた。

「どういう意味なの。お姉さま、それは？」新子は、聞き捨てならぬ気がして、訊き返した。

「どうって……。もし、そうなら、凄じやないの。つまり、前川さんをこうだもの。」と、笑いながら、お手玉を取るような手付をして見せた。

新子は、ムカムカしながら、

「お姉さん、貴女、そんな気持で、私のすることを見てらっしゃるの？」と激しい眼付で、姉をにらんだ。

「だって、そうじやないの。身体を許さないで、相手にあれだけのことをさせているのは、すごいじやないの。私になんか、とても出来ないわ。」

「お姉さんの馬鹿！」新子は、とうとうかんしゃくを起して、姉を怒鳴りつけた。

「あら！ よく知っているわねえ。私は、どうせ馬鹿よ。新子ちゃんは、利口者よ。おほほほ。」と、さも可笑し^{おか}そうに笑い出した。

「お姉さんが、もう少し家のことをかまって下さったら、私酒場なんかに出はしませんよ。」と、新子はつづけて怒鳴った。

「悪かったわねえ。でも、私は劇のほか、何にも分らないの。ご免なさい！」
そう云うと、姉は新子の鋭鋒を避けるように、トントン二階へ逃げ上った。

四

姉と争つた後味の悪い気持で、お店へ来ると、女給の一人の妙子という、チンマリと可愛い顔の少女が、豊かな黒髪を、プツリと切つて、すっかり見違えるような後姿^{うしろすがた}で、水盤の水を入れかえているので、新子は驚いて、

「まあ。勿体ない」と、眼を刮^{みは}つて近づくと、すっかり化粧も変えた顔で、

「だつて、この方が便利なんですもの。」と、羞^{はに}かみながらいった。

「似合うからいいわ。」

なかなか、女学生らしい澆^{はつらつ}刺^さたる味わいが出て、よく似合っていた。

そんなことで、新子の気もまぎれ、部屋へちよつと上るとすぐ階下^{した}へ降りて来て、少女達と話をした後、よし子のランプを借りて、一人隅の方の卓子^{テーブル}で、パーシエンスで、その日の運勢を占い始めた。

こんな水商売を始めみると、新子もいつの間にか、御幣^{ごへい}かつぎになつていた。自分が六白星だから、七赤、八白、二黒^{じく}の日は吉で九紫、三碧、四緑^{しりく}の日は凶であるなどと、朝刊の九星を気にしたり、カードのパーシエンスが、一度でパツと揃えば、吉。そろつても、

スペードからでは凶、揃わないときは大凶などと、独りでその日の客足を占つてみる習慣が、ついていた。

トランプは、幸先よく揃いそうであつたが、中途でつまつて、結局うまく行かなかつた。もう一度と、思い切り悪く、カードをまぜていると、

「いらつしやいまし——」と、いうよし子の挨拶を聞いて、新子は何と云うことなしに、立ち上つて、スクリーン衝立の陰にちよつと身を隠して、客の方を見た。

客は、たつた一人でてれくさそうに、部屋の中を見廻して、なかなか席に着こうとはしない。

「君達二人ぎり？」と、少女達に、話しかけるその声で、新子はハツとなつた。軽井沢で、前川夫人の遊び友達として、知り合つた木賀子爵ではないか。客が、もう一足進めば、すぐ顔を見られる衝立の陰なので、新子は急に悪寒おかんが、胸に上つて来た。

「落着きたい酒場だな。」

客は、無遠慮に、部屋中を見廻しているの、少女達も、モジモジしているばかりである。

相手は、前川とは、それほど懇意でなく、夫人の親しい友達であつてみれば、顔を見ら

れぬに越したことがないと思い、木賀が、やっと席につき、煙草を取り出して、うつむいたわずかな隙にサツと衝立の陰をのがれ、バー・スタンドの脇をくぐって、二階の居間に駆け上った。

しかし間もなく、よし子が二階へ追ってきて、

「ねえ、あの方マダムをご存じの方らしいの。会いたいとおっしゃるのよ。」と、扉口に來て呼んだ。

五

木賀などには、今の場合一番來てもらいたくなかった。いつそ頑張って、会うまいかと思つたが、もし偶然來たものだとするれば、会わない方がかえって前川夫人にすぐ注進されることになりそうなので、新子は胸をとどろかし、顔を赤くしながら、やっと階下へ降りて來た。

「やア、しばらく。」木賀は、案外氣がるに、やさしい調子で挨拶をした。

「しばらく、どなたにお聞きになりましたの？」と、新子はさし向いに、腰をおろしながら

ら、探るように尋ねた。

「いや、だれにも聞きやしません。」木賀は愉快そうに、首を振った。

「じゃ、私がここにいること、どうしてお知りになりましたの。」と、重ねて訊ねると、

「そりやア知れますよ。」と、木賀は事もなげだった。

「でも……」と、不安そうな表情を、正直にさらけ出すと、

「こんなところで、新しい酒場バを出せば、すぐ僕に分りますよ。」

「だって、私が居りますのが……」

「そりや、僕の六感。」と、木賀は、いよいよ事もなげに笑った。新子も笑いながら、

「こわい六感ですわねえ。私、貴君あなたがはいっていらしたのを見てびっくりしましたの。」

と、受けながら、新子の気持はやや落着いた。

「いくら、びっくりしても、あんなに颯爽さつそうと、お逃げにならなくっても、いいじゃありませんか。あれで、貴女だということが、いよいよ分った……」

「まあ、颯爽と……」妙な比喩ひゆに新子も笑った。

「貴女が、銀座に出たという噂だけは、聞いたんですよ。それ以来貴女を探していたので

すよ。でも、ここだろうと睨にらんだのは、僕の直感だったのですよ。」

「私が、銀座に出ているなんて噂、どなたから、お聞きになりましたの……」新子は、また不安になった。

「それは、貴女の六感に委せる。多分、当る！」

「まあ！」

（前川さんにですか、それとも奥さんからですか）と、訊き返そうとしたが、それは相手が前川と自分の関係を知らない場合は、藪蛇になるので、新子は咽喉^{のど}まで出た言葉を、噛み殺した。

「とにかく、貴女が酒場^バのママになったのは、大賛成だ。ロマンチックで、いいですな。僕は、軽井沢で、貴女と話をした味が、忘れられないんですよ。——カクテル、辛いのをね。一つ、貴女のとこのバーテンダーの腕前を拝見しましょう。」

木賀は、新子の心の一抹の不安を^{よそ}外に、他意なく微笑んだ。

新子も、ひやっとした気持が、まだ胸には残っているものの、とにかく闊^{かつ}達^{たつ}な若者に對する自然な気安さで、立ち上ってバーテンダーのところへ行つた。

銀盆に落花生とカクテルとを載せて、運んで行くと、

「貴女は？」と、問われて、

「いけないんですの。」と、云うと、

「そりや、つままない！」と、云いながらも、酒ずきらしく、唇を細めて盃を嘗^なめるように、

「こりや、相当なもんですな。こんないいバーテンを、どこでお見つけになったんですか。店の装飾と云い、この店の顧問は、一体誰ですか。」と、木賀は悪意は、なさそうであったが、少しニヤニヤ笑いながら、訊いた。

「さあ、誰でしょうか。」新子は、苦笑しながら、ごまかした。

「案外、前川さんあたりじゃないかな。あの先生、あれでなかなかの洋酒通だからなあ。どうです、当りませんか。」

「存じません。」新子は、打ち消すだけの勇氣はなかった。

「僕、もう貴女は結婚してしまわれたのではないかと思つた。軽井沢で、この一筋と思うような人でなければならんというような気焰^{きえん}だったが、まだ見つからないんですか。この

「筋が見つからるので、ちよつと道草ですか。」

「さあ……」

「案外、見つかつているのですか。」

「ご想像に委せますわ。」

「こりや、いかん、南條さんも、人が悪くなりましたな。じゃ、見つかつているものと考えていいですか。」

「おほほほ……」

「案外、前川さんあたりじゃありませんか。」

新子は赤くなつて、

「あら、違いますわ。そんな風に思つて下さつては困りますわ。」

「じゃ、前川さんはこの店には来ないんですか。」と、木賀は笑いながらも、鋭かった。

「そりや、時々いらつしやいます。でも、それとこれとは違うじゃございせんか。」

「もちろん違ふし、たとい前川さんが、貴女の後援をしているにしても、僕は変な風には、考えませんよ。前川氏は、紳士だし、たいへんな女性尊重主義者だし……そりや清らかなものだと思つていますよ。しかし、それだけに、貴女が、いつかは前川氏をこの一筋と考

え込んでしまいそうだな。そこに危険がある！」

新子は、ひしと云い当てられながらも、躍起になって、

「まあ、そんなに想像を逞しくなさるもんじや、ございませんわ。まるで、私が前川さんのお世話にでもなっているように……」

「いや、そう思うのは、僕だけではありませんよ。」

木賀の言葉は、なお朗かであったが、新子はズシンと、胸を衝かれた。やはり、木賀が前川夫人のスパイであるような気持がして来た。

七

新子は、急に真面目になった。

「もし、そんな誤解をしていらっしやる方がございましたら、貴君がよろしく、弁解しておいて頂きたいわ。」

「そりや、頼まれなくつてもやりますよ。しかし、前川さんがこの店へ時々来るとすると、そう誤解される危険は、充分あるですな……。それに、あの爆弾夫人は……」

「え！」新子には、何と云つたのか、ちよつと分らなかつた。

「いや、あの前川夫人ですよ。あの人は、貴女も知っているとおり、嫉妬という点になると、まるで獵犬か何かのように敏感ですからね。怪しいと見ると、どんな手段でも取りますよ。あの人は、僕なんかも、貴女に対するスパイとして、利用しようとしているんですからな。ところが、僕はスパイを勤めるような顔をして、久しぶりに貴女に会いに来たんですよ。」

「じゃ奥さんは、私がここにいることご存じなんですか。」新子は蒼くなっていた。

「いや、ハッキリは知らないんです。しかし、貴女が銀座のある酒場バーにいることは知っていますよ。」新子は、それを聞くと、自分のやや安定していた生活が、グラつき揺がされたような気がした。

「誰が、そんなこと話したんでしょう。」新子は、何となく恨めしそうだった。

「誰ですか。しかし、僕が来たことは安心して下さい。僕は、夫人のスパイを勤めるよりも、必要によつては、貴女のために、策動しますよ。」

「……………」

新子は、木賀の相変らずの朗かな調子に、随ついて行くことが出来なかつた。木賀も、や

や、真面目になつて、

「貴女のために、計るとすれば、前川さんと全然ご関係がないとすれば別ですが、もしどんな意味でも、ご関係があるとすれば、前川さんは、当分ここへいらつしやらない方がよくありませんか。でない、あの夫人は、あれでウルサイですから。いざとなると恐いですよ。どんなことでもやりかねないんですから。」

それは、木賀の云うとおりであつた。このわずか一月ばかりの幸福な生活の地平線に、たちまち黒い密雲の立ちおほ掩うて来るのを感じた。新子は、さしうつむいたままだまつていた。

「僕は、貴女のために、奥さんの動静を探つてあげますよ。必要があれば、時々ご報告します。このマツチに、電話番号が、ついていきますね。」と、バー・スワンと銘のはいつたマツチを、一箱ポケットの中に入れた。

今更、木賀に対して、前川と何の關係もないと、抗弁するのも愚かしいことであつたし、と云つて木賀に、どうかよろしくと、依頼する気にもなれなかつた。木賀は、新子の氣持を充分察しているように、

「あまり、クヨクヨご心配にならなくつてもいいじゃありませんか。少し注意をすれば、

貴女がこの店にいることだって、容易に分りやしないですよ。」と、木賀は、サラサラ云つてくれたが、新子の胸の重い澱みは、どうすることも出来なかつた。

案内者

一

断髪が散らないように、手拭でキツと鉢巻をして、化粧をしている美和子の肌は、真珠色に輝いている。

「何だ！ 朝湯に行つて来たの。じゃ、美和ちゃん、一日だけの我慢で、今日はまた、新子ちゃんとお手伝いするつもり？」

「ううん。」

圭子に訊ねられて、美和子は眼に奇妙な色を浮べて、生意気な笑い方をして、首を振つた。

「じゃ、どつか外へ出かけるの？」

「ううん。」

「じゃ、どうしてそんなに、お洒落するの。」

「別に、当はないの。でも、街を歩いていて、さる人に会った時、相手を少し口惜しながらせるお化粧するの。振られちゃった女の化粧つてのよ。これは……」

「何を云つてるのよ。」

圭子には、美和子の心理など、少しも分らない。美和子は、真面目な表情で、鏡の中の己おのれに、ジツと見入りながら、振り返っているまつ毛の一本一本に、メーヴェリンを塗っている。刷毛はけでつけた頬紅を、脱脂綿でまたほのぼのとふきとり、上唇の濃いルージユを、下唇に移して、油性のクリームで光らせる。圭子も惹ひきつけられて、鏡の中の美和子の顔を、まんじりともせず、眺めている。

やがて、アルコールで温めたこてを取り上げて、額ぎわの髪の毛は、すだれのように、カールして、

「どう……クローデット・コルベールのクレオパトラみたいじゃない？ 綺麗！ 綺麗！」
と、独りで悦に入り始めた。

「どうかと思うわ。せいぜい少女歌劇のクレオパトラくらいだわ。あんたのようなのを、ベビー・エロというのかしら。」

「ううん。この頃は、チビ・エロというんだって？ でも綺麗なことは、お姉さんだって認めるでしょう。」

「あんたが、うぬぼれなければねえ。でも、あんたのようなお化粧は、お化粧の範カテゴリイ囲カテゴリイを通り越しているわ。化粧ばけしようだわ。」

「だって、ネオン・サインの街を歩くのには、私のようなお化粧でなければ、刺戟がないって！ この間、雑誌に出ていたわ。」

「ねえ、どこも、出かける当あてがないんなら、私の方へお手伝いに来ない？ でも、私は新子ちゃんじゃないんだから、お給金なんか上げないわよ。」

「ええ、行って上げようか。私今日から毎日一度ずつ、銀座を歩くことにしたの。だから、ちようどいいわ。私、銀座で会ったら、示威デモをしてやりたい人があるの。」

「下らない。来てくれるのなら、一しよに出かけるから、サツサと洋服着てよ。」

「ハイ、ハイ。」と、美和子は立ち上りながら、

「私も、お姉さんのように、舞台へ出ようかな。」と云うと、圭子は、

「駄目！ 貴女あなたのような精神的な陰翳のない人は駄目！」
「へえ。」と、唇をそらした美和子の表情の方が、姉よりは、ずーっと陰翳があつた。

二

天性明るく淡泊な美和子ではあつたが、しかし、意地っぱり屋であつた。

美沢の心の中に、新子に対する清算しきれないものがあるのを知ると、何か苛いらいら々として来て、ひたむきに美沢を追う気になれず、その不満をまぎらすために、姉の酒場バーで働いていると、そこへ美沢が現れて、

（君とも会わないよ！）と、何か新子を清算するお添物のように、あつさり片づけられてしまうと、美和子は口惜くやしくて仕方がなかつた。

何か、あつと云うようなことをやり出して、美沢や姉に思い知らしてやりたい気がしていた。

だから、圭子に精神的陰翳がないから駄目と、あつさり云われても、姉の世話係として、劇団へ出入でいりするうちに、自分も舞台へ出る機会を掴むつもりでいた。

圭子達の今度の公演の場所は、帝国ホテルの演芸場であつた。だが稽古場としては、銀座裏の桜亭という貸席を借りていた。

美和子は、その朗かな性質で、たちまち劇団の人達と、お友達になつてしまい、姉の手伝いばかりでなく、誰の用事でもしてやるので（美和ちゃん美和ちゃん）と皆から重宝がられていた。

今度の出し物は、日本の現代作家の創作戯曲であつた。

第一夜は、満員に近い盛況であつた。

第二日目の夜、楽屋入をして間もなく、圭子は面会のお客があつて楽屋から出て行つたまま、しばらく帰つて来なかつた。

二十分も経つた頃、座員の一人が美和子のところへ来て、

「お姉さんから、ホテルのグリルにいるから、君にもすぐ来い！　ことづつてという言伝ことづつてだぜ。」
と、云つた。

「ご飯喰べているのかしら。」と、美和子が訊き返すと、

「そうだろう。君にも、ご馳走してくれるんだぜ。」

「素敵！　素敵！」美和子は、雀躍こわどりして演芸場からは近い、ホテルのグリルへ駈けつけ

りた。

やっと六時を過ぎたばかりなので、広いグリルには、お客の影が少く、姉と見知らない一人の婦人どが、入口から左の少し小高くなっている床フロアテーブルの卓子テーブルに着いているのが、すぐ眼にはいった。

美和子が、わざと靴音高く近づいて行くと、姉がすぐふり返って、

「美和ちゃん、来たの。ここへおかけなさい。」と、自分の右側の椅子を、卓子テーブルから引きはなした。

姉と話していた婦人は、そのときチラと美和子の方を、微笑で見上げたが、美しい顔に似合わず、何か人を威圧するような気位のある人だった。

相手は、頭を下げないので、美和子も顎と上体だけをちよつと動かすようなお辞儀の仕方をして、席に着いた。

三

美和子が席に着くと、すぐ簡単な食事が運ばれた。

「これが、一番下の美和子でございます。」と圭子が先方へ紹介した。

「そうお。」

相手の婦人は、鷹揚にうなずいて、やや陰のある美しい眼で、ジツと美和子をみつめていたが、

「どなたも、それぞれ美しいわね。でも、この方が一番モダンね。」といった。

美和子は、相手が何なんびと人か分らないので、ただニコニコ笑っていたが、その婦人の右の手の無名指に輝いている五キヤラットはありそうな燦さんらん爛たるダイヤに驚いて目を刮みはつてみると、パンを取り上げた左の手にも、同じくらいの石が光っているのを見つけて、（アツ）という叫び声を、口の中で、やつと噛み殺したのであった。

男なら、誰の懐ふところにでも、たちまち飛び込んで行く美和子だったが、女となると割合、好き嫌いが、ハッキリしていて、最初の一瞥いちべつから、美和子はこの婦人が、あまり好きでなかった。

食事が終りかけた時、姉の圭子は、以前からの話の続きらしく、

「私が、ご案内してもよろしいんですが、開幕前で、何となく落着けませんし、妹ならもう行きつけているんですから。」と行って、相手の婦人が、うなずくと、今度は傍らの美

和子に、

「ねえ、美和ちゃん、この方、私の芝居を後援して下さい方で、新子ちゃんとも懇意にしていच्छしやる方なの。新子ちゃんに、会いたいとおっしやるから、貴女バー・スワンへ案内してあげてくれないこと？」

「どなた？」美和子は、さすがに、相手の名前を訊ねた。

「前川さんの奥さま。」圭子は、さりげなく返事をした。

「まあ。そうお。」と、美和子は改めて挨拶したが、しかし、美和子は、その老成した頭で、新子と前川とのただならぬ関係をほぼ察していたので、前川夫人を新子の酒場^{バー}へ、案内することが、どういう役廻りであるか、すぐ思い当ったので、

「でも、新子姉さん、驚かないかしら。」と、真面目な顔で云った。

だが、若々しく愛らしく見える美和子のことなど、無視したように、夫人は圭子に、
「圭子さん、いろいろありがとうお忙しいところを。じゃ、しっかりと、おやり遊ばせ。明日改めて、拝見に参りますわ。」と、云うと立ち上った。

「厭だ！ ずるいや。」と、夫人が二、三間歩き出したとき、美和子は、姉に低くつぶやいたが、後から姉に押されて仕方なく一しよに戸外へ出た。

四

美和子は、姉の圭子が、このいやな案内役を体裁よく、自分に押しつけたのだと思うと腹が立って仕方がなかった。

彼女は、わがままで随分新子に迷惑をかけていたが、しかし自分には、一文の得にもならないことで、新子を苛めたくはなかったし、その上この夫人を一目見たときから、何となく虫が好かなかった。だから、夫人と素晴らしい高級車に、一しよに並んで乗ってからも、彼女はつんとすましていた。

全然、美和子を子供だと見くびっているらしい夫人は、美和子の機嫌の悪いのを、そういう性格だとも思ったらしく、いろいろ露骨に、南條姉妹の戸籍調べのような質問ばかりしていた。

しかし、そうなるとかの女は、さざえが戸を閉めたように、無口になっていた。ホテルから、新橋よりのバー・スワンへは、物の三分ともかからなかった。

自動車が止まると、美和子は常よりも、もっと身軽に飛び降りて、ゆっくり落着きを見

せている夫人に、

「ちよつと。お待ち遊ばして！」と、さりげなく云うと、自分だけ、姉の店へ飛び込んだ。

扉口のすぐ傍のボックスにいた新子は、勢いよくはいつて来た美和子を見て、

「何というはいり方！ もう、来ないのかと思つていた！」と、皮肉を云つた。

「それどころじゃないわ。前川さんの奥さんが来たのよ。」

「えっ！ 貴女が連れて来たの。」

「だって、圭子姉ちゃんが、無理に、私に案内させるんだもの。お姉さん、困るでしょう

……」

新子の顔から、一時に血の気が引いて行くような感じで、口がきけないらしかつた。

「お姉さま、私を恨んじやいやよ。圭子姉ちゃんが悪いのよ。」

「……………」

新子は、ふらふらしたらしく、後の衝立うしろついたてによるけかかりそうになつた。

「いいじゃないの、お姉さま、何も恐がらなくつてもいいじゃないの。何も、お姉さま、なにも悪いことしてないんでしよう。グズグズいえば、お姉さまだって、いうだけいえばいいじゃないの。」

「だって、なまやさしい方じゃ……」と、新子がいいかけたとき、待ちきれなくなったらしい夫人が、扉から早くも半身をのぞかせて、

「私は、はいつてもいいでしょうね。」と云った。

新子は、そのまま立ち竦んでしまったように、夫人から視線をそらすことも、首を下げることすら出来ずに茫然としていた。

夫人は中へ足を踏み入れながらも笑顔を見せていたが、それは異常な緊張の微笑である。こうなると夫人の高雅な鼻の形などは、それだけの凄味を呼ぶのであった。

五

新子は、夫人の姿を見た瞬間からあさましさと、恐ろしさで、床のないところに立っているような感じがして、身体がわなわなふるえた。

「随分立派ね。」夫人は、新子にも会釈もせず、部屋の中を一わたり見廻した後、なすところを知らず、棒立になつてゐる新子を見ていった。

「ほほほほ。駭いたらしいわね。私が、何も知らずにいるなんて、思う方が間違いよ。」

新子は、胸を衝かれたような思いであったが、その言葉をきっかけに、やっと視線をそらしながら、機械的に頭を下げた。

「私、貴女にいろいろ訊きたいことがあるの。答えて下さるでしょう。」

店にお客が二組くらいあるので、さすがに物柔らかい調子ではいったが、新子は何とも答えられず、ただおぞましい悲しさで胸が一杯だった。

「お客の居るところで、話しするのは、私はいいけれども、貴女はいやでしょう。静かに話の出来る所はないかしら……」と、夫人は早口に云った。すると、美和子が、

「お二階のお部屋にするといいわ。私、ご案内するわ。こちらへいらして下さい。」と、云って先に立った。

新子は、薄情な美和子の言葉を遮る気力もなかった。

夫人が、何を訊くのだろう。その訊かれたことに、何と答え、何と抗すればいいのか。傷もつ脛の弱味で、どんなヒドい言葉でも、どんな無慈悲な侮辱でも、甘んじて受けなければならぬのだろうか。顔を逆さまに、撫でられるような気がして、どうしていいか分からなかった。

厳然たる態度で、奥へはいる夫人を、美和子は階段のところまで、案内すると、飛ぶよ

うに姉のところへ引き返して来た。

「大方、こんなことだろうと思つたのよ。だから、私いやだったのに、圭子姉さんたら、^{いやおう}否応なしに私に押しつけるんだもの。ご免なさいね。でも、二階へ上げて、話した方がいいわ。お店で話しているところへ、前川さんが、ひよつくり来ようものなら、たいへんなことになってしまふじやないの。だから、私下にいて、前川さんがはいつて来たら、善後策講ずるわ。」

子供だと思つていると、一旦緩急の場合には、相当頭の働く美和子の顔を、新子は少し呆れて見つめていると、

「そんなに悲しがることないわ。お姉さん、勇気を出しなさいよ。構わないじやないの。よしんば、前川さんに、どんなことをしてもらっているにしろ、お姉さんがあの奥さんに、責任を持つことないじやないの。ねえ、勇気を出して、会っていらっしやい。下手に、^{へた}謝つたりしたら、いやよ。堂々と、戦いなさいよ。」

やんちやなだけに、こうなると頼もしい妹である。

貞操問答

一

来てみるまでは、夫人もかほどまでに、新子に対する良人の心づかいが、行き届いてい
るとは思っていなかった。

階下を見て驚き、二階へ上つてみて、新子の私室プライヴェートらしい小部屋を見て、驚いた。
すべては、小ぢんまりとしていたが、季節の飯蛸いいだこのように、充実している。階段を上
るとき電話が引かれているのも見逃さなかった。

夫人は憤いきどおらしさと口惜くやしさと、良人に対する馬鹿馬鹿しいといった嘲あざけりを覚えるだけで、
良人の愛情にのみ生きている妻のように、嫉妬から来る苦痛は少しも感じず、こんなにま

で、良人の世話を受けていては、どんなに面詰しようとも、相手はグウの音も出まいと思
うと、彼女の心は躍り、眼は輝き、新子が上ってくる二、三分の間も、もどかしいほど、
心はやるのである。

新子は、このまま逃げ出してしまいたいような、激しい衝動を感じて、藁をもつかみ
たい今の気持には、美和子に勇気づけられたことで、やっと心を落着け、メズーサの首の
ようにも恐ろしく思える夫人に直面すべく、階段に足をかけた。

階段を上って行く姉の後姿に、さも絶望したような憐れな容子があるので、美和子
はいたく心を動かされた。

ぼんやりしているよし子や妙子の側へ行くと、
「貴女達、気にかけないで、お客さんの方よろしくね。レコードをかけて、大いに騒いで
いてね。前川さんが来たら……」と、云いさして、小ざかしくも頭をかしげて物思いなが

ら、

「あんまり、二階の話が長いようなら、私容子を見に行くかも知れないから、その後にもし前川さんが来たら、ちよつと取りこんでいるから、資生堂へ行っているように、話してくれない、ね……」

と、云うと自分も、奥へはいり階段の下から、二番目のところまで昇つて上の容子いかにと聞耳を立てるのであった。

新子が、自分の部屋へはいると、夫人は新子のベッドの端に腰をかけながら、皮肉な微笑を浮べて、新子を迎えた。新子が、また落着きを失つて、シヨンポリとその前に立つと、「ほほほほ。南條さん、しばらく。私が、いきなり来たので、随分驚いていらつしやるらしいわねえ。でも、私の方だつて随分びつくりしていますよ。私、偶然、貴女のお姉さまとお友達になつて、貴女がバーなどに、勤めていらつしやるつて聞いたんで、びつくりしましたの。貴女のようなインテリ女性が、こんな商売をなさるの、勿もつたい体ない気がしましたの。そして、酒場バへは主人がお世話したという話でしたけれど、まさかと思つていま

した。でも、ここへ来て、私驚いてしまいましたわ。この家は、たしかに主人が出した店ですわね。私が見覚えのある装飾品だつて、三、四点あるんですもの……」と、征服者のように笑いながら、「新子さん、貴女、お腹ン中で、私のウカツさを笑ってらしたでしょう。」と、云つた。

二

こんなことで、取り乱しては、自分の品位に拘かかるとでも思っているのだろうか、態度だけは、あくまでも冷静に、言葉も針のように鋭く、

「まさか、貴女もこのお店と、主人とが何の関係もないなんて、おつしやらないでしょうね。家具の好み、装飾の好み、これはたしかに前川ですよ。色の調子なんか、私の家の主人の部屋と、そっくりですもの。」

新子が、良心的である以上、今更そうした断定に抗することは、出来なかつた。

夫人は、最初の前提をしっかりと定めるべく、

「この店を前川が出したことを貴女否定なさらないでしょう？」

「……………」

だまつてはいたが、不覚にもかすかに、うなずいた。

「貴女だつて、悪人じゃないんでしようから、こんな見えすいたことまで、かくしはなさらないわけね。じゃ、お訊きするわ……」と、夫人はさも軽蔑したような調子に変わり、

「私と主人との間には、今までは何の秘密もなかったんですのに、私に全然内証ないしよで、主人が貴女の世話をしているなんて……。一体、貴女は主人の何なんですの！」と、冷静を装っている夫人の眼も、さすがに光った。新子は、懸命な努力で、

「前川さんと私、何でもございませぬ。ただご親切にいつて下さるもんですから、この店で勤めさせて頂いているだけですの……」と、いった。

「そう！　じゃ、貴女は雇人ですの。でも、雇人の貴女が、

こんなハイカラなベッドや、立派な鏡台を持っているんですの……」と、夫人はまず、鋭い皮肉を浴せておいてから、「南條さん、貴女は、口では綺麗なことばかりおっしゃるけれど、貴女と私達一家とは軽井沢でご縁が切れているはずでしょう。それなのに、なぜ主人と交渉を……しかも並々ならぬ交渉をお持ちになつていますか。しかも、妻たる私に、内証に。それが、私には不可解なのですよ。貴女が、最初から私と、何の面識もない、

どつかの職業女性プロフェッショナルなら、こりや私わたし文句は云いませぬわ。ところが貴女は、かりにも、半月なり一月なり同じ家において、私と朝夕顔を見合わせた関係でありながら、私に内証で、前川と特別の關係をお持ちになる。主人が貴女を再び呼んだのか貴女が主人を呼び出したのかどうか知りませんが、一切私に秘密に、こんないかがわしい店に、貴女がいて、毎晩主人と会っていらつしやる。そういうことはかりそめにも、教育のある淑女のなさることでしょうか。貴女自身可笑おかしいとお考えにならないのですか。そんなことをなさつては、貴女を立派な淑女として、私の家へ紹介した路子さんに、申し訳がないとは、思わないのですか……」

三

層々と畳みかけて来る夫人の、一言一言つるぎを並べたような鋭い侮辱に、新子は完膚なきまでに斬り苛まれながらも、返すべき言葉は見当らず、ただじつところ見える全身の口くちや惜しさに、指先が烈しく震えて来るのであった。

夫人は、新子が自分の言葉に、打ちひしがれて返事も出来ぬ容子に、有頂天になり、口

で与え得るかぎり、あらゆる侮辱を与えて、二度と再び前川の周囲に、立ち寄せないことにしようと、頭の中でいろいろ効果のある云い廻しを考えた後、

「こんな生活なんて、大抵自尊心プライドのない、無教育の女がやることですけれど、貴女は不思議ですわね。専門教育をお受けになつたくせに、よくこんな寄生虫的な生活がお出来になるのですね。」と、（つまり、貴女は教育があるのに、人の妾めかけになるのか）と、云わんばかりの言葉で嘲った。

新子は、たとい貞操を売っていないにしろ、形式だけはそう思われても仕方のない生活をしているだけに、夫人の非難の少くとも半分は胸にヒシヒシと徹こたえるので、心はしめ木にかけられたように苦しく、なぜこんな生活に、足を踏み入れたのだろうか、我が身があさましく思われて、危く涙が出かかった。

その上、新子がだまっていればいるほど、それはいよいよ夫人の氣勢を、煽ることになるらしく夫人はいよいよ凶に乗って、

「この店で働いているなんて云えば、とても体裁がいいけれど……私は、良人が、こんな不見識な商売をしていることだつて、我慢できないんですよ。私の実家や、お友達にでも知れようものなら、良人はともかくも私までが、どんなに恥しい思いをすることでしょう。

しかも、以前、私の家で家庭教師をした女を、その店のマダムに使っているなんて、分ろうものなら、それこそ、いい加減醜聞スキャンダルじゃないでしょうか。それにしても、貴女に長く子供達を委せておかなかつたことは、こうなってみると、ほんとうによかつたと思えますわ。」

夫人は一層意地わるく、ジリジリと新子を責め始めて、

「あのまま貴女に長く居て頂こうものなら、それこそ私の神聖な家庭まで、汚されたかもしれませんわ。」

「まあ！ 奥さま、それはどういふことなんですか。」と、新子も堪りかねて云つた。

「どういふことだか、貴女の胸に手を当てて、訊いてごらんなさい！」

「だって、奥さま、私前川さんと何もやま邪しい！」

新子の口惜し涙は、とうとう頬に糸を引くまでになつて、身をふるわせながら、必死に叫んだ。

「じゃ、お訊きします。貴女は、この部屋で、前川とお会いになつたでしょう。それとも、お会いになりませんか？ この部屋、このベッドなんか置いてある部屋で！」

夫人の額にも、激しい嫉妬の影がひらめいた。

四

西洋では、男女二人ぎりで会う時は、部屋の扉ドアを開けておくと云う、日本は、それほどでないにしても、ベッドの在る部屋で会っていれば、どんな疑いをかけられても仕方のない道理なので、急所を衝いて来る夫人の言葉に、新子はまた一太刀斬りつけられた思いで、「でも何にも……」といったまま、後の句が継げないでいると、夫人は緩急自在、やや鋭鋒を収めた形で、

「まあ、いいわ。今までのことは、どうだつていいわ。よしんば、貴女と主人との間に、何かあつたにしろ、どうせ主人の気紛れか過失だつたと思えますわ。主人が、貴女のような人を本気に愛しているなんて、考えられないんですもの。だから、今までのことは深く咎とがめないわ。ただ、これから、先のこと私の心配しているような醜スキヤンダル聞ガが、世間に広ハがらないように貴女にも考えて頂きたいのよ。そのために、私恥を忍んでここへ来たんですから、貴女だつて、いずれはお嫁にいらつしやる身体でしょう、今下らない噂なんか立てられたら、一生の恥じやありません？」

そう云われれば、そのとおりには違いない。しかし、新子は素直に、肯きく気にはならなかった。

「だから、私、貴女が主人と、何でもないとおっしゃるのなら、それを信じたいわ。貴女も、信じてもらいたいでしょ。でも、貴女が潔白を証拠立てるのには、この店から、今晚にでも出て行って頂くのが一番よくないかしら。貴女が一介の雇人だとおっしゃるのなら雇人だということを、私の前で見せて頂きたいの。ねえ、南條さん！ 私の申し上げることが、無理かしら。」

まず名分論で、新子をさんざん痛めつけた上、今度は實際論で、新子を窮境に追い込もうという作戦であった。

新子としても、かほどまでに悪辣な夫人に対しては、教養も外聞もかなぐり捨てて、滅茶苦茶な論戦を開くか、でなかったら、夫人の面前で前川との関係を、きれいに清算して（お騒がせしてすみません）とアツサリ引き下るか、二つに一つを出いでないのであり、しかも今更、夫人と、いぎたなく口争いする勇氣もない以上、今はサラサラと引き下る外ないのであるが、しかし、ただこのままに出て行くのは、何と云っても口惜かなしく、敵かなわぬまでも、何かしら云ってみたく、

「でも、私前川さんから、このお店を、お預りしているんですから、前川さんから、お話がない以上は……」と、云いかけると、夫人は軽く引き取って、

「それはいいじゃありませんか。この店が前川のものであることを、貴女が認めていらつしやる以上、前川の妻の私が、出て下さいと云う以上、お出になってもいいじゃありませんか。バーテンダーを呼んで下さいませんか。私バーテンダーに話しますから。」

新子にとつて、はや絶対の場合となつた時、何と思つたか、美和子が、気楽そうな笑顔で、いきなり扉ドアを開けて、部屋の中をのぞき込んだ。

五

美和子は、姉の泣き顔を一目見ると、急に前川夫人に対して、猛然たる敵意を感じたらしく、その可愛い眼に、殺気を漂わせ、部屋の内にはいつて、姉の傍に歩み寄りながら、「お姉さま、どうしたの？」と、いつて訊いた。

「……………」

新子は、さすがに妹の肉親の情の頼もしく、それだけまた悲しくなつて、口がきけずに

いると、美和子はいきなり、前川夫人に対して、

「奥さま、どうしたと、おつしやるんですの。私に、案内させておきながら、お姉さまを苛めるなんて、厭ですわ。」と、喰つてかかった。

夫人は、この小イちやい娘をハナから、無視していることとて、

「貴女は、お若いんだから、下へ降りていて下さらない？」と、アツサリ片づけようとする、

「いいえ。いやですわ。お姉さまを苛められて、私だまっては、いられないわ。」

小さい身体が、まるで反抗の塊のように、飛びかかって来そうである。

「まあ！ 私いじめてなんかいませんよ。」

「いいえ。いじめていらつしやるんですわ。きっと、お姉さまに、いろいろな疑いをかけて！」

夫人は、少し本気になり、

「だって、そりや疑わしいことを、いろいろするんですもの。」と、いった。

「疑わしいことって、何ですの。」

「貴女のような、小イちやい人には、話せないことだわ。」

「それなら、分っていますわ。お姉さまと、前川さんとの間を、疑っていらつしやるんでしょう。」

「おませね、貴女は……」

夫人は、眉をひそめながら、いまいましそうに、

「それなら、貴女にもいつてあげるわ。どうせ貴女も圭子さんも、新子さんの縁で、前川の世話になっているんでしょう。そういうことを、貴女は自分で可笑しいと思わないんですか。前川と新子さんが、普通の関係で、貴女方妹きょうだい姉あねまでの面倒が見られますか。」

と、夫人は手きびしくやつつけたつもりでいると、美和子はケロリとして、
「あら、それは、奥様のひどい考え違いですわ。お姉さまなんか品行方正よ、ちゃんとしているわ。」

「品行方正で、こんなに前川の世話になっているんですか、前川と何でもなくて、こんな今まで前川の世話になれますか。」

「あら、お姉さんは、前川さんの何でもないわ、ただ、前川さんがお姉さんを、トテも好きただけだわ。」

それは、まさに夫人の自尊心を、真向に割りつけた返事である。

たとい、良人と新子との間に、關係があつたにしたらところで、それを良人の氣まぐれ、乃至は過失として片づけたい夫人には、良人が新子を愛していると云われたことは、堪えられないことだったので、思わずカツとなつて、

「汚わしいことですわ、良人に限つて、他の女性を愛しているなんてこと、絶対に信じられませんわ。」と、大見得を切つたが、美和子は、それを事ともせず、

「だから、奥さまは何にもご存じないんだわ。ご存じなければ、ご存じないで、その方が幸福なんだわ。知らなければ、知らないで済んでしまふんですもの。わざわざこんな所を探して、いらつしやることはないわ。」

あまりの暴言に、夫人は正面からピシヤリと叩かれた思いで、しばし呆氣に取られて、美和子の顔を、まんじりともせず眺めていたが、その洒々とした容子に、また腹が立つて来て、

「まあ、なんて恥知らずの人が揃つているんでしょう。私が、ここへ来て何が悪いんです。私の家庭を破壊しようとする者があれば、その人を面詰するのは、私の権利ですもの。」
今は、皮肉な冷静な調子はなく呼吸もややせわしく取り乱して来た。

「だつて、そりやお姉さんを責めるよりか、前川さんをお責めになる方が、先だわ。」と、

美和子は、さり気なく首を振った。

「だって、新子さんは、一度私に使われた人じゃありませんか、その人が、私の家にいる間に、主人と怪しい関係をむすんで、私の家を出ると、コソコソと店を出させたことを、私がだまって放っておけますか、貴方のような子供には、夫婦間の問題なんて、分らないことですよ。下へ降りていて、頂戴！」

夫人は、憤りに煽られて、権柄づくに、そう云った。

「いやですわ。私が、案内して来た人が、お姉さんを侮辱するのを、だまって見ていられないわ。」美和子は、決然として屈しない。

「私だって、故ない侮辱は致しませんよ。」と、夫人も今は、この小娘侮りがたしと見て、必死だった。

新子は、もうどうにも出来ない羽目に、追い込まれたので、身を棄てて、夫人の罵倒に甘んじようとした矢先、思いがけない美和子の颯爽たる助太刀を、頼もしくは思いながら、これ以上事を荒立てると、どんなことになるかもしれないので、

「美和ちゃん！」と、低くたしなめた。すると、美和子は、紅潮した頬を向け、

「お姉さんが、煮え切らないからいけないのよ。だから、愚図愚図いわれるのよ。」と、

姉触るれば姉を斬る勢い。

六

(愚図愚図いわれるのよ) という美和子の言葉に、夫人はギョツとして、

「愚図愚図いとうとは何ですか。生意気だわ貴女は。何だって、私をそんなに侮辱するのですか。」と、今度は自分の方が、被害者でもあるかのような夫人の口調である。

美和子は、相変らず、物に動じない円な瞳つぶらをジツと、見はって、

「だって、そうなんですもの。前川さんは、穩便主義でお姉さんは、志操堅固なんですもの。愚図愚図いわれることなんかちつともないわ。お姉さんは、処女ですわ。わたし、処女であることを信じているわ。奥さんに、苛められることなんかちつともないと思うわ。」姉に対する美和子の信念は、熱を持っていて、さすがに有力な反撃であった。だが、夫人も負けてはいず、

「へえ——。不思議なことを聞くものね。それなら、なおのこと、こんなベッドのある部屋で、前川と会うことなんか、慎むべきですわ。」

「そんなことは、お姉さんに、おつしやる前に、前川さんに、おつしやるべきだわ。」

「貴女の指図は受けなくつても、むろん前川を責めますよ。しかしそうするためにも、このいかがわしい場所を、確かめておく必要があるじゃありませんか。」

さすがの夫人も、才氣煥^{かんぱつ}発、恐ろしい者知らずの美和子には、ややてこずっている気味である。

「だって、確かめようがありますわ。処女であるお姉様に対して、誰と怪しいとか怪しくないとかそんな確かめようなんて、ないと思うわ。そんなことを、おつしやるのは、かえって貴方^{あなた}の人格を傷つけることになるんだわ。」

と美和子は、もう姉のために弁ずるよりも、いかにもけんだかな増上慢を、歴^{ありあり}々と顔に出している夫人に、突つかかつて行く興奮に自ら酔うているように、止めどもなく、喰つてかかつて行く。

子供らしい彼女の受口の舌の中には、少しは的はずれでも、とにかく相手のどこかを突き刺す毒の針が、無数に含まれている。

新子は、眼を伏せたつきり、問答は全く、夫人と美和子に移って、彼女は圏外に出された形である。

夫人は、今まで、わがまま一杯に育ち、人を権柄づくにやつつけることには、巧みでも、一度相手から逆撃されてみるとたちまち勝手が違い、カツとのぼせ上つて来、気の遠くなるほど、美和子が憎らしくなりながら、口の方はかえつて辛辣さを無くしていた。

「私は、別に埃のないところを叩いてやしません。それが証拠に、新子さんは恐れ入つてるじゃありませんか。」

美和子を避けて、弱い姉を衝こうとした。

七

美和子は、また奮然として、

「お姉さんだつて恐れ入つているもんですか。お姉さんは、あんまり良心がありすぎるから、たつた一月お世話になつたことを考えて、遠慮しているだけよ。こんなに慎みぶかいお姉さまを危険視するなんて、大間違いだわ。お姉さんを、警戒する前に、奥さまは、手近な前川さんの心臓を、しっかりと握りになつていいんだわ。」

これは、美和子の揮^{ふる}う論理の中でも、相当夫人にとつては、痛いものであるだけに、夫

人はますます苛々^{いらいら}して、表情らしい表情を無くして、了^{しま}い、

「下らない理窟なんか聞きたくないわ。ともかく今夜かぎり、貴女方姉妹は、この店に入を止して頂きたいわ。ねえ、新子さん、それに異議はないでしょう、貴女は先刻承諾したはずですもの。」と、敢然として高圧的な態度に出た。

「どんな理由で、止さなければならぬんですか。」と、美和子は落着き払って訊いた。

「どんな理由？ 私が厭なんです。前川がこんな酒場なぞを出すことに、反対するのです。この店が無くなる以上、貴女がここに止まる^{とど}わけはないじゃありませんか。」夫人は、ようよう冷然たる態度を取り戻して来た。

「あら、奥さまは、そんな権利をお持ちにならないはずだわ。」

「おや、どうして……良人のものは、私のものですわ。」

「だって、このお店、前川さんのものじゃないわ。」

「じゃ誰のものです。」夫人は嘲りながら云った。

「みんな新子姉さんのものよ。」

「美和ちゃん！」新子は、思わず美和子を押えようとした。

「お姉さんなぞ、だまっぺいらっしやい！」と、云ってまた夫人に向い、「このものは、

みんなお姉さんのものだわ。」

夫人は口惜くちおしそうに、ジツと美和子を睨にらみつめながら、

「だって、みんな前川が買ったものじゃありませんか。」

「お金は、誰から出ているか、私知らないわ。しかし、今では、みんなお姉さんのものだわ。だって、お店の名義は、お姉さんの名前ですもの、そりや、みんな前川さんから貰ったものかもしれないわ。でも、貰い物は貰った人のものよ。」

「まあ！ 図々しい！」

「図々しいよりも、こんなこと云い合うの、下品だわ。あさましいわ。だから、お姉さんは、だまつていらつしやるのよ。奥さまが、愚図愚図と云えばだまつて出て行くつもりよ。だからお姉さんの方が、奥さまや、私よりも人間が上よ、一言も云わないんだもの。」

「ヒドイ！」

夫人は怒りにかすれた喉のど声こゑでそう云うと、いきなり立ち上った。立ち上って、扉ドアを押すと、よこつ飛びに階段へ出た。

殉愛の道

一

「美和チャン、あなた貴女……」

「シツ、静かに。」と、姉の言葉を押えて、階段口から階下の情勢を窺うかがったが、動き出した自動車のエンジンの音を聞くと、

「帰っちゃった！」と、舌を出した。

「だって、貴女、ほんとにひどいこと云うんだもの。」

「ひどいって、どちらが……。あれは、一体何をして生きている人種ひとですか。苦勞知らずの奥様で、お金があつて、暇があつて、且那樣をお尻に敷いて威張っている上に、ちよつ

と貧しい同性は、目の敵かたきにして、こっちの困ることなんか、おかまいなしに、すぐ出て行けだなんて……人を馬鹿にしているじゃないの、もっと苛いじめてやればよかった。あたし、あんなのと喧嘩するの大好きだわ。」

美和子が、おどけた口調でいうので、場合を忘れて、新子もちよつとほがらかになりながら、

「だって、貴女だって、あの奥様の立場になれば、きつとああだわ。」

「モチ、あたしだったら、もつと凄くなっちゃう。」と、艶あでやかな笑顔をしてみせた。

妹の思いがけない奮闘で、急場の難儀を逃れたことを、嬉しく思うものの、しかし新子の心境はみだれていた。

前川が、夫人に対する態度をよく知っており、それを改めることが、前川にとって不可能であると思われるだけに、夫人にすべてが知られてしまった現在では、前川と自分との交際も、これが最後であると考えねばならなかった。

もし、またそれを続けるとしたならば、今以上に、太陽の当らぬ日蔭の地を選ばねばならないし、またどこに隠れていようと、ゲー・ペー・ウーのように鋭い夫人の眼を怖れて、常に恟きよう々きようとしていることは、新子の堪え得るところではなかった。

今こそ、前川の周囲から、身を引いて、明るいところへ、新しい生活を築き直すべき機会であると思つた。

新子が、ふかくうなだれて物を思つていると、女ウエイトレス 給のよし子が、不安な表情で上つて来て、小声で、

「先刻、前川さんがお見えになりましたので、美和子さんのおっしゃったとおり、資生堂で待つていて頂くように、申上げておきました。」と、いった。

「あら、そう、どのくらい前。」

「たつた今でございます。」

「お姉さま行く？」と、美和子は姉を見た。一ひとあし歩、店を出ると、すぐ前川夫人につかまりそんな気がして、新子は会いに行く、勇気が出なかつた。

「じゃ、私、行って来るわ。とにかく、事件を報告してくるわ。あの人にも少しいつてやるの。」と、新子が、止める隙もなく、美和子は一散に店を飛び出して行った。

（今取り込みがありますのよ。資生堂で、しばらくお待ちになって下さいませんか、とおっしゃってましたわ）と、よし子にいわれて、しかも奥を気にするその態度に、そわそわした不安が感ぜられたので前川は、（あ。よし！）と、軽くうなずいて引き返すと、指定されたとおり、一町とはない資生堂まで歩いて、空いたボックスを探して、腰をおろすとアイスクリームを注文した。

取り込みつて、何だろう。姉きょうだい妹い喧嘩けんかでも、始めたのであろうか。それとも、姉から妹に移ったという若い音楽家でも、飛び込んで来て、事トランプル件けんでも起したのであろうか、などと今までに例のないことだけに、狐につままれたような感じのなかにも、新子の身を案ずる不安が漂っていた。

だが、十五分とも、待たないうちに、待っていた姉の代りに、美和子が入口に現われ、わざと入口から見えるような位置に腰かけている前川を見つけると、思いの外に元氣のいい笑顔で、近づいて来た。

「やア。」と、笑顔で迎えれば、

「のん気な、顔をしてんのね。」と、きめつけられて、

「おや、あべこべじゃないですか。そちらこそ、取り込みがあったというのに、のん気な

顔をしているじやありませんか。」

「あら、取り込みなんて、よし子がいったの？　取り込みなんかじゃないわよ。ただ、前川さんが、会いたくない人が来ていたのよ。」

「じや、昔お姉さんの恋人であった人で、今度貴女と結婚するという人？」

美和子は、ちよつと憤いきどおつた顔をして、

「自分のお蔵に、火がついたのも知らずに、何を云つてんの。私達の恋人じゃないわよ。貴君あなたの恋人よ！」

「嘘、おっしゃい！」

「嘘なもんですか。前川夫人が乗り込んで来たのよ。」

「僕の女房？　ウソでしょう。」

「そらそら、すぐ色を失うくせに、……嘘なもんですか。」

「綾子が……どうして……」前川は、きれぎれに呟いた。

「どうしてだか、お家へ帰つて奥さんに訊くといいわ。」

「綾子が、あの家を知つてゐるわけではないんですよ。冗談にも、そんなことを云うものじやありませんよ。」

「そんなに、興奮しないで、落着いて、落着いて！ とにかく、私がどうにか帰したんだから。」

「本当ですか。」

「本当よ。」癩しやくにさわるほど、美和子は落着き払っていた。

三

「グレープ・ジュース、氷沢山入れてね。」と、ボーイに命じて、後は前川の張りついたような顔に、愛らしく笑いかけて、

「貴君の奥さんと、やり合ったんで、喉が乾いちやったの。……でも、不愉快だわ。」

「貴女が、やり合ったんですか。」前川は、気の毒なほど、蒼くなっていた。

「そうだわ。だって、新子姉さんは、何にも云わないんだもの。だから、マダム、俄然がぜん威張つちやつて、お姉さんを泣かしてしまっただから……」

「お店で、ですか。」

「お店で、始まりそうだったから、二階へ上げちやったの……」

「二階でね。」前川は、秘密の核心を衝かれたように、憂鬱な顔になって、

「しかし、こんなに早くどうしてあの店が分つたんでしよう。」

「圭子姉さん、ご存じ？」

「知っています。」

「あれが、マダムに籠絡ろうらくされているんだから、世話はないの。私が圭子姉さんに頼まれて、だらしなく案内してしまったの。」

「圭子姉さんか、ウツカリしていた……」

物事の径路がハッキリして来ると、今までは半信半疑であった事件が、マザマザと考えられて来、妻の露骨な仕打ちが、わが事のように差はじらわれて来た。

「奥さんも、随分思い切ったことなざるわねえ。たとい、お姉さんを疑っていらしても、いきなりここへ来て、直接行動を取るなんて、ひどいわねえ。」

「ひどい——とんでもないことをする。」前川は、懽然としている。

「前川さんも、いけないのよ。奥さん一人を、操縦できないくせに、私のお姉さんを、どうかしようって、ムリよ。」前川は、この小娘と思いなながらも、返すべき言葉がなかった。それに、お姉さんを、心では二につちも三さつちもないほど、好きになっただけながら、いつ

までも穏便主義でやろうなんて、ムリだわ。ムリというよりも、意気地がないわ。四十男の感傷主義なんていやだわ。女学生の作文のような恋愛なんか、いやだわ。そんな中途半端だから、お姉さんも苦しみ、貴君も苦しむのよ。やるのなら、ハッキリした方がいいわ。

「はははははは。」

前川も、つい苦笑してしまった。しかし笑いながらも（負うた子に、浅瀬を教えられ）と、いろいろはだとえを思い出していた。

「じゃ、あたし行ってお姉さんを代りによこすわ。よく慰めてあげて頂戴ね。お姉さん、随分考え込んでいるわよ。」と、いうとスラリと立ち上って、早くも入口の方へ、二、三間歩み去っていた。

四

風のように、美和子が去ってしまうと、前川は、しばらく味気なさあじきそうに、煙草を吸い
つづけた。

世の常の良人おつとならば、かかる場合には、たまりかねて、飛び出して来た自分の妻の心根にもかなり同情するのであろうが、同棲して以来、十幾年、常に夫人の高慢な意地の悪さに、悩まされる前川は、夫人の人格的な欠点を、洗いざらい見せられたように、眼の前が暗くなり、妻に対して、落莫たる味気なさを感じるばかりであった。

五分、十分、新子の来るのが、なぜか手間どった。新子が、どんなに、厭がっているだろうということが、分っているだけに、気が気でなかった。

重ねて、何を註文する気にもなれず、卓の上の一輪ぎしの、名も知らぬ西洋草花をじつと見ていた。

「お待たせ致しました。」

ハツとして、顔を上げると、急いで化粧したらしく、乱れのないいつもの新子が、それでもやさしく微笑しながら立っていた。

「すみませんでした。」

前川は、まじまじしながら、頭を下げてあやまつた。

新子は、唇のあたりに、ちよつと悲しい影を漂わせて、しかし眼は前川の気を、引き立てるように笑いながら、かす微かに首を振って、席に着いた。

「ほんとうに、申し訳ありません。かんにんして下さい。」と、重ねて、詫び入りながら前川は、にわかには胸の内に、明るいものが、さし上つて来るのを感じた。

（結局、俺の生活には、この人が一番、大事なのだ。この人をさえ失わなければ……何物をも犠牲にして、この人を失わないことが大事なのだ……。人生の方針を、そう訂正することが正しいのだ……）と、彼は思った。

家へ帰つて、夫人にどう云われようが、夫人がどんな行動に出ようとも！

曲者の夫人は、こうなれば……前川の愛が、自分にはないことを知れば知るほど、ただ夫婦という立場だけを、振り廻して、向つて来るに違いなかった。しかし、夫人があらゆる謀計を逞したくましゆうしても、もう前川は、二足三足昇りかけた殉愛の階段を、降りる気はなかった。いな、たといその階段が、地獄への下りくだりになつていようとも。

「僕どんな償いでも致します。だから、妻の云つたことなど忘れて下さい。」と、云うと新子は、首を振つて

「いいえ。」と、打ち消した。

「どうして？」前川は、憂鬱そうに、顔を曇らせて訊ねた。

新子は、せかずにゆつくりと、自分の気持を前川に伝えたかった。しかし、そうするに

は、ここはあまりに、人目が多すぎた。

五

新子が、何か云いためらつており、それがまた周囲のせいだと思つと、前川は、「ともかく、ここを出ましようか。」と、云つた。新子が、機械的に頷うなずいてしまったので、前川は重ねて、

「どこか、静かな家で食事でもしながら、お話ししましょう。」と、云つた。

新子は、素直に立ち上つて、外へ出ると、レジスターへ行つた前川を、涼しい夜風に、吹かれながら待つていた。

「どこへ行きましようか。」と、訊ねる前川に、

「あちらへ！」と、築地の方向を指さすと、一、二間先に立つて、電車通りを渡つた。向う側の横町なら、人目も少いし、万が一にも綾子夫人に、見られる氣づかいはないと思つたのであろう。

出雲橋を渡つて、人通りが少くなると、新子は歩調をゆるめながら、

「私、奥さまに、家庭破壊者だって、いわれたのが、一番悲しゆうございましたわ。」と、いい出した。前川は、だまって聞いていた。

「外国の芝居なんか読んで、（汝！^ユ 家庭破壊者よ！^{ホームブレイカー}）なんて、夫人^{マダム}に追い出される女なんて、どんなに嫌だろうと思っていましたのに、私自身いわれてしまったんですもの。まるで、伝家の宝刀をつきつけられた賊のようでしたわ。私、どんな清純な気持でいても、奥さまの立場から見れば、そうに違いないんですもの。やはり、奥さまのおありになる方には、どんな意味でも、お世話にならない方が、いいんですわ。」

前川は、新子に云わせるだけ、云わせた方が、かえって彼女の胸が晴れるだろうと思つて、なお黙然として歩いていった。

「これ以上、お世話になつていても、年中ビクビクしていなければなりませんし……それに、美和子が奥さまに、随分失礼なことを申し上げたので、奥さまは、私達姉妹をもう、仇敵のように思つていらつしやるでしょうし……」悲しげに声が曇り、新子もしばらくだまつて歩いていたが、

「お世話になるばかりなつてしまつて、勝手なこと申し上げているようで、悲しいんですけれど……」と、新子は前川が、黙々とこつちの云い分を聞いているだけなので、かえつ

て胸が一杯になり、その先を続けて云うことが出来なくなつた。

いつか、広い昭和通の歩道を、左へ左へと歩いていた。

「それに、私ばかりでなく、姉や妹までが、ご迷惑ばかりかけているようで、いやになつてしまいましたの……」

六

人の往来は少く、ただ自動車の激しく走り過ぎる広い通りに添うて、どこまでも歩きな
がら、前川の沈黙は、無気味なくらい続いた。

ふとした出来心だとか、物の拍子で、新子に「酒場」を出させたのではなかつた。

新子に会つていさえすれば、何ということなしに心豊かに、新しい希望の湧き立つよう
な、喜びを感じるからだ。

しかし、前川は穩健主義の紳士で、周囲を毀ち破つてまで、新子との交情を深める考え
はなかつた。

綾子夫人の眼から、そつとかくれて、静かな、足るを知る幸福に甘んじて暮して行こう

と思つていたのに、綾子夫人はこうした、慎しく隠されたる花園にまで、踏み入つて来て、新子をそこから追い出そうとしていたのである。

新子を感じているように、この関係は不自然に違いない、しかしそれかと云つて、新子との交渉を絶つてしまふくらいなら、自分の位置や名誉はおろか、自分自身さえ、何か要らない無用のもののように、感じられて来る前川だった。

(お別れした方がいい)と云つている新子にも、何となくそぐわな一時的の感情が、動いている気がしてならない。

自分の態度が徹底していないために、結局新子も、いい加減なところで、フラフラしているという感じであつた。

前川は、歩きながら、つくづく考えた。新子のような性格的にも上品な、一人の処女を獲るためには、自分の家庭や位置や名誉までも、犠牲にする覚悟が必要なのだ。及び腰で、手をさし延べているような、自分の態度のために、かえつていろいろな事件が起つて来るのかもしれない。

そう考へて来ると、ジワジワとねばり靱い^{つよ}昂揚が、心の中に盛り上つて来た。

「僕は、決心しました。妻が穏便じゃないんですから、僕も平和第一、安全第一の常識を

棄てることにします。」彼は、静かにいった。

「え？」と、新子は、びっくりしたように、眼を見開いて、相手の横顔を見た。

「僕は、貴女を失いたくない！ 何物に比べても貴女が大事だ！」

「だって……」と、打ち消そうとしたが、新子は顔を赤らめて、うつ向いてしまった。

「迷惑だとおっしゃるんですか。」前川は、勢い旺さかんに訊ねた。

「まあ、迷惑だなんて、そんなことをおっしゃるのなら、私このままどこかへ身をかくしてしまいますわ。さつきから、そんな気持で、申し上げているではありませんの……ただ、奥さまにだって、わるいし、……お子さま達にだって……」

「そんなことを貴女に考えさせていたのは、僕が卑ひき怯きようだからなんだ、今後、どんなことが起つて来ても、僕のことで貴女にご迷惑はかけないことにします。僕は、その決心をしました。」

相手の激しさに、新子はいよいよなだれるばかりであった。

七

「さあ。もう考えないで下さい。」と、前川は明るく云いながら、我とわが心に、（どうしたって、この人と離れるものか。どんなことがあっても頑張る、どんな手段でも取る！）と、云いつづけた。

主客転倒で、今度は新子がだまりこんでしまった。

前川は、ふと空を見上げた。昨夜が中秋であったという月夜空、雲がぐんぐんと動いていた。

「だって、どうなさるんですの。」やわらかく、新子が訊き返した。

「僕は、貴女が好きだ、絶対に別れない。今までは、僕が卑怯だったので、貴女に心配させた。これから、周囲のいかなる非難も受ける。妻とも戦います。だから、貴女は、僕の身の上について、心配することは、一切抜きにして、僕に対する一番素直な気持ちにだけなつて下さればいいんです。」

すぐには、返事が出来なかった。

「それそれ、そんなに考えないで下さい。考えれば、どうしたって、余計な思案が入って来ますよ。」

「それでいいのでしょうか。」新子の声が弱々しくかすれた。

「いいどころじゃない。僕達が別れたくないためには、そうしなければならぬ。理性にだけつけば、僕達は軽井沢で、もう別れて路傍の人になっていきますよ。あんな酒場なんか出さないし、今度の事件なんか起らないですよ。理性と感情と中途半端だから、ゴタゴタするんですよ。僕は、今度は貴女を失いたくないという自分の感情本位で行動しますよ。」

「私だって、感情だけで行動できたら、どんなに幸福だろうかと思えますの……、美和子のように……」

「うむ。」と、前川は深くうなずくと、たちまち自分の目頭がうるむのを覚え、新子が限りなく、いじらしくなり、ギュツと抱きしめて、顔中に唇の雨を降らせたい激しい衝動を感じるのを、息を呑み込んで、ズンズン歩きつづけることで、やっと押えた。

京橋の十字路も、いつか越していた。

「お腹すかない？」

「何だか分かりませんの。胸が一杯でご飯頂けるかしら……」

「随分歩いたから、ともかく落着きましょう。」と、その通りの路次を、少しはいった、大きい日本造りの鳥料理の店を、ステッキの先で示しながら、

「あの家静かですから……」

新子はその先を見やりもせず、

「でも、そこまで行ってしまうの、なかなか勇気がいりませわねえ。」

「よろしい。今までは、僕がいけなかった。僕も勇気を出す、そして貴女にも勇気を出してもらおうようにする。それでやってみて、もし日本が、住みにくかったら、一緒に三、四年外国へ行つていようじゃありませんか。」

と、前川は獅子の如く勇敢に、料理屋の門をはいって、玄関へつづく砂利の小径を、新子のかぼそい身体を、抱くようにしながら、グングン歩いて行った。

青空文庫情報

底本：「貞操問答」文春文庫、文藝春秋

2002（平成12）年10月10日第1刷

底本の親本：「菊池寛全集 第十三巻」高松市立菊池寛記念館

1994（平成6）年11月

入力：kompass

校正：土屋隆

2007年8月10日作成

2012年3月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

貞操問答

菊池寛

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>